

大阪府松原市所在

観音寺遺跡

—近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書—

1998年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

大阪府松原市所在

観音寺遺跡

—近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書—

1998年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

序 文

近畿自動車道松原那智勝浦線の建設に先立ち、先の中河内に続いて南河内北西部を縦断するような形で埋蔵文化財の発掘調査が行われました。観音寺遺跡はその対象となった遺跡の一つに当たり、発掘調査は昭和57年度の試掘に始まり併設の府道部改良工事分も含めると平成6年度まで行われました。この遺跡は古くからの街道である竹内街道のすぐ北側に位置する遺跡であり、街道を隔てて南側に位置する丹上遺跡とともに、古代河内国丹比の地の集落遺跡として重要視されています。その観音寺遺跡の発掘調査の結果、古代から中世にかけての集落の姿の一端が明らかとなりました。また、今回の遺物整理事業においては、墨書土器や篋描きの文字をもつ資料なども出土しています。そのほか古墳時代の遺物や窯壁片の付着した須恵器破片も出土しており、付近にあった立部古墳群との関連や、確認されている樋野ヶ池窯跡とは別の窯が存在していたのかどうかなど、多くの事柄を考えるべき資料が提示されています。

調査に際し、日本道路公団、大阪府土木部、地元各位など関係各方面のご協力を深く感謝するとともに、今後とも文化財保護について各位の御理解と御協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成10年3月31日

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野 一 美

はしがき

観音寺遺跡は旧河内国丹比郡（のち丹北郡）に属し、現在の大阪府松原市の南東部に位置する。遺跡南側には河内・摂津と大和を結ぶ幹道竹内街道が東西に通っている。この遺跡では、近畿自動車道松原那智勝浦線の工事に先立ち、昭和57年以来試掘調査を含め数回の発掘調査が行われた。この調査の概要は既刊の3冊の概要報告書に記されているとおりである。このたびは、一連の調査の過程で出土した遺物の整理を実施し、1冊の報告書として刊行する運びとなった。

今回の遺物整理においては、前回確認された墨書土器や木簡資料のほか、新たに篋で刻まれた年号等の文字を有する資料として、瓦質灯明台1点、平瓦1点の計2点が見出された。瓦質灯明台には、付近に所在した寺院の僧房名とも見える「西城房」や、「應保」年号が読み取れる。また、平瓦の方は、凹面に「建曆」年号が刻まれており、瓦の成形、調整技法の変遷をたどる上からも、貴重な資料といえる。また、瓦師の出身地名かとおもわれる文字の記された瓦片が発見されたことも興味深い事である。

発掘調査および遺物整理に際しての日本道路公団、大阪府土木部、松原市をはじめとする関係各機関並びに地元各位の御指導、御協力に深く感謝するとともに、これからも御指導、御協力を賜わるよう切望する。

平成10年3月31日

(財)大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は日本道路公団の近畿自動車道松原那智勝浦線建設工事に伴う、松原市西大塚および立部に所在する観音寺遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は大阪府教育委員会および(財)大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受け、昭和58年2月から同58年3月、昭和58年12月から昭和59年3月、昭和60年1月から3月、昭和60年4月から昭和61年3月まで実施した。平成4年10月から平成5年3月、平成6年10月から平成7年3月までは大阪府土木部富田林土木事務所の委託を受け調査を実施した。

調査期間中は多くの関係各位のご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表する。

これらの調査成果は以下の3冊の概要報告書にまとめられ刊行されている。

昭和57・58年度『近畿自動車道と歌山線建設に伴う観音寺遺跡第一次発掘調査概要』1984年3月

昭和59・60年度『松原市観音寺遺跡第2次発掘調査概要－近畿自動車道と歌山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』1986. 3

平成6年度『丹上遺跡(その9)－丹比道隣接地の調査－観音寺遺跡(その4)－奈良時代集落隣接部の調査－主要地方道 府道中央環状線美原ロータリー改良工事に伴う発掘調査報告書』1995年3月

3. 整理事業および本書作成は日本道路公団大阪建設局の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、(財)大阪府文化財調査研究センターが1997年4月から1998年3月にかけて実施した。整理にあたり、調査部長井藤徹、南部調査事務所長藤田憲司、調査第2係長寺川史郎、同第1係長小林義孝のもと、主査村上富喜子、第1係主任技師立花正治(写真)、本部調整係技師中村淳磯が担当した。

4. 現場調査は(財)大阪文化財センターが、業務課長泉本知秀、業務課長中西靖人(平成6年度は調査課長)総括のもと、下記のとおり実施した。(職名は当時)

昭和57・58年度 A～G地区試掘調査 主幹兼業務第6係長石神怡

業務第5係長尾上実

昭和59・60年度 A～G地区本調査

業務第4係技師辻本武、技師中村淳磯、

業務第2係技師大野薫、技師田中和弘、技師中村淳磯

技師高橋雅子(内業)、合田幸美(内業)

平成4年度

10・11D、8～10E

主幹兼調査第3係長赤木克視、

10～12F地区

主任技師小野久隆、主任技師平井貞子(写真)

平成6年度

16G地区

主幹兼調査第3係長赤木克視、

主任技師入江正則、主任技師平井貞子(写真)

5. 発掘調査の実施にあたっては日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、大阪府土木部富田林土木事務所、松原警察署の協力を受けるとともに、大阪府教育委員会をはじめとする関係各機関ならびに下記の方々の御指導・御教示を賜った。また、本報告書作成に際しては関係各機関、諸氏に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表します。(敬称略、順不同)

藤沢一夫(四天王寺国際仏教大学)、狩野久(橘女子大学)、鬼頭清明(東洋大学)、館野和己・山下信一郎(奈良国立文化財研究所)、上原真人(京都大学)、水野正好(奈良大学)、林野全孝(京都

府立大学)、中野晴久(常滑市民俗資料館)、出水睦巳(松原市史編纂室)、梶木良夫(大阪市立大学)、足立俊彦・岡本武司(松原市教育委員会)、[※]鈴木秀典(財)大阪市文化財協会)、森村健一・樋口吉文・野田芳正(堺市教育委員会)、西山昌孝(千早赤坂村教育委員会)、石神怡・尾上実・大野薫・松岡良憲(大阪府教育委員会)、市本芳三・鋤柄俊夫・岡本圭司(財)大阪府文化財調査研究センター)

6. 本報告書を作成するにあたり、以下の補佐員・補助員の参加を得た。(五十音順)

秋好洋子、浅木 薫、内山信子、上松敏子、乙女さおり、小原睦子、加茂千歳、加茂幸彦、久禮孝志、後藤佳代、高橋由利子、龍田かほる、立石京子、中平三紀子、中山武代、納谷好子、西田久美、二宮サキ子、松井晴美、松井利恵、松村より子、三島けい子、三山法子、山尾温子、山本晶子、若井キヨ子

7. 本書の題字は宮後晴壽氏による。

8. 本調査に関わる遺物、写真、スライド、実測図などは(財)大阪府文化財調査研究センターにて保管しており、広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 観音寺遺跡の略称はKNJであり、遺物の注記に略称を用いた。
2. 本書は既に刊行されている概要報告書をもとに、今回の遺物整理結果を加えたものである。
3. 本書で用いた方位北は座標北を示し、標高はT.P.（東京湾平均潮位）±を用いた。挿図中ではT.P.+を省略し、数字とmで表示した。建物断面図の標高は1ヵ所に表示した。
4. 遺構の平面実測はアジア航測株式会社、株式会社パスコ、ワールド航測コンサルタント株式会社に委託し、航空写真測量による1/20、1/100などの図化を行い、現地では必要に応じて詳細な遺物出土状況、断面図などを作成した。
5. 本書の記述は原則として時代順とし、須恵器の記述では主に大阪府教育委員会発行『陶邑』の編年を、奈良～平安時代の土器では古代の土器研究会編『都城の土器集成1～3』・『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』の編年を、中世土器では中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』の編年および菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集—文化財論叢』の土釜の分類を用いた。
6. 遺構図の縮尺は主に1/20、1/40、1/80、遺物実測図の縮尺は大部分が1/4であるが、一部異なる縮尺を用いており、それらは実測図にスケールを表示している。
7. 遺構図は点線が推定線、一点破線は壁面の崩壊部分や、井戸壁面の崩壊による土層観察の不可能なラインの境目を表示した。
8. 遺構名は原則として、遺構の種類、地区—地区毎の遺構通し番号で表わした。（例：井戸A-1）但し付図の場合は地区を省略している。
9. 1992年度調査のトレンチ、遺構名表示は以下の表の通りとした。

調 査 時		報 告 書 掲 載	
トレンチ	遺 構 名	トレンチ	遺 構 名
11D	土坑1	11D	土坑D-11
2 E	ピット58	8 E	ピットE-401
2 E	ピット103	8 E	ピットE-402
2 E	ピット126	8 E	ピットE-403
2 E	ピット153	8 E	ピットE-404
2 E	ピット228	8 E	ピットE-405
4 E	ピット321	10E	ピットE-406
4 E	ピット325	10E	ピットE-407
4 E	ピット326	10E	ピットE-408
4 E	ピット332	10E	ピットE-409
2 E	井戸1	8 E	井戸E-31
2 E	井戸2	8 E	井戸E-32
2 E	井戸3	8 E	井戸E-33
2 E	溝14	8 E	土坑E-72
2 E	溝16	8 E	土坑E-45
2 E	溝17	8 E	溝E-41
2 E	土坑6	8 E	土坑E-81
2 E	土坑9	8 E	土坑E-82
2 E	土坑10	8 E	土坑E-83
2 E	土坑12（溝16）	8 E	土坑E-84
4 E	落込3	10E	落込E-11
2 F	ピット106	10F	ピットF-701
2 F	ピット108	10F	ピットF-702

調 査 時		報 告 書 掲 載	
トレンチ	遺 構 名	トレンチ	遺 構 名
2 F	ピット109	10F	ピットF-703
2 F	ピット208	10F	ピットF-704
2 F	ピット319	10F	ピットF-705
2 F	ピット337（建物5）	10F	建物F-5 ピットF-706
2 F	ピット425	10F	ピットF-707
3F	ピット93	11F	ピットF-708
2 F	溝13	10F	溝F-101
2 F	溝15	10F	溝F-102
2 F	溝19	10F	溝F-103
2 F	東西溝	10F	溝F-104
3F	溝2	11F	溝F-105
3F	溝5	11F	溝F-106
3F	溝6	11F	溝F-107
3F	溝10	11F	溝F-108
3F	溝11	11F	溝F-109
2 F	土坑7	10F	土坑F-81
2 F	土坑10	10F	土坑F-82
2 F	土坑13	10F	土坑F-83
2 F	土坑15	10F	土坑F-84
2 F	土坑16	10F	土坑F-85
2 F	土坑19	10F	土坑F-86
2 F	井戸5	10F	井戸F-11

10. 編集は村上、中村が行った。

目 次

序 文
はしがき
例 言
凡 例

第1章 調査の概要	中村淳磯・村上富喜子	
第1節 発掘調査に至る経過		1
第2節 発掘調査の方法		1
第2章 位置と環境	松岡良憲	5
第3章 調査成果の概要	中村	
第1節 基本層序		7
第2節 遺構・遺物の概略		9
第4章 遺構	中村	
第1節 奈良時代以前		11
第2節 平安時代～中世		19
第3節 近世以降		64
第5章 遺物	村上・西山昌孝	
第1節 奈良時代以前		69
第2節 平安時代～中世		75
第3節 近世以降		122
第6章 まとめ	中村	
第1節 遺構の変遷		141
第2節 文献史料による時代背景		143
第3節 最後に		147
付 章		
第1節 観音寺遺跡出土瓦の様相	市本芳三	149
第2節 松原市観音寺遺跡出土の灯明台	大野 薫	165
第3節 二上山系凝灰岩における宝珠について	西山昌孝	173

目 次

図1	年度別調査区設定図……………	1	図36	井戸D-2・4・6平・断面図……………	52
図2	トレンチ配置図……………	2	図37	土坑D-5・井戸D-3平・断面図……………	53
図3	調査区地区割り図(100mメッシュ)……………	3	図38	井戸E-1・3・5・17平・断面図……………	54
図4	調査区地区割り図(10mメッシュ)……………	4	図39	井戸E-2平・断面図……………	56
図5	周辺の遺跡分布図……………	6	図40	井戸E-13・16平・断面図……………	57
図6	層序柱状図……………	8	図41	畦畔D-平・断面図……………	59
図7	建物G-1平・断面図……………	12	図42	井戸E-6・22平・断面図……………	61
図8	建物G-2・3平・断面図……………	13	図43	土坑E-37平・断面図……………	63
図9	竪穴住居G-1平・断面図……………	15	図44	土坑E-44平・断面図……………	66
図10	建物G-4・5平・断面図……………	16	図45	暗渠E-1平・断面図……………	68
図11	建物F-1平・断面図……………	20	図46	竪穴住居G-1出土土器……………	70
図12	建物F-2・3平・断面図……………	21	図47	ピットF-62出土土器……………	70
図13	建物F-4・5平・断面図……………	23	図48	ピットG-51・451出土土器……………	71
図14	建物F-6・7平・断面図……………	24	図49	溝E-7出土土器……………	71
図15	建物F-9・10平・断面図……………	25	図50	溝F-5出土土器……………	71
図16	F地区軸受け石……………	26	図51	溝F-24出土土器……………	72
図17	F地区平安時代・屋敷地の建物復元案……………	27	図52	溝F-108出土土器……………	72
図18	建物C-1平・断面図……………	28	図53	溝G-3・61、池底溝状遺構G-1 出土土器……………	73
図19	大溝G-1断面図……………	29	図54	土坑D-11出土土器……………	73
図20	井戸E-15平・断面図……………	30	図55	土坑F-18出土土器……………	74
図21	建物B-1平・断面図……………	32	図56	土坑F-84・85出土土器……………	74
図22	建物B-2・3平・断面図……………	33	図57	土坑G-50出土土器……………	74
図23	大溝B-1断面図……………	34	図58	F・G地区包含層出土土器……………	75
図24	井戸B-1～3平・断面図……………	35	図59	建物F-5出土土器……………	75
図25	建物B-4平・断面図……………	36	図60	ピットE-401出土土器……………	75
図26	建物B-5・6平・断面図……………	37	図61	ピットF-380・707出土遺物……………	76
図27	B地区掘立柱建物群変遷概略図……………	38	図62	ピットG-309出土土器……………	76
図28	建物D-1・平・断面図……………	40	図63	溝E-9出土土器……………	77
図29	建物D-2平・断面図……………	41	図64	溝F-38出土土器……………	77
図30	建物D-3平・断面図……………	42	図65	溝F-102出土土器……………	77
図31	建物E-1・2平・断面図……………	45	図66	大溝G-1下層・最下層出土土器……………	78
図32	建物E-3・4平・断面図……………	46	図67	大溝G-1下層・最下層出土土器……………	79
図33	建物E-5・6平・断面図……………	47	図68	井戸E-15出土土器……………	81
図34	建物E-7・8平・断面図……………	48	図69	井戸E-15出土土器……………	82
図35	土器埋納ピットD-1～3平・断面図……………	50			

図70 井戸F-6出土土器	83	図103 土坑C-4出土土器	107
図71 井戸G-4出土土器	84	図104 土坑D-1・2出土土器	107
図72 土坑F-54出土土器	84	図105 土坑E-27出土土器	108
図73 土坑G-43出土土器	85	図106 土坑E-35出土土器	109
図74 畦畔G-1出土土器	85	図107 落込E-11出土土器	109
図75 建物B-1・4出土土器	86	図108 畦畦D-1出土土器	109
図76 建物B-3・6出土土器	86	図109 F地区ピット出土土器	110
図77 建物D-3出土遺物	86	図110 溝F-101出土土器	110
図78 B地区ピット出土土器	87	図111 溝F-104出土土器	110
図79 土器理納ピットD-1～3出土土器	87	図112 井戸E-6出土土器	111
図80 E地区ピット、その他出土土器	88	図113 井戸E-14出土土器	111
図81 ピットF-301出土土器	88	図114 井戸E-22出土土器	112
図82 大溝B-1出土遺物	90	図115 井戸E-32出土土器	112
図83 大溝G-1上層・中層出土土器	91	図116 井戸F-7出土土器	113
図84 溝G-11出土土器	91	図117 井戸F-12出土土器	113
図85 井戸B-1出土土器	92	図118 土坑E-37出土土器	114
図86 井戸B-2出土土器	93	図119 土坑E-37出土土製器	115
図87 井戸B-3出土土器	95	図120 土坑E-37出土石製品	116
図88 井戸D-2出土土器	96	図121 土坑E-45出土土器	117
図89 井戸D-3出土土器	96	図122 土坑E-45(1992年度調査区含) 出土土器	118
図90 井戸D-4出土土器	97	図123 土坑E-45(1992年度調査区) 出土土器	119
図91 井戸D-5出土土器	98	図124 土坑E-45(1992年度調査区) 出土土器	120
図92 井戸D-6・7出土土器	99	図125 土坑E-84出土土器	121
図93 井戸E-1出土遺物	99	図126 溝G-4出土土器	122
図94 井戸E-2出土木器	100	図127 井戸E-9出土土器	123
図95 井戸E-2出土土器	101	図128 土坑E-44出土土器	125
図96 井戸E-3出土土器	102	図129 土坑E-72出土土器	126
図97 井戸E-5出土土器	103	図130 土坑F-82出土土器	127
図98 井戸E-12出土木器	103	図131 調査区周辺小字図	145
図99 井戸E-13出土土器	104	図132 大阪府文化財分布図	148
図100 井戸E-13出土木器	105		
図101 井戸E-16・17出土土器	105		
図102 土坑B-4出土土器	106		

写真図版目次

- カラー 1. 大溝 B-1 出土陶磁器
カラー 2. 井戸 B-1~3 出土陶磁器
カラー 3. B地区包含層出土陶磁器
カラー 4. 井戸 D-2・4・8、土坑 D-1、
畦畔 D-1 出土陶磁器
カラー 5. 井戸 E-6・13・19 出土陶磁器
カラー 6. 土坑 E-12・39・64・72 出土陶磁器
カラー 7. 土坑 E-44 出土陶磁器
カラー 8. 土坑 E-45 出土陶磁器
- 図版 1 1. G地区第2遺構面(北から)
2. G地区第2遺構面(南から)
図版 2 1. 建物 G-2(南東から)
2. 建物 G-2(西から)
図版 3 1. 竪穴住居 G-1 全景(東から)
2. 竪穴住居 G-1 内竈(南西から)
図版 4 1. 建物 G-4(南から)
2. G地区南部ピット群および
建物 G-5(北から)
図版 5 1. F地区全景(北から)
2. F地区全景(南から)
図版 6 1. 建物 F-1 全景(南から)
2. 建物 F-1 全景(西から)
図版 7 1. 建物 F-1 ピット 6(北から)
2. 建物 F-1 ピット 7(西から)
3. 建物 F-1 ピット 9(南から)
4. 建物 F-1 ピット 13(南から)
5. 建物 F-6 全景(西から)
図版 8 1. 溝 F-6(西から)
2. 土坑 F-60(焼土坑 北から)
図版 9 1. F地区軸受け断面(北から)
2. ピット F-301 土器出土状況
図版 10 1. C地区全景(南から)
2. C地区南部ピット群(北から)
図版 11 1. 大溝 G-1(南から)
2. 大溝 G-1 内曲物井戸
図版 12 1. 井戸 E-15(北から)
2. 井戸 E-15 遺物出土状況
図版 13 1. 井戸 F-6(東から)
2. 井戸 F-6 断面(東から)
図版 14 1. B地区全景(北から)
2. B地区ピット群全景(東から)
図版 15 1. 大溝 B-1(南から)
2. 建物 B-1・4(北から)
図版 16 1. 建物 B-2・5(西から)
2. 建物 B-3(西から)
図版 17 1. D地区全景(北から)
2. 建物 D-1(西から)
図版 18 1. 建物 D-2(南から)
2. 建物 D-3(西から)
図版 19 E地区全景(南から)
図版 20 E地区建物群全景(北から)
図版 21 1. E地区北群建物(西から)
2. E地区中央群建物(西から)
図版 22 1. E地区南群建物(西から)
2. 溝 E-5(西から)
図版 23 1. F地区道状遺構(西から)
2. 建物 F-10(西から)
図版 24 1. 井戸 E-1 遺物出土状況(西から)
2. 井戸 E-12 遺物出土状況(東から)
図版 25 井戸 E-2 土釜積みの状況(南から)
図版 26 1. 土坑 E-35 遺物出土状況(西から)
2. 土坑 E-24 断面(北から)
図版 27 1. 土坑 E-37 全景(東から)
2. 土坑 E-37 断面(北から)
図版 28 1. 土坑 E-37 軒平瓦出土状況(南から)
2. 土坑 E-37 五輪塔出土状況(南西から)
3. 土坑 E-44・45 全景(西から)

- 図版29 1. A地区調査区南半部(北から)
2. A地区轍状遺構
3. A地区土器溜り
- 図版30 1. 土坑E-44全景(北から)
2. 土坑E-49(焼土坑 西から)
- 図版31 1. 畦畔E-6・7(北から)
2. 暗渠E-1(北から)
- 図版32 包含層、その他出土の旧石器～
古墳時代石器
- 図版33 溝G-3、土坑E-37出土の
古墳時代遺物
- 図版34 溝F-5、F地区包含層、溝G-14、
G地区包含層出土遺物
- 図版35 井戸E-15出土土器
- 図版36 井戸E-15出土土器
- 図版37 建物F-5(ピット337)、
井戸F-6、井戸G-4、
土坑G-43出土土器
- 図版38 大溝B-1出土土器
- 図版39 井戸B-1出土土器
- 図版40 井戸B-2・3出土土器
- 図版41 土器埋納ピットD-1・3、
井戸D-2～4・6出土土器
- 図版42 井戸E-2出土土器
- 図版43 井戸E-1・12・13・16・17・22
出土土器
- 図版44 土坑B-4、土坑C-4、
土坑E-35・44出土土器
- 図版45 1. 大溝B-1出土陶器
2. 溝E-2出土陶磁器
- 図版46 井戸B-2、井戸E-1～3
出土陶器
- 図版47 1. 井戸E-8・9・22・23
出土陶器
2. 土坑E-37出土陶器
- 図版48 1. 土坑E-37出土陶器
2. 土坑E-37出土陶器
- 図版49 1. 土坑E-41出土陶磁器
2. 土坑E-44出土陶器
- 図版50 1. 土坑E-45出土陶器
2. 土坑E-45(1992年度調査区)
出土陶磁器
- 図版51 1. F地区溝、井戸、土坑、その他
出土陶磁器
2. 大溝G-1・溝G-1出土陶磁器
- 図版52 井戸E-9出土土器
- 図版53 井戸E-5・15、土坑E-45
(1992年度調査区)・65、井戸F-6、
大溝G-1出土墨書土器
- 図版54 土坑E-37・45・土坑E-45
(1992年度調査区)出土灯明台
- 図版55 B・E・F地区出土軒丸瓦
- 図版56 E・G地区出土軒丸瓦
- 図版57 E・G地区出土軒平瓦
- 図版58 E地区出土軒平瓦、鬼瓦
- 図版59 E地区出土刻字、スタンプ文のある瓦
- 図版60 E地区出土スタンプ文字、その他の瓦
- 図版61 井戸E-1・土坑E-37・大溝B-1
出土石鍋、溝F-81出土滑石、
井戸E-17出土牛骨、大溝B-1
出土鉾滓、井戸D-4出土溶解炉片
- 図版62 土坑E-37出土相輪、土坑E-37・45
出土五輪塔、井戸B-2出土不明石製品
- 図版63 暗渠E-1出土瓦製暗渠、井戸E-19
出土石臼・五輪塔
- 図版64 井戸A-1・2出土木製椀、
井戸E-2出土曲物、井戸E-13
出土呪符、井戸E-15出土木筒

表 目 次

遺物一覧表（1）～（13）	128～140
---------------	---------

付 図 目 次

付図1 観音寺遺跡A地区遺構全体図	付図4 観音寺遺跡E地区遺構全体図
付図2 観音寺遺跡B・C地区遺構全体図	付図5 観音寺遺跡F地区遺構全体図
付図3 観音寺遺跡D地区遺構全体図	付図6 観音寺遺跡G地区遺構全体図

付 章 挿 図 目 次

第1節 図1 出土軒丸瓦（1）	150
図2 出土軒丸瓦（2）	151
図3 出土軒平瓦（1）	152
図4 出土軒平瓦（2）	153
図5 出土丸瓦（1）	154
図6 出土丸瓦（2）	155
図7 出土特殊瓦	156
図8 丸瓦出土分布（1）・（2）	160・161
図9 平瓦出土分布（1）・（2）	160・161
図10 軒丸瓦（12～13世紀初頭）出土分布	160
図11 軒丸瓦（13世紀）出土分布	160
図12 軒丸瓦（14～15世紀）出土分布	160
図13 軒平瓦（12～13世紀初頭）出土分布	161
図14 軒平瓦（13世紀）出土分布	161
図15 軒平瓦（14～15世紀）出土分布	161
図16 他遺跡出土梵字紋軒丸瓦・五輪塔紋平瓦	162
第2節 図1 絵巻にみる灯明台	165
図2 灯明台を出土した遺構	166
図3 観音寺遺跡出土灯明台実測図	168
第3節 図1 二上山系凝灰岩製の宝珠1	173
図2 二上山系凝灰岩製の宝珠2	174

付章 表目次

第1節	表1	軒瓦類別出土点数表	149
	表2	地区別出土重量表	157
	表3	遺構別出土重量表(1)・(2)	158・159
	表4	観音寺遺跡出土瓦同範・同文關係	162
	表5	出土軒丸瓦報告書掲載一覧	163
	表6	出土軒平瓦報告書掲載一覧	164
	表7	出土丸瓦・平瓦・特殊瓦報告書掲載一覧	164

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

近畿自動車道松原那智勝浦線は近畿自動車道天理～吹田線松原I.C.と阪和自動車道阪南I.C.を結ぶ近畿自動車道と歌山線の路線内にあたる。この道路予定地には数多くの埋蔵文化財が含まれていると推測され、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局などの関係諸機関で協議がなされた。その結果、昭和52年に大阪府教育委員会により、近畿自動車道と歌山線の分布調査が実施され、従来の遺跡の範囲の確認と新しい遺跡の発見があった。

分布調査の後、さらに協議され、遺跡の時期、性格、遺構の深さ、遺跡の範囲確認を目的とした第1次調査が計画され、大阪府教育委員会の指導の下、(財)大阪文化財センターが調査を担当することとなった。

観音寺遺跡では昭和57、58年度の2年間にわたり第1次調査が行われた。まず観音寺跡に隣接する調査区から調査は実施されたが、遺構の広がりか認められたため、さらに北側へ延びて調査は進められた。調査区の長さは昭和57年度が340m、昭和58年度が520mである。

昭和59・60年度の第2次調査は、第1次調査の成果をもとに、遺構の少ないと推定される地区だけ橋脚部分の調査を行い、それ以外の地区は道路予定地内の全面発掘調査を実施した。

平成4・6年度は、美原ロータリーの改良工事に伴い、大阪中央環状線北行車線と近畿自動車道との間部分の調査が実施された。

第2節 発掘調査の方法

昭和57・58年度の第1次調査は、日本道路公団の設定したSTA.座標という、工事起点より道路延長方向への距離を100m単位で示すもの

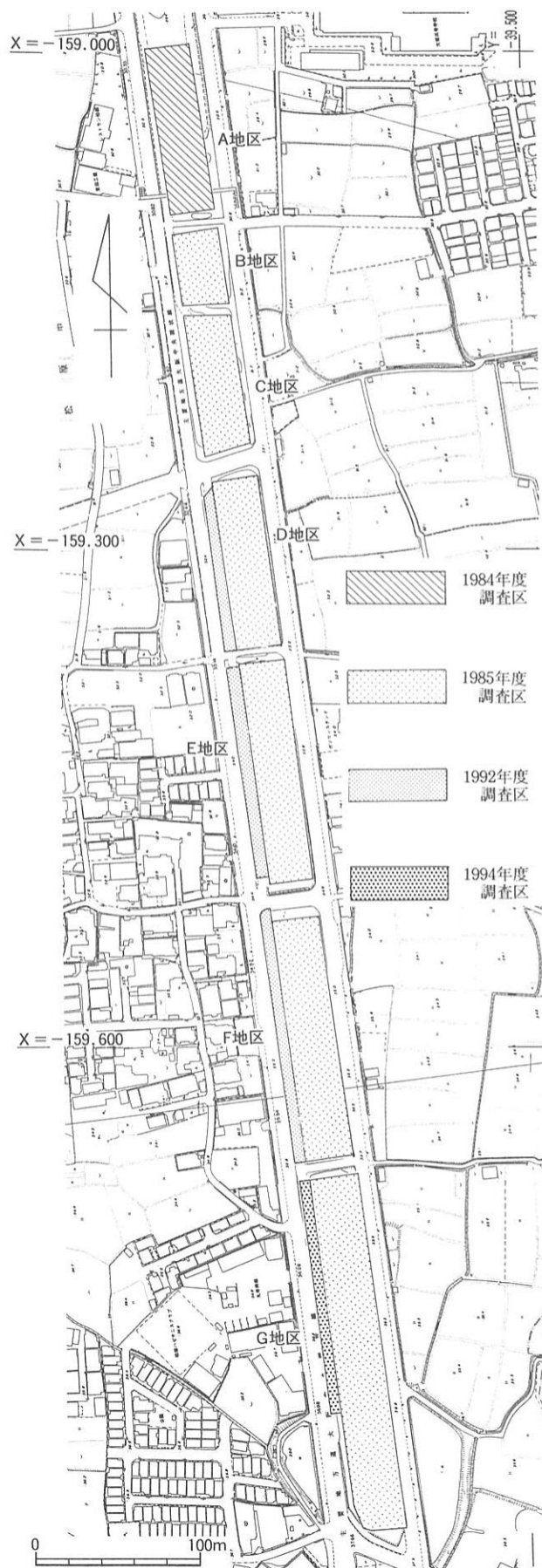


図1 年度別調査区設定図

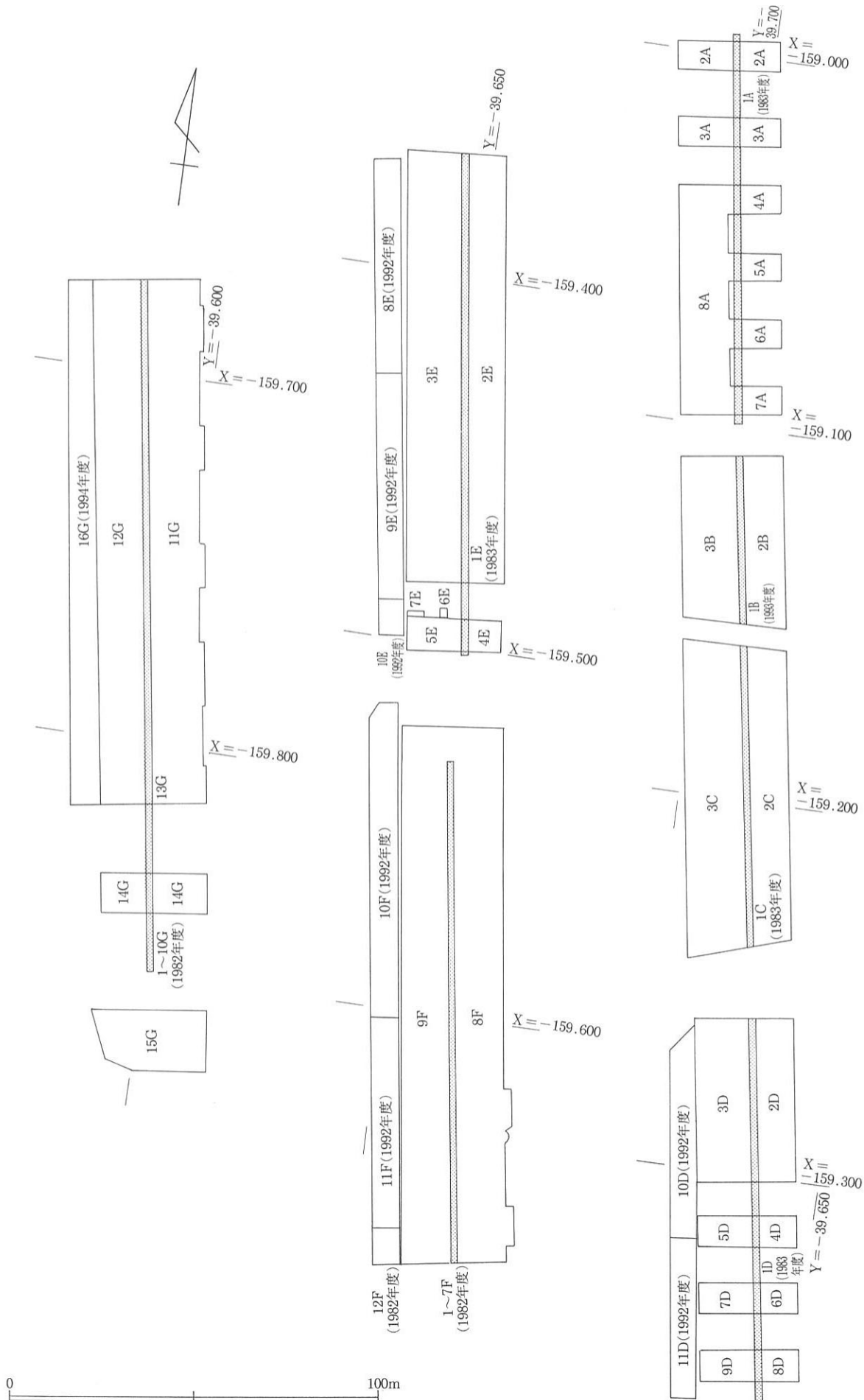


図2 トレンチ配置図

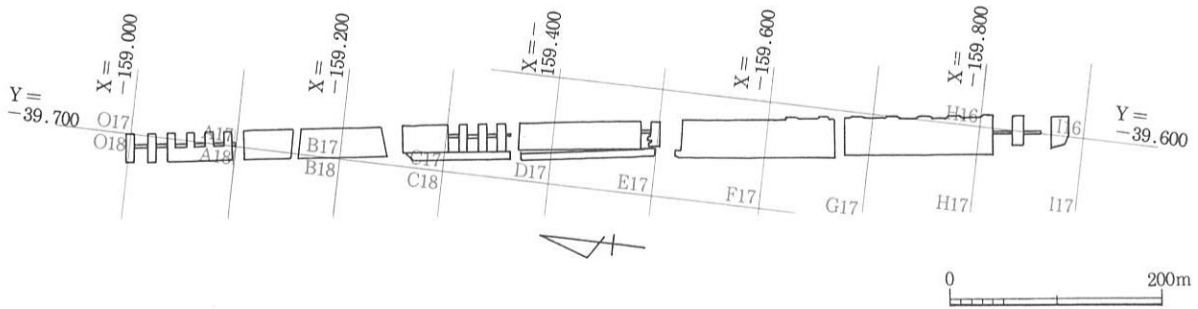


図3 調査区地区割り図 (100mメッシュ)

を用い、昭和59・60年度の第2次調査は国土座標を用いた。

第1次調査における調査区は、ほぼ全延長に、幅2mのトレンチが設定された。昭和57年度は道路中央部分にトレンチが設定されたが、道路中心上に20m毎の測量杭があり、杭の保護上、杭の両側0.5mずつ避けている。このため、トレンチは1本19mのものが、計17本に細かく分かれることとなった。調査区の名称は、南から1～17区である。但し、9、10区の境は杭の欠落のため、連続したトレンチとなった。

昭和58年度は杭を避ける煩雑さを解消するため、道路中心より東へ2mのラインをトレンチ中心線として調査区の設定がなされた。そこで調査区を横断する道路3本、水路1本を残し調査を進めたため、5本のトレンチに分かれる事になった。調査区は北からA～E区と呼称した。

昭和59年度は第1調査区(第1次調査のA区)、昭和60年度は第2～6調査区(第1次調査のB～E区、1～17区)の調査を行った。第1～6の調査区は、調査区を横断する5本の道路により、分割設定した。調査区の名称は第1次調査のA～E区を踏襲し、南側は昭和57年度調査区を東西に横断する1本の道路を境に、北側をF区、南側をG区と呼称した。

平成4年度の調査区は、第2次調査のD～F区の西側拡張部分にあたる。平成6年度の調査区は、第2次調査のG区の西側拡張部分にあたる。

各調査区の地区およびトレンチ名称は図1、2のとおりである。

図3は調査区を国土座標軸(第VI座標系)で表わしたものである。各遺構の検出、遺物の取り上げに際しては、(財)大阪文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』1988年に沿っている。

即ち、第I区画は1万分の1地形図の縦6km、横8kmが1区画をそのまま使用。南西端を基点、縦軸A～0、横軸0～8で表示。

第II区画は第I区画を縦、横各4分割し、縦1.5km、横2.0kmが1区画となる2500分の1地形図をそのまま使用。南西端を1とし、東へ4まで、平行式の地区名表示で、北東が16となる。

第III区画は第II区画を縦15、横20に分割し、100m四方を1区画とする。北東端を基点とし、縦A～0、横1～20で表示。

第IV区画は第III区画を縦、横10分割し、10m四方が1区画となる。北東端を基点とし、縦a～j、横1～10で表示。

第V区画は第IV区画を縦、横各2分割し、5m四方で区画。北東がI、北西がII、南東がIII、南西がIVと表示。

第VI区画は、北東を基点に西へ○、南へ○と、必要に応じて桁数表示を変えて表わす。

図4では地区割りの第I～第VI区画のうち、第II、III、IV区画を表示した。

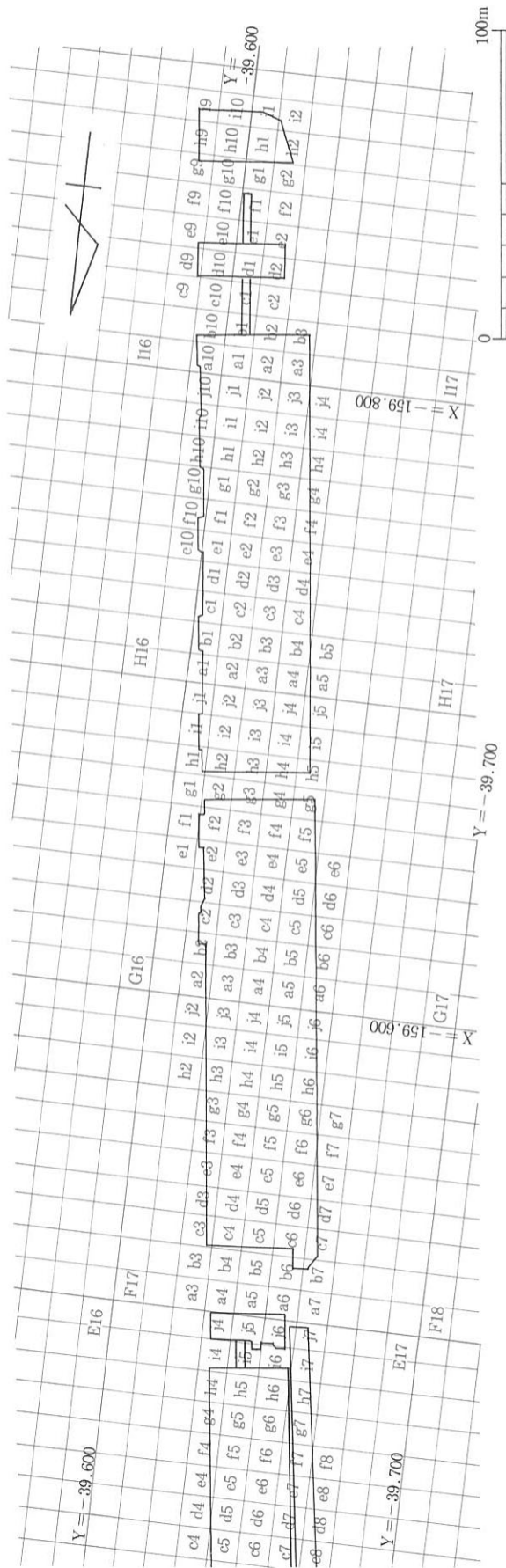
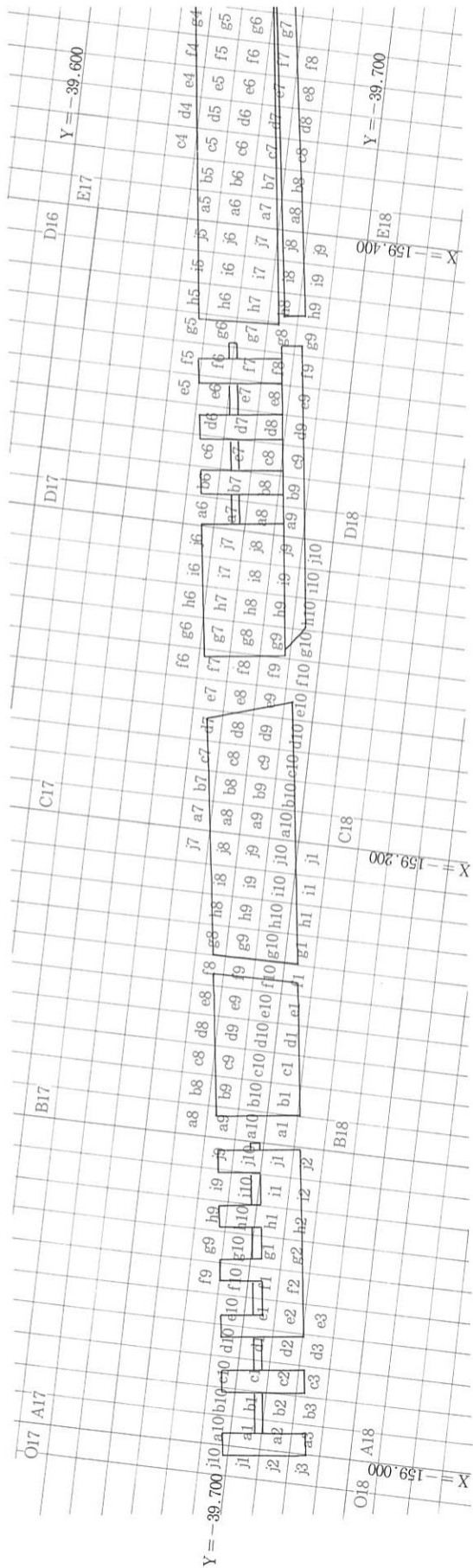


図 4 調査地区区割り図 (10mメッシュ)

第2章 位置と環境

観音寺遺跡（以下、単に遺跡と表示する）は、近畿自動車道の建設に伴い発見されたため、道路の形状に沿って、南北に細長い範囲が与えられている。

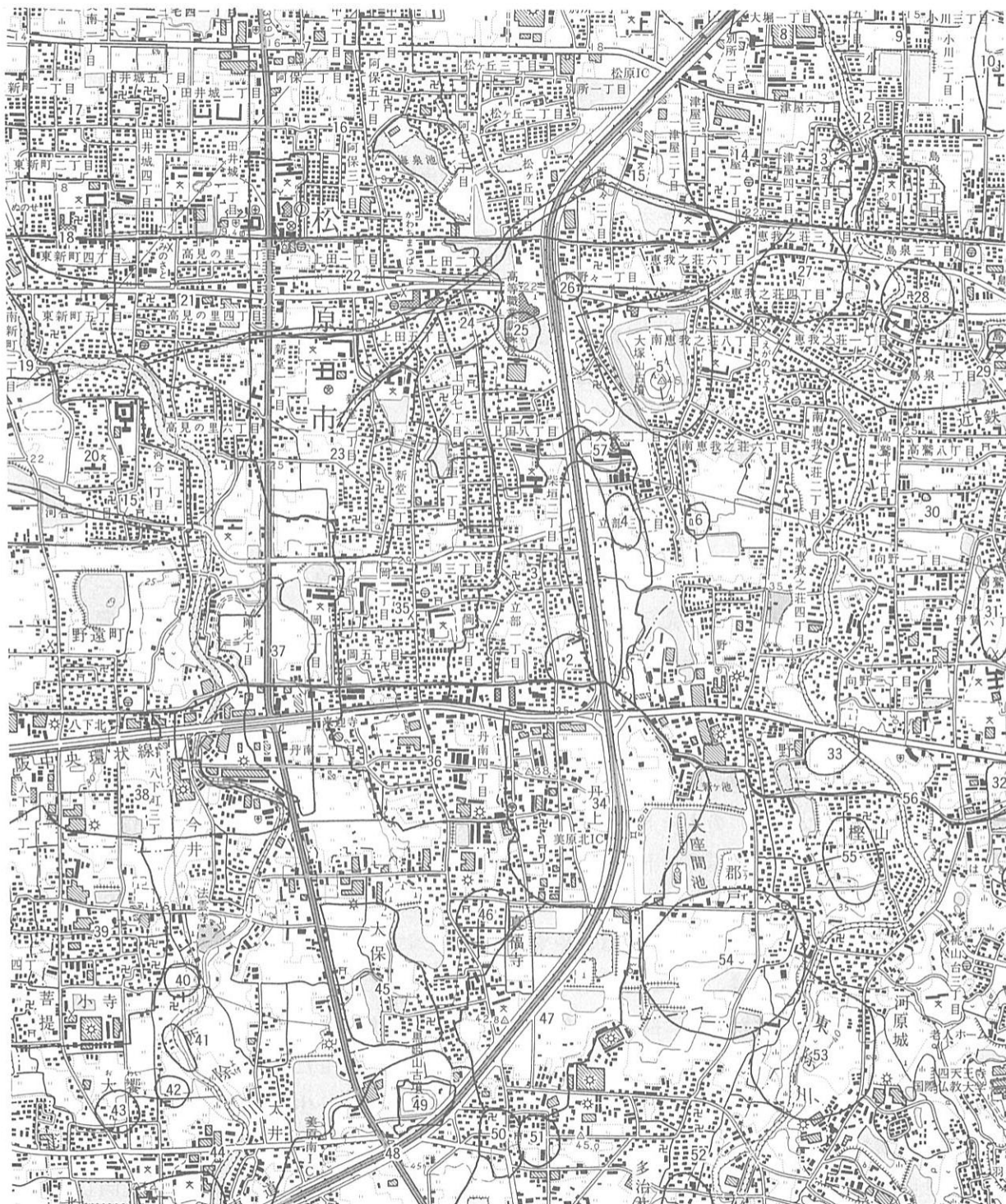
遺跡が立地するあたりは、地形的には「古天野川」が形成した扇状地にあたると考えられている。河内平野の南端を西方に流れる現大和川が緩やかに北側へ湾曲していることがその痕跡である。土地条件図では「段丘下位面」、日下氏の地形分類図では「中位段丘」と考えられている平坦な地形上の標高30～35mのあたりに立地している。遺跡付近は東除川と西除川に挟まれた南北約7km、東西幅約2kmほどの微高地のほぼ真中の南に寄ったあたりである。

遺跡の内容としては、中世の集落的性格が強く、原始・古代に関する遺構・遺物は、非常に少ないと云える。遺跡北部で接する大塚遺跡も、同様に中世の集落的性格が強く、この共通点から一連のものと考えられることができる。

また、遺跡の南に接し、遺跡名のもとになっている観音寺跡は、奈良～平安時代頃の寺院と考えられており、遺跡に先行したものと考えられる。しかし、現在はこれら遺跡は、遺跡の西側に位置した立部遺跡に含まれている。遺跡と同様に道路建設に伴い発見された丹上遺跡が、奈良～平安時代の集落遺跡であり、観音寺跡との関係が推察できる。同様に、奈良～平安時代の範疇にある付近の遺跡としては、反正天皇の宮跡として伝承されている丹比柴籬宮跡が、遺跡の北西に近接してある。

また、集落跡以外では遺跡の南に接して、竹内街道（丹比道）のルートが推定されており、北側やや離れて、長尾街道（大津道）のルートが推定されており、奈良～平安時代頃の遺跡の立地は、どうも交通の要衝であったことがキーポイントになると考えられる。

さらに古く、古墳時代は、遺跡の北東に近接して大塚山古墳、北西に山ノ内古墳などが知られ、この地域は古墳時代中期頃は、古市古墳群とは、やや墓域を異にする古墳群であったと考えられる。丹上遺跡での円筒埴輪棺出土などは、その例証であろう。古墳時代後期には、集落跡として前述した遺跡範囲の改変以前の状況では、遺跡の西に接していた立部遺跡がある。他にこの遺跡付近は、粘土が豊富にあることから、近年まで瓦を製造していた土地柄であり、土師器を生産した專業集団の集落との見解もある。遺跡のさらに南にある真福寺遺跡で中世の鑄造遺構が検出され、「中世丹南の鑄物師」が注目されている。これは、美原町黒姫山古墳の豊富な鉄製品を理解する時、古墳時代におけるこの地域の「鉄の專業集団」を想定させる恰好の資料であった。このように考えると、この地域は古墳時代に関しては、各種專業集団の動向と共に理解するのが適切かと考えている。先述した2基の前方後円墳の中間地点で、須恵器の窯跡（樋野ヶ池窯跡・6世紀前半）が営まれるなど、生業・生活域になったと考えられる。



- | | | | | |
|-----------|-----------|-------------|-----------|------------------------------|
| 1 観音寺遺跡 | 13 一津屋古墳 | 25 樋野ヶ池窯跡 | 37 清堂遺跡 | 49 黒姫山古墳 |
| 2 観音寺跡 | 14 一津屋町遺跡 | 26 西大塚遺跡 | 38 八下遺跡 | 50 黒山廃寺 |
| 3 立部遺跡 | 15 丹比大溝 | 27 恵我之荘遺跡 | 39 小寺遺跡 | 51 丹比神社 |
| 4 立部古墳群跡 | 16 阿保遺跡 | 28 明教寺跡 | 40 長和寺跡 | 52 丹比廃寺跡 |
| 5 大塚山古墳 | 17 東新町遺跡 | 29 島泉9丁目散布地 | 41 大響城土塁跡 | 53 河原城遺跡 |
| 6 阿弥陀廃寺 | 18 長尾街道 | 30 高鷲7丁目散布地 | 42 八坂神社遺跡 | 54 郡戸遺跡 |
| 7 三宅遺跡 | 19 南新町遺跡 | 31 伊賀遺跡 | 43 城岸寺城跡 | 55 郡戸東遺跡 |
| 8 大堀遺跡 | 20 河合遺跡 | 32 伊賀南遺跡 | 44 余部遺跡 | 56 竹内街道 |
| 9 小川遺跡 | 21 高見の里遺跡 | 33 榎山遺跡 | 45 大保遺跡 | 57 大塚遺跡 |
| 10 津堂遺跡 | 22 上田町遺跡 | 34 丹上遺跡 | 46 真福寺跡 | |
| 11 島泉北遺跡 | 23 新堂遺跡 | 35 岡遺跡 | 47 真福寺遺跡 | |
| 12 川ノ上古墳跡 | 24 山ノ内古墳跡 | 36 丹南遺跡 | 48 太井遺跡 | (1・2・57の各遺跡は
現在立部遺跡に含まれる) |

図5 周辺の遺跡分布図(縮尺:2万5千分の1)

第3章 調査成果の概要

第1節 基本層序

本遺跡は、南から北へのびる段丘上に位置しており、調査区においても途中で顕著な段差は認められず、全体に北から南へ緩やかに上る傾向がみられる。A地区が本遺跡の北端部にあたり、トレンチ北端での地山面の標高はT.P.28.40mを測り、調査区中で最も低い。一方、G地区では、調査区南端に位置する開析谷を利用した溜池の端部で、地山面の標高はT.P.35.20mを測り、最も高くなる。

基本層序は、おおむね、盛土・旧耕作土・床土・遺物包含層の単純な層である。盛土は、中央環状線建設に伴うものであり、調査区全体にわたって、20～80cmの厚さで堆積している。旧耕作土や床土は、調査区によって残存状況は異なっており、良好に残存している部分がある一方で、ほとんど削平されている部分もみられる。遺物包含層も同様で、約40cmの厚さで堆積している部分もあるが、削平をうけている部分も多く、全体に残存状況は良好ではない。また、削平が地山面まで及んでいる部分もあり、段差がみられる部分までである。遺物包含層は、黄灰色シルトが基本であり、これに灰色粘土や暗褐色砂質シルトなどが混入している。ただし、遺物包含層の違いによる時期差ははっきりしない。

A地区は、本遺跡の基本層序の最も典型的な地区であり、比較的良好に残存している。中央環状線建設による盛土が、全体に30～40cmの厚さで堆積しており、その下層部分は道路工事による削平などをほとんど受けていない。遺物包含層は、30～40cmの厚さがあり、整地に伴う灰色粘質土の堆積の違いにより、数層に分かれる。この部分も削平などを受けていないため、残存状況は良好であるが、遺物量は概して少ない。遺構は地山上面で検出されたが、耕作に伴う溝などが中心で、全体に少ない。遺物は、土師器や須恵器、瓦器、陶磁器などの中世を中心としたものであるが、かなり磨耗をうけている。

B地区は、東半部と西半部で様相が異なる。東半部では遺物包含層が10～20cmの厚さがあり、下層は灰色粘質土を多く含む。東南部は、中央環状線建設の際の削平のため、遺構や遺物はほとんど検出されなかった。西半部では遺物包含層が10cm以下しかなく、下層には灰褐色土層が認められる。ただ、遺構の大部分は地山面で確認されており、灰褐色土層上面では検出できなかった。また、遺構の埋土はほとんどがこの灰褐色土で、平安時代末～鎌倉時代の遺物が多く出土している。B地区検出の遺構群は大きく2時期に分かれるが、土層の違いによる時期差は確認できなかった。北西部は、中世以降の整地による削平により遺物包含層は残っておらず、遺構や遺物は少ない。

C地区は、B地区と同様の堆積状況であるが、ほぼ全域にわたって後世の整地による削平をうけており、遺物包含層は部分的にしか残っていない。床土層の下面が地山面の部分や整地により地山面に段がつくところもみられる。遺構は地山上面で検出され、埋土は黄灰色土（灰色粘質土を多く含む）のものがほとんどである。遺物量は全体に少ない。

D地区は、C地区と同様の堆積状況であるが、後世の整地による削平や中央環状線建設に伴う掘削などがみられ、遺物包含層は部分的にしか残っていない。工事による掘削が地山面まで及んでいる部分までである。北部で褐灰色砂質シルトの遺物包含層が確認できたのみである。大部分が床土層下面が地山面で、遺構は地山上面で検出された。遺物包含層からの遺物量は全体に少ないが、井戸や土坑からの出土量は比較的多い。

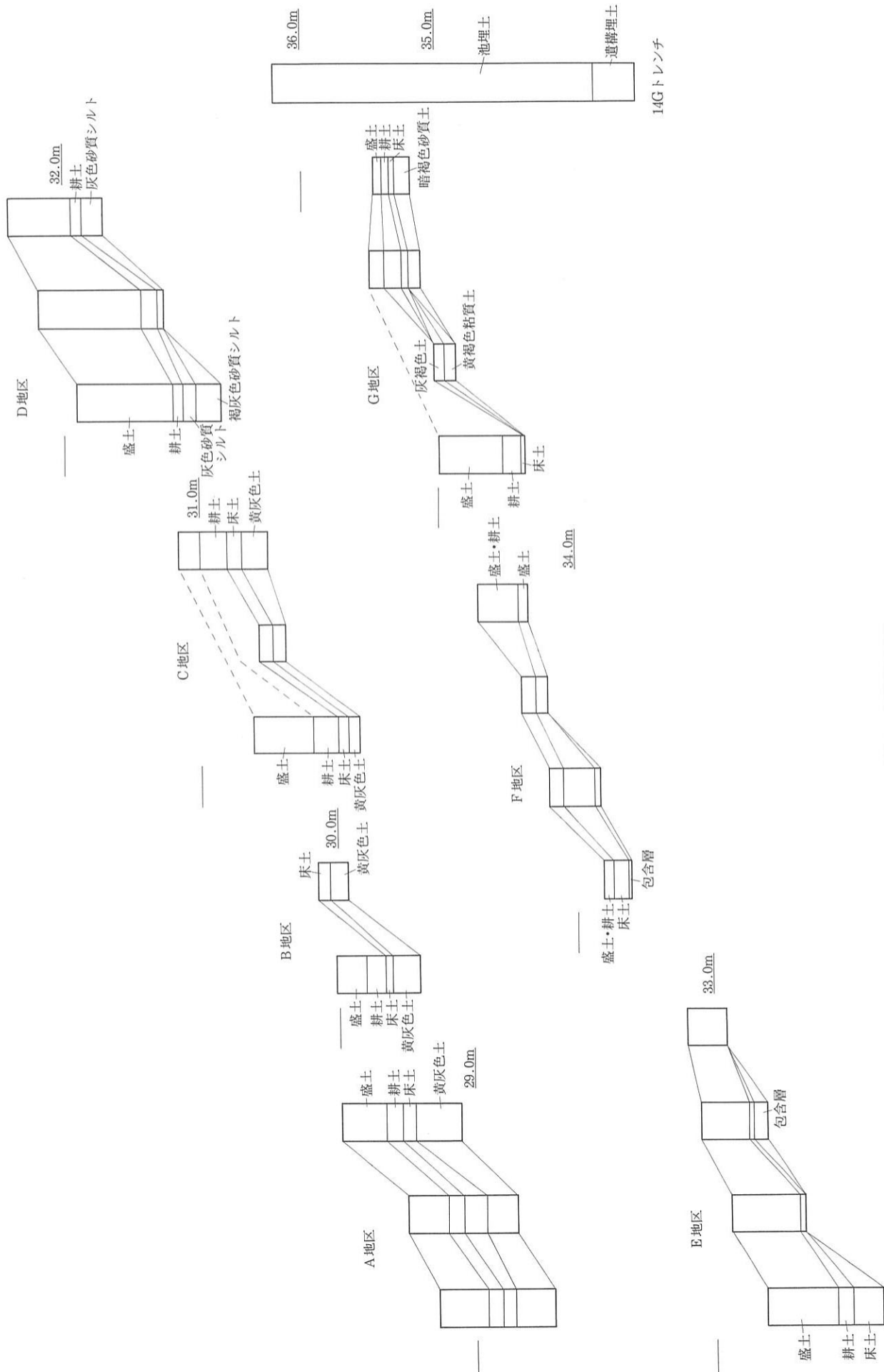


図 6 層序柱状図

E地区は、基本的にはB～D地区と同様の堆積状況であるが、遺物包含層が削平により残存していない部分が多い。中世以降の耕地開発などにより整地が行われており、地山面までおよぶ段造成が認められる。地山面で調査区東半部が高くなっており、そのうち南半部が最も高い部分であるが、ここでは近世以降の整地により、旧耕作土や床土層のみならず、遺物包含層まで削平がおよんでいて、地山が露出するほどであった。遺構は地山上面で検出された。遺物包含層からの遺物量は全体に少ないが、井戸や土坑からの出土量は多く、調査区の中では最も多い。

F地区も、E地区と同様で、遺物包含層が削平により残存していない部分が多い。特に調査区南半部では、後世の整地による削平や中央環状線建設に伴う掘削などが顕著にみられ、遺物包含層は部分的にしか残っていない。一方、北端部で検出された屋敷地周辺では、遺構に伴う整地層などが認められ、遺物包含層は比較的残存していた。遺構は地山上面で検出された。遺物包含層からの遺物量は全体に少ないが、井戸や溝からの出土量は比較的多い。

G地区は、基本層序に沿った堆積状況を示しているが、部分的に黄褐色粘質土や暗褐色砂質土、灰褐色土などの遺物包含層が認められる。調査区中央部を南北に縦断する溝G-1の東半部と西半部で様相が異なる。東半部では、遺物包含層は黄褐色粘質土のほか、灰褐色土や暗褐色砂質土などがみられる。北東部で遺構面が2面確認されており、上面の遺構面は床土層下面、下面の遺構面は地山面で確認された。上面の遺構面では、中世の遺構が検出されている。下面の遺構面では、飛鳥時代以前～平安時代の遺構が検出されている。暗褐色砂質土層は調査区南部でみられ、奈良時代～平安時代初頭の遺物包含層である。また、この層より円筒埴輪や古墳時代の須恵器などが出土していることから、奈良時代～平安時代初頭にこの部分で整地が行われたことが考えられる。灰褐色土層は調査区中央部で部分的にみられ、鎌倉時代頃の遺物包含層である。西半部では、黄褐色粘質土の遺物包含層の堆積は薄く、ほとんどが10cm以下である。整地による削平のため、床土層の下面が地山面の部分が多く、遺構はあまり検出されていない。さらに、試掘の成果により、調査区南端に位置する新池の池底部分から溝の一部と考えられる遺物包含層が検出されていたため、新池部分は橋脚予定部分のみ調査を行った。3ヶ所のトレンチを設定し、鋼矢板打設による土留めを施したが、深度が2mを超えるため、中央部のみの掘削を行い、池底（地山面）を確認した。その結果、池底の標高はT.P.33.70m前後でほぼ平坦だったことがわかった。

第2節 遺構・遺物の概略

A地区では、遺物包含層が良好に残存していたが、全体に遺物量は少なく、整地による磨耗をうけた破片が多い。遺構面は大きく分けて2面確認されたが、上面は耕作面と考えられ、鋤溝や畝溝が検出されたのみである。下面は地山面であるが、井戸や落ち込み内の土器溜まりを検出したのみで、ピットや土坑などは確認されなかった。この面も耕作面と考えられ、建物跡はなかったものといえる。出土遺物は、中世を中心としたもので、中世以降この地区では耕作に伴う整地が繰り返されて行われていたものと考えられる。

B地区では、平安時代末を中心とするピット群・掘立柱建物群・大溝・土坑・井戸などがまとめて検出された。調査区中央部をほぼ南北方向に走る大溝の東側と西側で様相が異なる。東側では遺構はほとんど検出されず、土坑1基と鋤溝が数条確認されたのみである。これに対し、西側ではピット300基以上のほか、井戸や土坑もまとめて検出されており、狭い範囲に遺構が密集している。これらは、大溝で区画された屋敷地と考えられ、掘立柱建物群の復原状況で2時期に分けることができる。遺物は、

大溝や井戸から瓦器椀・皿や土師器小皿・羽釜、須恵器鉢、陶磁器などがまとまって出土している。

C地区は、全体に後世の削平や攪乱が多く認められ、遺物包含層の残存状況はよくない。ピット群・溝・土坑・井戸などが検出されたが、調査区北端部にまとまっており、中央部にはみられない。南西部で平安時代の掘立柱建物が検出されたが、1棟のみで付近に関連した遺構はみつかっていない。

D地区もC地区と同様に、後世の削平や攪乱が多く認められ、遺物包含層の残存状況はよくない。地山面でピット群や掘立柱建物、溝、土坑、井戸などが検出された。奈良時代の溝や井戸もみられるが、掘立柱建物群は平安時代末～鎌倉・南北朝時代に営まれたもので、集落を形成していたものと考えられる。掘立柱建物群に伴うものとして土器埋納ピットが検出され、土師器小皿が出土した。また、井戸からは瓦器椀・皿、土師器小皿・羽釜、須恵器鉢・甕、瓦などが多く出土した。

E地区も、後世の削平などにより遺物包含層の残存状況はよくなく、地山面で遺構が検出された。遺構はほぼ調査区全体に広がるが、時期別に比較的まとまっている。平安時代の井戸や溝が認められるものの、中心は平安～鎌倉時代のピット群・掘立柱建物群・井戸・土坑・溝や室町時代の井戸・土坑・溝などである。ピット群は約300基検出されたほか、井戸や土坑もまとまって検出されており、狭い範囲に遺構が密集している。掘立柱建物群を中心とする遺構群は溝で区画されており、3群に分けることができる。これ以外には、近世の土坑が一列に並んで検出されている。中世の井戸や土坑からは、土師器小皿・羽釜や瓦器椀・小皿、陶磁器などが多く出土したほか、瓦質灯明台やまじない札がみられる。

F地区もE地区などと同様に、後世の削平などにより遺物包含層の残存状況はよくなく、地山面で遺構が検出された。遺構は、北部でピット群や土坑、溝がまとまってみつかったほかは、溝や土坑が散発的にみられるのみである。北部では、奈良時代の土坑や溝もみられるが、主体は平安時代の掘立柱建物を中心とする屋敷地である。屋敷地はまわりを溝で囲まれており、内部には掘立柱建物と雨落ち溝がみられ、同じ方向の建物が数棟確認された。また、周囲の溝を掘削する以前の建物も想定されることから、2時期の屋敷が想定される。溝や土坑から土師器杯・皿や須恵器杯・盤、黒色土器などが出土した。

G地区では、飛鳥時代以前のピット群・掘立柱建物群、奈良時代の竪穴住居跡・掘立柱建物・溝・土坑、平安時代のピット群・溝・井戸・土坑、近世以降の溝などが検出された。全体的に遺構は、調査区の東側で多く、西側ではあまり検出されていない。調査区中央部では、飛鳥時代以前の掘立柱建物群、南部では平安時代の建物群や溝・井戸・土坑などがまとまっており、集落の存在が想定される。中世以降は明確な遺構はほとんどみられず、耕作地として利用されるようになったことが考えられる。調査区南端部には、開析谷を利用した新池と呼ばれる溜池が存在するが、池底確認を行った結果、調査区の北方向から延びる大溝G-1の続きと考えられる溝が検出された。新池の築造時期ははっきりしないが、中世以降の開発に伴い、つくられた溜池と考えることができる。

第4章 遺構

ここでは、検出された遺構に関して述べる。本来なら、検出された遺構のすべてに関して記述すべきところであるが、遺物が出土し、時期が確定した遺構を中心に記述することとする。遺構の時期は奈良時代以前より近世以降までの長期間にわたることから、奈良時代以前、平安時代～中世、近世以降の3時期に大別して記述を進める。また、各時期においては、なるべく時期順に配置するようにしたが、遺構群のまとまりを優先したことから、一部時期の前後する部分も生じている。

第1節 奈良時代以前

本遺跡では、古墳時代以前の遺構は検出されていない。遺物に関しては、遺物包含層や後世の遺構内から旧石器時代～弥生時代の石器やサヌカイト片などが出土している。また、古墳時代では、土師器や須恵器のほか、埴輪などもみられる。弥生時代以前に関しては土器の出土がほとんどないことから、調査区内に当該期の遺構が存在した可能性は低いが、古墳時代に関しては、消滅した集落や埴輪を伴う古墳などが存在していた可能性は高いと考えられる。調査区の北東部には、北向きで墳丘の全長が335mの大型前方後円墳である河内大塚山古墳が存在するほか、その西側には墳丘が完全に削平されているが、前方後円墳の山ノ内古墳跡が知られている。河内大塚山古墳では、埴輪の使用は確認されていないが、調査区周辺で古墳群が形成されていたことが想定できる。なお、平成2年に調査区の東側で松原市教育委員会による調査が行われ、埴輪をもつ方墳を主体とした古墳群が検出されている。また、窯壁付着の須恵器破片や生焼けの須恵器破片もみられることから、近接して須恵器窯が存在していた可能性が考えられる。調査区の北部には、須恵器窯である樋野ヶ池窯跡が知られており、付近には須恵器窯の立地に適した環境が整っていたことがわかる。

1. 飛鳥時代以前

G地区で奈良時代の遺構に先行する掘立柱建物群が検出されている。いずれも埋土から時期を確定できるような遺物が出土していないため、時期ははっきりしないが、建物G-1が奈良時代の溝と重複関係にあることから、奈良時代より古い時期であると判断した。調査区内では、建物群以外で当該期の遺構はみつかっておらず、集落を構成していたものかどうかは確定しない。

(1) 建物

G地区の中央部で検出され、3棟分の復原ができる。柱穴はかなりしっかりしており、掘立柱建物の重複関係は認められない。いずれも遺物が出土していないことから、時期ははっきりしないが、主軸方向が一致するなどの関連性が認められることから、ほぼ同時期に存在していたことが考えられる。建物群が調査区の東側にひろがる可能性もある。

1) 建物G-1 (図7)

G地区の中央部で検出された。南北方向3間(6.4m)×東西方向3間(4.9m)で、南側に1間分の付属施設を持つ建物である。主軸方向の方位はN-30°-Wである。南北列の柱間がやや長く、平均は南北2.1m、東西1.6mを測る。南側の付属施設部分の柱間は、主舎部分の1間分の距離とほぼ等しい。柱穴掘方は不整円形および隅丸方形を呈しており、規模は平均して径約60cm、深さ約30cmを測る。埋土

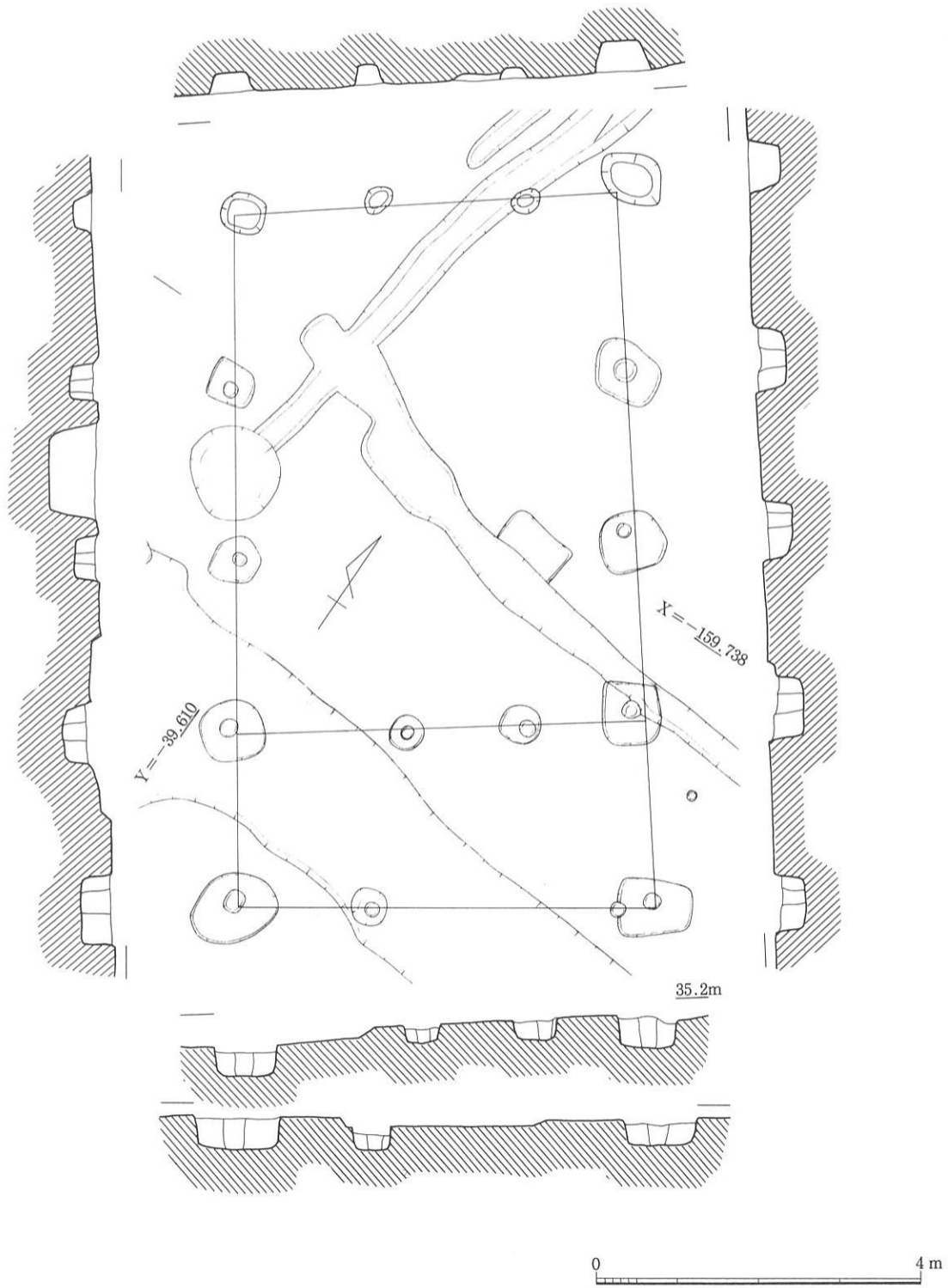


图7 建物G-1平·断面图

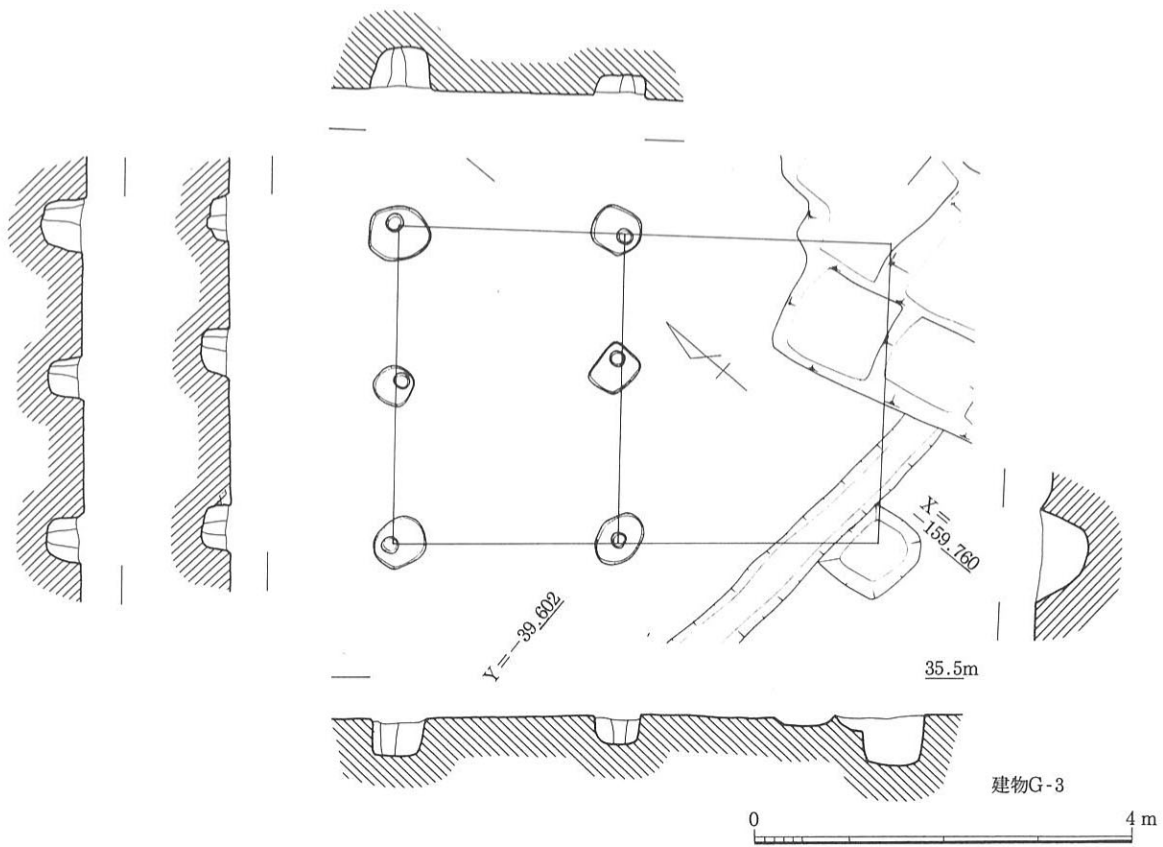
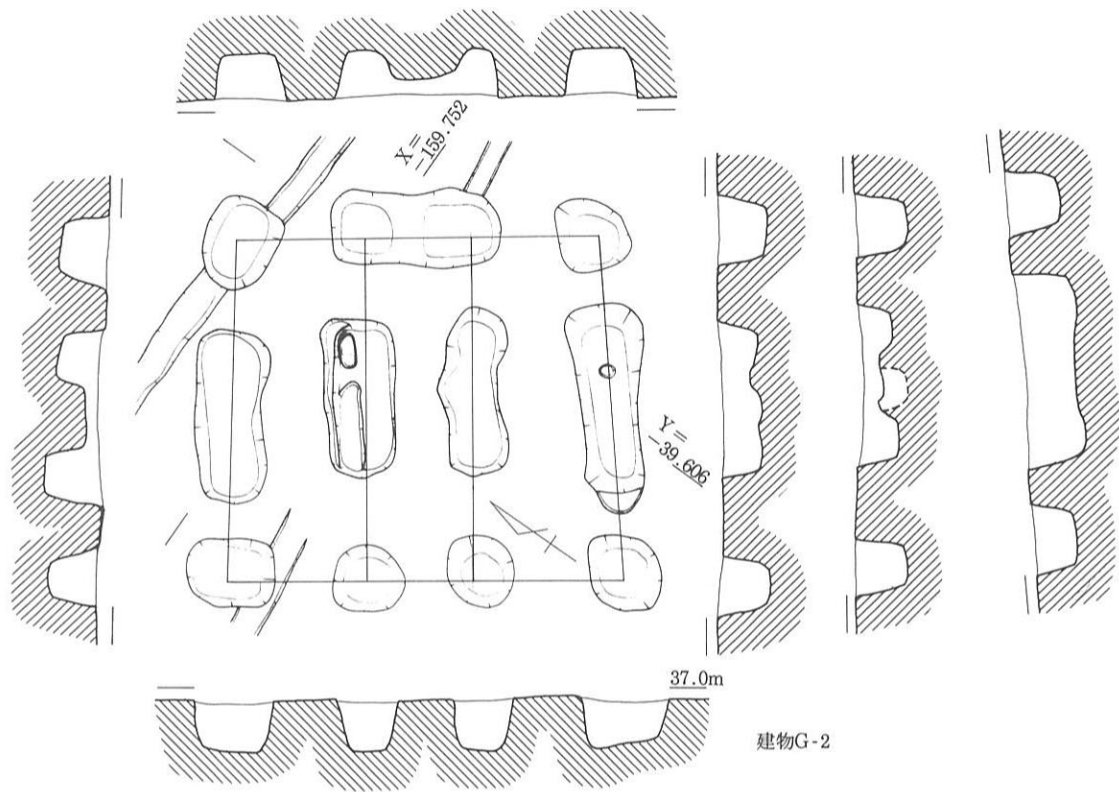


图8 建物G-2·3平·断面图

は黄灰色粘質土が基本であるが、遺物は検出されていない。

2) 建物G-2 (図8、写真図版2)

建物G-1の南側で検出された。南北方向3間(4.0m)×東西方向3間(3.6m)の総柱建物であるが、柱穴掘方は特殊な形状である。西側と4隅の柱穴は単独で、径約70cmの不整円形および隅丸方形を呈しているが、中央部分の柱穴は1間分の柱穴をつないだ長円形の掘方をもっており、さらに一段(約20cm)下がる柱痕が認められる。このうち外側の長円形の掘方では、2本の柱痕がみられるが、中央部分の2基では3本の柱痕が確認された。このことから、この建物は補強のため中央部分に柱を1本ずつ追加した倉庫と考えることができる。主軸方向の方位はN-30°-Wで、建物G-1と同じ方向である。南北列の柱間がやや長く、平均は南北1.4m、東西1.3mを測る。柱穴の深さは、平均約50cmを測り、長円形の掘方部分では約30cmである。埋土は建物G-1と同様に、黄灰色粘質土が基本であるが、遺物は検出されていない。

3) 建物G-3 (図8)

建物G-2の南側で検出された。南北方向3間(5.0m)×東西方向3間(3.4m)の総柱建物であるが、南東隅で攪乱をうけていることから、形状は確定しない。主軸方向の方位はN-30°-Wで、建物G-1と同じ方向である。南北列の柱間がやや長く、平均は南北2.4m、東西1.6mを測る。柱穴掘方は不整円形および隅丸方形を呈しており、規模は平均して径約50cm、深さ約30cmを測る。埋土は建物G-1と同様に、黄灰色粘質土が基本であるが、遺物は検出されていない。建物G-2とほぼ同軸上に並び、東西方向の柱間寸法がほぼ同じであることから、2棟は関連のあるものと考えられる。

2. 奈良時代

奈良時代の遺構は、G地区南部を中心として検出されている。本遺跡のすぐ南には古代の官道である竹内街道が走っており、調査区南端部には開析谷を利用した溜池が存在する。大きな水路も検出されており、街道に面した場所で奈良時代を中心とする集落が営まれていたことがわかる。竪穴住居や掘立柱建物、ピット、溝、土坑などが検出された。

(1) 建物

G地区の南部で検出された。竪穴住居1棟のほか、掘立柱建物が2棟分復原できた。調査区の南端部でピットの密集する部分が認められ、掘立柱建物はさらに増えるものと考えられるが、建物を復原するまでには至らなかった。

1) 竪穴住居G-1 (図9、写真図版3)

G地区の南部で検出された。南東隅に削平を受けているが、ほぼ方形で東西5.3m、南北7.0m、壁高17cmを測る。貼床などは検出されず、周溝や柱穴などもみられない。このため、上屋構造を想定することは困難で、どのような形状の建物であったのかははっきりしない。ただ、住居として使用されたものではなく、なんらかの工房跡の可能性もある。西壁の中央部やや南寄り部分に作り付け竈がある。規模は検出時で120cm×110cmを測り、依存状態は比較的良好であるが、煙道部は確認できず、支脚なども検出されていない。袖部は暗褐色粘土で構築されており、全体によく焼けているため、表面が硬化している。燃焼部と焚口部には焼土や炭化物、灰が堆積している。焚口部右側手前には土師器甕上半部が置かれており、この部分を避けるように左側手前に灰をかきだしている。出土遺物は須恵器や土師器の破片が少量みられる程度で、時期ははっきりしないが、奈良時代と考えられる。

2) 建物G-4 (図10、写真図版4)

G地区の中央部南寄りで検出された。建物G-3と隣接しているが、主軸方向が異なっていることなどから、関連はないものと考えられる。南北5間(7.8m)×東西2間(3.4m)の建物で、東側に約7.5mの柵列を持つ。柵列は、建物G-4の柱間間隔とは一致していないが、主軸方向が平行であることや、建物を構成するような他の柱穴が検出されなかったため、建物G-4に付属する柵列と判断した。建物の中央部分に大きな攪乱を受けていることや、南から2列目の柱列が揃っていないため、総柱の建物であるか否かははっきりしない。主軸方向はほぼ南北方向に一致している。柱間はほぼ等間隔で、約1.6mを測る。柱穴掘方は隅丸方形を呈しており、一辺約50cm、深さ10~40cmを測る。埋土は暗褐色砂質土が基本であるが、遺物はほとんど出土していない。隣接してピットは検出されておらず、調査区南端部のピット群とやや隔たりがある。

3) 建物G-5 (図10、写真図版4)

G地区の南部で、竪穴住居G-1に隣接したかたちで検出された。柱穴は揃っていないが、南北3間(5.4m)×東西2間(3.4m)の建物で、主軸方向はほぼ南北方向に一致している。南北列の柱間がやや長く、平均は南北1.8m、東西1.6mを測る。柱穴掘方は不整形円形を呈しており、規模は平均して径約50cm、深さ20~50cmを測る。埋土は建物G-4と同様に、暗褐色砂質土が基本であるが、遺物はほとんど出土していない。建物の南側にはピット群が密集しており、建物を復原することはできないが、埋土が建物G-5と同様であることから、集落を構成していたことが考えられる。ピットの埋土からも遺物はほとんど出土していないため、時期を確定できないが、この部分の遺物包含層である暗褐色砂質土層から奈良時代の土師器杯や須恵器杯・甕などが出土しているため、これらの遺構群の時期は奈良時代を

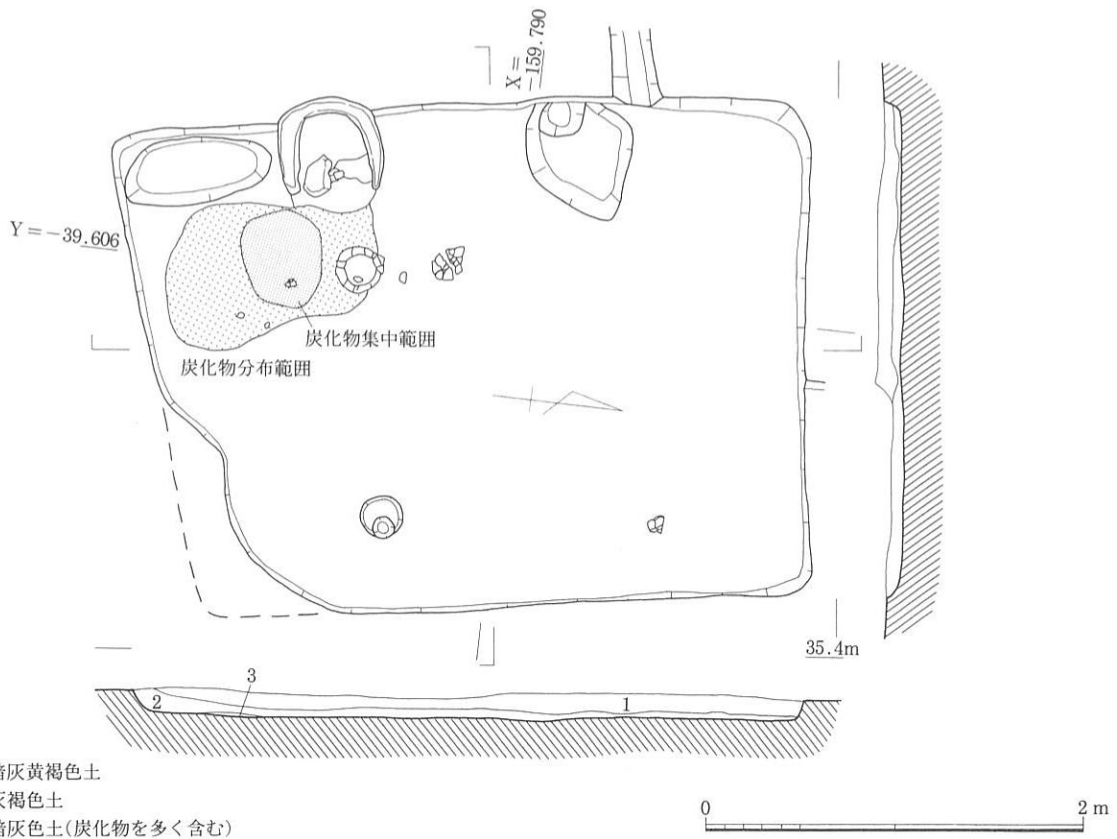


図9 竪穴住居G-1平・断面図

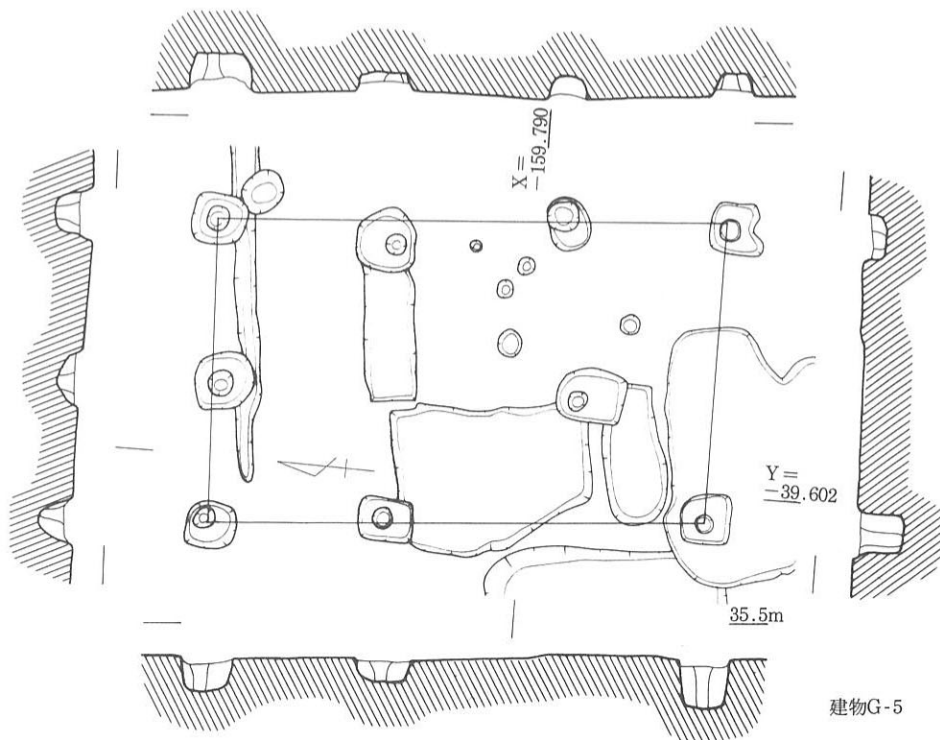
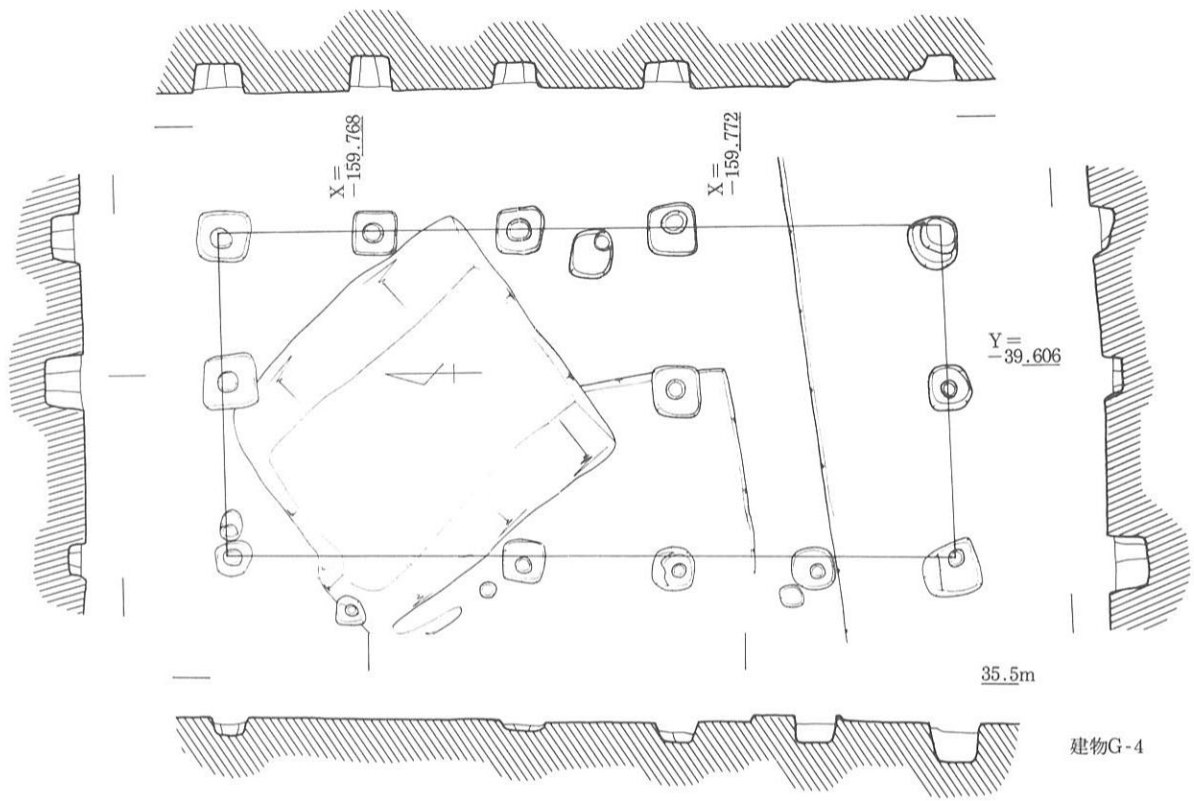


图10 建物G-4・5平・断面图

中心とするものと考えることができる。竪穴住居G-1との関係ははっきりしないが、ほぼ同時期に存在したと考えられることから、密接な関係を持っていたことは確かであろう。

(2) ピット

前項でも述べたように、奈良時代を中心とするピット群は、G地区南部に集中している。その他の地区では、部分的にF地区北部などで検出されているのみで、建物を復原できるものはないことから、集落を構成していたとは考えられない。当該期の集落は、G地区南部のみで営まれていたものといえる。遺物の出土したピットはほとんどないことから、時期の確定できるものは少ないが、ここでは遺物が出土して時期の確定できるピットに関してのみ記述する。

1) ピットF-62

F地区の北端部で検出された。溝F-5を切っており、一部は調査区外にひろがる。南北方向が長い楕円形を呈しており、長径66cm以上、短径50cm、深さ30cmを測る。埋土は灰褐色砂質土が基本で、部分的に暗灰褐色砂質土を含む。土師器杯と羽釜が出土しており、出土状況から柱穴よりも土器埋納ピットと考えるほうが妥当であろう。

(3) 溝

溝は、集落が営まれていると考えられるG地区とF地区北部、E地区で検出されている。

1) 溝G-3

G地区のほぼ中央部で検出された。ほぼ南北方向に走る溝であるが、隣接する近世の溝G-1と重複する部分が多いことから、全容は不明で部分的な検出にとどまっている。検出箇所での規模は、幅約1m、深さ約46cmを測る。遺物は須恵器杯・壺、土師器杯・羽釜などが出土している。

また、中世以降につくられたと考えられる溜池部分の14Gトレンチでは、底から溝の一部が残存していることが確認され、須恵器や土師器が出土している。遺物の時期から溝G-3がこの部分までのびていたことが推測されるが、途中で溝G-1と重複する部分があることから確定できない。そのため、ここでは一応別の溝と考えることとした。ただ、この溜池も開析谷を利用した池であることから、本来この部分に流れ込む水路が掘削されていたことが考えられ、奈良時代にさかのぼる溝が存在することは否定できない状況である。

2) 溝G-51・61

G地区の北部西寄りで検出された。昭和60年度の調査では、ほぼ南北方向にのびる溝が西へ屈曲することが確認されていた。平成4年度に西側のトレンチを調査した際、この溝に続くと考えられる溝が検出され、溝の全容が明らかとなった。新たに検出された溝(溝G-61)は、さらに屈曲して南西方向にのびるため、溝の全形は、逆コの字状を呈していることがわかった。全体形状から、水路というよりも建物などの施設を区画する溝と考えることができる。ただ、区画内部では建物を構成するようなピットなどは検出されていないことから、はっきりしない。長さは、南北方向部分が約3m、東西方向部分が約6m、南西方向部分が約10mで、さらに調査区外へのびる。幅は6~20cm、深さ約10cmを測る。遺物の量は少ないが、溝G-61から須恵器杯が出土しており、奈良時代の溝と考えられる。

3) 溝F-5

F地区の北端部で検出された。南北方向にのびる溝であるが、南側は溝F-6に切られているほか、北側は調査区外にのびることから、全容は不明である。検出箇所での規模は、長さ約3m、幅1.2m、深さ約10cmを測る。埋土は灰黄色砂質土が基本である。須恵器杯・高杯・甕、土師器杯・甕・壺・製塩

土器などが出土している。

4) 溝F-11

F地区の北端部で検出され、溝F-5の南側に位置する。東西方向にのびる溝で、長さ約13m、幅0.3~1.6m、深さ約0.2mを測る。埋土は灰黄色砂質土が基本で、褐色土が混じる。溝F-5とは直接つながらないものの、位置関係では直交していることや、埋土が類似していることから、関連性が考えられる。このため、溝F-5と共に、L字形の区画を表す溝と考えることもできる。ただ、区画された内部からは建物を構成するようなピットなどは検出されていないため、はっきりしない。遺物は、須恵器杯・甕、土師器皿・甕・羽釜などがみられるほか、和同開珎が3点出土している。

(4) 土坑

土坑は、集落が営まれていると考えられるG地区ではほとんどみられず、溝が検出されたF地区北部で検出されている。

1) 土坑F-18

F地区の北部東寄りで検出された。土坑F-19を切っており、平面形は楕円形を呈しているが、一部は調査区外へひろがるため、全容は不明である。土坑F-18の西側では、遺構がほとんど検出されていないため、土坑の性格は不明である。検出箇所での規模は、長さ2m、幅約1m、深さ0.2mを測る。埋土は、暗灰黄色砂質土が基本である。土師器皿・甕、須恵器杯・甕などが出土している。土坑F-19からは、遺物は出土していないため、時期は確定しない。ただ、土坑F-18と埋土が類似していることから、あまり時期差があるものとは考えられない。

2) 土坑F-84

F地区の北部西寄りで検出された。平面形は方形を呈しているが、一部は調査区外へひろがるため、全容は不明である。検出箇所での規模は、長さ約1m、幅約1.2m、深さ約0.2mを測る。埋土は、黄褐色粘砂質土が基本である。土師器杯・甕・羽釜、須恵器杯などが出土している。

3) 土坑F-85

F地区の北部西寄りで検出され、土坑F-84の北側に位置している。平面形は楕円形を呈しており、規模は、長径約4m、短径約3m、深さ約0.4mを測る。埋土は、灰黄褐色粘砂質土ないし暗灰黄色粘土質シルトが基本である。土師器杯・甕・羽釜、須恵器杯・甕・壺などが出土している。

4) 土坑G-50

G地区北西部の逆コの字状に巡る溝G-51の南側で検出。楕円形状を呈し、長径約3.2m、短径約2m、深さ約0.5mを測る。埋土は黄灰色土である。遺物は須恵器杯、土師器皿、羽釜、壺、甕などが少量出土している。

(5) 小結

奈良時代の遺構は、主に竹内街道を臨むG地区南部を中心にひろがっている。この部分では、掘立柱建物がみついているほか、多くのピットが密集していることから、さらに建物が多く存在したことが推測される。井戸や土坑はみつからないが、調査区南部の開析谷に向かう溝も検出されたことから、排水路がつけられ、この部分で集落が営まれていたと考えることができる。他の地区では、F地区北部で溝や土坑が検出されているが、建物は復原できず、G地区とは様相が異なる。さらにD地区やE地区でも溝や土坑が検出されているが、いずれも散発的で、集落の存在は確認できない。

第2節 平安時代～中世

本遺跡でもっとも遺構の展開している時期が、平安時代～中世の時期である。ほぼ調査区全域で遺構が検出されているが、同じ場所で長く続くことはなく、時期によって遺構の配置が異なっている。奈良時代以前の遺構は、主にG地区南部で検出されていたが、平安時代以降、遺構はほとんどみつかっていない。平安時代の遺構は、主にF地区北部で検出され、特にこの部分でみつかった大規模な建物をもつ屋敷は在地有力者のものと考えられる。平安時代末～南北朝時代の遺構は、B地区やE地区でまとまって検出されている。遺構の構成からB地区は有力者の屋敷、E地区は集落と考えられる。室町時代の遺構は、E地区やF地区で溝や土坑・井戸などが検出されており、遺物量も多い。ただ、建物の復原はできず、集落が営まれていたかどうかははっきりしない。遺物の中には、瓦類が多いほか、灯明台台座や瓦質製品が多くみられることから、調査区付近に寺院が存在していたことが考えられる。

1. 平安時代

F地区北部で、平安時代の屋敷地が検出されている。屋敷地を取り囲む溝や掘立柱建物群、井戸、溝、ピット群などで構成されている。その他には、E地区やG地区で溝や井戸、土坑などが検出されている。ここでは、まずF地区の屋敷地に関する遺構についてまとめて述べ、その他の地区については遺構別に記述することとする。

(1) F地区の屋敷地

F地区の北部で検出され、まわりを溝に囲まれた屋敷地と考えられるが、調査区が道路幅のみに限定されていたため、北辺と南辺の溝を検出したのみである。北辺の溝は溝F-6、南辺は溝F-38でほぼ東西方向に走る。溝F-38は途切れる部分が認められ、ちょうど建物F-1の南側正面に位置することから、屋敷地の入口と考えられる。掘立柱建物は、建物F-1を中心として、主軸方向が揃う数棟分の復原ができる。南西側では、建物が2棟復原されたが、建物F-1に先行するものも認められ、ある程度の建物の建て替えが行われていたことがわかる。西側では、建物が4棟復原されたほか、井戸も2基検出されているが、重複が認められるものや柱穴に統一性のないものもあり、同時に存在したものはこの数を下回ると考えられる。また、南東側にも全形は不明ではあるが、建物の存在が認められた。さらに溝F-38に先行する建物も検出されていることから、屋敷がつくられる以前にこの場所に建物が数棟存在していたことがわかる。

1) 建物F-1 (図11、写真図版6・7)

屋敷地の中心に位置するものと考えられるが、溝F-6に隣接するかたちで屋敷地の北側に寄っている。南北2間(4.2m)×東西5間(9.0m)で、南側に庇を持つ建物である。庇の出は1間分(約1.8m)で、主舎部分の1間分の距離とほぼ等しいが、後に付加された可能性もあり、検討を要する。また、周囲には、雨落ち溝や足場穴と考えられるピットなどが認められる。主軸方向の方位はほぼ東西方向である。南北列の柱間がやや長く、平均は南北2.1m、東西1.9mを測る。柱穴掘方は方形を呈しており、規模は平均して一辺約1mで、柱痕跡も径約0.4m、深さ約0.6mを測る。埋土は黄灰色砂質土が基本であるが、黄灰色粘土や暗灰褐色砂質土が混じる。柱痕跡部分の埋土もほぼ同様であるが、輪郭が比較的是っきりと確認できるものもある。また、抜き取り穴が認められるものもみられるほか、柱穴内に根石や平石を据えたものもある。遺物の量は全体に少ないが、土師器や須恵器が出土している。

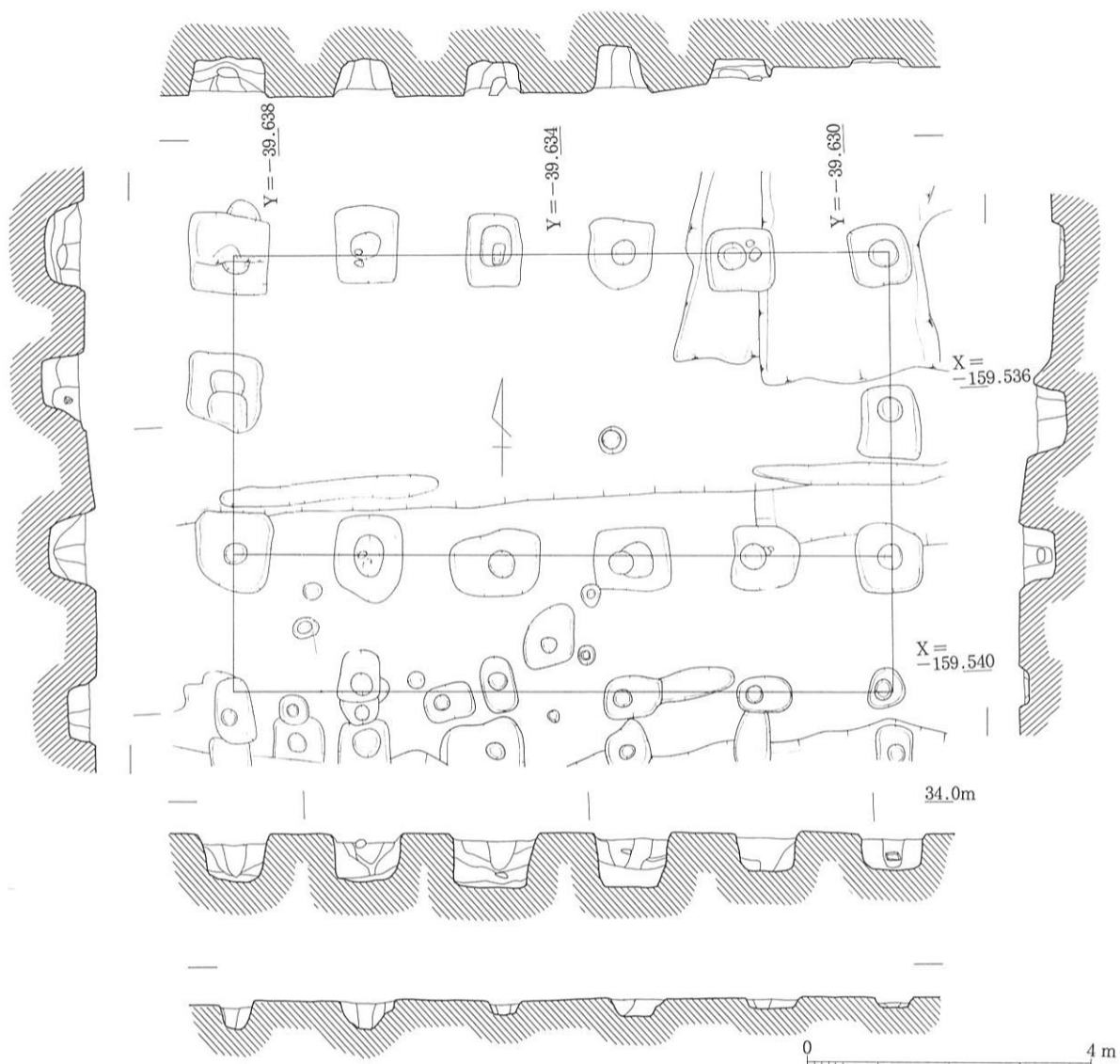


図11 建物F-1平・断面図

2) 建物F-2 (図12)

建物F-1の南西側で隣接して検出された。南北2間(3.8m)×東西2間(5.6m)の建物で、主軸方向はほぼ東西方向に一致している。東西列の柱間が長く、平均は東西2.8m、南北1.9mを測る。柱穴掘方は隅丸方形を呈しており、規模は一辺約0.7m、柱痕跡は径約0.3m、深さ約0.4mを測る。柱穴の重複関係から、建物F-1に先行する建物と考えられる。遺物はほとんど出土していないため、時期は確定しない。

3) 建物F-3 (図12)

建物F-1の南西側で隣接して検出された。建物F-2と重複しており、建物F-3のほうが新しい。南北2間(5.4m)×東西2間(4.0m)の建物で、主軸方向はほぼ南北方向に一致している。やや小型であるが、東柱と考えられるピットが認められることから、総柱建物になる可能性がある。南北列の柱間が長く、平均は南北2.7m、東西2.0mを測る。柱穴掘方は南北方向がやや長い隅丸方形を呈しており、規模は一辺約0.6~0.8m、柱痕跡は径約0.3m、深さ約0.4~0.6mを測る。遺物はほとんど出土していないため、時期は確定しない。重複関係をまとめると、建物F-2→建物F-1→建物F-3の順につ

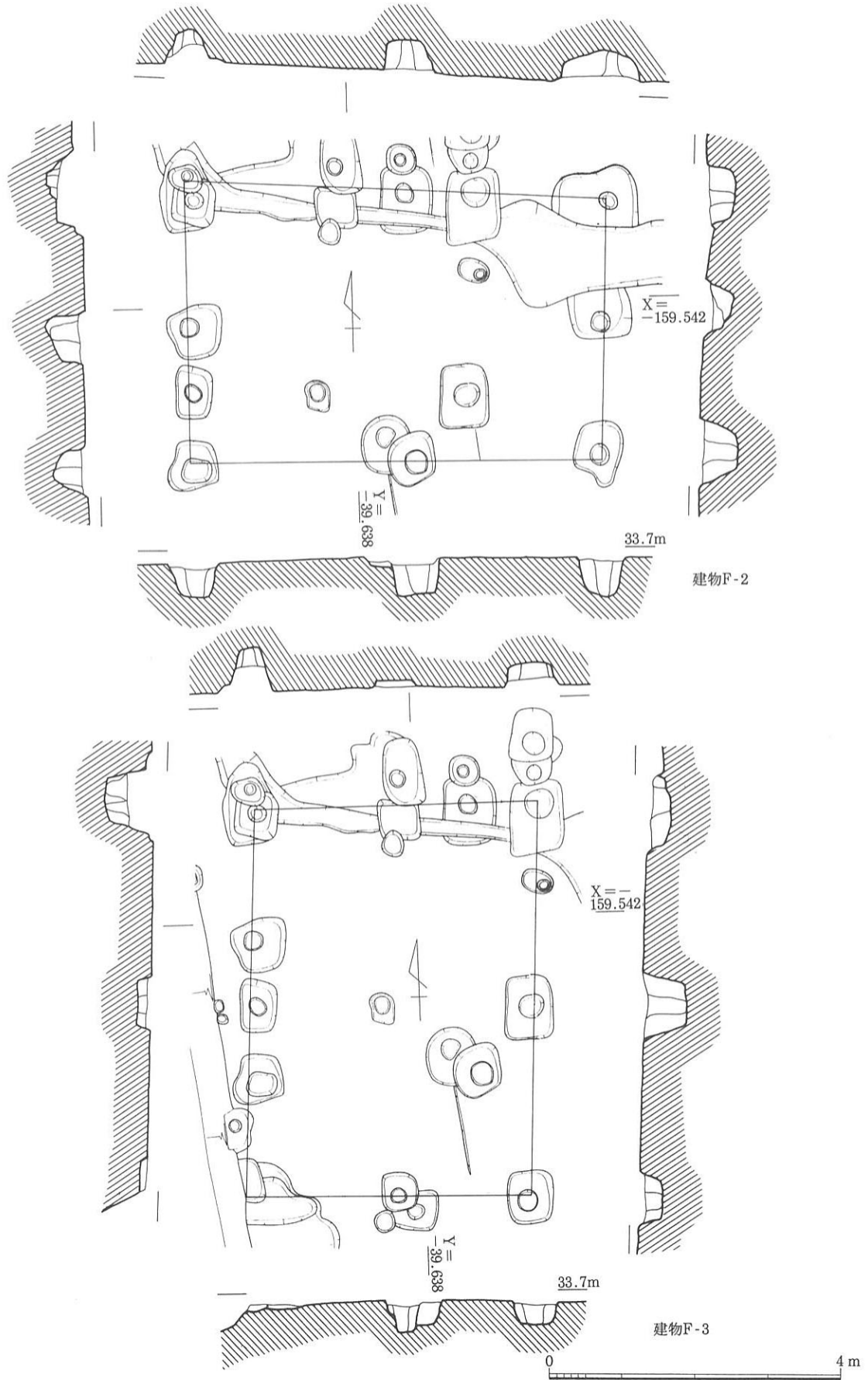


图12 建物F-2・3平・断面图

くられたものと推定される。

4) 建物F-4 (図13)

建物F-1の西側やや北寄りで検出された。南北3間(5.8m)×東西2間(3.6m)の建物で、主軸方向はほぼ南北方向に一致している。南北列の柱間がやや長く、平均は南北1.9m、東西1.8mを測る。柱穴掘方は隅丸方形を呈しており、規模は一辺約0.6m、柱痕跡は径約0.2m、深さ約0.2~0.4mを測る。遺物はほとんど出土していないため、時期は確定しない。

5) 建物F-5 (図13)

建物F-1の西側で検出された。建物F-4と重複しており、建物F-5のほうが新しい。東西列の柱穴が不明な部分もあるが、南北4間(7.0m)×東西2間(3.6m)の建物で、主軸方向はほぼ南北方向に一致している。東西列の柱間がやや長く、平均は東西1.8m、南北1.7mを測る。柱穴掘方は隅丸方形を呈しており、規模は一辺約0.6m、柱痕跡は径約0.2m、深さ約0.2~0.4mを測る。遺物はほとんど出土していないため、時期は確定しない。建物F-4の建て替えとも考えられるが、規模が異なっている。

6) 建物F-6 (図14、写真図版7)

建物F-1の西側やや南寄りで検出された。南北3間(6.0m)×東西2間(3.6m)の建物で、主軸方向はほぼ南北方向に一致している。柱間は等間隔で、約1.8mを測る。柱穴掘方は隅丸方形を呈しており、規模は一辺約0.4m、柱痕跡は径約0.2m、深さ約0.2mを測る。遺物はほとんど出土していないため、時期は確定しない。建物F-5とほぼ同じ大きさの建物であるが、柱穴の規模はかなり小さいため、上屋の構造は、簡易なものであったと考えられる。井戸F-1と重複しているが、先後関係は不明である。

7) 建物F-7 (図14)

建物F-1の西側やや南寄りで検出され、建物F-5の南側に位置する。南北3間(5.0m)×東西2間(3.2m)の建物で、主軸方向はほぼ南北方向に一致している。柱間は、1.4~2.0mを測り、そろっていない。柱穴掘方は隅丸方形を呈しており、規模は一辺約0.6m、柱痕跡は径約0.2m、深さ約0.4mを測る。遺物はほとんど出土していないため、時期は確定しない。柱筋が通らず、柱間も一定ではないため、建物とは考えにくい点もあるが、建物F-4・5の東側柱列の延長上に柱列が並ぶことから、建物としておく。建物F-4~7は、主軸方向が一致しており、一部重複はあるものの、柱列が並ぶなどの関連性が認められる。同時に存在していたのか否かは不明であるが、建物F-1の西側に位置する建物が数棟建てられていたことが考えられる。

8) 建物F-8

建物F-1の南東側で検出された。西側柱列のみが検出され、東側の大部分は調査区外にひろがるため、全容は不明である。南北方向は3間(6.0m)で、主軸方向はほぼ南北方向に一致している。建物F-1の西側で建物がみつまっていることから、東側でも存在する可能性は高いと考えられる。

9) 建物F-9 (図15)

建物F-1の南側やや西寄りで検出された。現代の排水路が中央部分を貫通しているため、全容ははっきりしないが、南北3間(5.0m)×東西2間(3.0m)の建物と考えられる。主軸方向はほぼ南北方向に一致している。東西列の柱間は不明であるが、南西は約1.6mを測る。柱穴掘方は、不整円形あるいは隅丸方形を呈しており、規模は一辺約0.6m、柱痕跡は径約0.2m、深さ約0.2~0.4mを測る。遺物はほとんど出土していないため、時期は確定しない。一部が溝F-38と重複しており、建物F-9の方が古い。

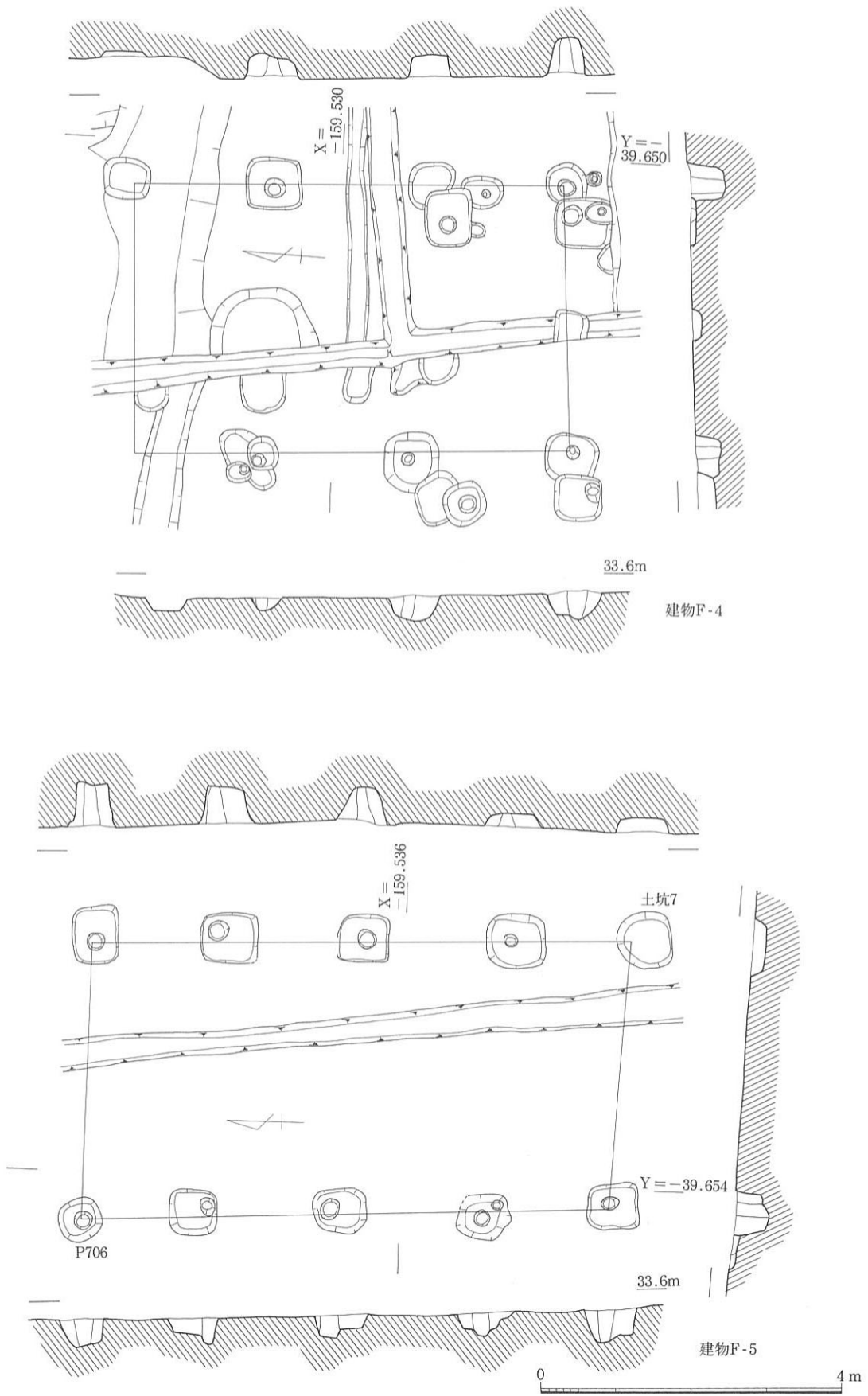


图13 建物F-4・5平・断面图

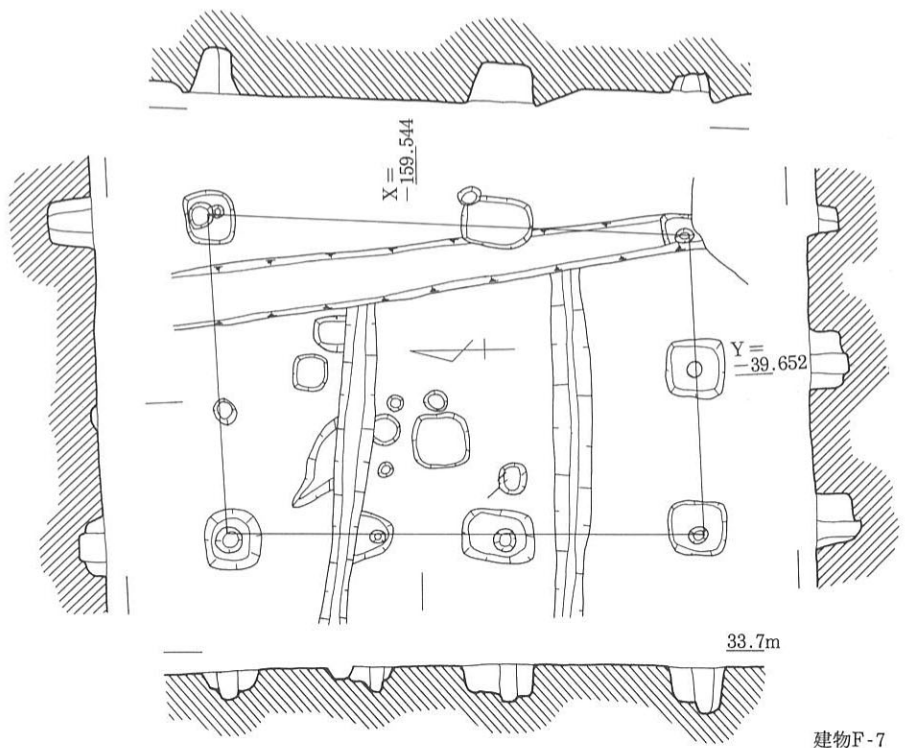
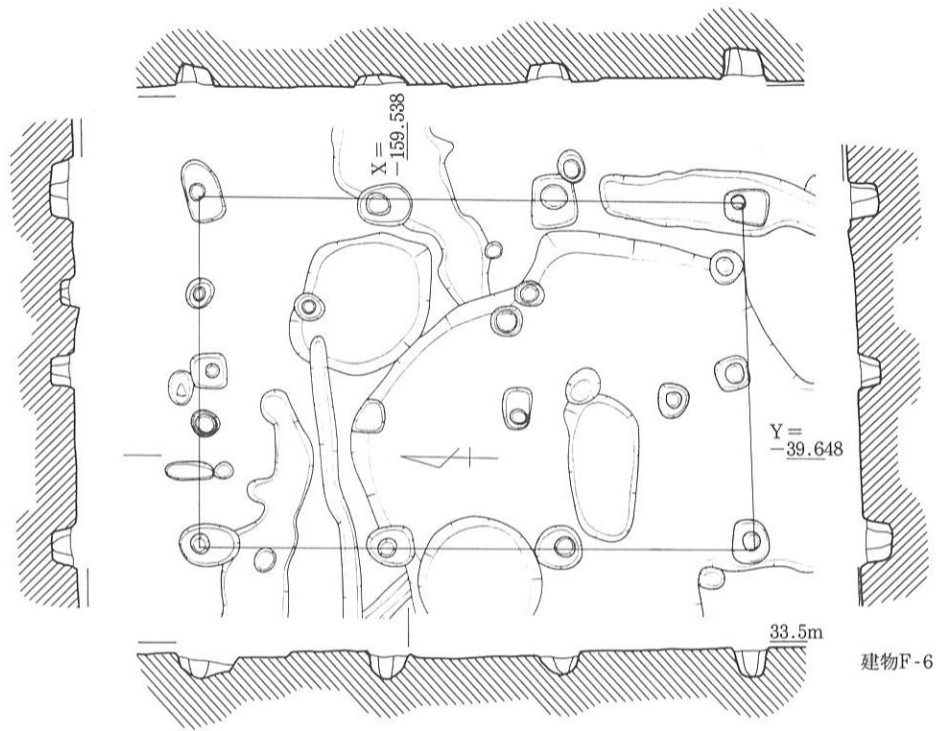


图14 建物F-6・7平・断面图

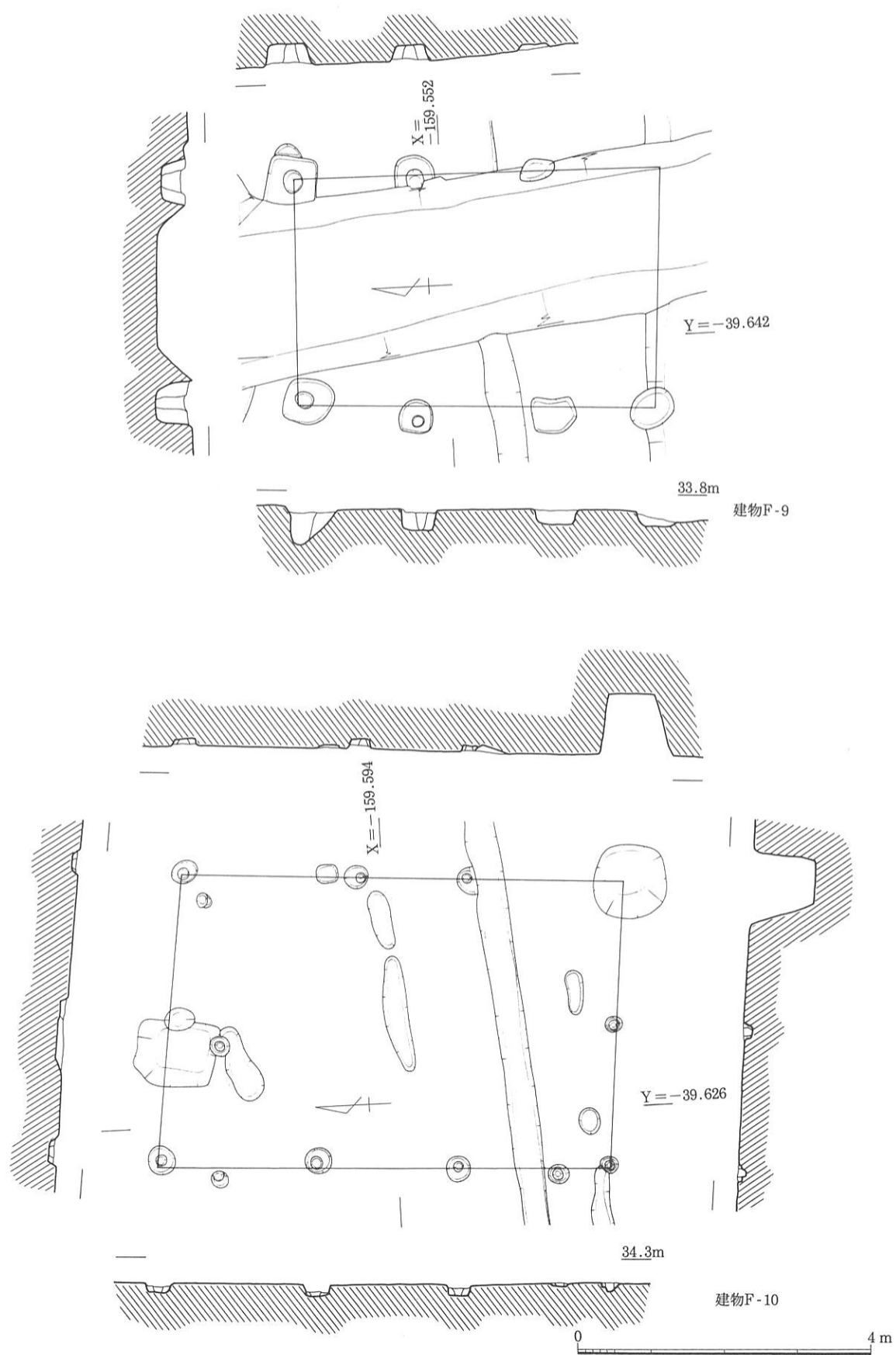


图15 建物F-9・10平・断面图

10) 溝F-6 (写真図版8)

屋敷地の北辺を画する溝である。規模は、幅約2m、深さ0.4mでほぼ東西方向に走っており、両端は調査区外へのびる。溝の南辺はほぼまっすぐにそろっているが、北辺は凹凸が著しい。埋土は、褐色混じり暗灰色土が基本である。遺物は、土師器、須恵器などが出土している。

11) 溝F-38

屋敷地の南辺を画する溝である。規模は、幅1~3m、深さ約0.2mでほぼ東西方向に走っており、溝F-6と同様に両端は調査区外へのびる。溝の幅は一定しておらず、溝F-6とは様相が異なる。埋土は、灰黄色粘質土が基本であるが、みかけは地山と似ている。遺物は、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・鉄鉢・壺、黒色土器などが出土している。ほぼ中央部分で、約1.2mにわたって溝の途切れる部分が認められ、前述したように建物F-1のほぼ正面に位置することから、屋敷地の入口と考えられる。溝F-6と溝F-38は、その心々距離が約27m(約1/4町)で平行していることから、屋敷地を区画するために計画的に掘削されたことが考えられる。

12) 軸受け石 (図16、写真図版9)

屋敷地南側の調査区東端で検出された。検出遺構は、一辺約1.5mの隅丸方形の土坑状を呈し、東半分は調査区外へと延びる。石は、土坑の中央部より上面がほぼ水平の状態出土した。土坑の深さは、石の周囲で十数cm、中央部付近で約30cmである。埋土は、暗褐色粘質土および暗灰褐色粘質土である。埋められた時期ははっきりせず、屋敷地との関係も不明である。ただ、周辺で検出された遺構がほとんど平安時代に属しているため、一応ここで述べることにする。推測の域を出ないが、平安時代の屋敷で使われていた軸受け石で、その後転用され、中世以降の開発に伴い、この場所に埋められた可能性もある。

石材は(角のとれた礫を含んだ)凝灰岩製で、二上山産の風化していない硬いものである。形状は下がややすぼまる円柱状を呈し、上面と下面は平行ではないので、そのまま置くと上面が斜めを向いた状態となる。大きさは、上面43×45cm、下面24×38cm、高さ34cmである。中央部穴は直径19×20cm、深さ13cmである。石の側面と下面は加工したままの状態、上面には新しい欠損が一部みられる。上面の外周が一番高く、中央の穴に向かってわずかに低くなっており、穴部分の縁と外周の差は5mm前後である。穴部分の中心からややずれて直径5cm程度の挿鉢状の窪みがある。穴部分の肩には若干傾斜に差があり、片方に少しなだらかで、反対側へは少し直に落ちる傾向がある。上面および穴の表面は滑らかである。穴部分の磨滅は上下方向で、左右方向には認められない。側面のやや広い範囲で、相対する位置に煤の付着が少し認められる。これは最初に軸受け石として作られ、あとで唐臼として転用された可能性が高いようである。転用の痕跡として、穴部の傾斜に差のみられることがあげられる。

屋敷地の東限と西限は調査区外であるため、不明であるが、周辺の地形とF地区南東端部で検出された溝F-62から、ある程度東西の規模を推定することができる。溝F-62については後述するが、南北方向に走る溝で、若干のズレはあるものの中世以降の用水路と一致し、現在の坪境でもあることから、古くからの土地の境界であった可能性がある。溝F-62の延長したラインは、屋敷地の入口とした溝F-38

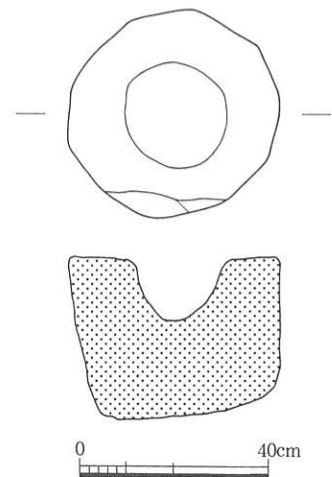


図16 F地区軸受け石

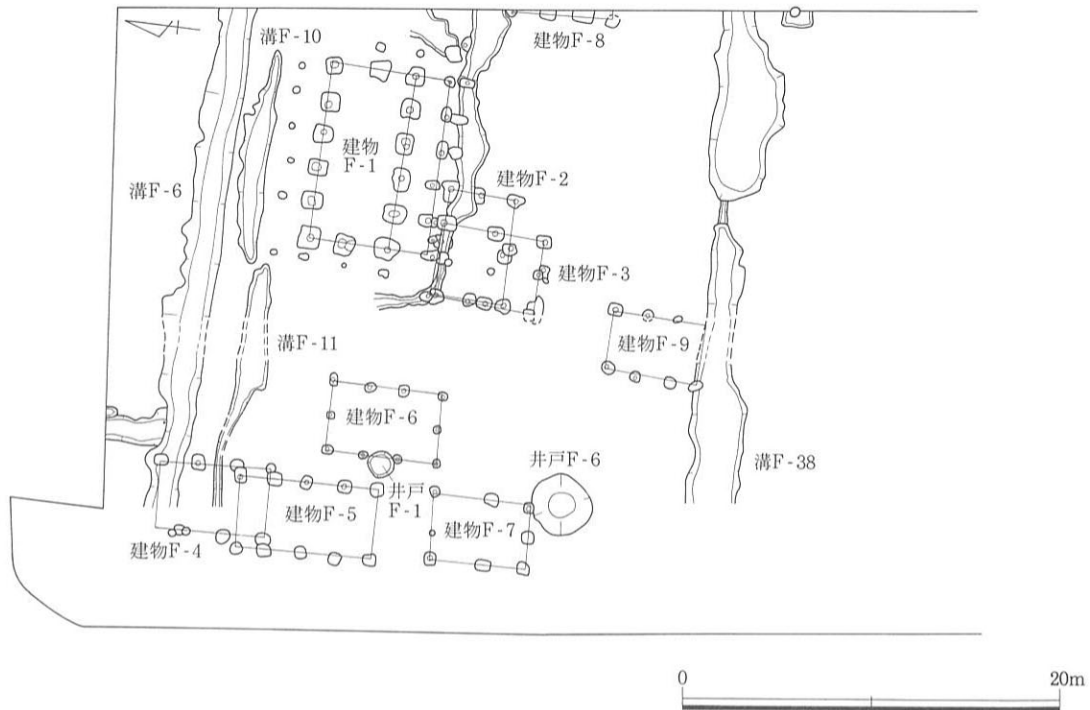


図17 F地区平安時代・屋敷地の建物復元案

の途切れた部分から東へ約27m（約1/4町）の部分を通ることになる。入口から東へ1/4町の部分に、現在の坪境や中世以降の用水路が存在しており、溝F-62の延長線もこの部分を通ることから、屋敷地の東限と考えられる。さらに、入口が屋敷地の東西幅の中央にあると仮定すれば、入口から西へ1/4町の部分に西限を求めることができる。この推定によれば、屋敷地の規模は東西約54m（1/2町）、南北約27m（1/4町）と考えることができる。

屋敷地を囲む溝に切られているピットがいくつかみられることから、溝をめぐる以前に建物が存在したことは確実である。重複関係から建物F-4・9などがこれにあたり、建物F-1より古いと考えられる建物F-2もはっきりしないが、同時期の可能性がある。建物F-1は、屋敷地の入口からみて正面奥に位置しており、背後の雨落ち溝（溝F-10）の位置関係からみても、屋敷地を囲む溝と同時期と考えることができ、屋敷地内の中心的な建物といえる。確定することは難しいが、建物F-5・6・7・8などは、同時期に存在したと考えることができる。

（2）建物

平安時代に属すると考えられる建物跡で復元できたものは、F地区の建物群のほかにC地区で見られる。また、E地区やG地区でも、平安時代のものと考えられるピット群が検出されているため、建物の復元はできなかったものの、この部分においても建物が存在した可能性は高い。

1) 建物C-1（図18、写真図版10）

C地区の南西部で検出された。全面に削平をうけているが、南北方向4間（6.5m）×東西方向2間（4.3m）の規模で雨落ち溝を伴う。主軸はほぼ南北方向に一致している。東西列の柱間がやや長く、平均は南北1.6m、東西2.0mを測る。柱穴掘方は円形か隅円方形を呈しており、規模は平均径65cm、深さ約21cmを測る。埋土は黄灰色土で、遺物が検出されておらず、時期は不明であるが、おそらく古代のものであろう。建物C-1の南側でピットが検出されており、掘立柱建物の存在が推定されるが、調査区外に及ぶため、規模などは不明である。柱穴の形状から同時期のものと考えられる。

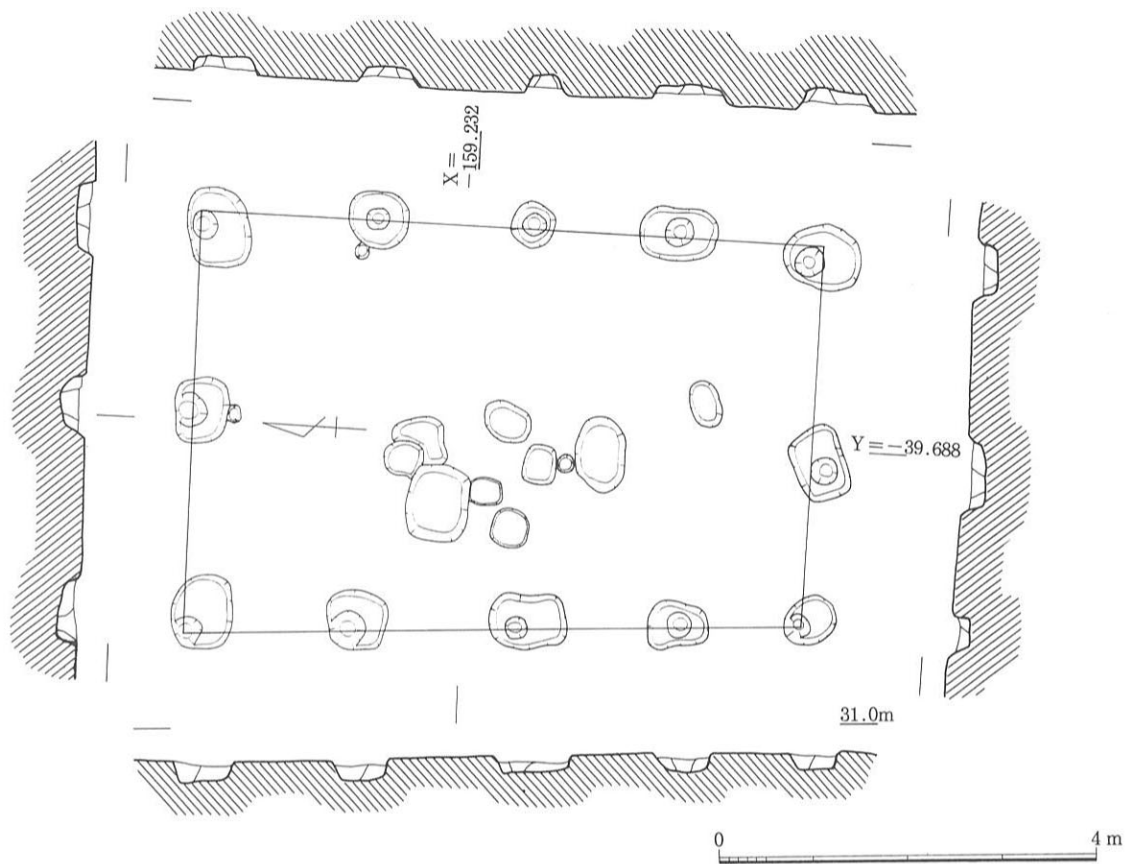


図18 建物C-1平・断面図

(3) ピット

奈良時代に引き続き、E、F、G地区で平安時代と考えられるピットの偏りがみられる。ここでは、遺物が出土して時期の確定できるピットに関してのみ記述する。

1) ピットE-401

E地区中央西端部より検出された。柱穴掘方は楕円形を呈しており、長径36.5cm、短径30.5cm、深さ32cmを測る。柱痕径は15cmである。埋土は黄灰色ないし暗灰黄色シルト質で、炭化物を含む。遺物は黒色土器、土師器皿・羽釜、瓦などが少量出土している。

2) ピットF-380

F地区の中央部で検出された。平面は楕円形を呈しており、長径50cm、短径43cm、深さ8cmを測る。遺物は土師器耳皿、黒色土器、須恵器などが出土している。

3) ピットF-707

F地区の西部やや北寄りで検出された。平面は円形を呈しており、直径29cm、深さ6cmを測る。遺物は土師器、黒色土器A、瓦器椀、石鏃、凹み石などが出土している。

4) ピットG-309

G地区中央部やや北側の建物G-1西側で検出された。平面は五角形状を呈しており、長径107cm、短径106cm、深さ4cmを測る。遺物は須恵器長頸壺が出土している。

(4) 溝

平安時代の溝は、E地区の建物群周辺とF地区で検出されたほか、G地区では調査区を横切る大溝が

みられる。E地区の溝に関しては、次項で述べる建物群に伴うものと考えるのが妥当であるが、建物群に先行する遺物が出土していることから、ここで述べることとする。

1) 溝E-7

建物E-5を取り囲むように巡る溝で、南北方向に緩やかに弧を描いている。規模は、幅1.2~1.6m、深さ22cmを測る。遺物は奈良~平安時代の土師器、須恵器、中世の土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦、鉾滓などが出土している。古代の遺物の方が遺存状態が比較的良好で、中世遺物は細片が多い。

2) 溝E-9

東西方向に走る溝で、溝E-7とともに建物E-5を取り囲むように巡る。規模は、幅1~1.3m、深さ約30cmを測る。遺物は土師器皿・杯、須恵器杯・大甕などが出土している。溝E-7・9は建物E-5を意識してつくられたものと考えられるが、他の建物に切られているため、建物群がつけられる以前から存在していたことがわかる。ただ、顕著な時期差はあまりないため、建物群と無関係とは考えられず、建物群がひろがる初期段階につくられた溝といえることができる。

3) 溝F-102

F地区の北西部で検出され、建物F-7と重複する。溝は東西方向に走り、幅0.3~0.4m、深さ24cmを測る。遺物は須恵器蓋杯、土師質埴輪、土師器杯、羽釜、灰釉陶器碗などが出土している。

4) 溝F-62

F地区の南東端部で検出され、ほぼ南北方向に走る溝である。北側は調査区外にのび、南側は現代の井戸に切られている。埋土は、暗灰黄色砂質土であるが、底の中央部がさらに掘り下げられており、この部分は灰色砂質シルトである。規模は、幅約1m、深さ20~50cmを測る。遺物は、土師器や須恵器が少量出土している。

5) 大溝G-1 (図19、写真図版11)

G地区南西第2遺構面で検出された。方位はN-30°-Wで幅約3m、深さ約1.2mを測り、断面はV字形を呈している。埋土は4層に分かれ、底部の高さの違いにより南から北へ流れていたものと推測される。層によって出土遺物の時期が異なる。下層、最下層からは古墳時代から平安時代までの遺物が出土しており、奈良時代のものやや多くみられる。上層、中層からは中世の遺物が少量出土している。このことから、大溝が使われていた時期は平安時代までとして、完全に埋められたのは中世まで下層である。

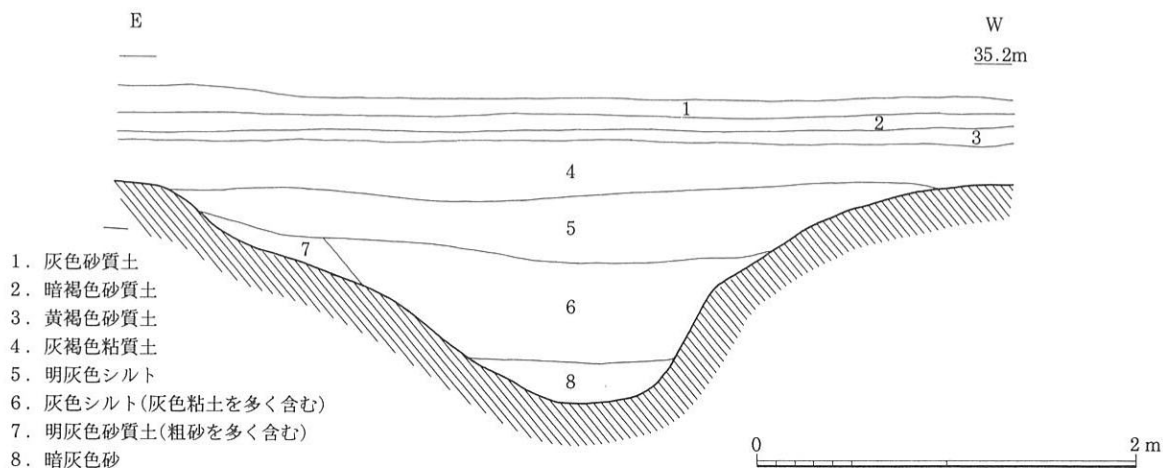


図19 大溝G-1断面図

(5) 井戸

平安時代の井戸はE、F、G地区で検出されている。

1) 井戸E-15 (図20、写真図版12)

E地区北寄り検出された。平面は円形を呈し、直径約1.8m、深さ約3mの素掘りの井戸であるが、井戸枠のあった可能性もある。遺物には、木筒、土師器、黒色土器A、須恵器、瓦、鞆羽口などが出土している。土師器杯底部外面には「畠」と墨書されたものが1点みられる。

2) 井戸F-6 (写真図版13)

F地区北西寄り検出された。平面は円形を呈しており、直径約3m、深さ約3m以上で、漏斗状に狭まり、底径約1mを測る。素掘りの井戸であるが、井戸枠のあった可能性があり、埋土は灰褐色土が基本である。遺物は須恵器、土師器、黒色土器A、瓦、根石などが出土している。土師器把手付き甕の体部には「東寺」と墨書されたものが3点認められた。

3) 井戸G-4

G地区中央よりやや北寄りの東側で検出された。直径約1.2m、深さ約3.6mで、狭まりながらほぼ垂直に落ちる。底径は約0.4mの素掘りの井戸である。埋土は暗褐色ないし暗灰色粘質土および暗青灰色シルトである。遺物は須恵器、土師器、黒色土器、焼土塊などが少量出土している。

(6) 土坑

平安時代の土坑はF、G地区で検出されている。

1) 土坑F-54

F地区中央よりやや南西の位置で検出された。道状遺構の北西にあたる。平面は不整形を呈し、長径2.2m以上、短径1.7m、深さ12cmを測る。遺物は土師器、須恵器杯蓋などが少量出土している。

2) 土坑G-43

G地区北寄りの東端で検出された。建物1北側のピット密集地点に位置する。長径3m、短径2m以上、深さ14cmを測る。埋土は灰褐色土である。遺物は須恵器、土師器、黒色土器A、鞆羽口、焼土塊、炭などが少量出土している。

(7) 畦畔

1) 畦畔G-1

G地区中央付近ではほぼ南北方向に走る畦畔状遺構が検出された。建物G-1の南側に位置し、幅0.2~0.4m、長さ約11m、高さ平均24cmである。この畦畔上からは体部の欠損した須恵器の長頸壺が1点出土している。

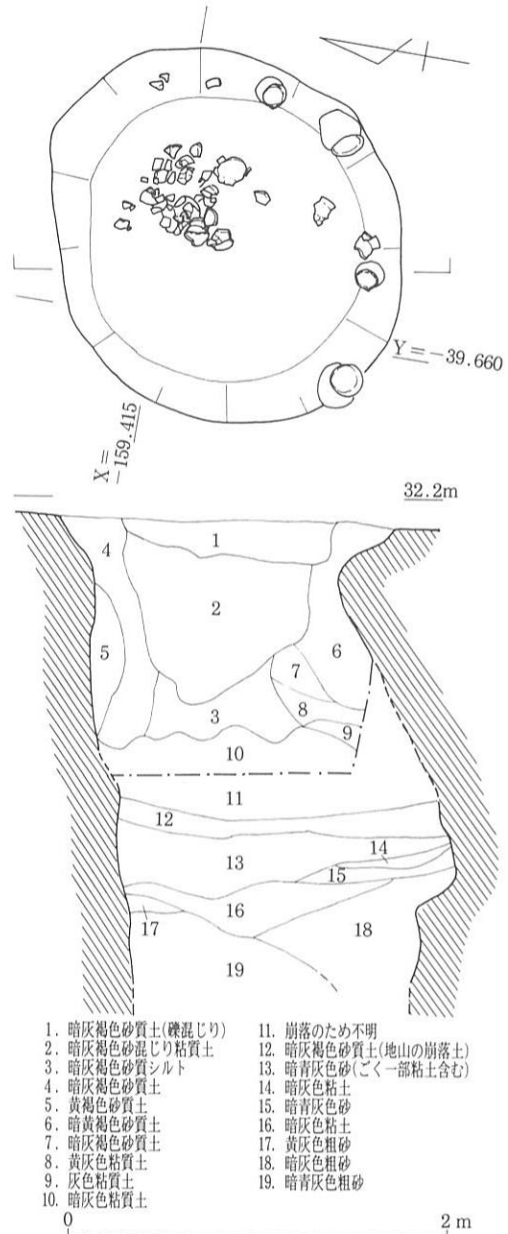


図20 井戸E-15平・断面図

2. 平安時代末～南北朝時代

B、D、E地区で掘立柱建物、柵列、溝、井戸、土坑などが検出されている。建物では、B地区西部およびD地区北部、E地区東部で複数の時期にまたがる建物群がみられる。B地区は平安時代末が中心で、D地区は平安時代末～鎌倉・南北朝時代、E地区は平安時代～鎌倉時代のものと思われる。

以下、建物群は地区毎に、他は遺構別に記述することとする。ただし、B地区の建物群は、土坑や井戸、区画溝などを伴っており、関連性が高いことから、これらをまとめて述べる。

(1) B地区の建物群

B地区では、ピット群や土坑、井戸などが多く検出された。これらの遺構は、調査区中央部を南南東から北北西へ直進する大溝B-1を境として、東側と西側で様相が異なる。東側では、数条の鋤溝がみられるほかは、土坑B-1が検出されたのみで、ピットもあまりみられない。これに対し、西側では、ピットが約300基検出されたほか、井戸や土坑もまとめてみつまっている。掘立柱建物の復原により、おおむね2時期の建物群がみられ、これらに伴うものと考えられる井戸や土坑も確認されることから、2時期にわたって屋敷地が構成されていたことがわかる。大溝B-1が掘削される時期が画期となり、建物群を分けることができる。ただ、両時期の建物は、主軸方向はやや異なるものの、ほぼ同じ場所に建てられていることから、以前の屋敷を意識して2期の屋敷はつくられたものと考えられる。また、復原は困難であったが、限られた区域に多くのピットが密集していることから、何度も建物の建て替えがおこなわれていたことがわかる。

1期

大溝B-1が掘削される以前の屋敷と考えられ、主要な遺構は、掘立柱建物3棟と井戸1基である。

1) 建物B-1 (図21、写真図版15)

B地区西部に重複する建物群があり、そのうちの2番目に大きい規模の建物である。2間(4.6m)×5間(10.3m)で、南面に半間の庇がついている。方位はN-10°-Wである。柱間寸法は、桁行で2.3m、梁行では北から2.2m、2.0m、2.5m、2.2mの平均2.2mと、庇の1.4mである。柱穴掘方は、円形ないし楕円形状を呈し、平均して径46cm、深さ25cmを測る。埋土は、黄灰色土が基本である。柱穴内に根石を含むものがみられ、その石の一部は火を受けている。遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器碗・小皿、中国製白磁皿、鋳滓などが少量出土している。

2) 建物B-2 (図22、写真図版16)

建物B-1の南西で、主軸の方位を同じくして検出された。2間(4.2m)以上×3間(6.0m)の規模で、総柱の建物で根石をもつことから倉庫と考えられるが、西側にさらにのびる可能性もある。柱間寸法は、桁行で2.1m、梁行で2.0mを測る。柱穴掘方は、円形ないし楕円形状を呈し、平均して径46cm、深さ21cmである。遺物は、土師器、瓦器などが出土している。

3) 建物B-3 (図22、写真図版16)

建物B-1の西側で、建物B-1・2と同じ方位で検出された。2間(3.3m)以上×3間(5.7m)の規模で、東面に庇がついている。西側にさらにのびる可能性があるが、建物の性格は不明である。柱間寸法は、桁行2.2m、梁行1.9mである。柱穴掘方は、円形ないし楕円形状を呈し、平均して径39cm、深さ約20cmを測る。埋土は、黄灰色土が基本である。柱穴内に根石を含むものがみられる。遺物は、土師器小皿、須恵器鉢、瓦器碗・小皿、陶器、焼土塊などが少量出土している。

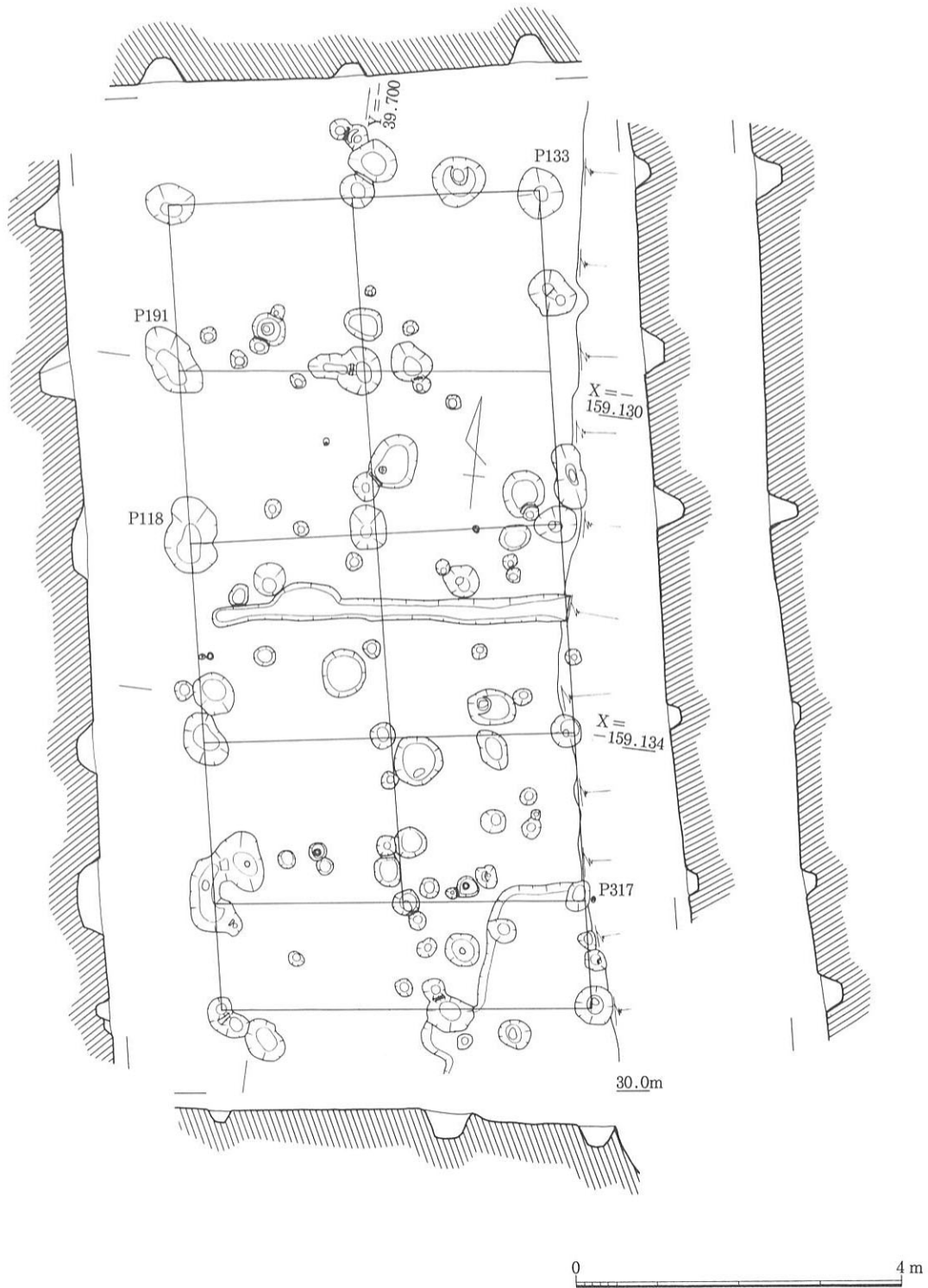


图21 建物B-1平・断面图

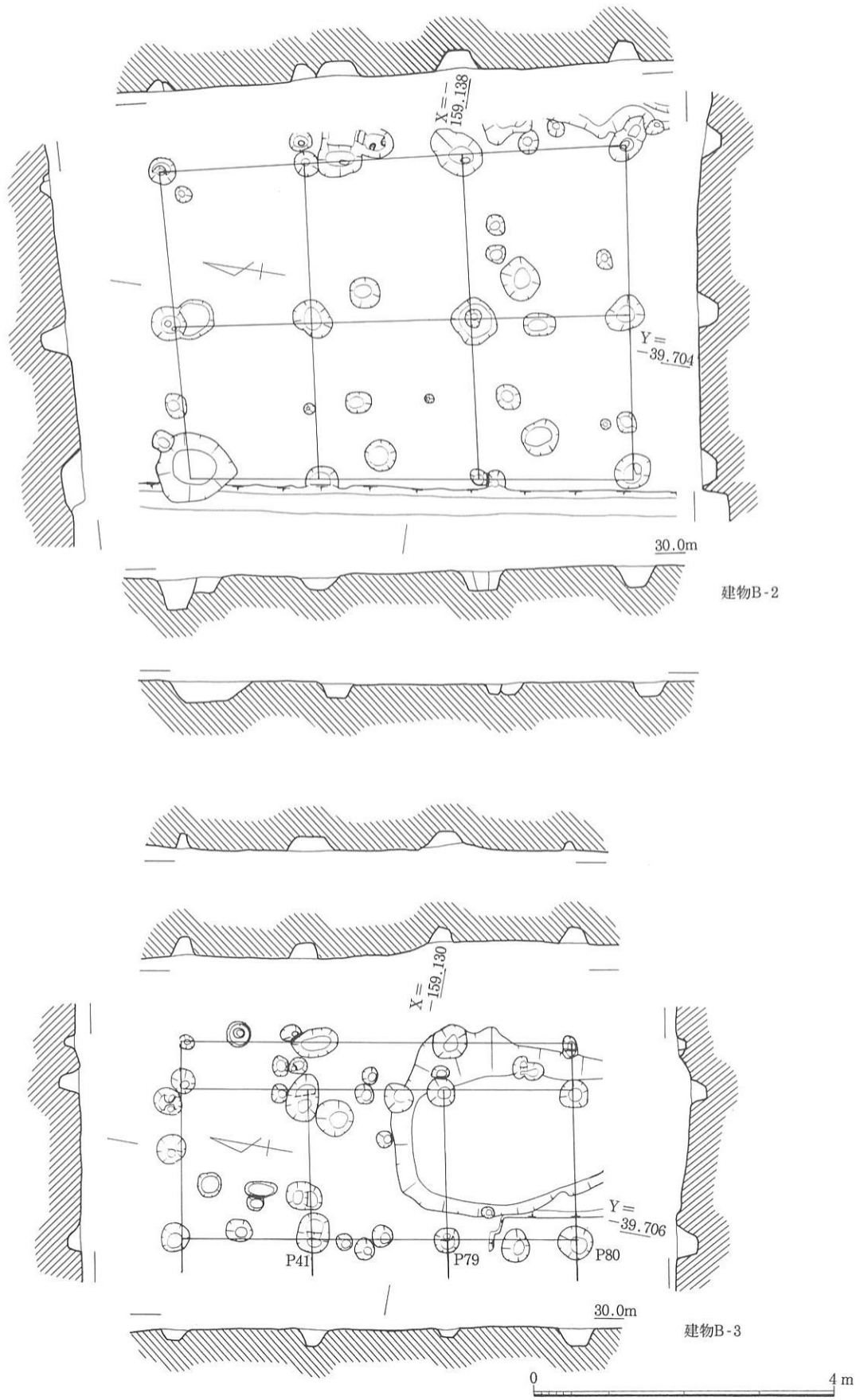


图22 建物B-2·3平·断面图

4) 井戸B-1 (図24)

B地区の建物群と大溝B-1との間に位置し、建物B-1～3に伴う井戸と推定される。平面は不整形を呈しており、素掘り井戸である。長径約2m、短径約1.9m、深さ約1.3mを測る。埋土は3層よりなる。遺物は、木材の他、主として、瓦器碗・小皿、土師器羽釜・小皿、須恵器鉢、瓦質甕、陶磁器、瓦類、鉾滓などが大量に出土している。

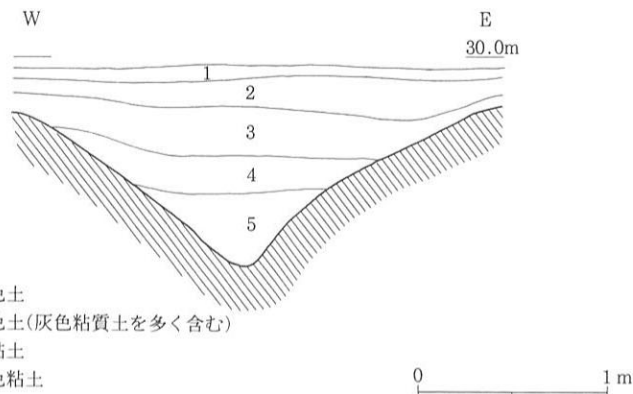


図23 大溝B-1断面図

また、古墳時代の須恵器や奈良～平安時代の須恵器もみられる。

2期

区画溝の大溝B-1を伴う屋敷と考えられ、主要な遺構は、掘立柱建物3棟と柵2列、井戸1基、土坑1基である。

1) 大溝B-1 (図23、写真図版15)

B地区のほぼ中央を南北にのびる大きな溝である。溝の西側に建物群や土坑、井戸などが密集していることから、これらで構成された屋敷地を区画する溝と考えられる。方位はN-15°30'-Wである。幅約2m、深さ0.9mで断面V字形を呈する。埋土は3層で、灰色粘土を含む灰色シルト層が厚く堆積している。B地区の中央部付近で、長さ約2mにわたってほとんど掘削されていない浅い部分を確認された。そのすぐ西側で、この部分に対応するかたちで、一対のピットが検出された。これらのピットは、屋敷地の門を構成していたものと推定されることから、この掘り残しによる浅い部分は、屋敷地の入口にあたる陸橋と考えることができる。遺物は、土師器羽釜・小皿、瓦器碗・小皿、須恵器甕・鉢、瓦質羽釜・挿鉢・甕・鍋、中国製陶磁器、滑石製石鍋、瓦類などが大量に出土している。

2) 建物B-4 (図25、写真図版15)

建物B-1と重複して検出された、B地区で最も大きな建物である。建物の西側北半では柵B-1が建物に沿って検出されている。2間(5.0m)×7間(15.4m)の規模で、方位はN-15°30'-Wである。建物B-1を建て替えたものと考えられる。柱間寸法は、桁行2.5m、梁行2.2mである。柱穴掘方は、円形ないし楕円形状を呈し、平均して径47cm、深さ23cmを測る。埋土は、暗黄灰色土が基本である。柱穴内に根石を含むものがみられる。遺物は、土師器小皿、瓦器碗・小皿、須恵器甕、中国製白磁皿、焼土塊、鉾滓などが少量出土している。

3) 建物B-5 (図26、写真図版16)

建物B-2と重複して検出された。2間(4.4m)×2間(4.4m)の規模で、方位は建物B-4と同じ、N-15°30'-Wである。建物の北側には柵B-2が、建物に沿った方向で検出されている。柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.2mである。柱穴掘方は、円形ないし楕円形状を呈し、平均して径51cm、深さ18cmを測る。柱穴内に根石を含むものがみられる。遺物は、土師器、瓦器、焼土塊、鉾滓などが少量出土している。

4) 建物B-6 (図26)

B地区の建物群の中で最も北に位置する。方位は建物B-4・5と同じである。4間(4.4m)×4間

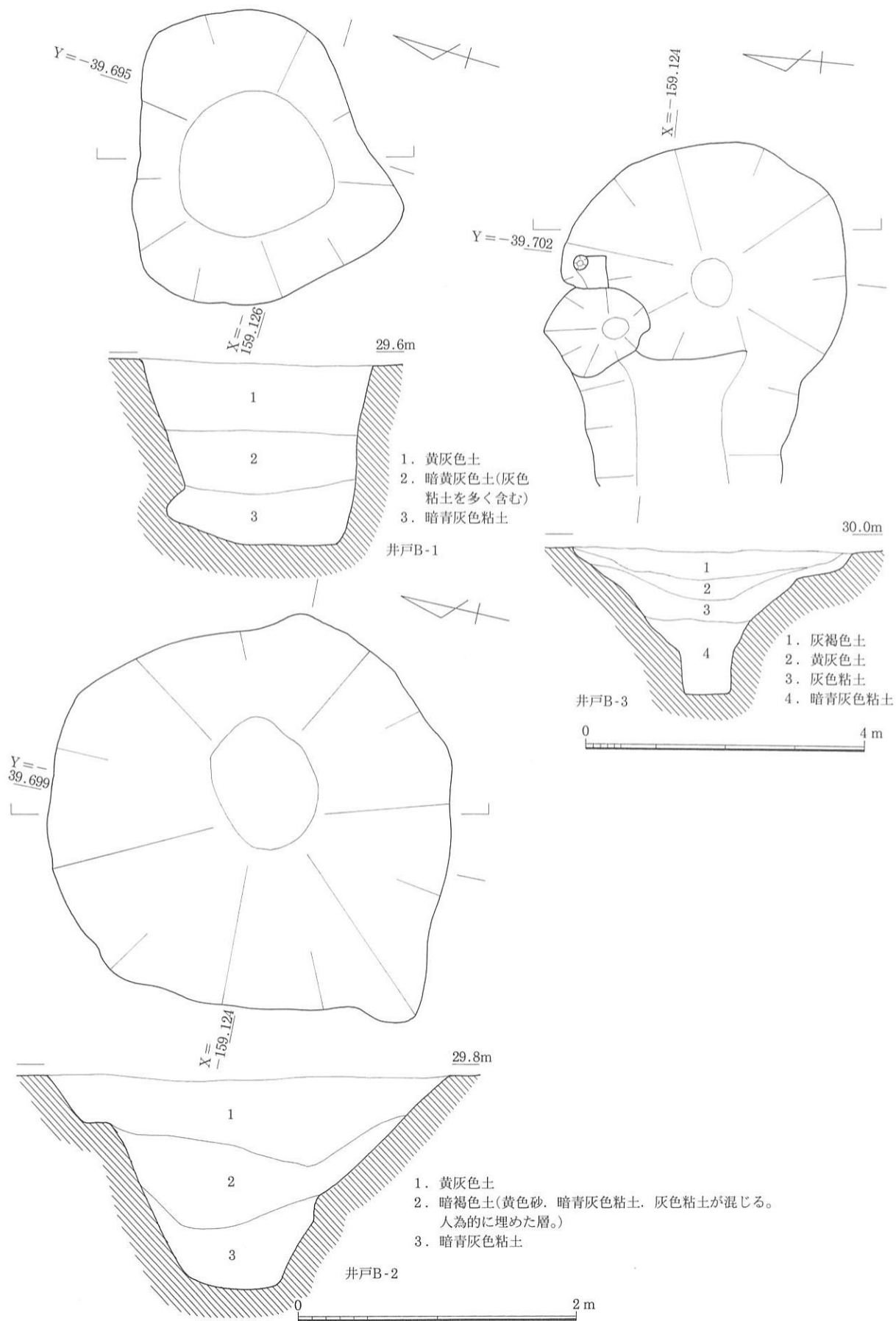


図24 井戸B-1~3平・断面図

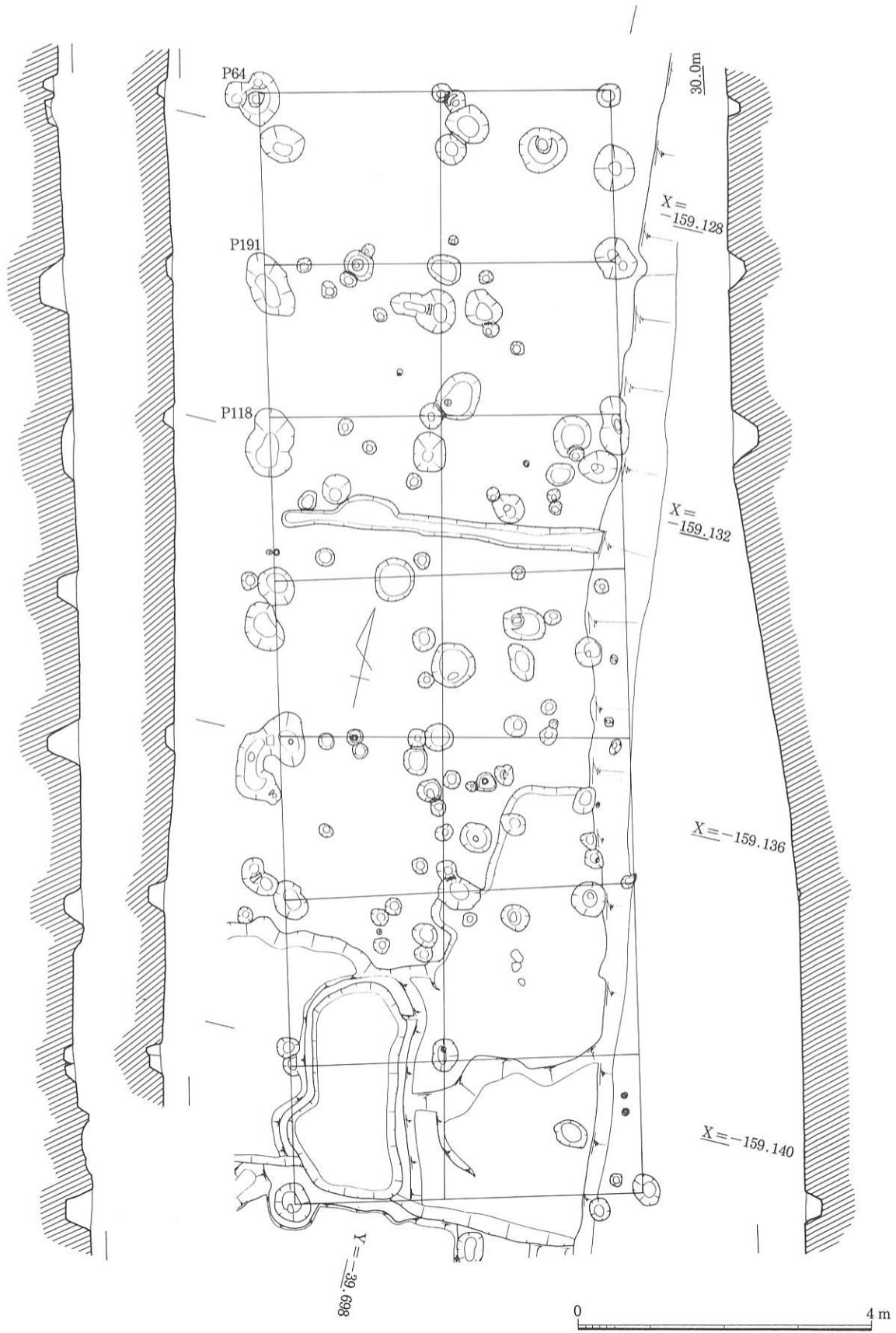


图25 建物B-4平·断面图

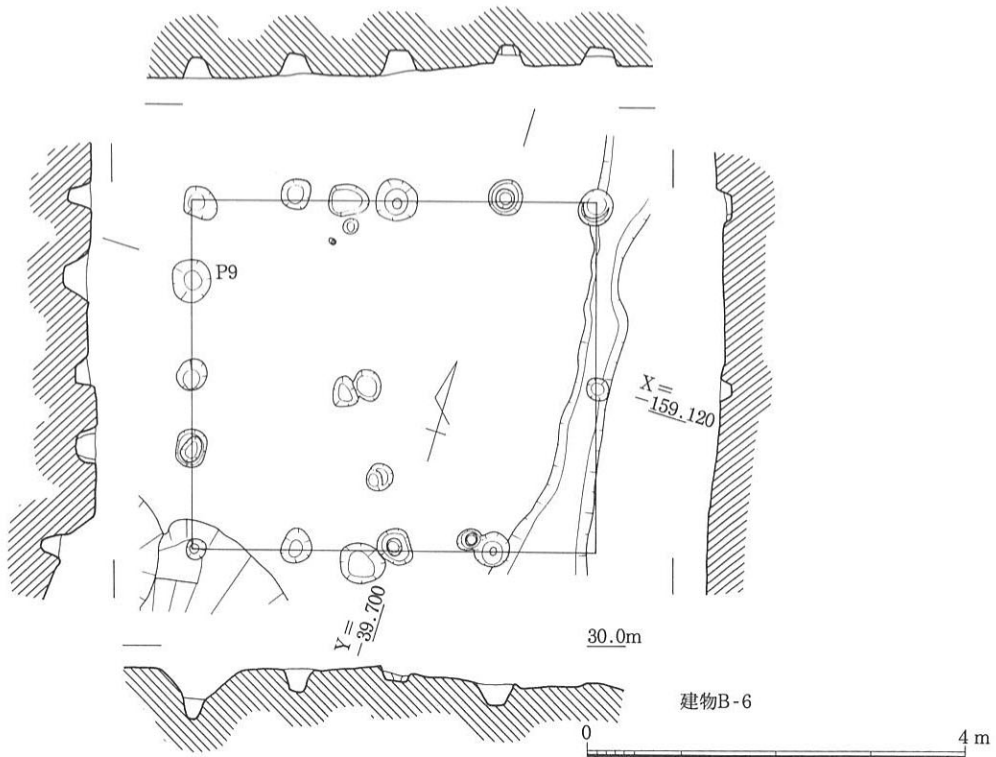
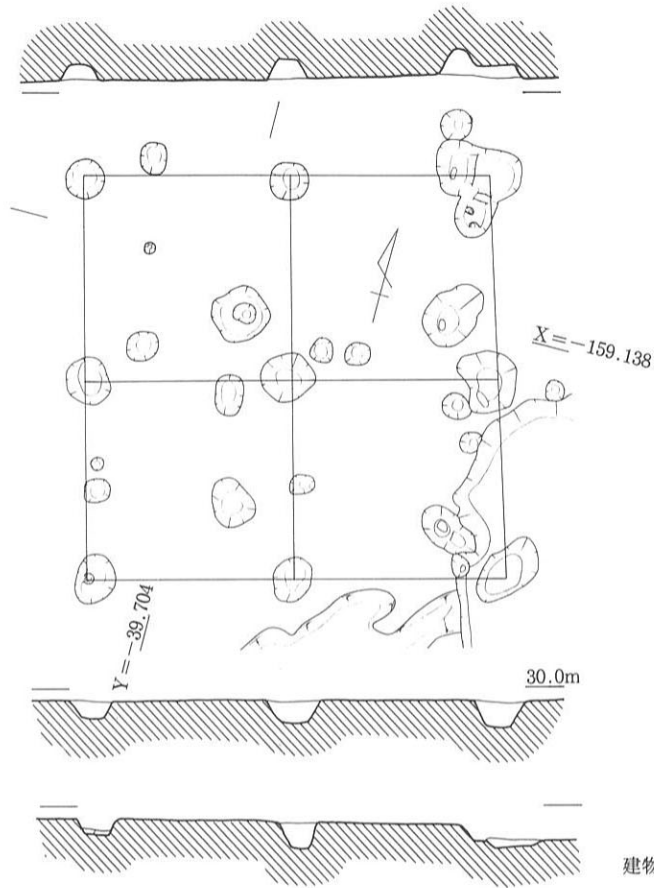


图26 建物B-5·6平·断面图

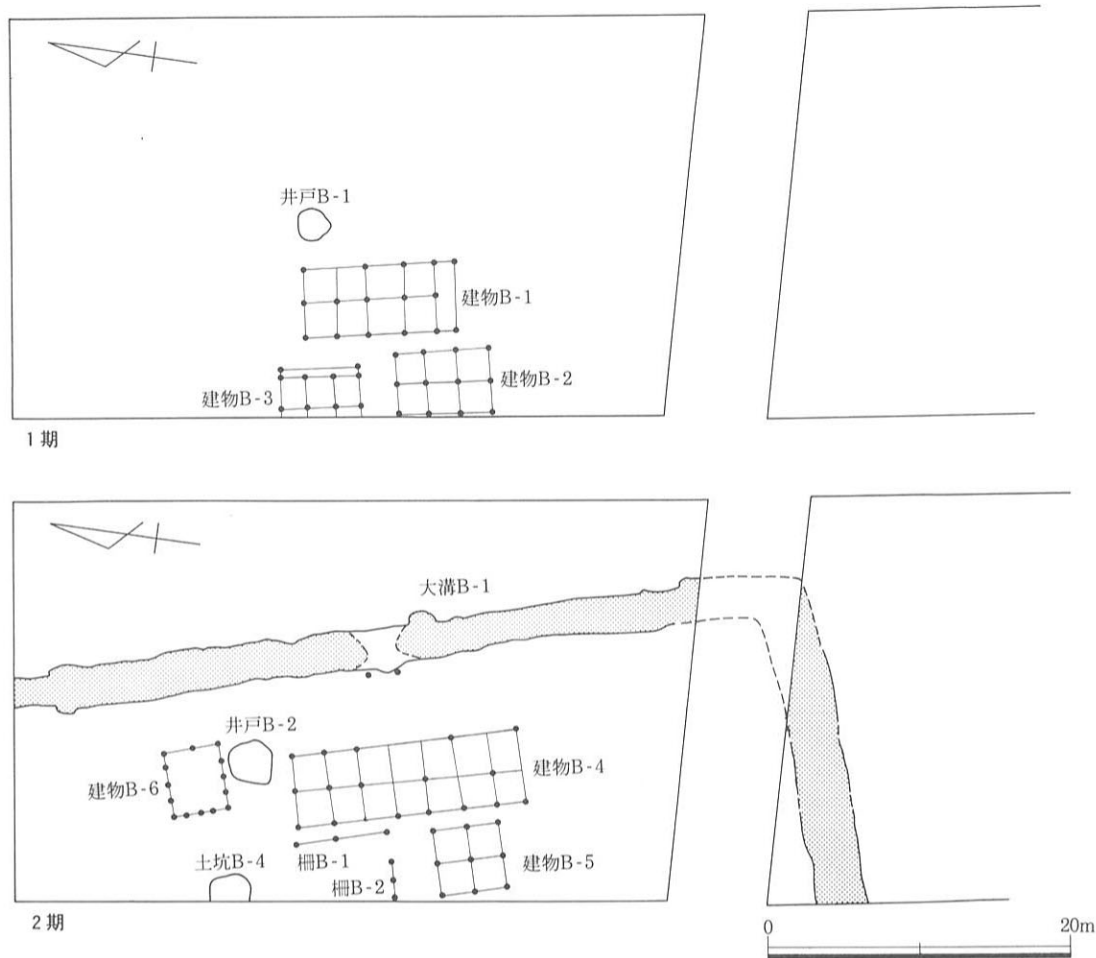


図27 B地区掘立柱建物群変遷概略図

(3.8m)の規模で、東にのびる可能性がある。柱間寸法は、他の建物の約半分の規模で、桁行1.1m、梁行は北から0.9m、1.0m、0.9m、1.0mの平均約1.0mである。2間×2間の建物の柱間に束柱が存在した可能性も考えられる。柱穴掘方は、円形を呈し、平均して径34cm、深さ21cmを測り、一部に柱根が残る。埋土は、暗黄灰色土が基本である。遺物は、土師器小皿、瓦器椀、鈇滓などが少量出土している。

5) 柵B-1

建物B-4の西側で、3間分(約6m)が検出された。建物B-4と同じ方位で、 $N-15^{\circ}30' - w$ である。柱間寸法は北より2.75m、1.65m、1.6mである。柱穴掘方は、円形ないし楕円形状を呈し、平均すると径45cm、深さ20cmである。埋土は、灰褐色土が基本である。遺物は、土師器、瓦器、中国製白磁碗、焼土塊などが少量出土している。

6) 柵B-2

建物B-2北側のほとんど接する位置で検出された。2間(2.4m)以上の可能性がある。方位は建物B-2とほぼ同じである。柱間寸法は平均1.2mである。柱穴掘方は円形で、平均して径34cm、深さ16cmを測る。埋土は、黄灰色土が基本である。遺物は、土師器、瓦器が僅かに出土している。

7) 井戸B-2 (図24)

建物B-6と建物B-1との間に位置し、建物B-4~6と柵B-1・2に伴う井戸と推定される。平面は不整形円形状を呈しており、長径約3.3m、短径約2.9m、深さは約1.9mを測る。埋土は、3層よりなる。遺物は、土師器羽釜・小皿、瓦器椀・小皿、須恵器甕・鉢、中国製陶磁器、瓦類などが大量に

出土している。また、砥石や焼土塊、鈹滓などもみられる。

8) 土坑B-4

B地区北寄りの西端で検出された。西側は調査区外に広がるため、全容は不明である。規模は、南北2.7m×東西2.0m以上、深さ約0.9mである。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、中国製陶磁器、石鍋、瓦などが出土している。遺物の時期は大溝B-1、井戸B-2と同じ頃である。

屋敷地を区画している大溝B-1は、B地区内ではほぼ南北方向に走っているが、里道をはさんで約5m北側のA地区ではまったく検出されていない。A地区は後世の削平などをあまり受けておらず、遺物包含層も良好に残存していることから、大溝B-1がこの部分まで延びていないことは明確である。このため、里道の下で途切れるか、曲がっているものと考えられる。

一方、C地区北部で東西方向に延びる溝C-4が検出されている。出土遺物が少ないため時期は確定できないが、出土した瓦器碗などから、大溝B-1とほぼ同時期である。規模は、幅約3.2m、深さ20cmを測る。底部は平坦になっており、大溝B-1とは様相が異なる。ただ、接点は調査区外であるためはっきりしないが、ほぼ直交していることから、関連性はあるものといえる。また、溝C-4の南側で遺構がほとんどみられないことから、同様の区画溝と考えることができる。さらに大溝B-1で確認された陸橋部を中央とすると、屋敷地の北側区画はちょうど里道の下に位置することとなる。このため、屋敷地の南北の範囲は、ほぼB地区内におさまっているといえる。

屋敷地を構成している建物は1期・2期とも3棟ずつ検出されているが、総柱の倉などのみで主屋はみつからない。大溝B-1の陸橋部を屋敷地の入口とすると、正面に位置する建物B-1・4は、長屋のような建物と想定することができ、屋敷内の使用人などの住居と考えられる。主屋は、調査区外の西側に位置するものといえる。なお、陸橋部の西側でピットが対になって検出されており、この部分に簡易な構造の門がつくられていたものと考えることができる。このことから、大溝B-1の陸橋部を屋敷地の入口と考えることができるが、簡易な門が設けられているため、裏口の可能性もある。

屋敷は2時期にわたって営まれているが、出土遺物の時期差をみてもあまり差がなく、1期の建物とほぼ同じ位置に同様の建物を建てている。このため、1期の建物群が戦乱などで破壊された後に、同様の規模の建物を建て、さらに防御のために堀を掘削したものが、2期の建物群と考えることができる。

なお、2期の柱穴から若干の柱根が出土したため、液体シンチレーション¹⁴C年代測定をおこなった。結果は、建物B-6でB.P.670±160、門と考えられるでB.P.730±110である。この年代はほぼ平安時代末～鎌倉時代に相当し、出土土器からみた遺構の年代と一致する。

(2) D地区の建物

1) 建物D-1 (図28、写真図版17)

D地区の北部で検出された。3間(5.4m)×2間(4.4m)で、四面庇をもつ。東面の北半は他と比べて庇が少し短く、柱穴は浅い。また、東面庇の南2間分も攪乱を受け、不明確である。方位はN-4°5'-Wである。柱間寸法は、平均して桁行1.8m、梁行2.2mである。庇の柱間は、平均して桁行1.5m、梁行平均1.2mである。柱穴掘方は、多くが隅円方形を呈しており、一辺が平均約30cm、深さは深いもので40cm、平均約20cmである。庇より母屋の柱穴が深い。根石などは検出されていない。埋土は、掘方が灰褐色シルト、柱根痕は暗灰色シルトが基本である。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、瓦などの細片が少量出土している。

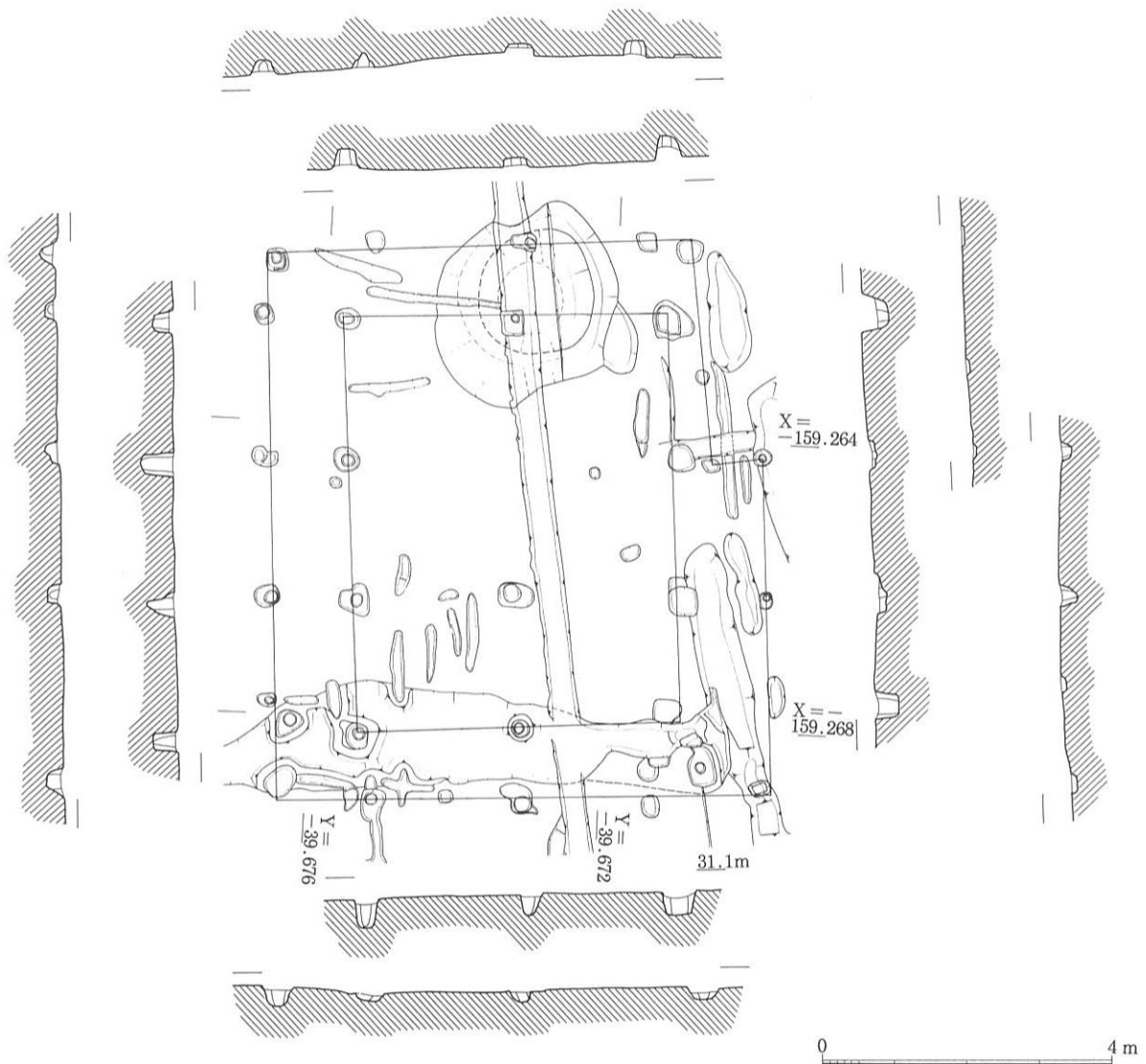


図28 建物D-1平・断面図

2) 建物D-2 (図29、写真図版18)

D地区の中央付近で検出された。建物D-1の約10m南に位置している。5間(約8m)×2間(約3m)の規模で、南北に庇をもち、北東部に2面の庇をもつ。北東部にはさらに張り出した一角があるが、孫庇か濡れ縁か不明である。また、南面には2間の張り出しがあり、南端の柱穴列は南北に二重になっている。南面の1間目の張り出しのピット列は並びが悪く、柱穴の無い所もある。方位は $N-3^{\circ}55'$ -Wである。柱間寸法は、桁行1.5m、梁行1.5mである。庇の柱間は、北で1.5m、0.45m、南で1.05m、1.5m、東で0.9mである。柱穴掘方は、方形を呈し、柱穴の一边が10~20cm、掘方は20~35cm、深さは平均約20cmを測る。埋土は、掘方が灰褐色ないし灰黄色シルトと暗灰色粘質土、柱根痕は暗灰褐色シルトと灰色粘土が基本である。建物の東西には、1間分の間隔を置いて、建物とほぼ平行に溝が走る。雨落ち溝と考えられるもので、東のほうが西よりも幅が広く深い。柱穴内に根石を含むものがみられ、その石の一部には煤が付着している。遺物は、土師器、瓦器、瓦などが少量出土している。関連する遺構として土器埋納ピットがあるが、ピットの項で述べる。

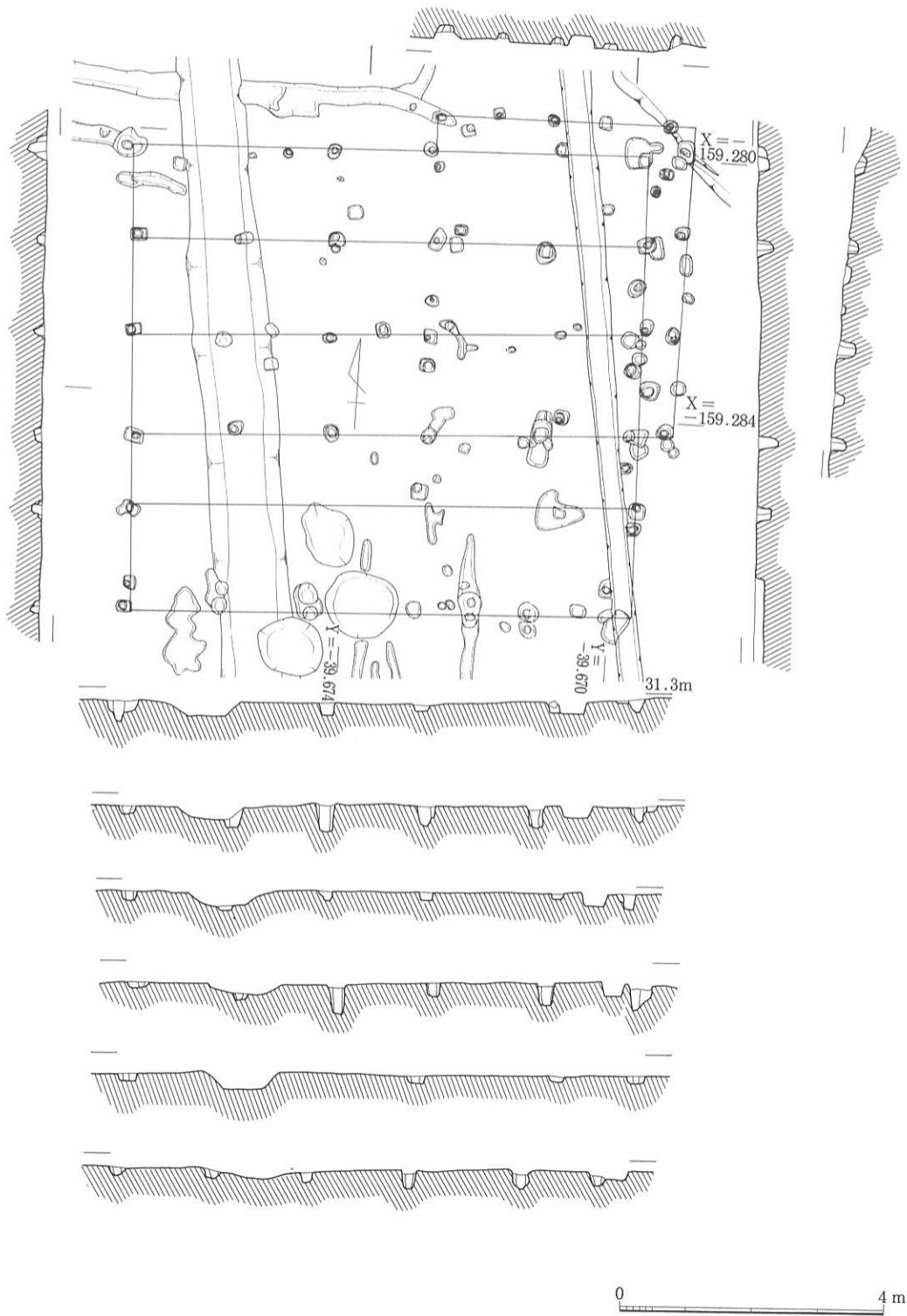


图29 建物D-2平·断面图

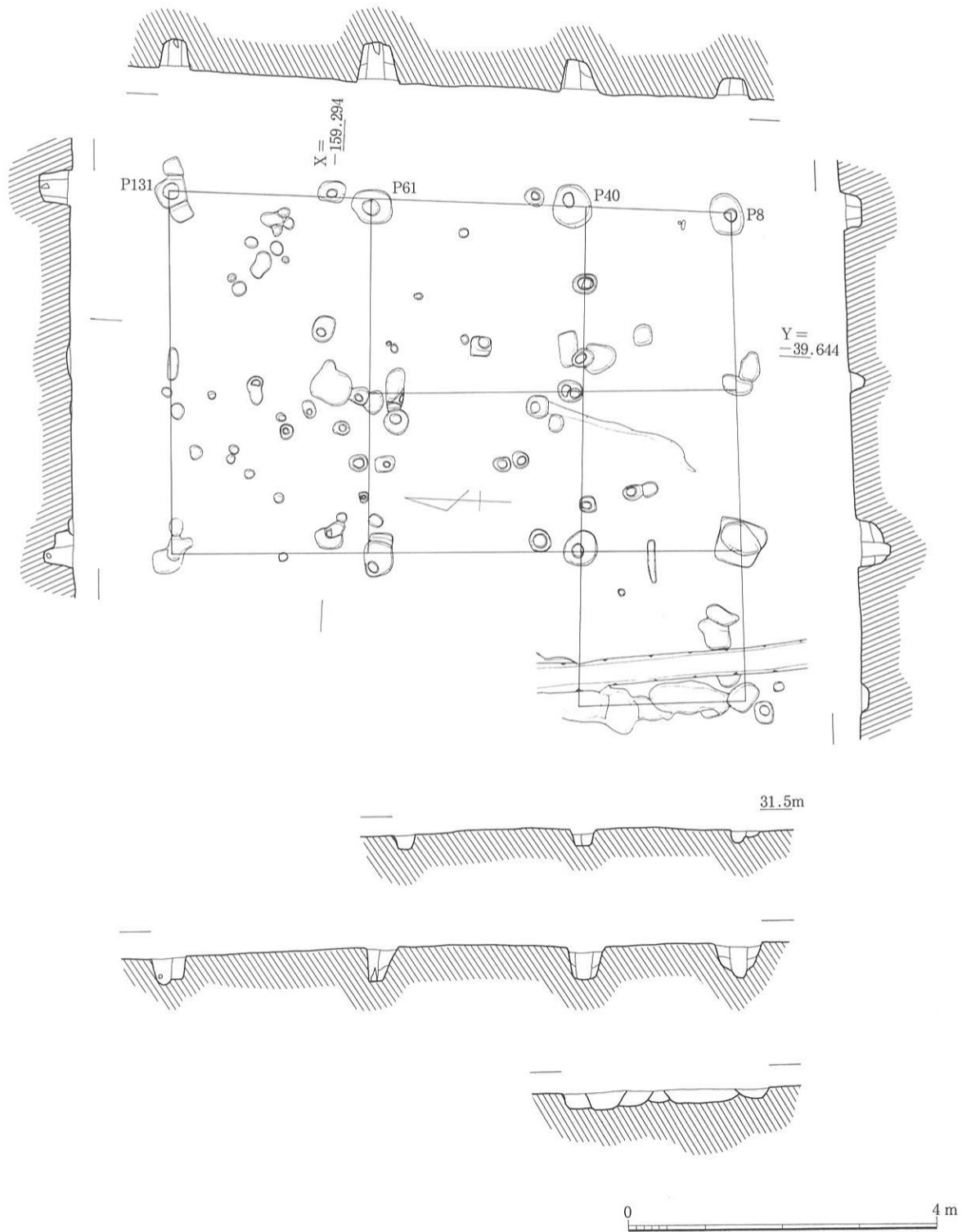


图30 建物D-3平・断面图

3) 建物D-3 (図30、写真図版18)

D地区の南東部で検出された。3間(7.5m)×2間(4.5m)で、南西角に1間分の張り出しがある。方位はN-4°15'-Wである。北の1間分は中央のピットが不明瞭なため、庇あるいは囲いの可能性がある。柱間寸法は、平均して桁行2.5m、梁行2.3mである。桁行、梁行ともに南よりも北の方が長い。柱穴は、円形で径20cm、掘方は不整隅円方形を呈し、一辺が30~50cm、深さは平均約30cmを測る。柱穴のうち3カ所で柱根が残存しており、材は杉である。建物部分は地山が一段低く、周囲の北・東・南側でコ字型に段が形成されており、遺物を多く含む褐灰色シルト層の上面で建物が検出された。これは、建物を建てる前に整地されたものと考えられ、特徴的である。この層からの出土遺物は、土師器、瓦器、瓦質土器、焼土塊、炭化物、溶解炉、鋳滓、煤付着の石などである。溶解炉の破片が出土しているのはこの建物部分だけであり、近くの井戸D-4からも溶解炉の大きな破片が出土していることから、鑄造関連の施設がこの周辺にあった可能性が考えられる。柱穴からの遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器碗・小皿、須恵器甕、瓦質土器、焼土塊などが出土している。

4) 建物D-4

建物D-2の東側で、建物D-5と重複して検出された。両建物ともに後世の攪乱により大きく壊されているが、東西4間×南北2間と推定される。方位はN-4°5'-Wである。柱間寸法が東西に短く、南北に長い。柱間寸法は、桁行1.05m、0.75m、梁行1.8mである。柱穴は、長方形で15cm×14cm、掘方は不整隅円方形を呈し、約30×20cm、平均27cmである。柱穴のうち1カ所で柱根が残存しており、材は杉である。埋土は、掘方が黄灰色砂質土、柱根痕は淡灰色土である。遺物は、土師器、瓦器、瓦質土器などの破片が少量出土している。

5) 建物D-5

建物D-4の南側で検出された。北東部は後世の攪乱を受けているが、東西3間×南北2間と推定される。方位はN-2°5'-Eである。柱穴は方形で、一辺約10cm、掘方は隅円方形を呈し、一辺約20~30cmである。遺物は、土師器、瓦器、瓦などの細片が僅かにみられる。建物D-2と同じ時期の遺物を伴う土坑D-1を切っている。

D地区で検出された建物群は、B地区とは様相が異なっており、建物がまとまって一群を形成する屋敷地の形態をとっていない。また、屋敷地を区画する堀なども確認されていない。住居と考えられる大型の建物と倉と考えられる小型の建物が、セット関係をなしているのみである。鋤溝が多く検出されていることから、耕作地に近接した住居を想定することができる。

(3) E地区の建物群

E地区の南半部東側は一段高くなっており、比較的平坦な面をなしている。この高い面において、約300基のピットをはじめ、溝、土坑、井戸などがまとまって検出され、掘立柱建物群が8棟復原できた。建物の重複は認められるものの、北側の建物E-1・2と中央部の建物E-3~5と南側の建物E-6~8の3グループに分けることができ、それぞれを画するような溝もみられる。

1) 建物E-1 (図31、写真図版21)

E地区の建物群中、最も北側の東端で検出された。南北3間(4.2m)×東西2間(4.1m)以上の規模で、東側は調査区外に広がるため、全容は不明である。柱間寸法は、南北方向で北から1.9m、1.5m、0.8mと南の柱間が短いことから、南面に庇の可能性はある。東西方向の柱間は、北側で2.1m、南側で2.2m、庇の可能性のある部分では、北側で2.1m、南側で2.2mを測る。柱穴掘方は円形で、平均して

径32cm、深さ16cmを測る。埋土は、褐色混じり暗灰色土が基本である。遺物は、土師器や瓦器等の破片が僅かに出土している。

2) 建物E-2 (図31、写真図版21)

建物E-1と重複しており、その南側に位置する。南北2間(3.9m)×東西2間(3.5m)の総柱建物である。柱間寸法は平均して1.9mである、柱穴掘方は円形ないし方形を呈し、平均して径または一辺が26.8cm、深さは17cmを測る。埋土は、褐色混じり暗灰色土が基本である。遺物は、土師器、瓦器が僅かに出土している。

建物E-1との前後関係は、遺物で観察した限りでは、建物E-1で瓦器碗・Ⅲ期のものが、建物E-2では瓦器碗・Ⅱ-1期と思われるものが出土していることから、建物E-2→建物E-1の順と推測される。

3) 建物E-3 (図32、写真図版21)

建物E-1・2の南側に位置する。現状で南北3間(4.7m)×東西2間(4.1m)であるが、それ以上の規模の総柱建物の可能性がある。柱間寸法は南北に短く、平均1.6m、東西方向で平均2.1mである。柱穴掘方は、平面円形ないし隅円方形を呈し、平均して径または一辺が52cm、深さは約20cmを測る。埋土は、褐色混じり暗灰色土が基本である。遺物は、土師器、瓦器、焼土塊、叩石などのほか、須恵器や黒色土器Aが出土している。柱穴内に焼土や炭化物を多く含む。

4) 建物E-4 (図32、写真図版21)

建物E-3の南側で、建物E-5および溝E-7～9と重複し検出された。建物E-5および溝よりも新しい時期のものである。南北2間(5.0m)×東西2間(3.6m)の南北に長い建物である。柱間寸法は、平均して東西1.7m、南北2.4mである。柱穴掘方は、平面が円形ないし隅円方形を呈し、径ないし一辺の平均が44cm、深さが18cmを測る。埋土は、褐色混じり暗灰色土が基本である。遺物は、須恵器、土師器などが僅かにみられる。

5) 建物E-5 (図33、写真図版21)

建物E-4と重複して東側で検出された。南北3間(5.1m)×東西3間(4.6m)の総柱建物で、東側に建物と平行して走る細い溝E-6があり、雨落ち溝と考えられる。また、北側および西側には、溝E-9と溝E-7が建物を取り囲むように巡る。柱間寸法は、1.1m～2.8mとばらつきがあり、南北方向では中央部が最も間隔が広く、平均2.5m、南北方向の北側と南側での柱間は、平均1.3mになる。東西方向では西端の1列が柱間が狭く、平均1.2m、それ以外の東西方向の柱間の平均では1.7mとなる。柱穴掘方は、円形、楕円形、方形を呈し、径ないし一辺の平均が43cm、深さの平均は15cmである。埋土は、褐色混じり暗灰色土が基本である。遺物は、土師器、須恵器などが僅かにみられる。

6) 建物E-6 (図33、写真図版22)

E地区南東部で、建物E-7と重複して検出された。南北3間(5.1m)×東西2間(3.4m)で、柱間寸法は平均1.7mである。柱穴掘方は、主に隅円方形を呈しており、平均して一辺40cm、深さ20cmを測る。埋土は、褐色混じり暗灰色土が基本である。遺物は、土師器、須恵器、製塩土器などの細片が僅かにみられる程度である。

7) 建物E-7 (図34、写真図版22)

建物E-6と重複して検出された。南北3間(5.3m)×東西2間(3.8m)で、柱間寸法は平均1.8mである。柱穴掘方は、平面が主に隅円方形を呈しており、平均して一辺54cm、深さ17cmを測る。埋土

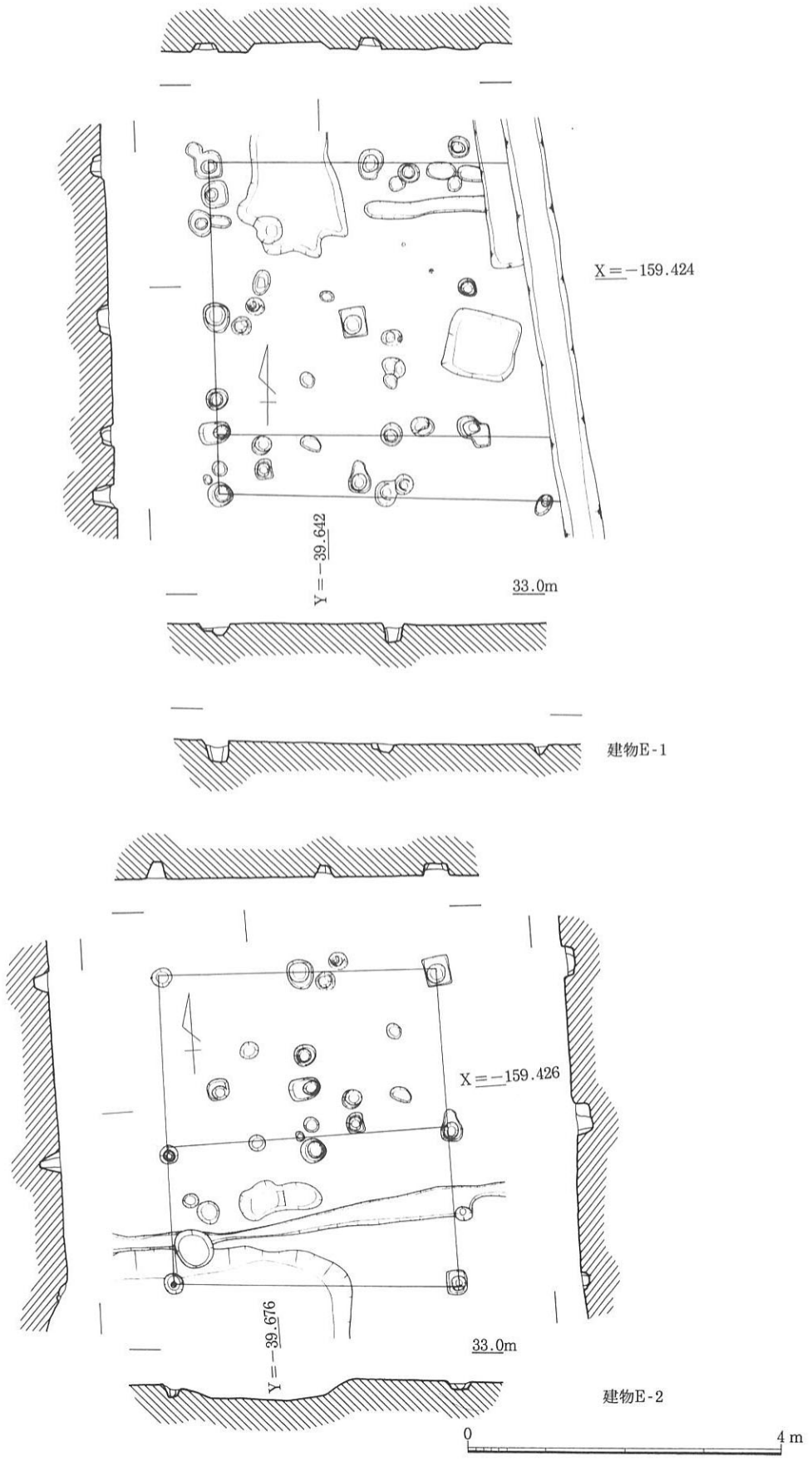


图31 建物E-1・2平・断面图

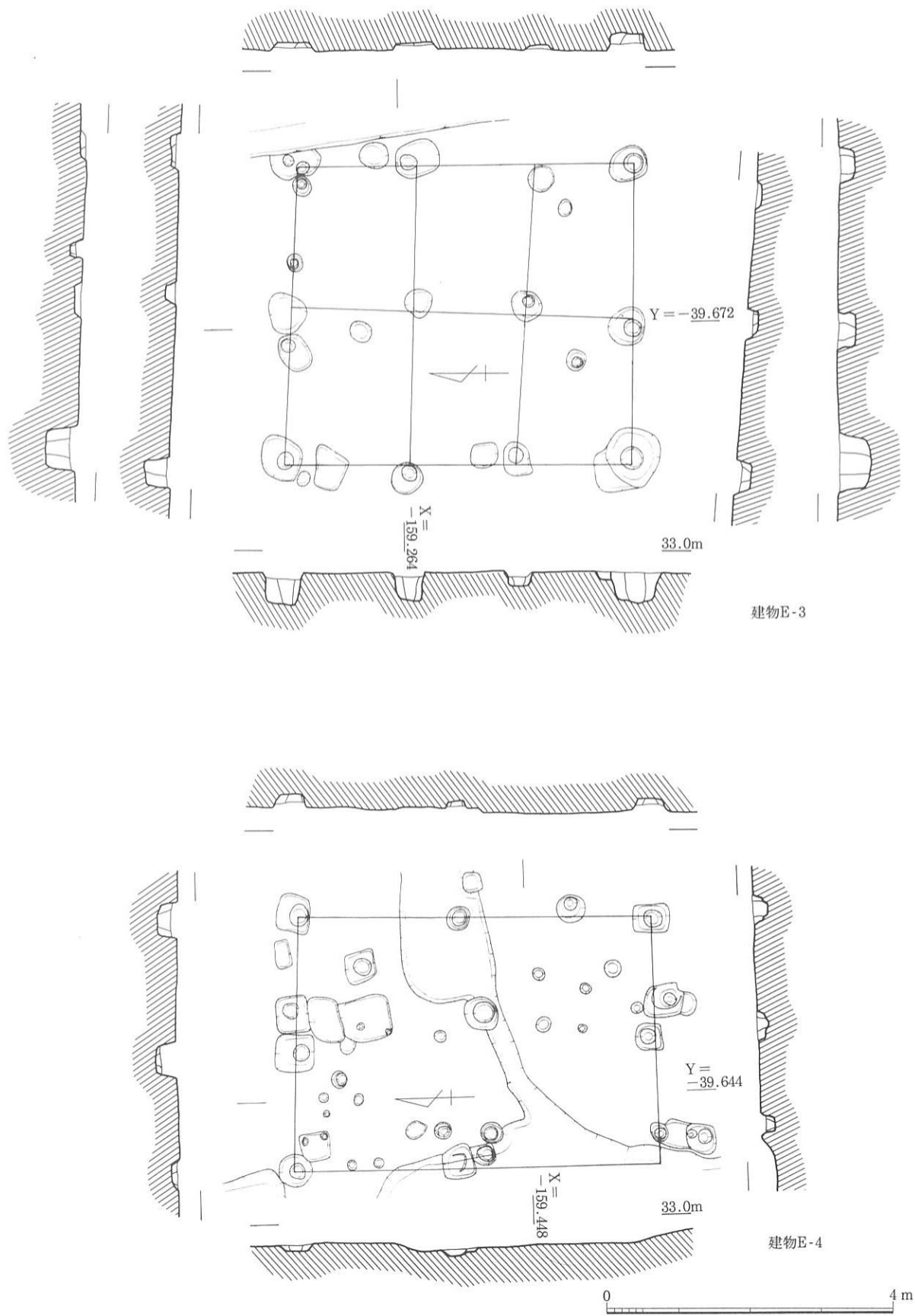


图32 建物E-3·4平·断面图

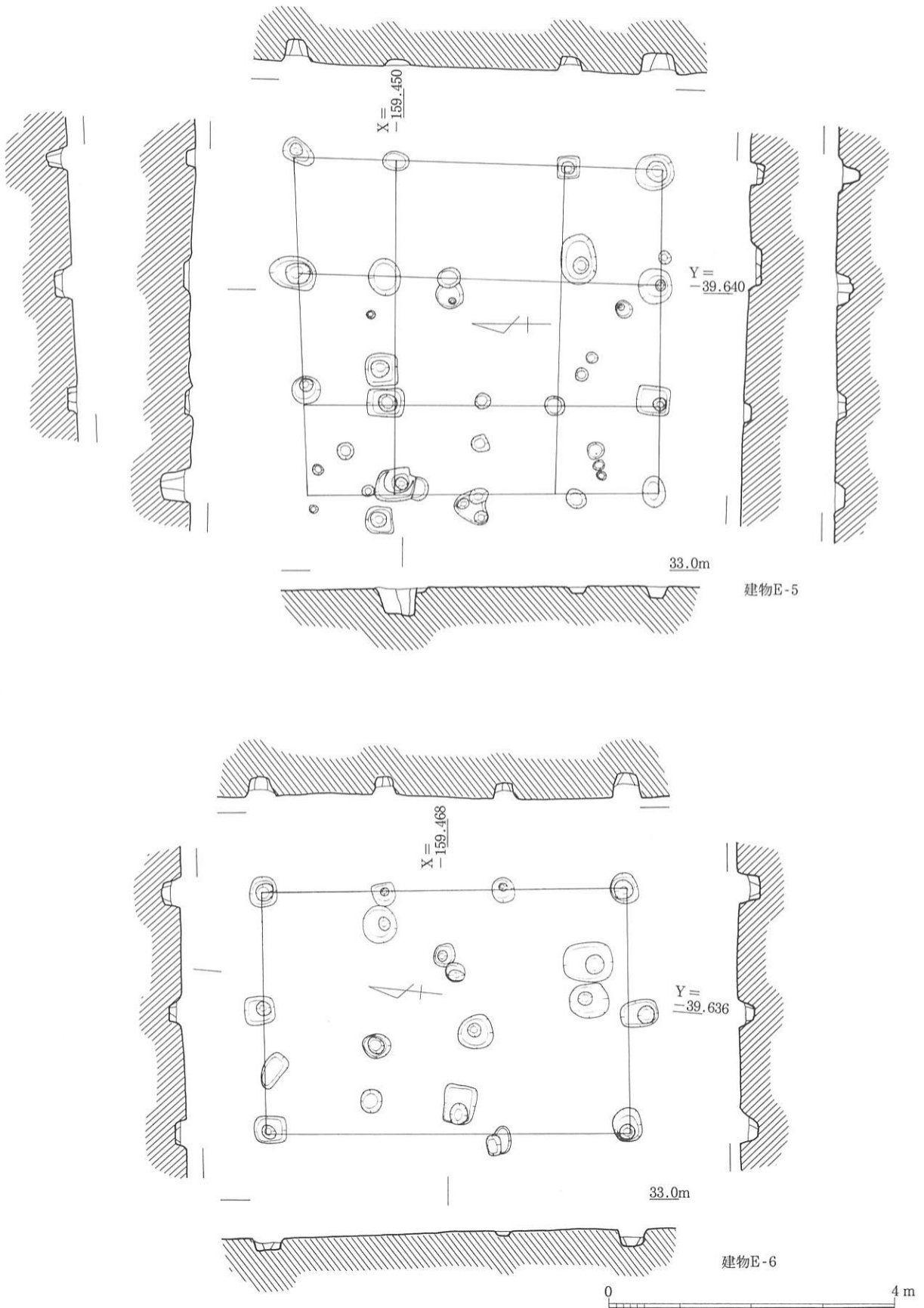
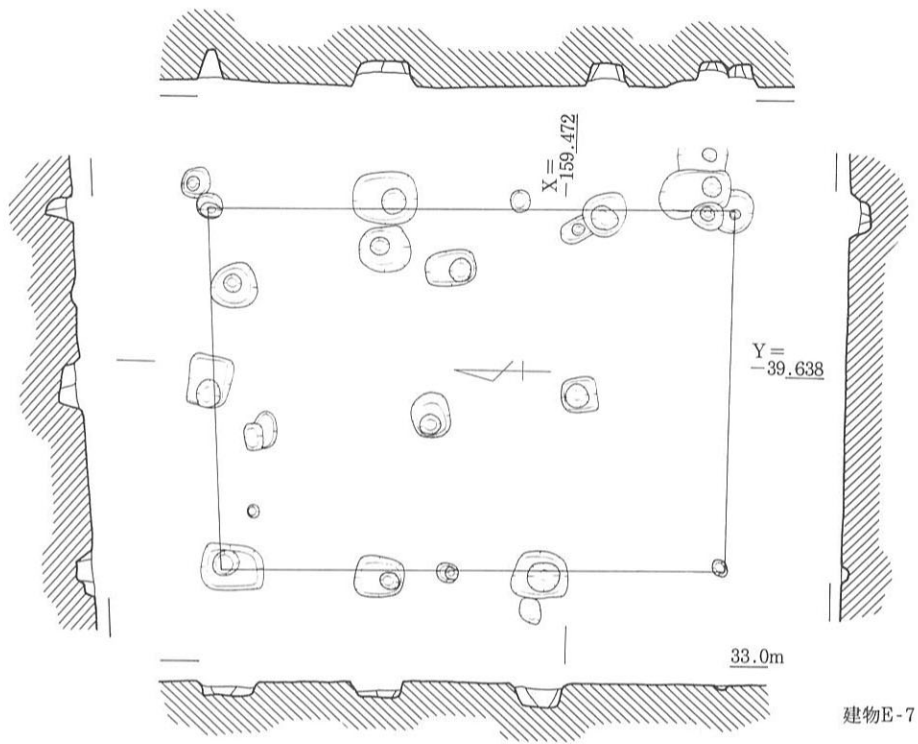
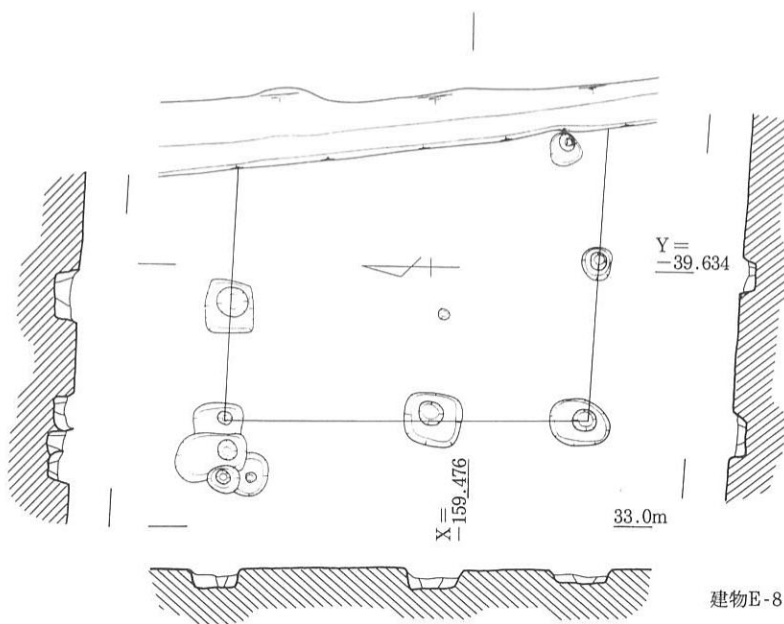


图33 建物E-5・6平・断面图



建物E-7



建物E-8



图34 建物E-7·8平·断面图

は、褐色混じり暗灰色土が基本である。遺物は、須恵器、土師器などの細片が僅かにみられる。建物E-6と建物E-7の前後関係は、出土遺物からは判断し難いが、建物E-7が新しいと思われる。

8) 建物E-8 (図34、写真図版22)

E地区の最も南端で検出された。南北2間(3.8m)×東西2間(1.7m)以上で、東側は調査区外に広がるため、全容は不明である。建物E-7とは近接しているが、同時併存は困難である。柱間寸法は平均すると1.7mである。柱穴掘方は、平面が主に隅円方形を呈しており、平均して一辺51cm、深さは20cmを測る。埋土は、灰黄色ないし黄褐色砂質土が基本である。遺物は、須恵器、土師器、瓦器などが僅かにみられる。

建物E-1・2周辺のピットは、円形か不整形の小型のものがほとんどである。さらに数棟の建物が存在するものと思われるが、復原はできなかった。建物E-3～5周辺のピットは、方形か不整形の大型のものが多く、北側のグループとは様相が異なる。建物E-6～8周辺のピットは、中央部分とほぼ同様である。ただ、この差は時期差というよりも、使用される建物の性格の違いによるものと考えられるが、はっきりしない。北側と南側のグループは、井戸を伴っているが、中央部では井戸は検出されていない。また、中央部の建物は総柱の建物であるため、住居ではなく、倉庫であった可能性が高い。ただ、今回の調査では、居住地として利用されている高い面の縁辺部を検出したのみで、調査区外の東側に集落が広がり、中心部が存在するものと考えられることから、今回の成果のみでは集落の構造をとらえることは困難である。

(5) ピットおよび土器埋納ピット

1) ピットB-90

建物B-2と建物B-3の間の柵B-2北側で検出された。掘方は円形を呈しており、径30cm、深さ10cmを測る。遺物は、土師器小皿、瓦器碗・小皿、中国製白磁、瓦などが出土している。

2) ピットB-103

建物B-1・4の中央部西側で隣接して検出された。ピットB-102・104と重複しているため、平面形ははっきりしないが、ほぼ円形と考えられる。規模は、径約40cm、深さ約25cmを測る。遺物は、土師器小皿、瓦器碗・小皿などが少量出土している。

3) ピットB-192

柵B-1の柱穴の東側で重複して検出された。掘方は平面円形を呈しており、径37cm、深さ24cmを測る。埋土は、黄灰色である。遺物は、土師器小皿、瓦器碗・小皿、中国製白磁などが少量出土している。

4) 土器埋納ピットD-1 (図35)

建物D-2の東から2列目の南北方向の柱通りの延長線上で検出された。建物D-2との間隔は約3mで、建物D-2の2間分に相当する。平面は楕円形状、断面は浅い皿形を呈しており、長径約25cm、短径約20cm、深さ4cmを測る。ピット内では、西側に偏って3枚の土師器小皿が一部重ねて埋納されていた。東側に有機質のものを置いていた可能性も考えられる。建物D-2との位置関係から、建物の地鎮に関係するものと考えられる。

5) 土器埋納ピットD-2 (図35)

建物D-2内の南側で検出された。建物D-2の南北方向の中軸線上で、1列目の南面庇ピットとの間に位置する。平面は不整形隅円方形を呈しており、長辺16cm、短辺11cm、深さ5cmを測る。ピット内では、北寄りに底から約3cm浮いた状態で、土器埋納ピットD-1と同型式の土師器小皿が1枚埋納され

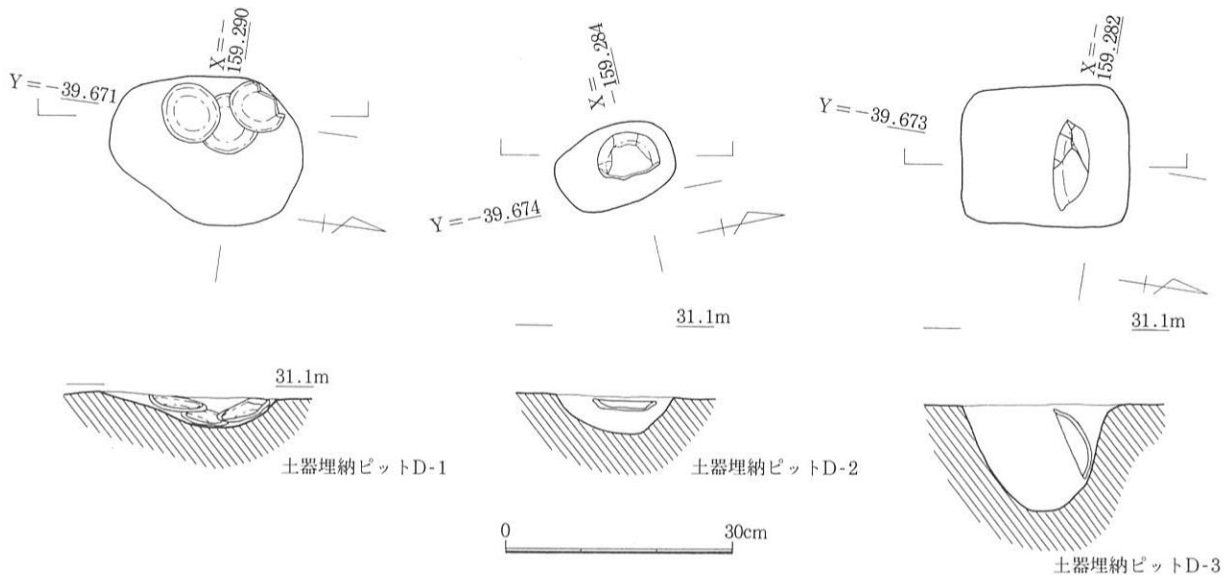


図35 土器埋納ピットD-1～3平・断面図

ていた。

6) 土器埋納ピットD-3 (図35)

建物D-2内のほぼ中央で検出された。建物D-2の東西方向と南北方向の中軸線上の交点に位置する。平面は隅円方形で、楕円状を呈しており、長辺22cm、短辺19cm、深さ14cmを測る。ピット内では北側に寄せて横向きより少しくつぶせ気味に、完形の瓦器碗が1点埋納されていた。D地区の土器埋納ピットでは、土器を中心部よりずらして埋めるという共通点がみられる。

7) ピットE-403

E地区の北部西寄りで検出された。掘方の平面は隅円方形で、長辺55cm、短辺43cm、深さ12cmを測る。埋土は、黄灰色粘土混じり砂質土で、径3～4cmの礫を含む。遺物は、土師器羽釜、瓦質甕・羽釜などが出土している。

8) ピットE-404

E地区の北部西端で検出された。掘方の平面は円形で、径32cm、柱根痕径15cm、深さ15cmを測る。埋土は、掘方が褐灰色ないし黄褐色粘土混じり砂質土、柱根痕が黄灰色ないし灰色粘土混じり砂質土である。遺物は、瓦質羽釜片1点である。

9) ピットE-407

E地区の南端西寄りで検出された。掘方の平面は円形で、径12cm、深さ15cm、柱根痕の直径は12.5cmを測る。柱根痕の埋土には炭化物を含む。遺物は瓦器碗が1点出土している。

10) ピットE-408

E地区の南端西寄りのピットE-407の東側で検出された。掘方の平面は円形で、径28cm、深さ32cmを測る。根石をもち、埋土には炭化物、焼土を含む。遺物は、瓦器小皿が1点出土している。

11) ピットE-409

E地区の南端西寄りで、落込E-11の北側で検出された。掘方の平面は円形で、径24cm、深さ40cm、柱根痕の径は13cmを測る。底に土器・木片が、その上に焼土、さらに上には炭化物を含む埋土があり、中に石が1点含まれていた。遺物は、瓦器碗が出土している。

12) ピットF-301 (写真図版9)

F地区の北部東端で検出された。平面は楕円形で、長径34cm、短径31cm、深さ10cmを測る。遺物は、土師器小皿がまとまって約30点出土している。

(6) 溝

溝は、B地区の屋敷地にとまなう大溝B-1をはじめ、D・E・G地区などで検出されている。ただ、近世以降まで存続するものや規模が小さく、遺物が少なく時期の確定できないものが多いため、ここでは溝G-11のみの記述にとどめる。

1) 溝G-11

G地区の北部をほぼ東西に走る細い溝である。規模は、幅0.4~0.6m、深さ16cmを測る。埋土は、浅黄色ないし鈍い黄色粘土混じり砂質土である。遺物は、須恵器鉢、土師器、瓦器碗、瓦などが少量出土している。

(7) 井戸

井戸は、B・D・E地区でまとまって検出されており、屋敷や集落に伴うものが多い。遺物も比較的多く出土しており、集落の時期判断の基準となっている。

1) 井戸B-3 (図24)

井戸B-2の西側に接して検出された。平面は不整形円形状を呈しており、規模は、長径約4m、短径約3m、深さは約2mである。上部は漏斗状に広がり、底部は垂直に落ちる。底部の径は約0.6mを測る。埋土は、灰褐色土や黄灰色土からなる上層と暗青灰色粘土の下層の2層に分けることができる。遺物は、奈良・平安時代の須恵器が極僅かと、中世のものが多くみられる。中世遺物では、土師器小皿・羽釜、須恵器鉢・甕、瓦質羽釜・鉢、瓦器碗・小皿、中国製白磁碗・皿・四耳壺、瓦などがみられる。また、鉍滓、炭化物、焼土塊の破片も僅かだが含まれている。井戸B-2との新旧関係は出土遺物で見ると、井戸B-3の方がやや新しい。このため、2期の屋敷に伴う可能性もあるが、井戸B-2と隣接しているため、2期の屋敷廃絶後に新しく掘削された井戸と考えることができる。

2) 井戸D-2 (図36)

D地区北部の建物D-1西側で検出された。素掘り井戸で、平面は楕円形状を呈しており、規模は、長径約1.9m、短径約1.7m、底で直径0.5m、深さは約1.7mである。湧水があり、最下層から曲物内にちょうど納まる大きな石が出土した。意識的に沈めたものと思われる。埋土は5層よりなり、上の2層はシルトブロックが混じっており、人為的に埋められている。下の3層は自然に堆積したものである。遺物は下の3層から出土しており、土師器小皿・羽釜、須恵器、瓦器碗・小皿、中国製陶磁器などがみられる。曲物はもともと遺存状態が悪く、調査途中で壁面が崩壊したため、詳細は不明である。遺物に建物D-1とほぼ同じ時期のものがみられることから、建物に付随した井戸の可能性が考えられる。

3) 井戸D-3 (図37)

D地区南寄りの東側、建物D-5の南で検出された。建物D-3の北東端から約2mに位置する。北側上面を土坑D-5によって削られている。素掘りの井戸で、平面は不整形円形状を呈する。上半が開いており、検出面での規模は、径約2m、底で径1m、深さ1.8mを測る。埋土は、3層からなり、上層が人為的に埋められたシルトや砂質シルトなどで、中・下層が自然堆積によるシルトや粘質シルトである。遺物は、須恵器、土師器小皿・羽釜、瓦器碗、溶解炉、炭化物細片などが主に下層から多く出土している。また、底にはほぼ密着した状態で、桶の底板と考えられる径19cmの円形の板が出土した。植物遺

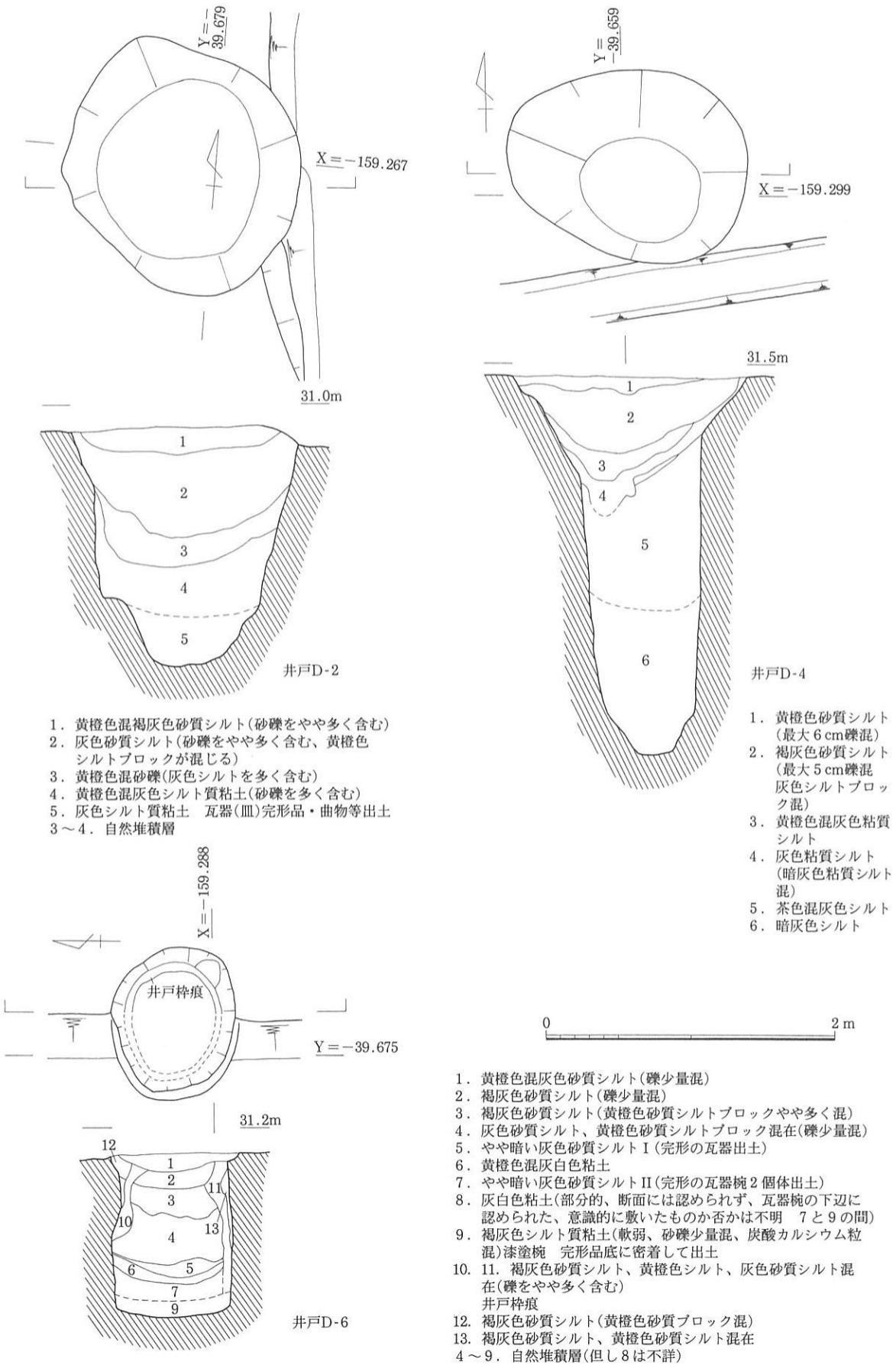


図36 井戸D-2・4・6平・断面図

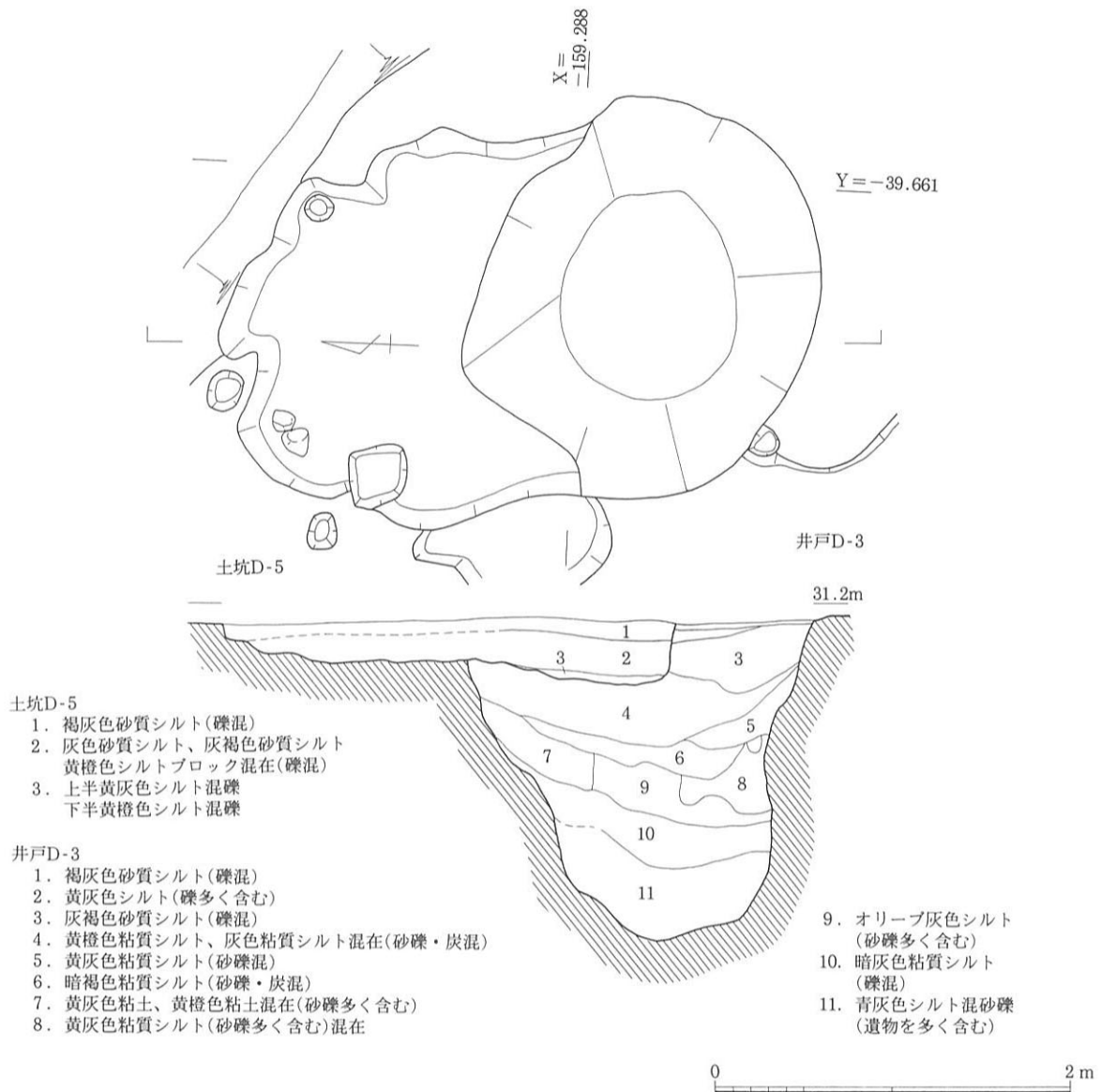


図37 土坑D-5・井戸D-3平・断面図

体も多くみられ、松笠が数点認められた。

4) 井戸D-4 (図36)

D地区の南端東で検出された。建物D-3の南東角から東約2.5mに位置する。平面は長円形で、長径約1.7m、短径約1.3m、深さ約2.6mを測る。素掘りの井戸で、漏斗状を呈し、中位で径0.8m、底部直上で径0.6m、最下部で径0.3mである。埋土は3層からなり、上層は人為的に埋められており、中・下層は自然堆積のシルト層である。遺物は多く、中・下層から須恵器甕・鉢、土師器小皿・羽釜、瓦器碗・小皿、瓦質甕・羽釜、陶器、中国製白磁、瓦、溶解炉などが出土している。特に、土師器小皿は200点以上、瓦器碗は100点以上、瓦器小皿は60点以上に及ぶ。溶解炉は、残存状態が比較的良好な大きい破片が認められた。(写真図版41)。

5) 井戸D-5

建物D-2の南面庇中央付近で、重複して検出された素掘りの井戸である。建物D-2の南面柱通り東から2間目と3間目のピット間に納まった状態であった。柱通りを境に南北等分に分けられているため、庇と同時に計画的に掘削された可能性が高い。平面は不整円形を呈しており、直径約1.1m、深さ

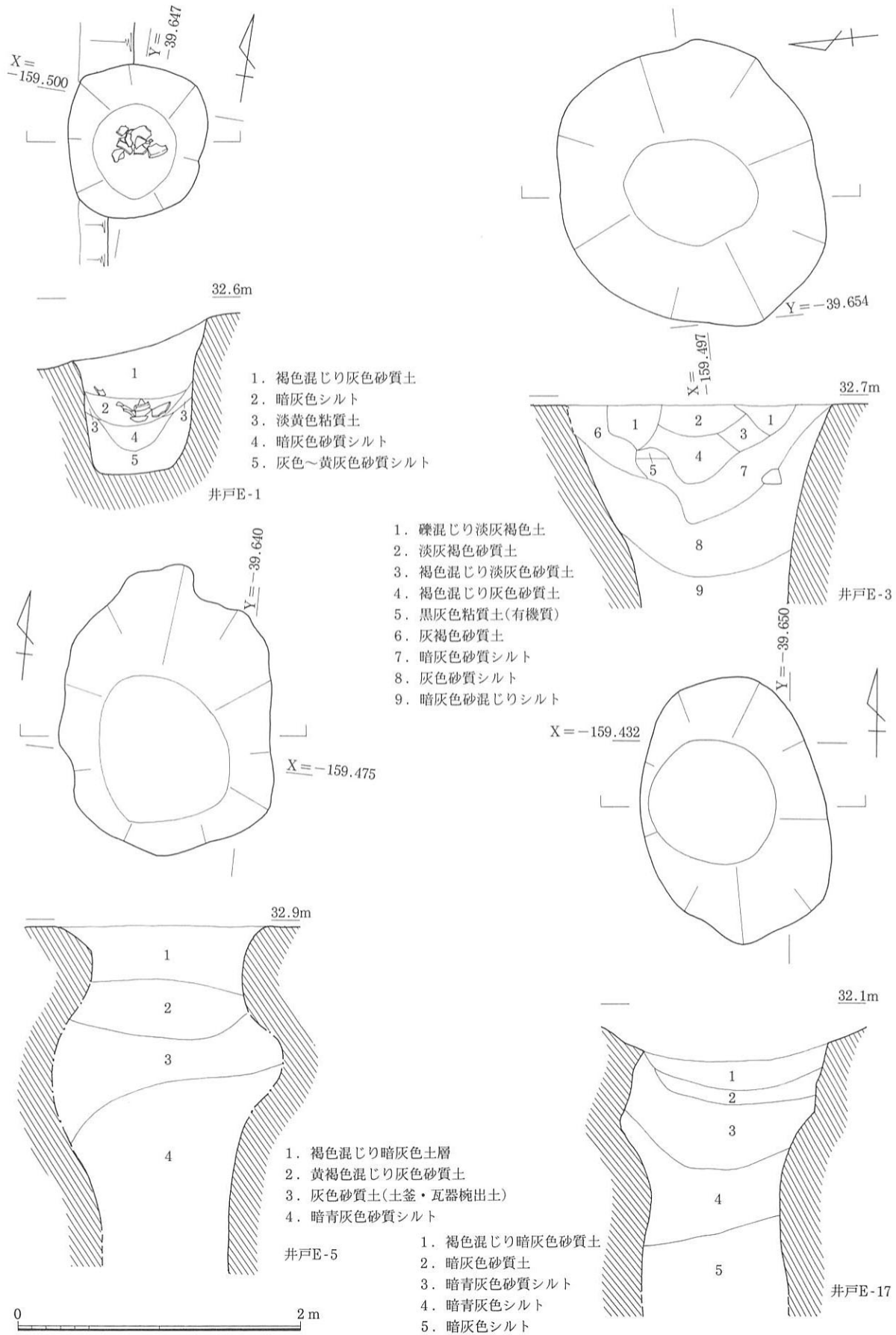


図38 井戸E-1・3・5・17平・断面図

約1.5mを測る。底部は径が小さくなる。遺物は、須恵器、土師器小皿・羽釜、瓦器碗・小皿、瓦質羽釜・播鉢、瓦などが出土している。建物D-2と井戸D-5は同じような時期の遺物を出土しており、井戸D-5の方が若干後のものまで含むようである。時期は井戸D-5～7まで同じ頃である。

6) 井戸D-6 (図36)

井戸D-5の南西で隣接して検出された。平面は長円形を呈しており、長径1.2m、短径0.9m、深さ約1.2mを測る。壁はほとんど垂直に落ちる。平面及び断面で井戸杵痕が認められた。底部で径約0.7m、厚さ5cmの井戸杵が復原できる。遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器碗、陶器、焼土塊などが少量出土している。下層からは完形の瓦器碗3点、底にはほぼ密着して完形の漆器碗が1点出土した。

7) 井戸D-7

井戸D-6の南西約1.5mで検出された。平面は円形を呈しており、径約1m、底部で径約0.5m、深さ約1.3mを測る。底部で井戸杵の痕跡らしきものがみられたが、詳細は不明である。遺物は、須恵器鉢、土師器、瓦器碗、瓦質土器、焼土塊などが少量出土している。

8) 井戸E-1 (図38、写真図版24)

E地区の南端で検出された。素掘り井戸で、平面円形状を呈しており、径1.1m、深さ1.1mを測る。井戸の壁はほぼ垂直に落ち、底部で径0.6～0.8mである。上層から下層まで遺物を包含する。特に中層の暗灰色シルト層からは一括して遺物が出土した。上層は人為的に埋められている。遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器碗・小皿、石鍋、瓦などが少量出土している。

9) 井戸E-2 (図39、写真図版25)

E地区の南端部で検出された。土師器羽釜を積み、井戸杵とした井戸である。掘方南端を井戸E-3により切られているが、楕円形を呈しており長径約2.5m、短径約2m、深さ約3mである。漏斗状で、上部はかなり広がっているが、中位から下は壁がほぼ垂直に落ちる。最下部に径4～6cm、長さ80cm前後の2本の丸太をハの字状におき、その上に直径40cmの曲物を3段重ね、更にその上には底を抜いた口径30cm前後のほぼ同じ大きさの土師器羽釜を積み重ねている。井戸杵に使用された土師器羽釜は12段以上あったと推定されるが、調査途中の崩壊により、11段まで確認したにとどまる。遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器碗・小皿、中国製白磁・青磁、陶器、瓦質土器、瓦、砥石などが出土している。

10) 井戸E-3 (図38)

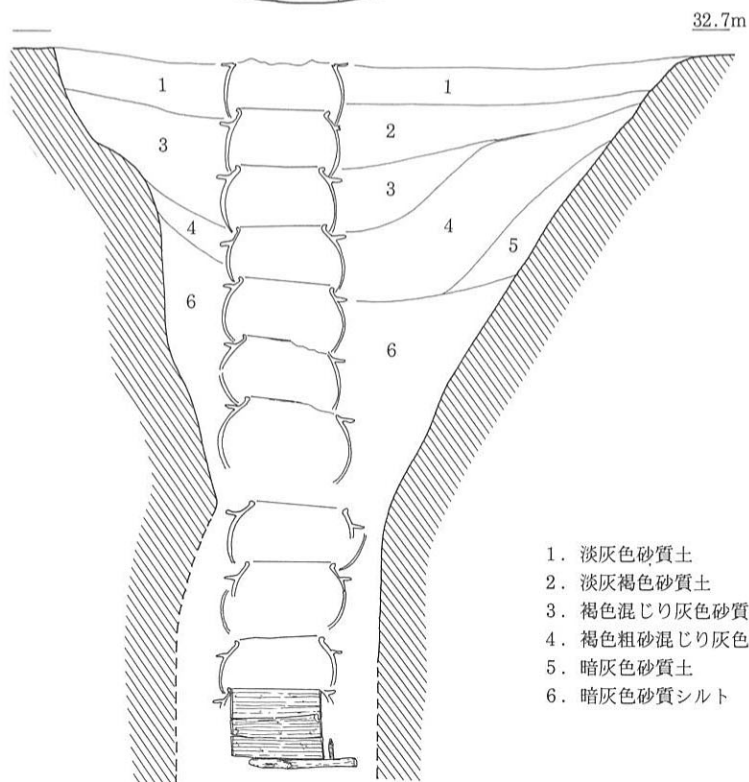
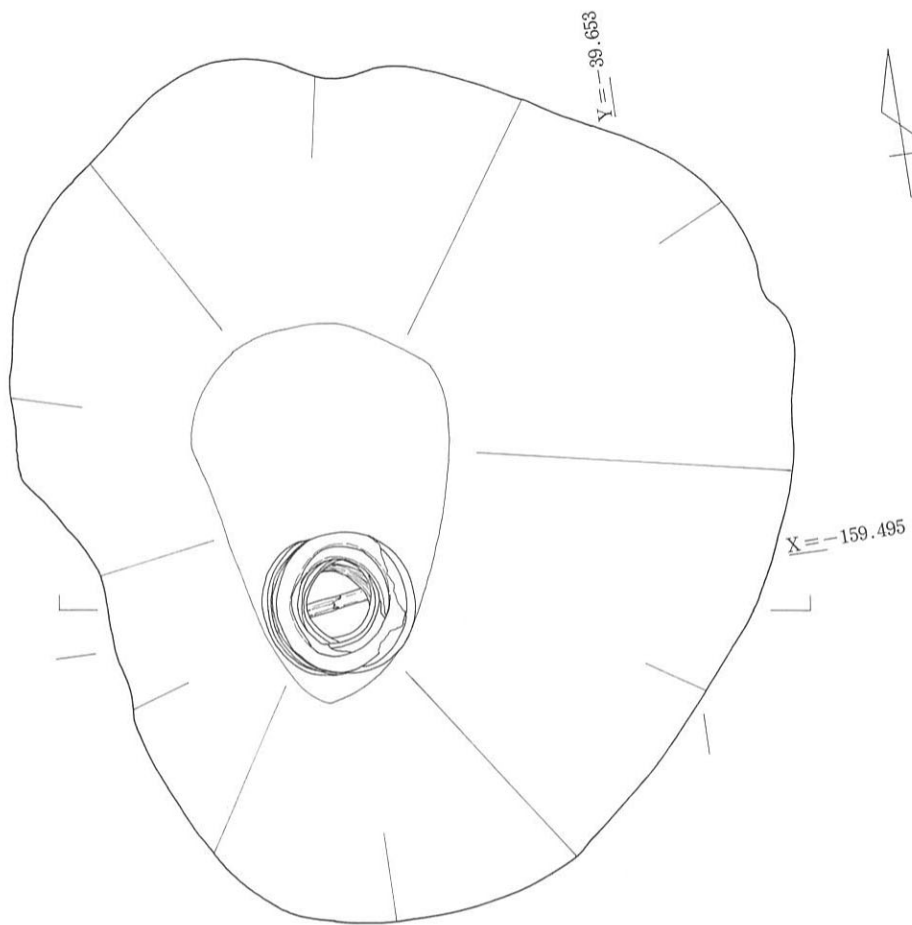
井戸E-2の掘方南端を切る素掘りの円形井戸である。規模は、径2m、深さ3.5m以上である。埋土は3層からなり、上層は人為的に埋められたものと考えられる。下層には植物遺体が含まれている。遺物は、土師器小皿・羽釜、須恵器甕・鉢、瓦器碗・小皿、瓦質土器、中国製白磁、陶器、焼土塊などが多く出土している。

11) 井戸E-5 (図38)

E地区南東部の建物E-7の南西角にほぼ接する位置で検出された。素掘り井戸で、平面は不整形を呈する。規模は2m×1.5m、深さ2.5mを測る。埋土は3層よりなり、各層より遺物が出土している。下部は大きくえぐられており、袋状になっている。遺物は土師器小皿・羽釜、須恵器鉢、瓦器碗・小皿、陶器、中国製白磁などが出土している。中国製白磁皿の底部外面には「大」の墨書が認められた。時期的には建物E-7・8と同じ頃のものである。

12) 井戸E-12 (写真図版24)

E地区北部の西寄り検出された。素掘り井戸で、壁はほぼ垂直に落ちる。平面は円形状を呈してお



1. 淡灰色砂質土
2. 淡灰褐色砂質土
3. 褐色混じり灰色砂質土
4. 褐色粗砂混じり灰色砂質土
5. 暗灰色砂質土
6. 暗灰色砂質シルト

0 1 m

図39 井戸E-2平・断面図

り、規模は、径0.7m、深さ1m以上を測る。埋土は、青灰色ないし暗青灰色シルトである。底部で、完形品を含む瓦器椀が並べられた様な状態で出土した。遺物は、このほかに須恵器鉢、土師器小皿・羽釜、瓦器小皿、砥石などが少量出土している。

13) 井戸E-13 (図40)

井戸E-12の南16mで検出された。平面は長円形を呈しており、長径1.4m、短径1.2m、深さ1m以上を測る。調査途中で壁が崩壊したため、下半部の断面観察はできなかった。遺物は、土師器小皿・羽釜、須恵器鉢、瓦器椀・小皿、瓦質甕・羽釜、中国製白磁、陶器などが出土している。このほかに、下半部から出土した呪符木簡がみられる。

14) 井戸E-16 (図40)

E地区中央部の建物E-2の南西角より2m南西の位置で検出された。平面は長円形を呈しており、長径2.2m、短径1.6m、深さ3m以上を測る。遺物は、土師器、須恵器鉢、瓦器椀・小皿などが少量出土している。遺物の時期から、建物E-1と同じ頃のものと思われる。

15) 井戸E-17 (図38)

井戸E-16の南西2mに位置する溝E-2の底部より検出された。平面は不整形円形を呈しており、長径1.9m、短径1.4m、深さ1mを測る。遺物は、須恵器鉢、瓦器椀、瓦質羽釜、陶器、瓦などが少量出土している。また、牛骨もみられる。遺物の時期は、E地区の建物群よりも少し新しい。

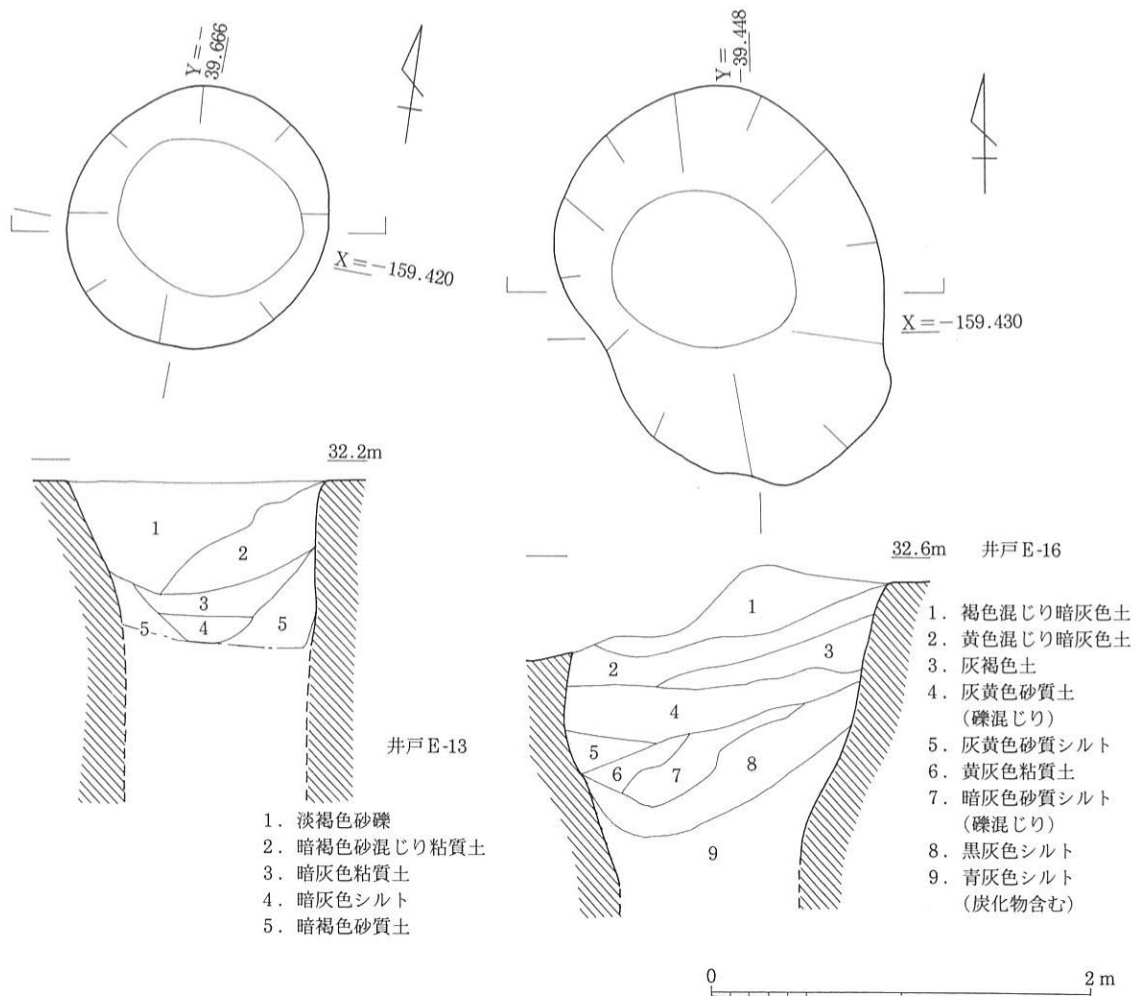


図40 井戸E-13・16平・断面図

16) 井戸E-18

E地区南寄りの溝E-2の底部より検出された。平面は不整円形を呈しており、長径1.9m、短径1.8m、深さ1.7mを測る。調査途中で壁面が崩壊したため、詳細は不明である。遺物は、土師器羽釜、瓦器碗などが僅かに出土している。遺物の時期は建物群より少し新しく、井戸E-17よりも少し古い。

(8) 土坑

土坑は、B・C・D・E地区で検出されており、屋敷や集落に伴うものが多いと考えられる。

1) 土坑B-1

B地区の中央部東端で検出された。東側は調査区外に広がるため、全容は不明である。屋敷地外に位置しているが、2期の遺構群とあまり時期差はなく、併存した可能性がある。平面は不整楕円形状を呈しており、長径2.5m以上、短径2m、深さ約20cmを測る。埋土は暗褐色土が基本であるが、黄灰色土が混入しているほか、焼土や炭化物を多く含む。遺物は、土師器、須恵器、瓦器碗、瓦質土器などが出土している。

2) 土坑C-4

C地区北西隅で検出された。現状で東西2.8m、南北2.5m、深さ約90cmを測る。北側と西側が調査区外に広がるため、形状や規模は不明であるが、溝C-4の北側に位置するため、屋敷地内の施設と考えられる。埋土は3層に分かれており、上・中層は黄灰色土に砂礫や灰色粘土が混入しており、人為的に埋められている。下層に暗灰色粘土が堆積しているため、水溜として使われていたと推定される。遺物は、土師器小皿・羽釜、須恵器鉢、瓦器碗・小皿、中国製陶磁器、炭、焼土塊などが少量出土している。時期は、B地区建物群2期(建物B-4他)と同じ頃のものである。

3) 土坑D-1

D地区北半の建物D-5と重複して検出された。平面は隅円方形を呈しており、長辺2.5m、短辺2.1m、深さ35cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は褐灰色砂質シルト、下層は灰色砂質シルトが基本であるが、人為的に埋められており、全体に礫を多く含む。下層には焼土が含まれており、遺物が多く出土している。遺物は、土師器小皿・羽釜、須恵器甕・鉢、瓦器碗・小皿、瓦質土器、中国製陶磁器、焼土塊などがみられる。時期は建物D-5よりも少し新しい。

4) 土坑D-2

D地区北半の建物D-2と重複しており、井戸D-5のすぐ北西より検出された。平面は楕円形状を呈し、長径1.1m、短径0.7m、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、礫を含む。遺物は、瓦器碗が僅かに出土している。時期は建物D-2よりも少し新しく、井戸D-5～7と同じ頃のものである。

5) 土坑E-27

E地区中央より南東の建物E-5西側の溝E-7と重複して検出された。平面は楕円形状を呈しており、長径1.7m、短径1.5m、深さ8cmを測る。埋土は暗灰色粘質土で、炭化物を含む。遺物は、土師器小皿・羽釜、須恵器甕、瓦器碗・小皿、瓦などがみられる。時期は、建物E-2と同じ頃のものと思われる。

6) 土坑E-35(写真図版26)

E地区の北部東寄りで検出された。平面は方形状を呈しており、一辺約3m、深さ約50cmを測る。埋土は灰褐色粘質土が基本であるが、下層には砂が混入している。遺物は、土師器小皿・羽釜、須恵器鉢、瓦器碗・小皿、瓦質羽釜、陶器、瓦、鉾滓などが出土している。瓦および石の中には一部火を受けているものもみられる。また、平瓦の破断面に瓦器細片を含むものが認められた。

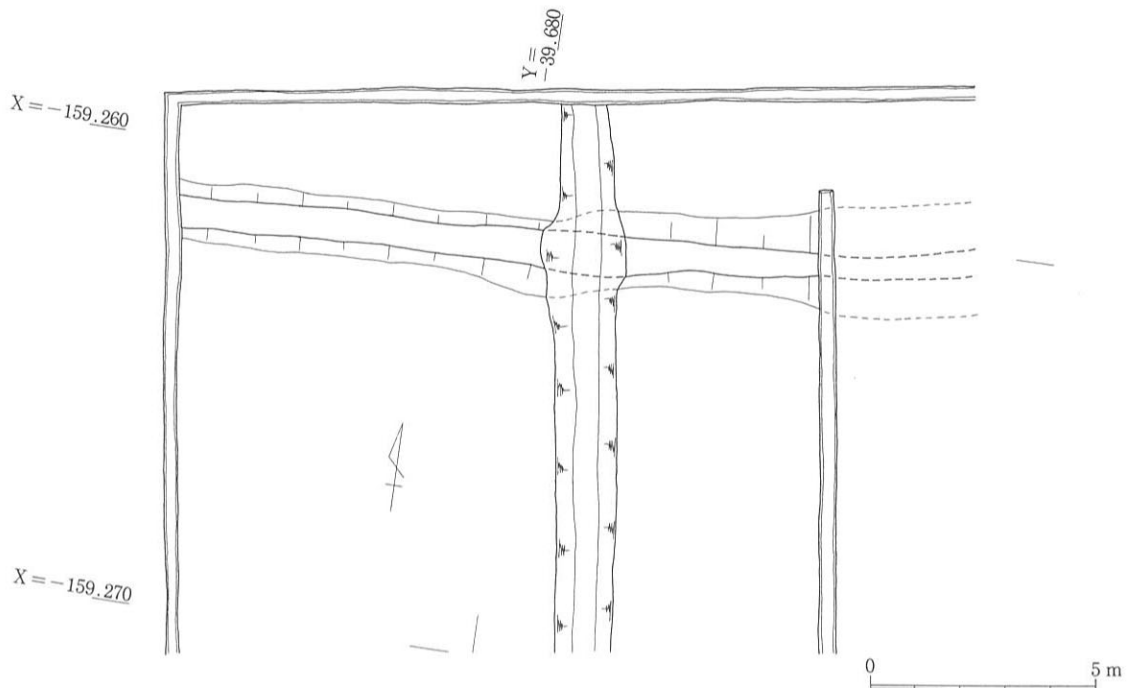


図41 畦畔D-1平・断面図

(9) 落込

1) 落込E-11

E地区南西端で検出された。南側は調査区外にのびるため、全容は不明であるが、土坑状のものである。規模は、東西約2.5m以上、南北0.9m以上、深さ約5cmである。遺物は、土師器羽釜、瓦器椀、瓦質羽釜などが出土している。

(10) 畦畔

1) 畦畔D-1 (図41)

D地区北端寄りに東西方向で検出された。方位は、東西の軸で4°5′南へ振っている。規模は、上端幅約0.6m、下端幅1.2~2mを測る。畦畔を境にして北側が一段上がり、高さは北で約20cm、南では10cmである。畦畔はさらに東へのびるため、南北方向の畦畔の存在も考えられるが、攪乱などにより確認できなかった。遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器椀・小皿、中国製白磁、焼土塊などが出土している。ただ、畦畔と関連すると考えられる整地層からの出土遺物により、時期はやや新しくなる可能性もある。

3. 室町時代

D・E・F地区で、ピット、溝、井戸、土坑などが検出されている。いずれも散発的に検出されており、平安時代末~南北朝時代のような遺構のまとまりはあまり認められない。前時代にみられた屋敷や集落は存続しておらず、ほとんどが耕作地になったようである。ただ、E地区で検出された井戸や土坑からは遺物が大量に出土していることから、建物は検出されなかったものの、この時期までは調査区外東側に集落が広がっていたものと考えられる。

(1) ピット

検出されたピットのうち、出土遺物によって時期が確定したものは、主にF地区で検出されている。ほとんどが建物の柱穴と考えられるが、建物を復元できるものはなかった。F地区の西端部で検出され

ているものが多いことから、調査区外の西側に集落が広がる可能性がある。また、土器埋納ピットと考えられるものもみられる。

1) ピットF-701

F地区中央部西端で、溝F-101の中にピットが4個かたまって検出されたうちのひとつである。平面形はほぼ円形を呈しており、径約17cm、深さ約7cmを測る。土器埋納ピットと考えられ、土師器皿が1枚埋納されていた。

2) ピットF-702

溝F-101の中から検出されたピットの一つで、ピットF-701の南側に接している。平面形は楕円形を呈しており、長径18cm×短径15cm、深さ約4cmを測る。ピットF-701と同様に土器埋納ピットと考えられ、土師器皿が数点出土している。

溝F-101の中から検出されたピットは、遺物の出土状況から土器埋納ピットと考えられるが、隣接して建物を復原できるようなピットが検出されていない。現状では、特定の建物の地鎮を目的としたものとは断定し難いが、調査区外の西側に集落が広がっているものとする、なんらかの関連性を考えることができよう。

3) ピットF-705

F地区北部西端の建物F-5と重複して検出された。平面形は隅円方形を呈しており、柱穴掘方は長辺73cm、短辺65cm、柱根は長径30cm、短径25cm、深さ25cmを測る。埋土は、黄褐色粘質土が基本である。遺物は、土師器皿・羽釜、中国製白磁などが出土している。

(2) 溝

室町時代におさまる溝は主にF地区で検出されているが、E・F・G地区では近世まで存続する溝も確認されている。

1) 溝F-81

F地区の南部を東西に走る溝である。東側は近世の井戸F-2に切られている。また、北側の道路状遺構と考えられる溝F-80を切っている。規模は、幅1.1～2.4m、深さ28cmを測る。埋土は、暗灰黄色砂質土である。遺物は、平安時代の須恵器が数点混入しているが、中世の土師器皿、瓦質甕・鉢・羽釜、陶器、中国製青磁、滑石片、焼土塊細片などが少量出土している。滑石片は未製品であるが、器種は不明である。

2) 溝F-101

F地区中央西端で検出された。東西方向に短く走る溝状を呈しているが、土器埋納ピットと考えられるピットをもつため、土器を埋納する目的でつくられたものといえる。規模は、幅0.5m、長さ2.1m、深さ7cmを測る。遺物は、土師器皿、瓦片などが出土している。土師器皿は、2枚重なったような状況で検出されており、意図的に埋められていることから、本来は溝の底部に土師器皿を置いたもので、ピット状に一段下がった部分からも出土したことから、土器埋納ピットにみえる可能性も考えられる。

(3) 井戸

E・F地区で多く検出されている。E地区では、東半部の集落域の縁辺部に沿って検出されているが、土坑も同じようにみられることから、不確定要素は多いが、さらに井戸が多くつくられていたことが推測される。F地区では、散発的な検出である。素掘りの井戸が多く、崩落の危険があったため、底部をほとんど検出できなかった。

1) 井戸D-8

D地区中央の東寄りで検出された素掘りの井戸である。建物D-1の南東隅から約5m、建物D-2北東隅からは4mの位置にある。平面形は南東部が攪乱を受けているため不明であるが、隅円方形と考えられる。一辺は約1.8m、漏斗状を呈し、下部は径0.9mの円形で、深さ3.7mまで確認できた。遺物は上部で出土しており、中・下部では全くみられなかった。出土遺物には土師器小皿・羽釜、瓦器碗、中国製白磁・青磁、焼土塊などが少量みられる。

2) 井戸E-6 (図42)

E地区の南部で検出された。東半部の集落域にあたる高い面の縁辺部に位置する。素掘りの井戸で、平面は不整形円形状を呈しており、規模は長径2.6m、短径2.4m、深さ2.1m以上を測る。井戸の底が西に片寄っているため、西側の壁面がほぼ垂直に落ち、東側は漏斗状を呈する。埋土はおおむね3層からなり、上層に暗灰褐色粗砂、中層に灰色砂質シルトや黄色粘質土、下層に黄灰色粘質土が堆積しており、上層は人為的に埋められている。遺物は、古墳時代遺物が少量混入しているが、中世の土師器皿・羽釜、須恵器甕・鉢、瓦器碗、瓦質甕・鉢・羽釜、陶器、中国製白磁碗、瓦などが出土している。

3) 井戸E-14

E地区中央よりやや北東部で検出された。井戸E-6と同様に、集落域にあたる高い面の縁辺部に位

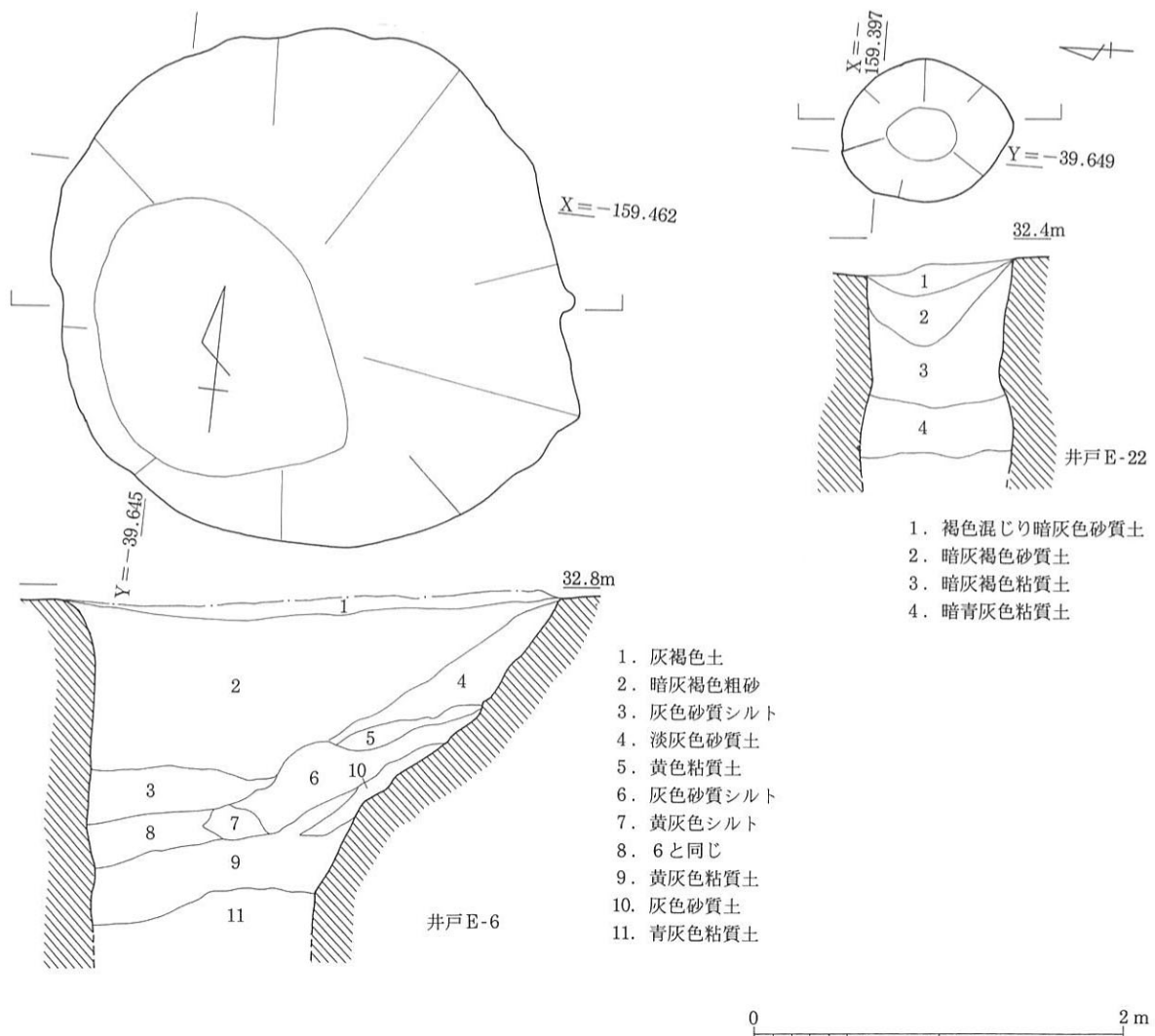


図42 井戸E-6・22平・断面図

置する。建物E-1の北西角より6.5m北に位置し、土坑E-41と重複する。土坑E-41に切られていると考えられるが、検出状況からは前後関係ははっきりしない。素掘りの井戸で、平面は楕円形状を呈しており、規模は長径1.5m、短径1.2m、深さ1.5m以上を測る。井戸の壁面はほぼ垂直に落ちる。埋土はおおむね3層からなり、上層に淡黄褐色砂質土、中層に黄灰色砂質土、下層に灰黄色砂質シルトが堆積しており、上層は人為的に埋められている。遺物は、奈良時代遺物が少量混入しているが、土師器、須恵器鉢、瓦器、瓦質插鉢・羽釜、瓦などが少量出土している。

4) 井戸E-22 (図42)

E地区の北部東側に位置しており、土坑E-47の埋土除去後に検出された。素掘りの井戸で、平面は楕円形状を呈しており、規模は長径0.9m、短径0.8m、深さ1.2m以上を測る。井戸の壁面はほぼ垂直に落ちる。上層は人為的に埋められており、主に暗灰色砂質土が堆積している。遺物は、古墳時代遺物が少量混入しているが、土師器皿・羽釜、瓦器碗、瓦質羽釜・插鉢・甕、陶器、瓦、焼土塊などが出土している。瓦の中には、梵字文軒丸瓦、五輪塔形スタンプ文などがみられる。

5) 井戸E-32

E地区中央よりやや北の西端で検出された。素掘りの井戸で、平面は円形状を呈しており、規模は径約1.1m、深さ0.7m以上を測る。埋土は、灰オリーブないし暗灰黄色砂質土が基本である。中・下層より遺物が出土している。遺物は、土師器大甕、瓦質插鉢・甕、瓦などが少量出土している。

6) 井戸F-7

F地区中央よりやや南の東端で検出された。井戸F-2に切られている。素掘りの井戸で、平面は円形状を呈しており、規模は径約1.7m、深さ0.6m以上を測る。遺物は、土師器皿・羽釜、須恵器甕、瓦質羽釜、瓦などが出土している。特に土師器皿は170点余もまとめて出土しており、井戸廃絶の際に意識的に埋められたものと考えられる。

7) 井戸F-11

F地区の北部西端で検出された。建物F-5の西側に接している。素掘りの井戸で、平面は円形状を呈しており、規模は径約2.6m、深さ0.7m以上を測る。埋土は灰色粘質土が基本で、明黄褐色粘質土が混ざる。遺物は、土師器皿、瓦質甕、瓦などが出土している。

(4) 土坑

特にE地区で多く検出されている。東半部の集落域の縁辺部の外側(西側)に多くみられるが、内側ではほとんど検出されていない。不確定要素は多いが、中には井戸と考えられるものもある。また、大規模で大量の遺物が出土したものもみられる。

1) 土坑E-37 (図43、写真図版27・28)

E地区北西部で検出された。瓦溜土坑で、平面は南北方向に長い楕円形状を呈しており、北側は溝E-16へと続く。規模は長径約8m、短径約3.5m、深さ0.5mを測る。埋土は3層に分かれ、上層に暗褐色土、中層に淡褐色砂質土、下層に暗灰色粘質土が堆積している。ただ、人為的に埋められており、土層の違いは時期差によるものではないと考えられる。古墳時代から中世までの遺物が多く出土している。特徴的なものをあげると、古墳時代では須恵器杯・器台・壺・甕・窯体付着破片、円筒埴輪や朝顔形埴輪などが、奈良時代では製塩土器が認められる。平安から中世の遺物では、土師器皿・羽釜、瓦質甕・插鉢・羽釜、須恵器甕・鉢、陶器、中国製青磁などのほか、瓦質灯明台、五輪塔、石鍋、鉦滓、砥石、瓦などがみられる。灯明台には、片面に「寺」の刻字が認められる。特に瓦の出土量は多く、遺跡全体の

出土量の2割強を占めている。調査区内では、寺院に関連するような遺構は検出されていないが、大量の瓦がまとまって見つかったことから、調査区外の西側に寺院関連の建物が存在したことが推測される。

2) 土坑E-39

E地区北部東端で検出された。平面は東西方向に長い不整楕円形状を呈するが、東側は調査区外に広がるため、全容は不明である。規模は長径3.8m以上、短径2.1m、深さ0.2mを測る。埋土は2層に分かれ、上層に暗灰色土、下層に暗灰褐色砂質土が堆積している。遺物は、埴輪片と思われるものから、中世の土師器皿・羽釜、須恵器鉢、瓦器、瓦質甕・羽釜・火舎、中国製青花、瓦、焼土塊、砥石、瓦などが少量出土している。

3) 土坑E-41

E地区中央部やや東で検出された。平面は不整形形状を呈しており、東側は調査区外へのびる。規模は長辺7m以上、短辺5.2m、深さ約0.5mを測る。埋土は灰黄色砂質土が基本で、底部に灰色砂質土が堆積している。遺物は、土師器、須恵器、瓦器碗、瓦質土器、陶器、中国製陶磁器、瓦などの他に、溶解炉の破片と考えられるものなどが出土している。

4) 土坑E-45 (写真図版28)

E地区の中央部で検出された。東西方向の溝状を呈しており、西側は調査区外へのび、東側は南北に走る溝E-2を切る。規模は長さ26m以上、幅2.5~4.2m、深さは深い所で約1mであるが、約0.7mの深さの部分が多い。埋土は淡褐色砂礫が基本で、底部に灰色粘土が堆積している。古墳時代から中世までの遺物が多く出土している。中世では、土師器皿・羽釜、須恵器、瓦器碗・皿、瓦質鉢・甕・羽釜、陶器、中国製陶磁器などの他、瓦質灯明台、五輪塔未製品、砥石などが出土している。特に瓦の出土量は多く、遺跡全体の出土量の1割強を占めている。灯明台には、「西条房」と「應保」の刻字が認められる。また、瓦の中にも「大鳥郡」と刻字された丸瓦がみられる。

5) 土坑E-84

E地区中央部の西端で検出された。土坑E-45を切っている。平面は円形状で断面は楕円状を呈しており、規模は径1.4m、深さ約0.8mを測る。埋土は2層に分かれ、上層に暗灰黄色砂質土、下層に黄灰色粘土が堆積している。上層は人為的に埋められており、小礫や粘土ブロックが混入している。遺物は土師器皿・羽釜、瓦質楕鉢・甕、瓦などが出土している。

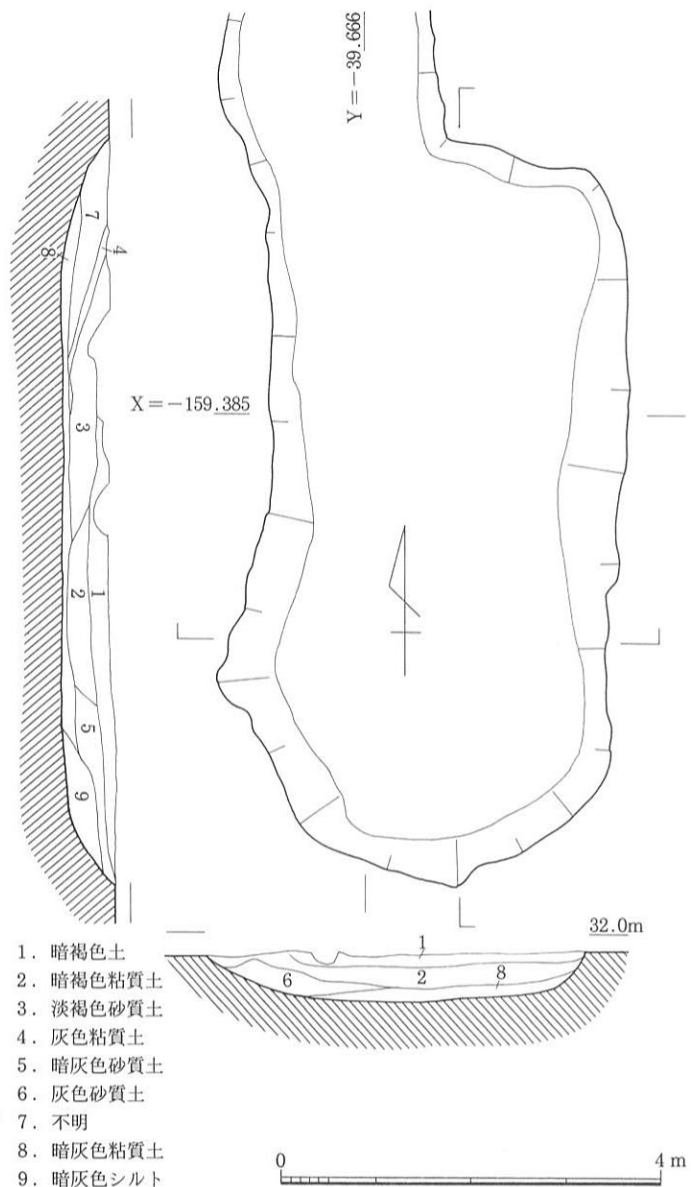


図43 土坑E-37平・断面図

第3節 近世以降

本遺跡では、近世以降の建物跡は検出されていない。中世に展開していた屋敷や集落は、近世までに廃絶しており、すべて耕作地となったようである。E地区で土坑がまとまって検出された以外は、散発的に溝や井戸がみられるにすぎない。溝は、周辺一帯の耕作地の重要な用水路あるいは排水路となっており、現代まで存続していたものが多い。井戸も耕作に伴うものと考えられ、全体に遺物は少ない。

(1) 溝

調査区の南半部にあたるE・F・G地区で、長い溝が検出されている。いずれも、土地を区画する意図で掘削されたものと考えられ、掘削時期は中世までさかのぼるが、ほぼ現代まで存続していた。

1) 溝E-2

E地区の中央東寄りを南から北へ流れる溝である。この溝E-2を境として、東側は一段高くなっており、西側には谷状の細長い低地部が南北に走っている。方位は、南北の直線的な部分でN-7°-Wを示す。規模は、幅2~3m、広い所では約5m、深さ0.5~1mを測る。北側は、土坑E-41付近で東へ湾曲していたものと考えられ、調査区外へのびる。また、南側も調査区外へのびるが、F地区では検出されておらず、北側と同様に、途中で東方向へ曲がるものと推測される。重複して井戸が数基検出されているが、調査段階では前後関係ははっきりしなかった。ただ、井戸から近世の遺物が出土していないことから、溝掘削以前の可能性が高い。埋土は、おおむね2層に分かれ、上層は暗灰褐色砂質土、下層は灰褐色砂質土が堆積しているが、北側では削平のため下層のみの検出となっている。下層は、室町時代にさかのぼる遺物が多く出土しており、特に瓦類が多くみられる。遺物は、土師器皿・羽釜や須恵器鉢、瓦器椀、瓦質羽釜・甕・鉢・火舎、陶器、中国製陶磁器、鉾滓などが出土している。

2) 溝F-63

F地区の南東部に位置し、南北に走る溝である。南北両端ともに調査区外へのびる。調査直前まで使用されていた用水路と重複しているため、ほとんど残っていない。規模は、幅2.5m~3.6m、深さ約1mと推測される。残存部の埋土は、灰黄色粘質土が基本である。遺物は、土師器や瓦質土器、陶磁器、中国製陶磁器などが少量出土している。

3) 溝G-1

G地区の中央を南北方向に走る溝で、東側を流れる奈良時代の溝G-3とほぼ重複して検出された。北側は調査区外へのび、溝F-63につながり、一体のものと考えられる。

溝G-1は中央環状線建設時まで使用されており、南の新池からの用水路である。規模は、幅約1.4~5.5m、深さ約0.7mを測り、底のレベルは南側が浅く、北側が深い。埋土は、下層で暗灰褐色粘質土の堆積がみられるが、上層では黄褐色粘質土が混入している。溝G-3との関係から、室町時代頃の農地開発に伴い、溝G-3や溜池(新池)を整備して、新たに溝G-1を掘削したものと考えられる。遺物は古墳時代以降、近世までのものが出土しており、特に中世から近世にかけての遺物が多い。中世では、土師器皿・羽釜、須恵器鉢、瓦質挿鉢・羽釜、陶磁器、瓦、窯壁などが、近世では、土師器や陶磁器などがみられる。

(2) 井戸

E地区でまとまって検出されたほか、散発的にA地区やF地区でもみられる。いずれも付近に建物は確認されていないことから、耕作に伴うものと考えられる。

1) 井戸A-1

A地区中央部で検出された素掘りの井戸である。平面は円形を呈しており、径2.1m、深さ約2mを測る。遺物は、漆器碗が1点出土したのみである。

2) 井戸A-2

A地区南部で検出された素掘り井戸である。平面は不整形円形を呈しており、長径0.9m、短径0.7m、深さ2.7mを測る。遺物は、井戸A-1と同様に、漆器碗が1点出土したのみで、共伴遺物はないため、時期ははっきりしない。

3) 井戸E-8

E地区南部寄り中央で検出された素掘りの井戸である。平面は長円形を呈し、長径3.4m、短径2.9m、深さ1.7mを測る。遺物は、中世から近世にかけてのものが少量出土している。

4) 井戸E-9

E地区の南端部で検出された素掘りの井戸である。上部を溝に切られているが、平面は楕円形を呈しており、長径1.8m、短径1.5m、深さ1.7m以上を測る。壁面は下方がえぐれているため、底部は検出できなかった。約1.7mまで掘削したが、その中で埋土は3層に分けることができた。上層は暗灰褐色砂質土、中層は混在しているが灰褐色粘質土が基本、下層は暗青灰色砂質シルトが堆積している。上層の下部と下層で土師器皿が大量に集中する部分が確認された。土師器皿は、約600個体に達していることから、単なる廃棄とは考えられず、意図的に埋めたものといえる。検出部分が2面にわたっており、その間を人為的に埋めていることも特徴的である。ほかに遺物は、瓦質土器や陶磁器、瓦、砥石などが少量出土している。

5) 井戸E-19

E地区北部東側で検出された素掘りの井戸である。平面は楕円形を呈し、長径1m、短径0.9m、深さ0.9mを測る。遺物は、中世から近世にかけてのものが少量出土している。中世では、土師器皿・羽釜、瓦質羽釜・播鉢・甕、中国製青磁碗などが、近世では染付の他、土師器、一石五輪塔、石臼などがみられる。

6) 井戸E-23

E地区北部寄りの東側で検出された素掘りの井戸である。灯明台を出土した中世土坑E-45のすぐ東に位置する。平面は楕円形を呈し、長径2m、短径1.7mを測る。遺物は、古墳時代、中世、近世のものが少量出土している。

7) 井戸F-2

F地区中央よりも南部寄りの東端で検出された。東側は南北に走る溝F-64に切られている。平面は楕円形を呈すると考えられ、長径4.6m、短径4.3m以上、深さ1.7mを測る。遺物は、平安時代の須恵器のほか、中近世の土師器、瓦器、陶磁器、瓦などが少量出土している。

(3) 土坑

E地区では中央を南北に走る現代水路の東側に沿うようにして近世土坑が多く検出されている。

1) 土坑E-12

E地区中央よりも少し南寄りの西側で検出された。平面は、隅円三角形で、長径2m、短径1.2m、深さ0.5mを測る。遺物は少量だが出土しており、中世のものが主に、近世のものが僅かにみられる。中世では、土師器皿・羽釜、瓦器、陶磁器、瓦などがみられる。

2) 土坑 E-44 (図44、写真図版28・30)

E地区中央よりも少し北部で検出された。平面は隅円台形状を呈しており、断面は皿状の中央が一段深く掘り込まれている。規模は、長辺10.5m、短辺9m、深さは底部中央の最も深い所で2.5mを測る。遺物は、古墳から平安時代のもものが少量、中世から近世のもものがやや多く出土している。古墳から奈良時代では、埴輪、須恵器杯・器台・甕・壺・鉢が、平安時代では土師器高杯がみられる。中世では、土師器皿・羽釜、瓦器碗、須恵器鉢・甕、瓦質羽釜・甕・播鉢・井戸杵、陶磁器などがみられる。特徴的な遺物として、子持勾玉と大量の瓦があげられる。瓦類は、当遺跡全体の約2割強の出土量である。

3) 土坑 E-48

E地区北部東端で検出された。井戸 E-19 に切られている。平面は楕円形を呈しており、残存部の長

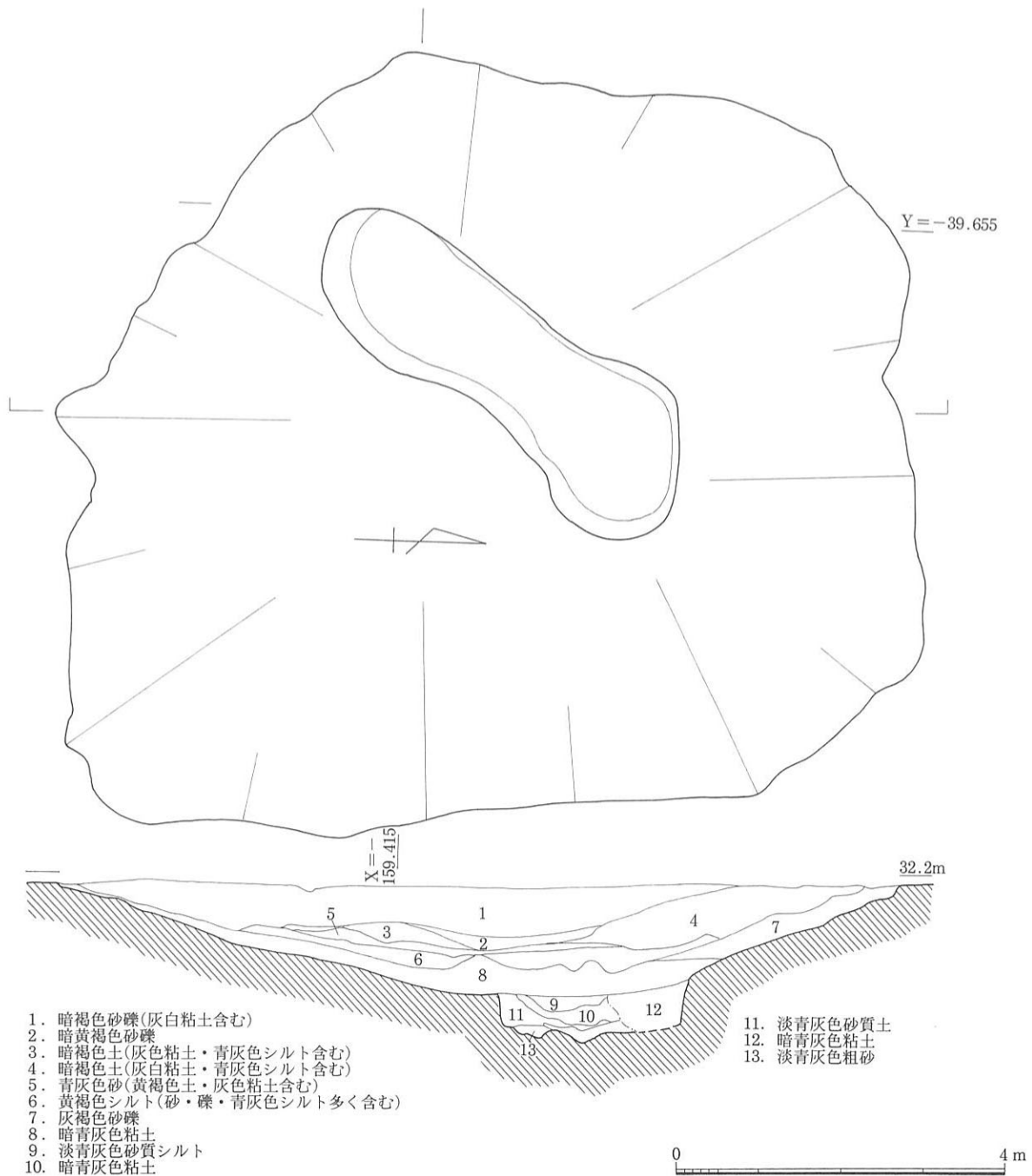


図44 土坑 E-44 平・断面図

径2.0m、短径1.6m、深さ24cmを測る。遺物は、サヌカイト剥片、平安時代の須恵器、中世、近世の遺物が少量出土している。中世では、土師器皿・羽釜、須恵器鉢、瓦質羽釜・甕、瓦器、中国製青磁碗などが、近世では、染付や瓦がみられる。

4) 土坑E-64

E地区北部の土坑E-44の北東部で重複して検出された。平面は楕円形を呈しており、長径2m、短径1.3m、深さ0.5mを測る。遺物は、中世から近世にかけてのものが少量出土している。内容は、土師器皿・羽釜、瓦器、瓦質挿鉢・羽釜、陶磁器、中国製陶磁器、瓦などがみられる

5) 土坑E-65

E地区北部の土坑E-64より2.5m北側で検出された。北側は大きく攪乱を受けている。平面は不整楕円形を呈しており、長径約2.1m、短径約1.7m、深さ64cmを測る。遺物は、奈良時代の須恵器杯、中近世のものが少量出土している。中世では、土師器皿・羽釜、瓦質甕・羽釜・鉢、陶磁器、中国製白磁が、近世では、湊焼や陶磁器がみられる。なお、唐津焼皿の中には墨書が認められた。

6) 土坑E-72

E地区北西端で検出され、東西方向に長く、西端は調査区外へのびる溝状の土坑である。南東部で中世の溝E-16と接続している。長辺14.3m以上、短辺3.5~4.4m、深さ0.4mを測る。遺物は、埴輪、奈良時代の須恵器杯と、中世遺物が少々みられ、近世遺物は西側より出土している。中世では、土師器皿・羽釜、瓦器、瓦質甕・挿鉢・羽釜、中国製青磁、瓦などが、近世では陶磁器がみられる。

7) 土坑F-82

F地区中央よりやや北部寄りの西端で検出された。平面は隅円長形状を呈し、長辺1.5m、短辺0.9m、深さ0.4mを測る。埋土は、黄褐色砂質土が基本である。遺物は、古墳から奈良時代にかけての須恵器、中近世のものが少量出土している。中世では、土師器皿、瓦質羽釜などが、近世では陶磁器がみられる。

(4) 暗渠

1) 暗渠E-1 (図45、写真図版31)

E地区南部中央西側の溝E-2を切り、東側の溝E-1に切られ、直径約30cm、長さ40cm余りの土管が5本連結した状態で検出された。この土管付近からは中近世の遺物が少量出土している。中世では、土師器、須恵器、瓦器などが、近世では瓦がみられる。

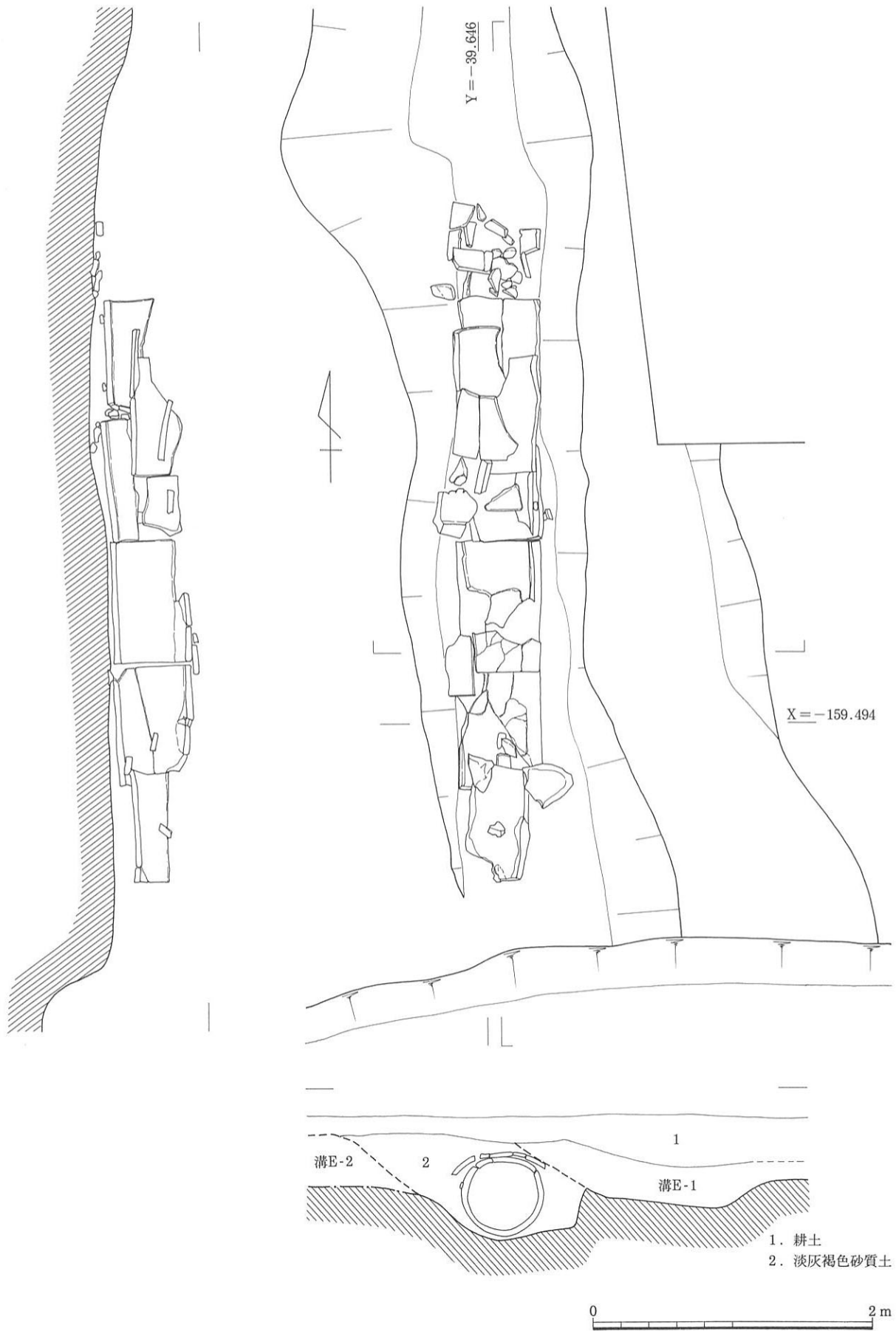


图45 暗渠E-1平·断面图

第5章 遺物

観音寺遺跡出土の遺物はコンテナ数にして650弱あり、その半数以上は瓦によって占められている。時代別には奈良、平安時代と、近世の遺物が少し、中世の遺物が大量にみられる。以下、各時代順に遺構出土遺物を中心に述べる。

第1節 奈良時代以前

遺構に伴うものではないが、旧石器から古墳時代にかけての遺物が少し認められた。奈良時代の遺物には遺構に伴うものが若干あり、それらは図化している。奈良時代の遺物は平城宮Ⅱ～Ⅲの時期にあたるものが多いようである。

1. 古墳時代以前 (写真図版32・33)

旧石器から弥生時代に該当する遺構は検出されていないが、包含層その他から、石器が少量出土している(写真図版32)。

632は土坑F-5出土の旧石器の翼状剥片と思われるもので、表面は白く風化しており、背面には大剥離面をつくる前の打面調整がなされている。

633は3Eトレンチ包含層出土の不定形刃器で全体に磨滅しているが、先端部および右側縁を除いた縁は鈍く磨滅している。

634～638の石鏃は基部に抉りのある凹基式で、縄紋から弥生前期までのものを含むと思われるものである。634、635、637は基部の抉りも深く、縄紋時代のものであろう。634は土坑F-86より、635はピットF-707から、637は3Dトレンチ包含層からの出土である。636、638は基部の抉りが浅いことから、縄紋晩期から弥生前期の可能性がある。636は鋤溝D-1から、638は土坑G-31からの出土である。639は土坑F-28出土の先端部の欠損した円基式石鏃である。640は落ち込みG-4出土の上下ともに欠損した石鏃である。641は7Aトレンチ包含層出土の先端部が欠損した凸基有茎式石鏃で、弥生中期のものであろう。

後世の遺構から、若干の古墳時代遺物が出土している。遺構に伴うものは無いが、タガの退化した小ぶりの円筒埴輪や人物埴輪の腕かと思われるもの(写真図版33-643)、盾形埴輪と思われるもの(写真図版33-645)、滑石製子持ち勾玉(写真図版32-642)、須恵器の筒型器台破片などが出土している。時期は6世紀代のものであろう。古墳時代の出土遺物の種類から、後世の開発により、破壊された古墳があったであろうと推測される。また、窯壁付着の須恵器破片(写真図版33-644)や、生焼けの須恵器破片も僅かながら出土していることから、近くに須恵器の窯が存在していた可能性も考えられる。

643の人物埴輪の腕と思われる破片は溝G-3出土である。この埴輪破片は中空で、緩く湾曲し、長さ13.5cm、最も太い部分で4×3.5cm、手首部分とおぼしき所は2.5×2cmを測る。衣服、装身具などの表現はみられない。

645は溝G-3から出土の盾と思われる15×10cmの埴輪破片である。表面には縦ないし斜め方向のハケ目調整の後、弧線により紋様が施されている。円筒埴輪の部分には縦方向のハケ目調整が残り、盾の面と円筒との継ぎ部分には三角形の板状の粘土の貼りたしが見られる。

644は土坑E-37から出土した、窯壁の付着した須恵器体部破片であり、須恵器内面には同心円文叩きがみられる。

642の子持ち勾玉は土坑E-44から出土しており、長さ12.6cm、幅6.9cm、厚さ3.5cm、重さ310gを測る滑石製である。断面形は四角形状をなす。頭部寄りには径5mmの穿孔がみられる。平面形は緩いC字形で、頭部と尾部に厚みを持ち、腹部分は薄い。頭部は3.5cmの厚さを測り、尾部分は破損しているが、頭部とほぼ同じ厚さのものと推定する。腹部に1.5×1.2cmの四角い突出部がみられ、片面脇と背部分が一部欠損しているが、背部には3個の子が、両脇には2.5個の子がつけられている。

2. 奈良時代

主な遺構はD～G地区で認められ、遺物が若干出土している。以下、竪穴住居、溝、土坑、包含層というふうに、遺構の種類別にトレンチ順に述べる。

(1) 竪穴住居

1) 竪穴住居G-1 (図46)

全調査区のなかで、12Gトレンチより1棟だけ検出されている。出土遺物は須恵器および土師器の破片が少量みられた。

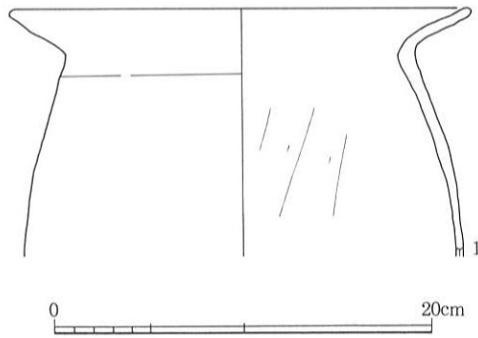


図46 竪穴住居G-1出土土器

須恵器は小型の甕かと思われ、甕か壺の口縁部、体部や底部破片などがある。土師器では杯、皿、甕、胎土中に角閃石を含む羽釜などである。いずれも飛鳥から奈良時代の範疇に入るとされるものである。

図化したのは体部上半部が残存する土師器甕1点だけである(1)。甕の頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。体部最大径よりも口径が僅かに上回る、おそらく長胴型の甕であろう。調整は外面が摩耗しており不明、内面は下から上へ斜め方向のへら削りが施されている。

平城宮I～IIの時期のものと思われる。

(2) ピット

1) ピットF-62 (図47)

ここからは土師器杯1点、土師質羽釜の破片2点が出土している。いずれも平城宮III～IVと思われるものである。2、3の土師質羽釜は胎土中に角閃石を含む。

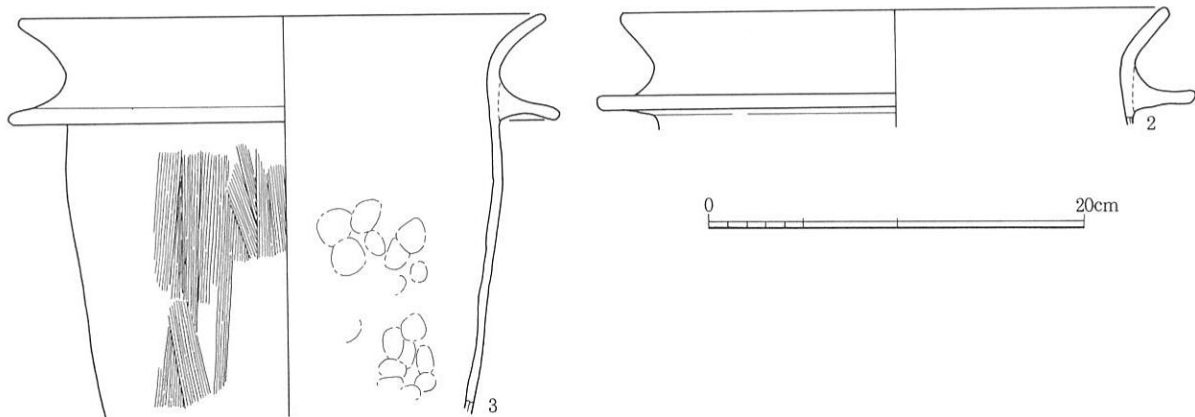


図47 ピットF-62出土土器

2) ピットG-51 (図48)

ここからは土師器細片、須恵器甕体部細片、平城宮Vにあたると思われる時期の須恵器杯高台部分1点が出土している(4)。

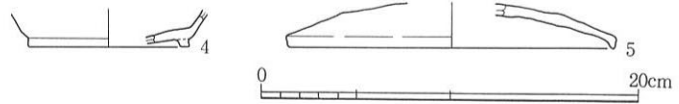


図48 ピットG-51・451出土土器

3) ピットG-451 (図48)

ここからは平城宮III~IVの時期にあたると思われる須恵器杯蓋が1点出土している(5)。つまみ部分は欠損しており不明。

(3) 溝

E、F地区の溝から出土した遺物を図化した。

1) 溝E-7 (図49)

この溝は中世建物である建物E-5をとりまくように巡っており、雨落ち溝の可能性が考えられているが、遺物の残存状態が中世と奈良時代のものでは異なり、奈良時代の遺物に遺存状態の良好なものが目だったため、奈良時代の遺物をここで取り上げた。

出土遺物の内訳は奈良時代の土師器、須恵器が数点と、奈良から平安時代の須恵器、土師器の細片少量、灰釉陶器細片と、瓦器のIII-2~3期、および土師質羽釜、瓦質羽釜、瓦質播鉢、陶器体部片など、中世遺物細片が少量出土している。この他に瓦破片や鉄滓も1点みられる。

奈良時代の遺物では、破片を接合すると略完形となった土師器の甕1点と、土師器の鉢1点、須恵器壺高台1点を図化した。6の土師器鉢は小形で、肩部に稜をもち、口縁部はゆるやかに外反する。外内面の調整は不明である。平城宮II~IIIの時期か。7は須恵器壺高台破片で底部外面に一状の線が認められる。偶然についた線か、ヘラ記号かは不明である。

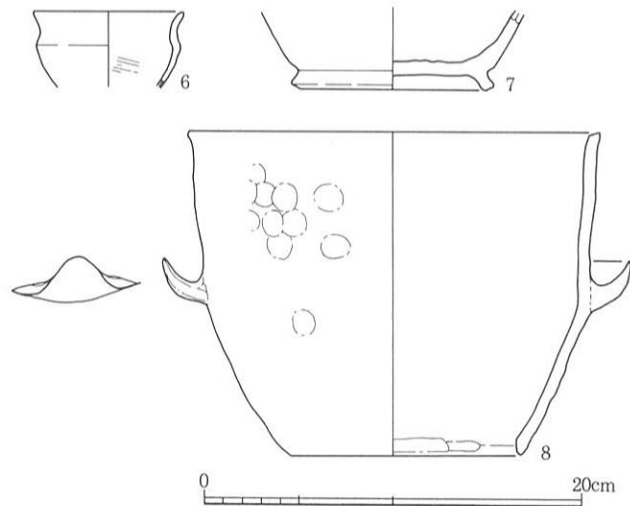


図49 溝E-7出土土器

平城宮III~IVの時期か。8は土師器甕で、底部~体部にかけてややふくらみ、体部最大径の部分に偏平な平面三角形状の把手が上に折曲げられてつく。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦である。底は抜けて無い。平城宮I~IIの時期にあたるものか。

2) 溝F-5 (図50、写真図版34)

溝F-5はF区の最北部に位置し、ほぼ東西にのびる溝F-6に切られている。溝F-5からは陶器

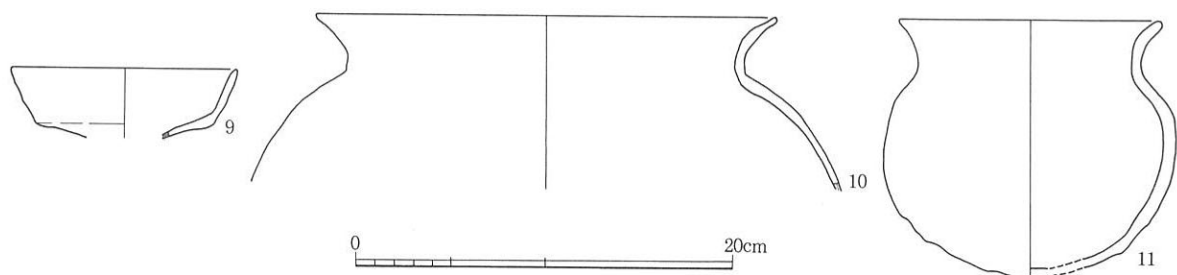


図50 溝F-5出土土器

Ⅲ～Ⅳ型式の須恵器と、飛鳥～奈良時代の土師器、瓦破片が少量出土している。器種は須恵器ではⅢ型式と思われる杯底部破片、Ⅳ-1～2段階の杯蓋、甕体部破片、土師器では平城宮Ⅱ～Ⅲにあたると思われる杯、奈良時代と思われる把手破片、壺、甕、製塩土器がみられる。図化したのは土師器甕大小の各1点である。9は須恵器高杯の杯部破片である。10は緩いくの字状に屈曲する頸部に口縁は端部で薄く丸くおさめる。体部最大径よりも口径が小さい。調整は外内面ともに磨滅しており不明である。11はゆるく外反する口頸部に、口縁端部は丸くおさめる。口径よりも体部最大径が僅かに上回る。ほぼ完形品である。調整は外内ともに磨滅しており不明であるが、体部下半に粘土紐の継ぎ目の痕跡を留める。9～11は平城宮Ⅰ～Ⅱの時期にあたるものか。

3) 溝F-24 (図51)

溝F-24はFトレンチ北部の建物F-1の南側に位置し、平安時代前期の建物F-1に伴う雨落ち溝

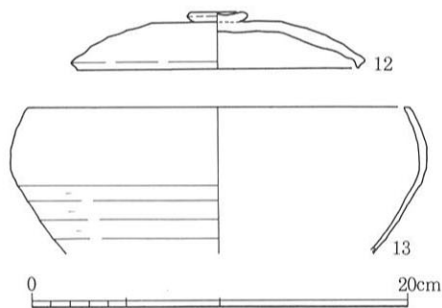


図51 溝F-24出土土器

と概要報告書で記述されていた溝である。溝F-24からは須恵器、土師器の破片が少量出土している。器種は土師器では平城宮Ⅱ～Ⅲかと思われる皿のほか、甕、胎土中に角閃石を含む羽釜小破片、須恵器では陶邑Ⅳ-1～2段階と思われる杯、杯蓋、鉄鉢破片や、外面に叩きのちカキ目を施した体部破片もみられる。12は偏平なつまみの中央が僅かに突出した杯蓋である。天井部は高く、口縁端部は短く内下方へおさめる。13は底部の欠損した鉄鉢形で、体部最大径からやや内側へむけて立ち上がる

口縁の端部は水平な面をなす。体部下半は左方向にヘラ削りを施している。

4) 溝F-11 (写真図版34-649～651)

溝F-11はトレンチ北側、溝F-6のすぐ南に位置する、幅0.3～1.6m、長さ約13m、深さ約0.2mの溝である。ここからは須恵器、土師器破片が少量出土している。須恵器は陶邑Ⅲ～Ⅳ型式にあたると思われる杯、杯蓋、甕や横瓶の体部破片がある。土師器では奈良時代にあたると思われる皿、甕、羽釜の鏝破片などがある。現在水路より東側の溝F-11からは、平城宮Ⅲ～Ⅳの土師器皿が表面がかなり摩耗した状態で、2/3個体出土しており、そのすぐ南東からは和同開珎が3点(649～651)出土している。写真図版掲載の3点は、保存処理後の状態である。

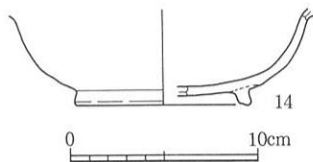


図52 溝F-108出土土器

5) 溝F-108 (図52)

溝F-108はトレンチ中央よりやや南寄りの道状遺構の北側を東西に近い方向で走る幅0.8m前後の溝である。溝F-108からは須恵器のⅠ型式後半にあたるかと思われる体部破片と、飛鳥Ⅱの杯蓋細片1点、陶邑Ⅳ-4段階の盤、飛鳥時代のものと思われる土師器の高杯脚部破片1点などが出土している。14の盤は底部から体部にかけての立ち上がりが丸みを帯びており、欠損した口縁部はほぼ水平に短く開くと思われ、陶邑Ⅳ-4段階にあたると思われる。

6) 溝G-3 (図53、写真図版33)

ここからは奈良時代の遺物、瓦破片が少量出土している。15、16は陶邑Ⅳ-2～3段階と思われる須恵器である。盤は1/3個体、長頸壺は1/4個体が残存する。これら以外に、胎土中に金雲母を含む土師質羽釜の鏝破片や、円筒埴輪破片、形象埴輪、陶邑Ⅱ-6～Ⅲ-1段階の杯破片などがある。そのほか、平安時代初め頃と思われる須恵器甕口縁部細片1点、瓦器碗細片が2点みられるが、混入によるものか。

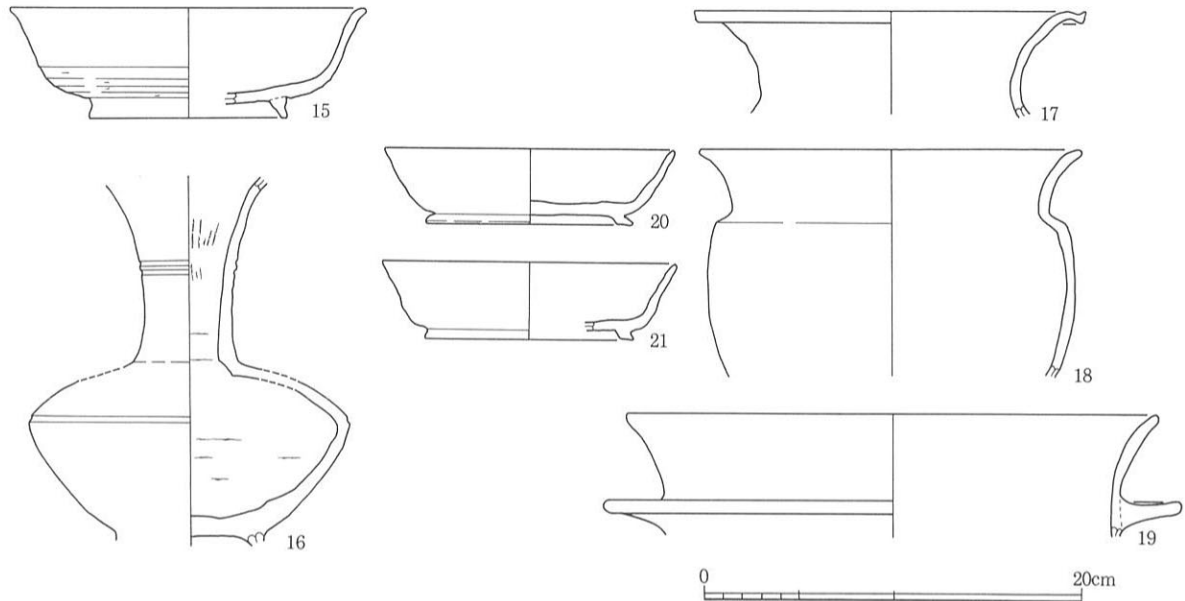


図53 溝G-3・61、池底溝状遺構G-1出土土器

7) 溝G-14 (写真図版34)

溝G-14はトレンチ中央東側にある溝G-31のすぐ北側に位置する、ほぼ東西に伸びる細い溝である。この溝の下の遺構面からは建物1が検出されている。溝G-14からは奈良時代の土師質羽釜、製塩土器破片(646~648)が少々、炭細片が出土している。646、647は外面に指頭圧痕、内面に布目圧痕が残る。648は表面が摩耗しており、調整は不明である。647の表面は固く焼け締まっており、灰赤色を呈する。

8) 池底溝状遺構G-1 (図53)

奈良時代の須恵器、土師器、瓦破片などが少々出土している。須恵器では広口壺口縁部(17)、鉄鉢形鉢、土師器では甕(18)、羽釜(19)、杯がある。時期は平城宮III~Vにあたると思われる。このほか円筒埴輪破片や、混入らしい中世平瓦破片も1点みられる。

9) 溝G-61 (図53)

奈良時代の須恵器杯が2点(20、21)出土している。高台が若干内寄り、接地部分が少し外方へふんばっていることから、平城宮II~IIIの時期のものか。このほか、1点だけだが、瓦器破片がみられるが、混入と思われる。

(4) 土坑

D、F地区出土の奈良時代遺物を図化している。

1) 土坑D-11 (図54)

土坑D-11は11Dトレンチ中央よりやや北側に位置する一辺1.2mほどの焼土坑である。土坑D-11からは平城宮II~IIIの時期にあたると思われる土師器皿、杯や把手破片の他、甕口縁部破片が僅かに認められる。22~25は土師器の皿および杯である。口縁端部内面は僅かに肥厚する。体部内面には斜め上方に平行にのびる暗文がみられる。見込みには残存状態が不良だが、連結輪状の暗文が施されているものか。23の底部外面にはヘラ削りの痕跡が残る。

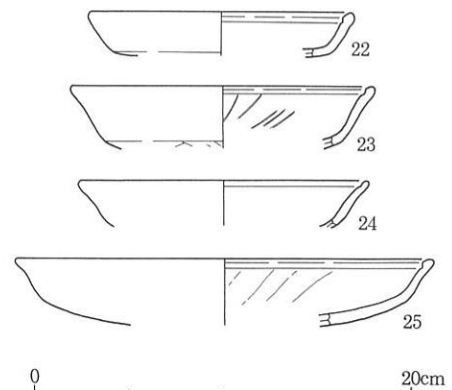


図54 土坑D-11出土土器

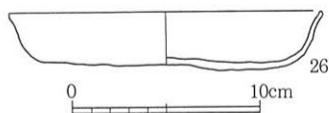


図55 土坑F-18出土土器

と思われる皿、甕が、須恵器ではIV型式の杯細片、生焼けの甕頸部細片がみられる。26の土師器皿はほぼ完形品であるが、全面摩耗し、内面の暗文は不明である。底部から体部にかけて屈曲し、口縁が端部で僅かに外反し、内側へ極僅かに肥厚する形状から、平城宮IIの時期に該当すると思われるものである。

3) 土坑F-84 (図56)

土坑F-84はトレンチ中央西端に位置する一辺約1.2mの土坑である。トレンチ外へ伸びるため、一辺は1.2mよりも大きくなる可能性が高い。土坑F-84からは平城宮IIないし平城宮IVの土師器の杯が出土している。他には体部と頸部の境目に稜をもつ平城宮IVの時期にあたると思われる甕(30)や、胎土中に角閃石を含む土師器の羽釜破片もみられる。須恵器では陶邑III-3段階の杯蓋細片、IV-3段階かと思われる皿細片が各1点、II-6段階かと思われる杯蓋が1点(27)、IV型式と思われる高台付きの杯身破片が2点(28、29)出土している。

4) 土坑F-85 (図56)

土坑F-85は土坑F-84よりも北側に位置し、長径約4mのやや楕円形状を呈する。ここからは土師器、須恵器の破片が少量と、混入によるものか、瓦質羽釜と瓦質火舎の細片が各1点みられた。土師器

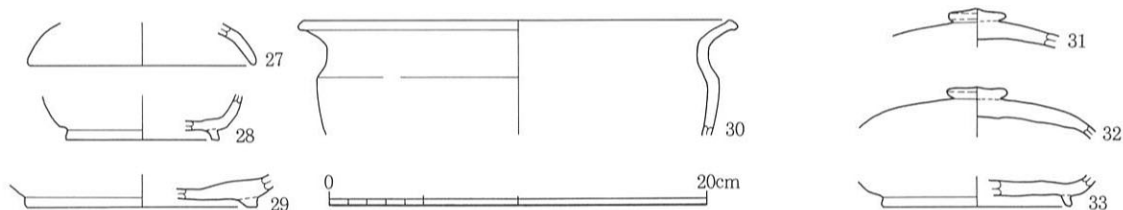


図56 土坑F-84・85出土土器

では平城宮II~IIIの時期にあたると思われる杯破片が1点、他に甕口縁部破片が数点と、胎土中に角閃石を含む羽釜がみられる。須恵器では陶邑II~III型式と思われる杯、甕口縁部、短頸壺の他に、31~33のようなIV型式と思われる杯および杯蓋が、いずれも細片であるがみられる。

5) 土坑G-50 (図57)

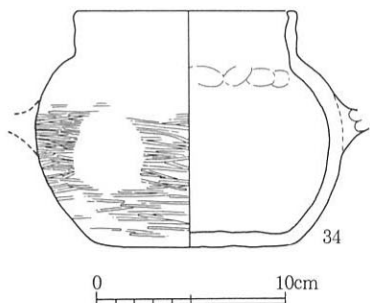


図57 土坑G-50出土土器

ここからは須恵器では陶邑III-3段階の杯高台、平瓶か不明のもの、甕体部破片、土師器では皿、羽釜、甕などが少量出土している。34は把手付き短頸壺である。把手は一方の付け根が残存し、もう一方は欠損しており不明である。おそらく双把手付きのものであろう。平底にやや偏平な体部と短く直立した口縁部よりなる。体部中央より下は横方向のヘラ磨きが施されている。平城宮I~IIの時期にあたるものか。

(5) 包含層 (図58、写真図版34)

包含層出土の遺物に奈良時代のものがみられる。37は2Fトレンチの地山直上より出土したもので、ほぼ完形の須恵器の鉄鉢である。外面は丁寧な磨きが施されている。陶邑IV-2段階のものと思われる。35、36はともに8Gトレンチの灰青砂礫層から出土しているものである。35は須恵器の広口壺で陶邑IV

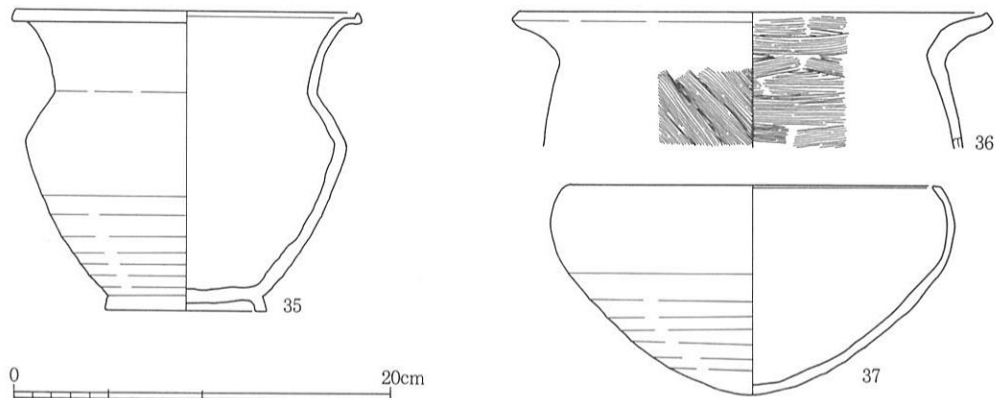


図58 F・G地区包含層出土土器

一3段階と思われるものである。36は土師器甕の口縁から体部にかけて残存するものである。くの字状に屈曲する頸部に口縁端部は上外方に極僅かに肥厚する。体部外面に斜め方向のハケ目、内面に横方向のハケ目が施されている。平城宮Ⅰ～Ⅱの時期にあたる。

第2節 平安時代～中世

E～Gトレンチの建物、ピット、溝、井戸、土坑、畦畔から出土の遺物を図化した。

1. 平安時代

この時代の遺構にはF地区の建物、F・G地区の溝、E・G地区の井戸などがあるが、井戸出土遺物を除くと、全体に遺物出土量は少ない。

(1) 建物

1) 建物F-5 (図59、写真図版37)

建物F-5は9Fトレンチ北西の10Fトレンチ北側寄りに位置する。建物F-5のいくつかのピットからは土師器細片と黒色土器A、須恵器Ⅳ～Ⅴ型式の高台、カキ目のついた体部破片、製塩土器かと思われる細片などが出土している。

建物F-5北西隅ピット706からは奈良から平安時代と思われる遺物が少量出土している。38は黒色土器Aの碗である。器壁は厚く、高台が若干細めである。調整は表面が摩耗しており不明である。

また、建物F-5の南東角にあたる土坑F-7からは底部穿孔された土師質のミニチュア無頸壺が1点(39)出土している。

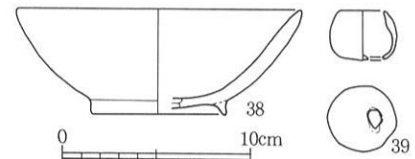


図59 建物F-5出土土器

(2) ピット

E・F・Gトレンチのピットからは平安時代の遺物が少量出土している。

1) ピットE-401 (図60)

ピットE-401は土坑45の西側延長部分のすぐ南側に位置する。

ここからは黒色土器AとBの碗が各1点、土師器の皿および羽釜の細片、瓦破片が少量出土している。

40、41は同一個体と考えられる黒色土器Bの碗である。2点ともに表面

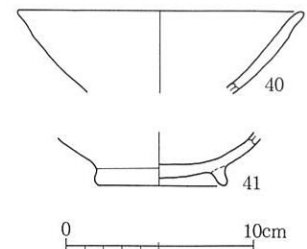


図60 ピットE-401出土土器

の残存状態が悪く、調整は不明である。

2) ピットF-380 (図61)

ここからは土師器耳皿1点、黒色土器Bかと思われる破片1点、平底に糸切痕を留める須恵器破片1点が出土している。42は土師器の杯口縁部の両端をつまんで耳皿としている。平安京I新の時期のもの

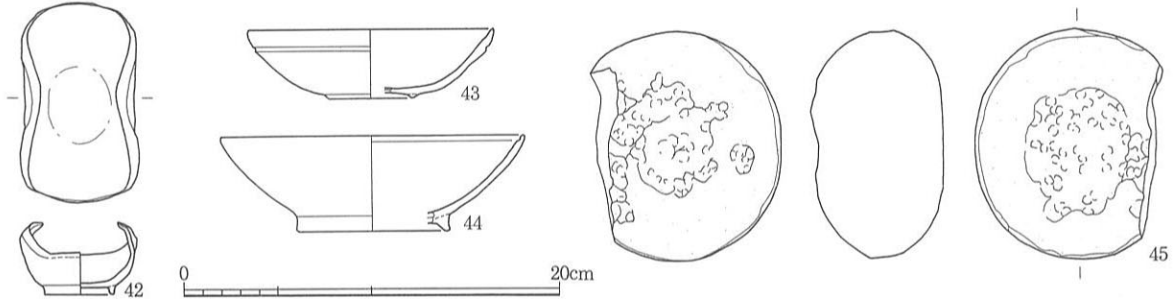


図61 ピットF-380・707出土遺物

か。表面は剝落しており不明であるが、内面は黒味を帯び、外面高台部分のごく一部黒みを帯び、高台付近が赤みを帯びる。口径10.4×推定5.8cm、高台径は4.3×3.7cmである。

3) ピットF-707 (図61、写真図版32)

ピットF-707は10Fトレンチ中央に位置し、直径29cmの円形状を呈する。ここからは土師器の杯ないし碗の破片が4点、黒色土器Aの碗1点、瓦器碗1点、石鏃1点、砂岩製の凹み石1点が出土している。この他、白磁の体部細片1点がみられる。43は瓦器碗で、外内面ともに摩耗しており、調整は不明である。全体に粗雑な作りで、底部の高台は紐状に細い。瓦器碗は混入かと思われる。44は黒色土器Aの碗である。口縁端部内面に沈線が1条巡り、高台は大きめで若干高い。瓦器出現前の段階のものか。45の砂岩製の凹み石は直径12cm、厚さ7cmを測り、一部が火を受けて欠損し、少し赤く変色しているようである。片面に煤が付着している。両面中央および側縁の一部には叩打痕、側縁には幅2.5cmの一部平坦な面をなす研磨の痕跡がみられる。

4) ピットG-309 (図62)

11Gトレンチ中央部の建物G-1西側より検出された。ピットG-309と溝G-31との切り合い関係は不明である。ピットG-309からは須恵器の長頸壺上半部と体部破片が各1点出土している。

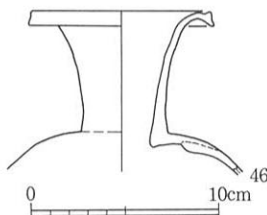


図62 ピットG-309
出土土器

46は陶器Ⅳ-4段階のものであろう。頸部の接合は、体部上面を粘土で塞いだ後、穿孔して頸部を貼り合わせている痕跡がある。頸部は僅かに外反して立ち上がり、口縁部で水平に屈曲して開き、端部は少し下がりぎみで、上部へ拡張している。

(3) 溝

E、Fトレンチの溝から奈良時代から平安時代はじめにかけての土器が出土している。

1) 溝E-9 (図63)

土師器、須恵器が少量出土している。須恵器は陶器Ⅳ～Ⅴの時期にあたると思われる杯、高台の破片が数点と大甕の破片1点がある。土師器では8～9世紀と思われる皿、杯が数点みられる。

47の須恵器大甕は外面に平行叩き、内面に同心円文叩きを有する。口縁部は外反し、端部で下方に拡張している。口径52.2cmの大甕である。平安京Ⅱの時期にあたるものか。

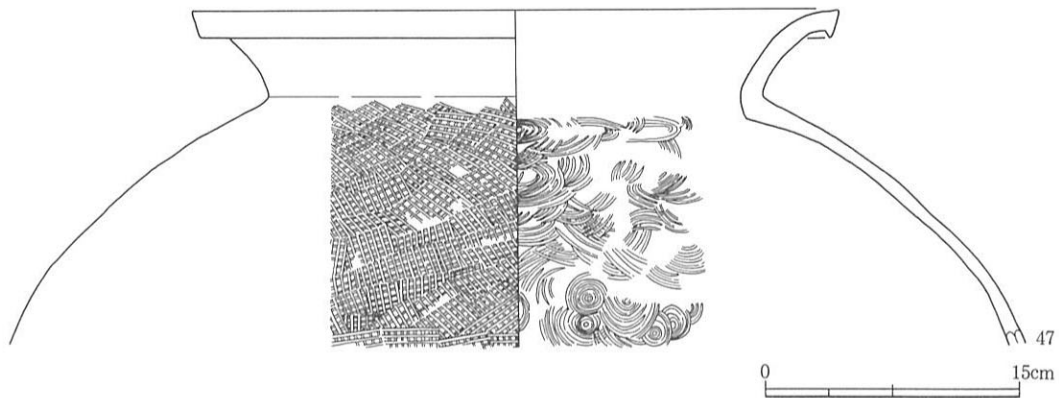


図63 溝E-9出土土器

2) 溝F-38 (図64)

溝F-38は平安時代前期の屋敷地の南辺を限る幅1~3mの溝で、ほぼ東西に走り、途中一部とぎれている部分は屋敷地の入り口にあると概要報告書で考えられている。溝F-38からは平城宮II~VI、平安京I中の土師器破片および陶器IV-2~4の須恵器破片が比較的まとまって出土している。土師器では杯、皿、甕が、須恵器では杯、杯蓋、鉄鉢、長頸壺がみられる。また、黒色土器Aの杯破片が一点出土している。

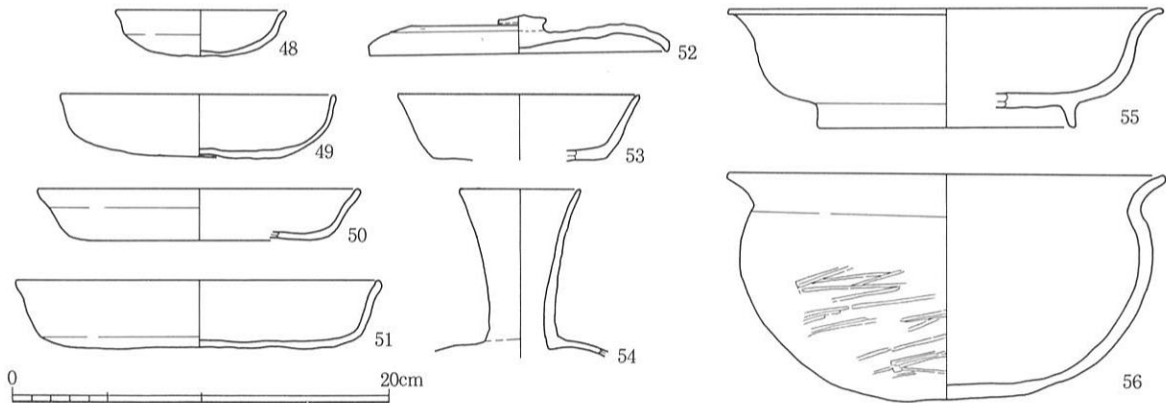


図64 溝F-38出土土器

48は土師器杯であり、口縁部に煤が付着している。49~51は土師器皿である。50、51の口縁部はやや外反して端部内面が肥厚し、その直下は沈線状に窪む。56は土師器の鉢で、甕の形態と類似するが、器高が低く、口径が体部最大径よりも僅かに大きい。口頸部はくの字状にゆるく外反し口縁端部は角張る。体部には黒斑がみられる。

52は須恵器杯蓋で、中央が僅かに突出した偏平なつまみに、やや器高は低めである。口縁部は端部でほぼ垂直におりる。外面には灰を被り、つまみの回りには直径4.3cmの重ね焼き時の溶着痕を留める。53は須恵器杯である。54は須恵器の長頸壺口縁部で、外面および内面の一部に灰を被っている。口縁部は体部の上へ口縁部を乗せて接合しており、口縁部内面の付け根に接合痕を微妙に留める。55は須恵器の盤で、体部は底部から丸みを帯びてほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で外方へ大きく開く。

3) 溝F-102 (図65、写真図版51)

溝F-102はトレンチの中央部よりもやや北側に位置し、ほぼ東西方向に走

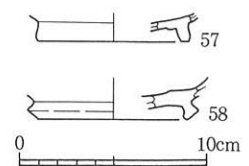


図65 溝F-102
出土土器

る幅0.3~0.4mの溝である。ここからは陶邑II型式の蓋杯、無蓋高杯かと思われる破片の他、土師質の埴輪細片、奈良から平安時代と思われる土師器の杯破片、羽釜の罌破片などが出土している。57は瀬戸灰釉陶器山茶碗の高台破片である。外面に極わずかに灰釉をかぶっている。9世紀後半代のものか。58は須恵器の壺高台破片であり、陶邑III-3~4段階にあたるものか。

4) 大溝G-1 (図66・67、写真図版53)

上層、中層、下層、最下層より遺物が出土している。下層、最下層からは古墳時代の遺物が少量と、飛鳥~奈良時代の須恵器、土師器が多くと、平安時代の遺物が少量、瓦が少し出土している。時期は須恵器では陶邑IV~V型式のものが、土師器では飛鳥から平城宮I~V、平安京I~IIの時期にあたると思われるものがみられ、平城宮II~IIIがやや多い。

内訳は古墳時代では須恵器器台脚細片1点、飛鳥時代では須恵器では杯、杯蓋、皿、土師器では杯、甕、羽釜などが少量出土している。奈良から平安時代では須恵器は杯、杯蓋、壺、平瓶、土師器では杯、碗、鉢、甕、羽釜などが出土しており、甕口縁部の破片点数が最も多い。

59~65、72、73は須恵器、66~71、74~87は土師器である。59は陶邑II-4~5段階の杯蓋、60は飛鳥IIの杯身、61は平安京I~IIの杯、63と65は平城宮Iと思われる皿と平瓶、64は飛鳥IVと思われる短頸壺である。66は平城宮II~IIIと思われる高杯脚部で、脚柱は下から上方向へ11~12の面とりがなされ、脚裾端部は下方へ僅かにつまみ出している。67は飛鳥I~IIと思われる土師器杯で、底部外面には木の葉の圧痕が残る。全体に粗雑な作りで、外面の底部と体部の境には粘土接合痕を留める。67の底部外面には黒斑がみられる。68は平城宮II~IIIの壺かと思われるものである。口縁部から肩にかけて黒斑がみられる。69は平城宮II~IIIの土師器皿で、内底面中央にはラセン文、体部から口縁部にかけては斜め方向にのびる放射状の暗文が施されている。底部外面中央には2文字の墨書がみられ、「召」と記されており、下の文字は不明である。70、71は平城宮III~IVの杯で、口縁部内面には暗文が残る。70は底部内面にもラセン状か不明の暗文が見られる。底部外面には不定方向のへら削りが施されている。71は底部外面周縁に横方向のへら削りが施されている。72は陶邑IV-2~3段階の須恵器広口壺、15は陶邑III-1~2段階かと思われる須恵器の甕である。73は外面および口縁の一部に自然釉を被っている。74~

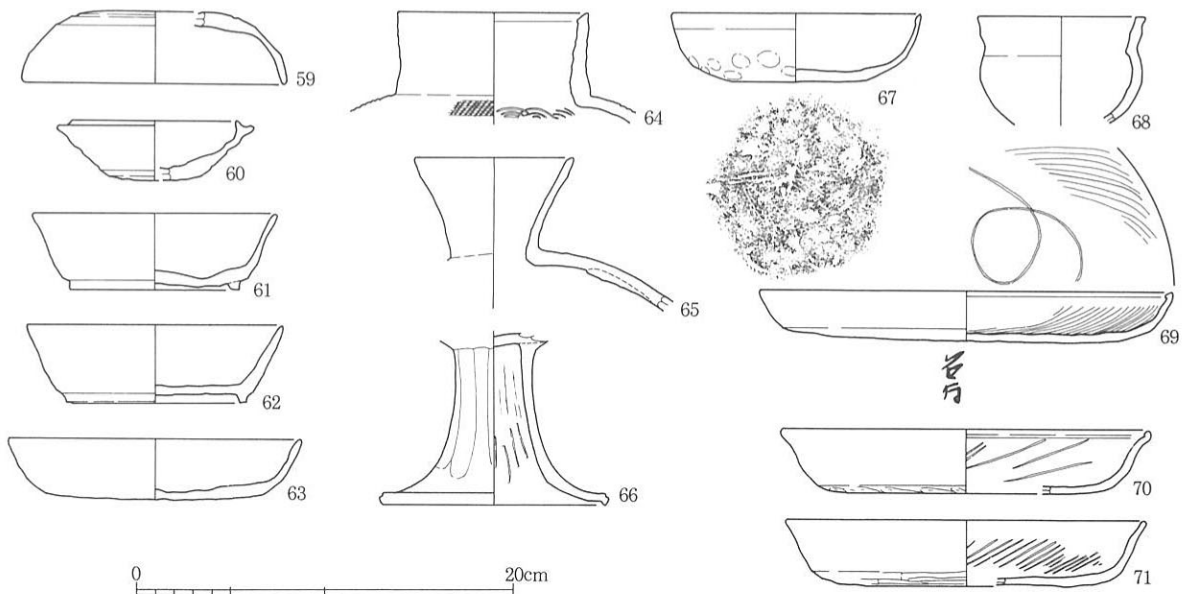


図66 大溝G-1下層・最下層出土土器

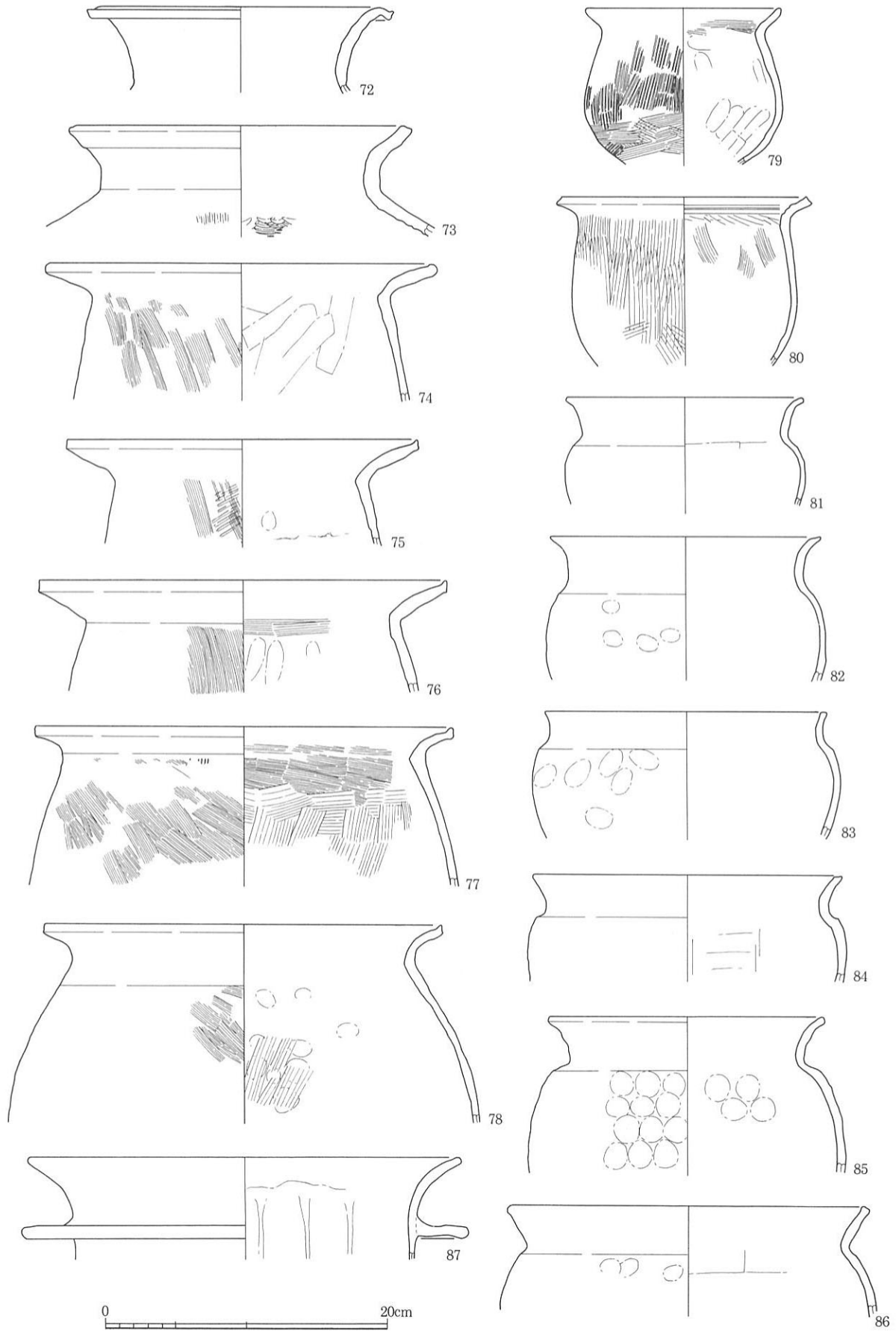


图67 大溝G-1下層・最下層出土土器

86は土師器甕である。74～80、86は頸部がくの字状に屈曲しており、口縁端部を極僅かに上方へつまみあげている。調整は外面を斜めないし縦方向のハケ目、内面はハケ目またはハケ目のちナデや削りを施したものが多し。86は外内ともにナデである。74～78は飛鳥Ⅳ～Ⅴか。75、77、78は外面に黒斑がみられる。86は外内面ともにナデ調整である。79、80、86は平城宮Ⅰ～Ⅱくらいの時期のものか。81、82は体部が丸みをもち、頸部で屈曲したあと口縁部が直立ないし斜め上方へのび、口縁端部でさらに外方へ開く形態で、調整は外内ともにナデである。82の体部には指頭圧痕が残る。81、82は平城宮Ⅰ～Ⅱの時期か。83～85は頸部と体部との境に稜があり、内外面の調整がナデのものである。83は短い直立ぎみの口縁部がついており、平安京Ⅰ中の時期にあたるものか。84、85は口縁部が緩やかに外反しており、平城宮Ⅳの時期にあたるものか。79～85の甕には煤の痕跡が認められた。87は羽釜で、胎土中に長石、角閃石を多量に含んでいる。口縁部が比較的長く外湾し、罫が水平に大きく張り付けられている。平城宮Ⅰ～Ⅱの時期にあたると思われる。

(4) 井戸

E・Fトレンチの井戸から平安時代の土器が出土している。

1) 井戸E-15 (図68・69、写真図版35・36・53・64)

井戸E-15はトレンチの中央付近、土坑45の北に位置し、径約2mの井戸である。ここからは、やや多くの土師器と少量の黒色土器Aや須恵器、平瓦片2点、鞆羽口1点が出土している。内訳は土師器では甕49点、杯7点、皿2点、鉢1点、羽釜の罫3点が、須恵器では杯蓋2点、平瓶1点、壺高台3点、瓶子2点の破片などがみられる。そのほか特筆すべきものとして、結晶片岩を含んだ製塩土器、墨書土器1点、木簡1点がある。土師器甕では中形が一番多く、ついで大形、小形である。これらのうち、煤の付着したものは小形では12点中全点、中形では24点中約半分、大形では13点中約1/3に認められた。

90は高台付きの土師器杯である。底部からはほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる口縁の端部は丸く収めている。外面は横方向にヘラ磨きが施されており、おそらく6分割の磨きであろう。内面は見込みと口縁部にラセン状の、体部には放射状ないし斜め方向の暗文が施されており、非常に丁寧な作りである。底部外面には墨書で「畠」と記されている。

91～93は土師器杯で、緩やかに斜め上方に立ち上がる口縁端部は丸くおさめている。外面には指押さえの痕跡を留める。

94の土師器皿は口縁端部を丸くおさめたものである。外内面ともになでにより調整している。外内面と断面の割れ破損面には煤の付着がみられる。95は口縁部が少し屈曲し、端部内面に沈線が1条巡る土師器の皿である。底部外面は少しナデられているが、指頭圧痕がみられる。

96の土師器は口縁部が欠損しており、器種は不明である。器表面の残存状態が悪く、詳細は不明であるが、外内面を磨いていたようである。高台部付近に黒斑がみられる。

97～99は土師器の鉢である。形態的には須恵器の鉄鉢に類似するが、97・98は片口付きである。調整は指押さえ、なでを施している。98は外面にヘラ削りの痕跡がみられ、97、98ともに体部に粘土紐接合痕が残る。

100は底部が欠損しているが、黒色土器Bの杯と思われるものである。口縁部内面は横ナデが強く、少し凹んでおり、口縁端部内面は一部に沈線が巡る。調整は外内面共に横方向に密なヘラ磨きが施されているが、口縁部寄りの体部外面には粘土の継ぎ目を、底部寄りの外面には部分的にヘラ削りを留める。粘土接合痕は内傾している。

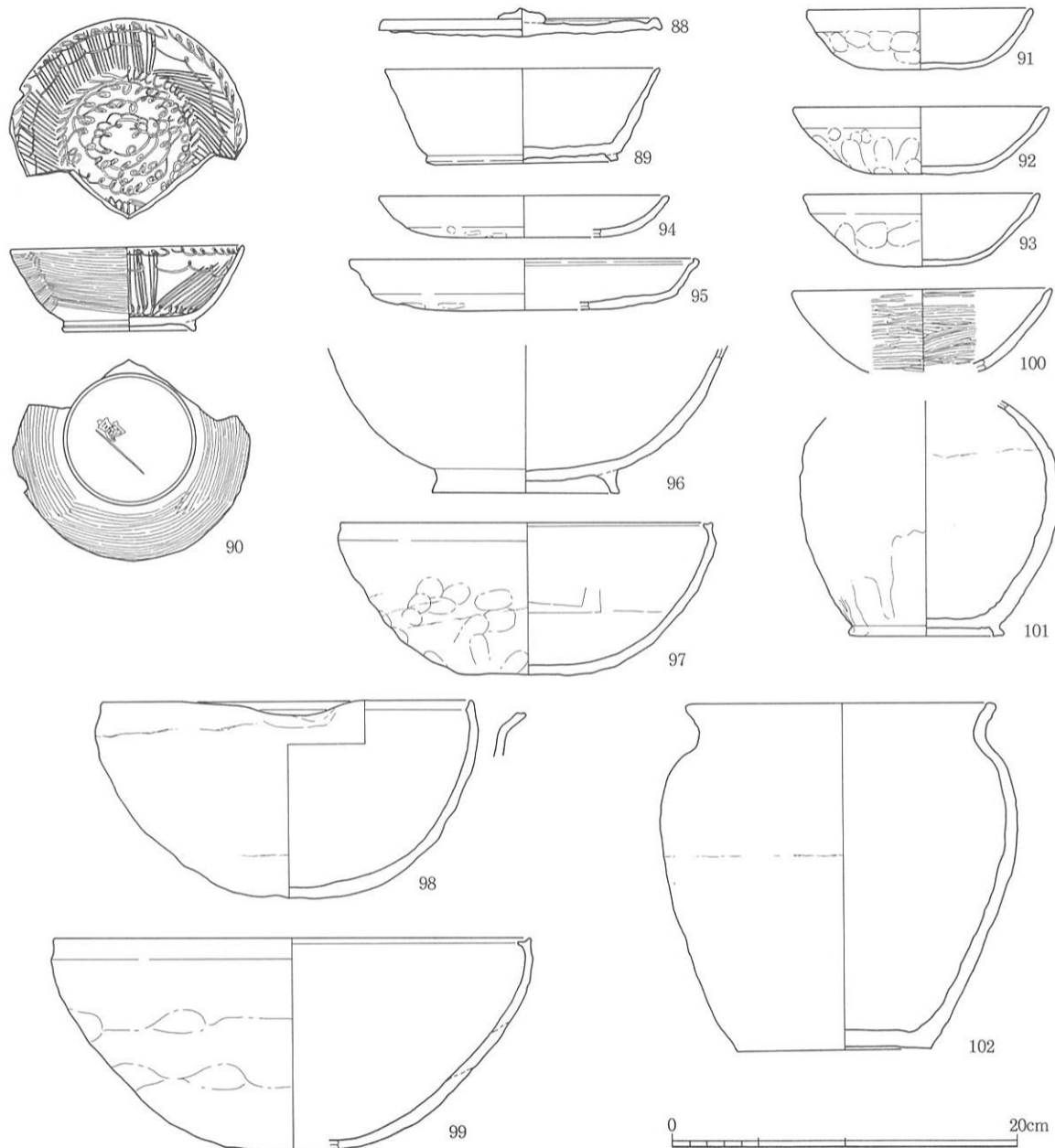


図68 井戸E-15出土土器

88、89、102は須恵器である。88は天井部と口縁部がほぼ水平で、口縁端部で屈曲する扁平な杯蓋である。89は高台付き杯で、高台が底部端に貼りつけられている。102は口縁部が短く外反する、やや深めの鉢である。体部には粘土紐の継ぎ目が残る。須恵器は3点ともに、陶邑Ⅳ-4段階にあたる。

101は高台付き壺の体部破片で、外面には灰釉がみられ、胎土が焼き縮まっていることから灰釉陶器か。時期は須恵器と同じ頃のものと思われる。

図69-103~124は土師器甕である。口径20cm前後の大形と口径15cm前後の中形、口径12cm前後の小形がみられる。口縁部は短く外反し、端部は平坦面をなすものが大形ないし中形に多い。小形は口縁端部を丸くおさめたものが多い。大小ともに、大きさに関係無く、頸部と体部の境に稜をもつものが特徴的である。体部には指頭圧痕を多く留める。体部内面には板状のものでなでたような痕跡を留めるものが見られる。121は底部外面にヘラ削りが施されている。123と124は口縁端部を内方ないし外内方に僅か

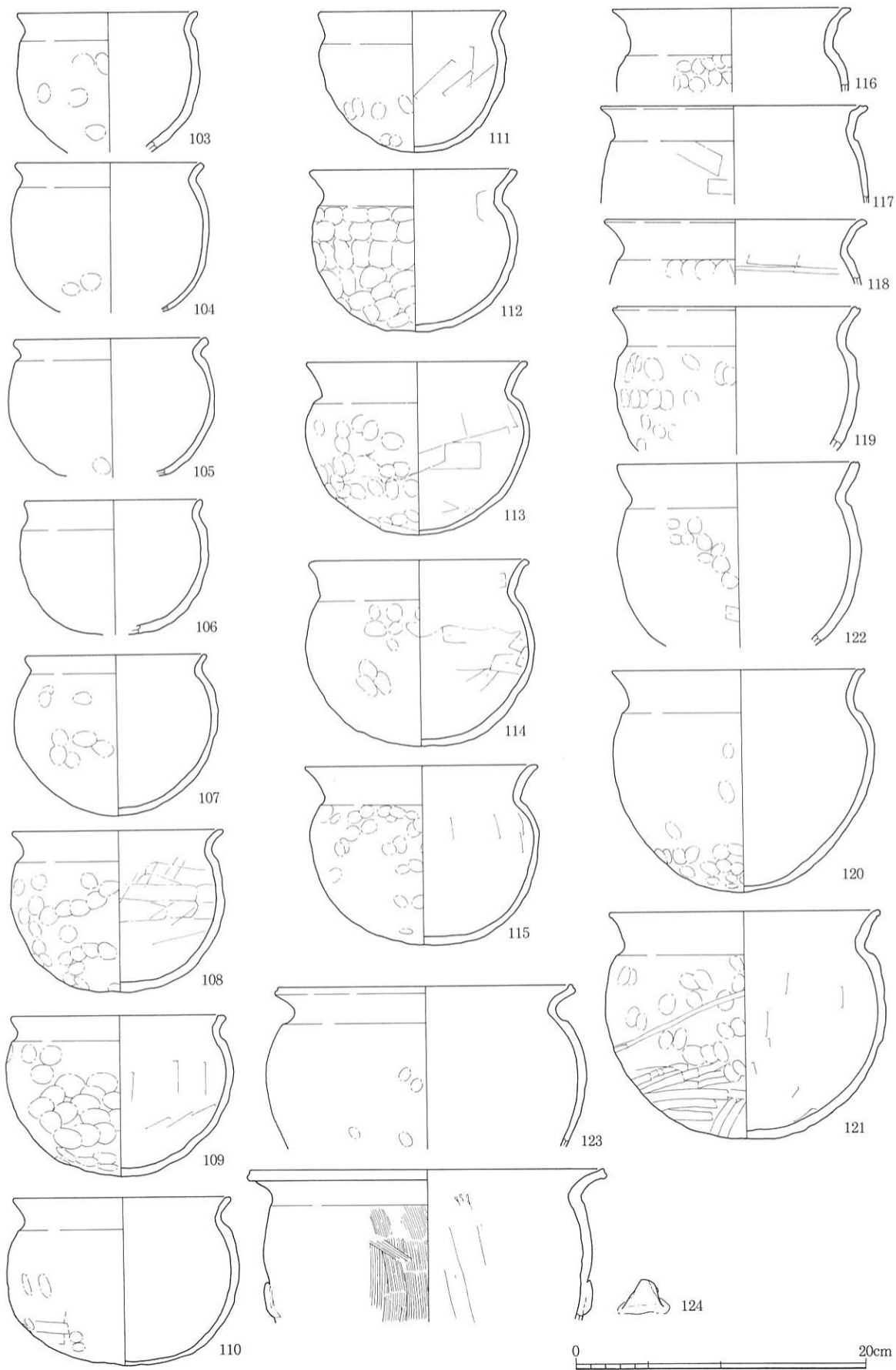


图69 井戸 E-15出土土器

に肥厚させたものである。123は体部外面に指頭圧痕が残り、内面はなでられている。124は把手が体部に貼りつけられており、調整は体部外面を縦方向のハケ目、内面は下から上へへら削りが施されている。9 F トレンチ井戸F-6 出土の「東寺」と墨書した甕と類似している。

土師器は9～10世紀の時期に、須恵器は陶邑Ⅳ～Ⅴ型式の時期にあたると思われるものである。

木簡（写真図版64-768）は残存長32.1cm、残存幅1.2cmで、上下両側辺とも欠損している。削りなおして数回使用したと考えられ、「■ 河内国丹比郡□□□道道道道」と記され、「道」以下は別筆で、削り直して手習に使用したものであろうと、当遺跡第2次調査概要報告書に記述されている。

2) 井戸F-6 (図70、写真図版37・53)

井戸F-6はトレンチ北側西端より検出されたものである。遺物は須恵器、土師器、黒色土器A、瓦の細片、根石の破片かと思われるものなどが出土している。須恵器では陶邑Ⅳ～Ⅴ型式の杯蓋、鉄鉢、皿？、壺などが、口縁部合計6点ほどみられる。129は須恵器の瓶子破片で、体部から口縁部にかけてロクロでミズビキ成形しており、平安京Ⅰ～Ⅱの時期にあたる。土師器では皿(125)、杯(126)、甕(130～133)の種類がみられ、口縁部合計48点中、甕が26点と出土量が最も多い。125の皿は平底に近い底部から鈍角に屈曲して斜め上外方に大きく開く口縁部よりなる。外面は残存状況が悪く詳細は不明である。内面調整は横なでが施されている。口縁の一部が黒色を呈する。平安京Ⅰの時期のものか。126の杯は高台のついたもので、外面は指押さえ、なで、内面はなで調整を施している。平安京Ⅰ～Ⅱの時期にあたるものか。黒色土器Aの破片は2点(127、128)みられる。127の碗は口縁端部内面に細い沈線文が1条引かれ、内面には横方向に密な磨きが施されている。外面調整はなでか、残存状態が悪く不明瞭である。128は口径の大きい盤かと思われる器形で、体部から口縁部にかけて大きく開く口縁

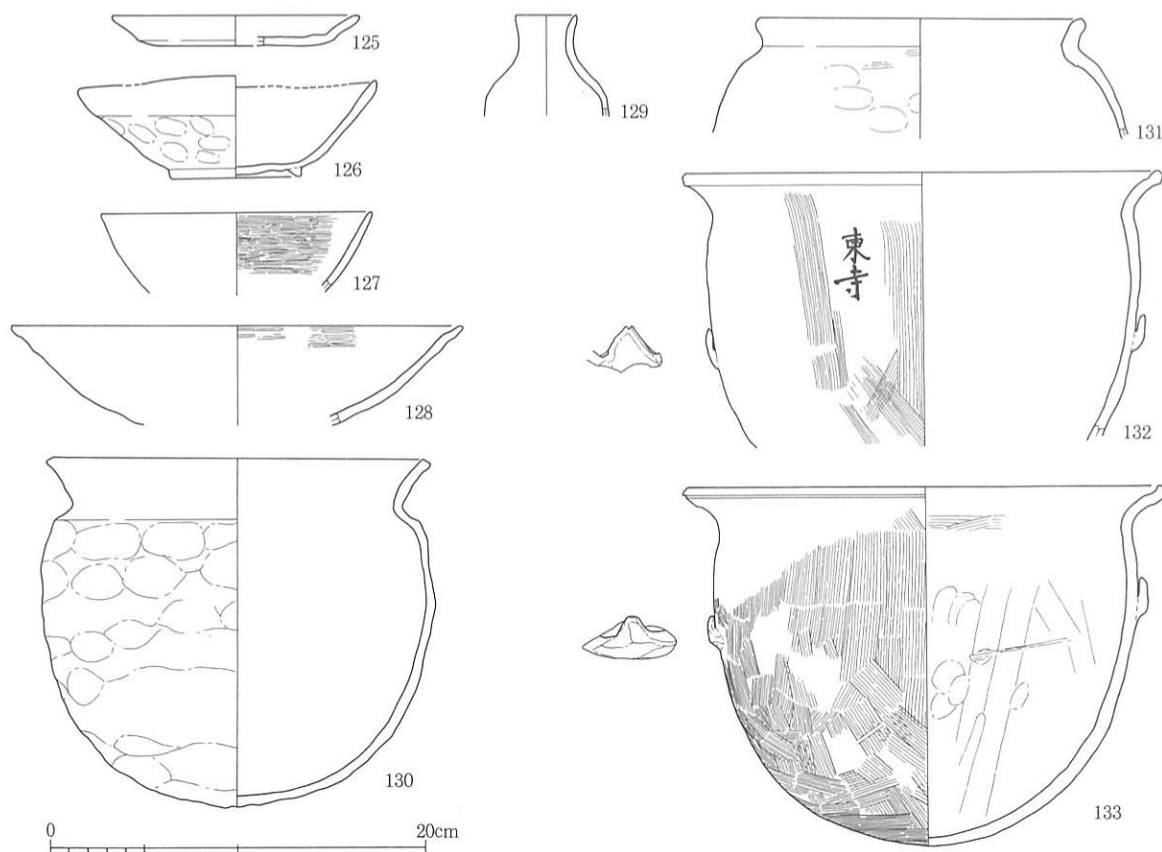


図70 井戸F-6 出土土器

は端部寄りですらに緩く開く。外面は横なで、内面は横方向に密にヘラ磨きが施されている。130、131の甕は体部外面を指押さえ、なで、内面をなでて調整している。130の甕は外面全体に煤が付着している。132、133の甕は体部外面をハケ目、内面を下から上へヘラ削り、なでを施している。そのほか、製塩土器の細片2、鉄滓細片1、鉄釘1点もみられた。また、瓦器碗の細片が1点認められたが、混入と思われる。この井戸出土遺物の時期は奈良から平安時代のうち、平安京I（古）～IIの時期にあたると思われる。この井戸6出土遺物で特筆すべきものは、土師器の把手付き甕体部に墨書で「東寺」と書かれたものが3点みられた事である（写真図版37-132、53-329・748）。いずれも同一の形をなしており、口縁部は外反して広がり、端部で内面に僅かに肥厚する。体部中央には偏平な平面三角形の把手を上方に接するばかりに貼りつけている。字体は東の書き方が東になっているものが2点あり（写真図版53-329・748）、若干異なるので、同一人物の筆によるものではないと思われる。132のみが最も残存状態が良好であり、図化している。

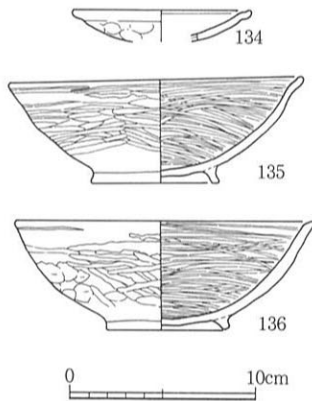


図71 井戸G-4出土土器

3) 井戸G-4 (図71、写真図版37)

井戸G-4からは須恵器、土師器、黒色土器が少々と、焼土塊がごく僅かに出土している。須恵器では陶邑II～IVの時期にあたると思われる杯、杯蓋、器台、壺、甕などの破片が少量みられる。土師器では皿、杯、碗高台、甕、製塩土器、羽釜の体部破片かと思われる胎土中に角閃石を含むものなどが少量ある。黒色土器ではAの高台破片が1点、黒色土器B碗が3点みられる。134の土師器皿は口縁部がての字状に近い形状をなし、口縁端部内面には沈線が1条巡る。胎土はきめ細かく、灰白色を呈する。外面調整は指押さえ後なでである。135、136の黒色土器Bの碗

は、ほぼ完形に近い残存状態で、一見、瓦器と見間違える形状をなしている。器壁はやや厚手である。135の口縁部はやや外反し、端部内面に浅い凹みが3/4周巡る。体部内面の磨きはおよそ3分割で密に施し、見込みは一方向にやや密に、それと直交する方向には粗く施した後、圏線状に数回磨いている。口縁部内面は横方向の磨きである。外面は体部を3分割で磨き、口縁部は横方向の磨きである。体部の磨きの下面にはヘラ削りの痕跡が認められる。高台内面はなでており、高台の接地面にはスサ状の圧痕が残る。136は外内面の一部が炭素の吸着が悪く、土師器の色をなしている。口縁部は若干歪んでいる。口縁端部内面には浅い凹みが約3/4周巡る。口縁部から体部にかけて内面の磨きは密に横方向に、見込みは一方向の後、直交する方向に施されており、体部を磨いた後、見込み部分の磨きが施されているようである。外面は横方向に数回にわけて磨いているようだが、まとまりが不明瞭である。磨きの下面には右から左方向へのヘラ削りの痕跡が多く残る。高台内面の調整は指押さえなでである。この黒色土器Bの碗は2点ともに、森編年の畿内系V類のIX期にあたるものか。

(5) 土坑

E・Gトレンチの土坑から平安時代初め頃の遺物が出土しているのを図化した。

1) 土坑F-54 (図72)

土坑F-54はF地区南側寄りを東西に走る道状遺構のすぐ北側のトレンチ西端に位置する楕円形状の土坑である。ここからは土師器甕頸部破片1点、黒色土器が不明の細片1点、平城宮Vから平安京Iの時期にあたる須恵器杯蓋が1点出土している(139)。

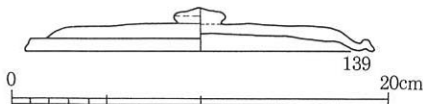


図72 土坑F-54出土土器

2) 土坑G-43 (図73、写真図版37)

土坑G-43は建物1北側のピット密集地点の東側に位置する。ここからは須恵器、土師器、黒色土器Aなどの破片と、鞆羽口、焼土塊、炭細片が少量出土している。

140は土師器の小形甕である。やや器高は低く、頸部でくの字状に屈曲し口縁部にいたる。口縁端部は薄く丸くおさめられている。調整は外内ともになでか。9世紀のものと思われる。

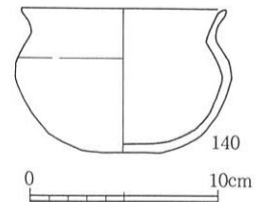


図73 土坑G-43
出土土器

(6) 畦畔

1) 畦畔G-1 (図74)

12GトレンチH17e2地区の畦畔G-1上からは須恵器の長頸壺が体部を半分欠損した状態で1点だけ出土している。

141は丸い体部に直立ぎみに立ち上がる頸部は口縁部で水平に開き、端部で上方へ拡張する。高台は底部と体部の境に貼り付けられている。頸部と体部の継ぎ目は直角に近い。体部下半にはへら削りが施されている。外面には一部、灰を被っている。平城宮Vから平安京Iの時期に属するものであろう。

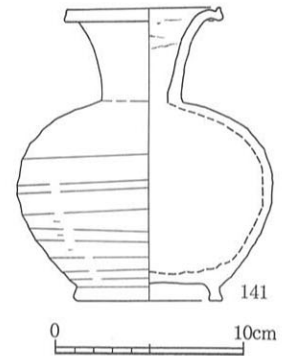


図74 畦畔G-1出土土器

2. 平安時代末～南北朝

ここでは瓦器碗を共伴する遺構出土遺物を対象とした。瓦器碗Ⅳ期には瓦質土器を共伴している遺構がいくつか認められ、それらをここで掲載した。しかし、瓦質土器のみ出土の場合などは判断に窮し、類似した形態が瓦器碗と共伴している例を参考に、また、菅原編年の羽釜で14世紀代に属する形態に類似したものを、この時期に組み込んでいる。B～E・G地区の各種遺構から出土した遺物を図化した。

(1) 建物

この時代に該当する建物はB・D・Eトレンチにおいて検出されている。しかし、建物ピット出土遺物には残存状況の不良なものが多く、図化できたのは極一部に過ぎない。それらを以下に記す。

1) 建物B-1 ピットB-133、317 (図75)

ここからは土師器の皿、羽釜河内B1c、瓦器の皿、碗、根石か不明の石などが出土しており、このなかで瓦器碗、皿を図化している。142、144がピットB-133出土、143がピットB-317出土である。142～144の瓦器碗、皿ともに見込みには格子状の暗文が施されている。瓦器碗の高台の特徴からⅡ-1～2期のものか。このほか、瓦器碗高台破片でⅠ-3からⅡ-2～3期と思われるものがある。142の瓦器皿の暗文は施文順序が特異で、網代を編んだような感じに一部施紋されている。見込みには通常、平行線を一定方向に描いたのち、それと直交する平行線を描いて格子状をなしており、施文の順序に規則性がみられるが、142のような例は珍しい。

2) 建物B-1・4 ピットB-118、191 (図75)

これらは建物B-1とB-4で隣り合せに位置し、どの建物に付随するピットか不明のものである。ここからは土師器皿および瓦器碗が出土している。145の土師器皿は外面指押さえのちなでである。146の瓦器碗は見込みには格子状かと思われる暗文がみられる。高台の断面は三角形形状である。Ⅲ-2～3段階のものか。

3) 建物B-4 ピットB-64、134 (図75)

ここからは瓦器皿、瓦器碗が出土している。149は見込みに格子状の暗文、148は見込みに平行暗文を施した瓦器皿である。147の瓦器碗は見込みに平行の暗文がみられ、高台断面は三角形状である。Ⅲ-1～2期のものか。このほか、建物B-4のピットからは土師器皿、瓦器のⅠ-3からⅢ-2～3期までのもの、

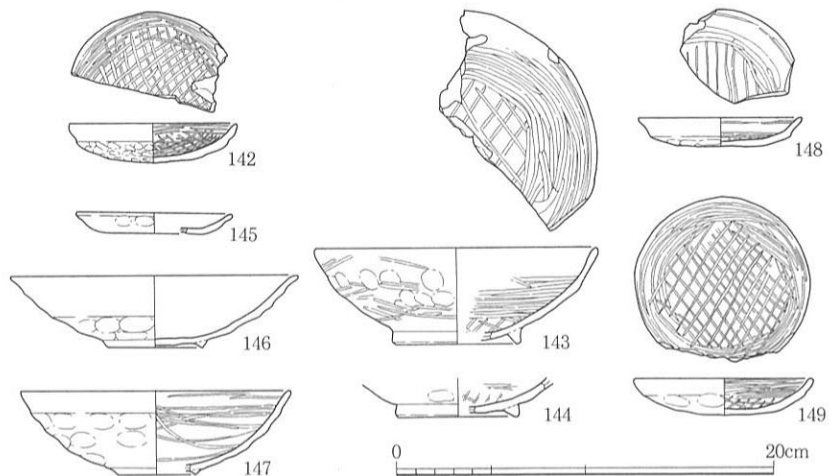


図75 建物B-1・4出土土器

須恵器甕細片、中国白磁碗と皿の細片、鉄滓、焼土塊細片、根石か不明の石などが出土している。瓦器片のなかには火を受けたものも1片だがみられる。

4) 建物B-3 ピットB-41、79、80 (図76)

ここからは土師器皿、瓦器高台付き皿、瓦器碗などが出土している。151はピットB-80出土の土師器皿である。152はピットB-79出土の高台付瓦器皿で、高台部分が欠損している。内面には残存状況が悪く不明瞭だが、格子状の暗文が施されている。153はピットB-41出土の瓦器碗である。見込みには格子暗文、口縁部外面には横方向のヘラ磨きが施されている。Ⅱ-2～3期のものか。このほか、建物B-3のピットからは須恵器の練鉢底部破片、渥美甕口縁部破片、根石などが出土しており、ピットB-35出土の渥美甕は井戸B-2出土破片と接合した。

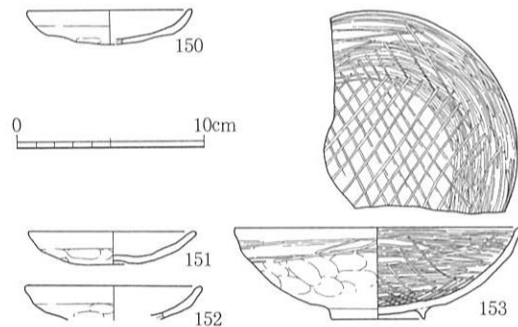


図76 建物B-3・6出土土器

5) 建物B-6 ピットB-9 (図76)

ここからは土師器皿1点、瓦器碗細片2点、鉄製角釘1点が出土しており、土師器皿を図化した(150)。瓦器碗は口縁部細片だが、Ⅲ-1～2期のものかと思われるものである。

6) 建物D-3 ピットD-61、8、40、131 (図77)

ここからは中世遺物が少量出土している。ピットD-61からは土師質羽釜、土師器皿、瓦器碗、瓦器皿、焼土塊などが出土しており、瓦器はⅣ-1～2期の高台細片が2点ある。154の土師器皿は平底で口縁部が短く斜め上外方に開く。

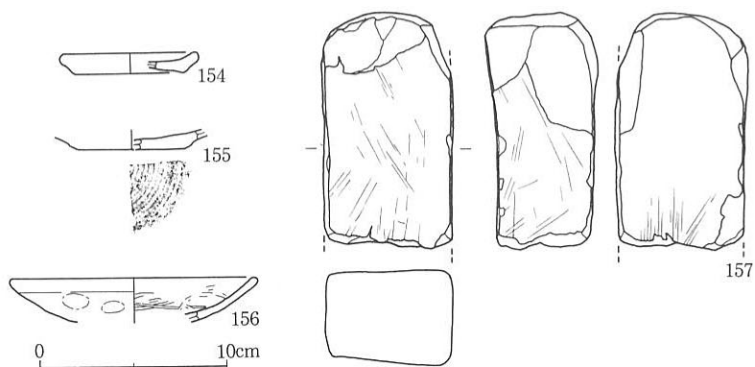


図77 建物D-3出土遺物

ピットD-8からは土師器皿、瓦器碗の細片が出土しており、瓦

器碗はⅡ-3～Ⅲ-1期と思われる高台細片がみられる。155の土師器皿は口縁部が欠損しているが、底部外面に糸切り痕を留める。この糸切り痕を有する土師器皿は、観音寺遺跡主要遺構出土遺物の中では、この1点以外に井戸D-4に4点認められたが、出土量は極めて少ない。

ピットD-40からは瓦器、土師器、須恵器、瓦質土器、焼土塊、炭の細片が少量出土している。瓦器碗はⅣ-1～2期の高台が1点みられる。156の瓦器碗は器高が浅く、内面にまばらな渦巻状暗文がみられるが、Ⅳ-3～4期のものか。外面には重ね焼の痕跡を留める。

ピットD-131からは土師器細片、Ⅲ-1～2?とⅣ-1～2期の瓦器高台細片数点と、須恵器甕体部破片1、扁平な根石破片かと思われるもの、砥石1点が出土している。157の砥石は隣り合う2面が滑らかで、そのうちの1面は中央の窪んだ滑らかな研ぎ面をなす。長軸方向の1端は自然面、もう1端は割れ面の突出部が摩耗したものか、滑らかである。石英安山岩製か。

(2) 柵・ピット

1) ピットB-90 (図78)

ここからは土師器皿(158)と高台付瓦器皿(159)が出土している。高台付き瓦器皿の形態は丸みを帯びた底部から口縁部で斜め上方へ大きく開く。見込みは格子状かと思われる暗文がみられる。これら以外に、ピットB-90出土遺物には中国白磁の体部細片が1点、平瓦細片1点、Ⅲ-1～2期の瓦器碗2片がある。

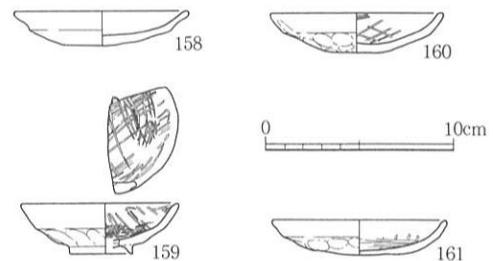


図78 B地区ピット出土土器

2) 柵B-1 ピットB-103 (図78)

ここからは奈良時代の須恵器破片1、土師器皿、瓦器碗、瓦器皿、焼土塊細片1などが少量出土している。時期は瓦器碗高台の細片でⅠ-3期と思われるものが1点ある。瓦器碗口縁部破片では細片のため不明であるが、Ⅱ～Ⅲ期のものが数片ある。160は底部に丸みをもつやや深めの瓦器皿で、見込みに格子暗文がみられる。

3) ピットB-192 (図78)

ここからは土師器皿1点、瓦器碗細片3点、瓦器皿1点が出土している。瓦器碗はⅡ-1～2期と思われる高台細片が1点ある。161の瓦器皿は底部が丸く、やや浅めで、見込みには格子暗文が施されている。

4) 土器埋納ピットD-1～3 (図79、写真図版41)

土器埋納ピットは3箇所に見られ、土器埋納ピットD-1からは土師器皿が3点(162～164)出土している。いずれも丸い底から緩やかに斜め上方にのびる口縁は端部にむけて厚くなっている。14世紀代のものか。165は土器埋納ピットD-2出土の土師器皿である。形態的な特徴は土器埋納ピットD-1と同じである。166は土器埋納ピットD-3出土の瓦器碗で、高台が退化して無くなっており、見込みの暗文も口縁からの圏線の続きのようなものがまばらに施されている。Ⅳ-3～4期のものか。

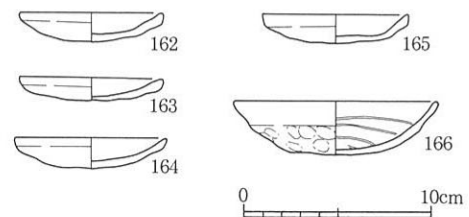


図79 土器埋納ピットD-1～3出土土器

5) ピットE-407・408他 (図80)

これらのピットはトレンチ南端西寄りに接して位置する。169はピットE-407出土の瓦器碗口縁部破

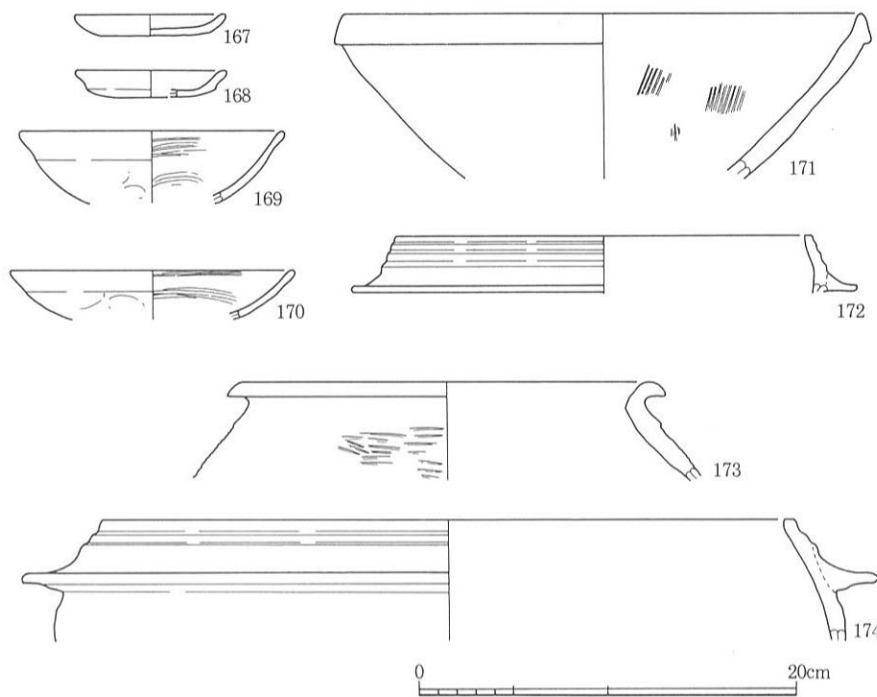


図80 E地区ピット、その他出土土器

片で、体部内面にはまばらな暗文の他、ハケの痕跡を留める。外面は体部が指押さえ、なで、口縁部がよこなでである。口縁の傾きから、III-1~2段階のものか。168はピットE-408出土の瓦器皿であるが、内面の暗文は不明、外面底部は指押さえ、口縁部は横なでである。167はピットE-407とE-408の間から出土の土師器皿である。外面は摩耗しており不明、内面はなでである。

6) ピットE-409 (図80)

ピットE-409はトレンチ南端に位置する。170の瓦器碗は口縁部破片で、体部に圈線を留めるが、口縁部の傾きがやや浅めであることから、III-3からIV-1段階のものと思われる。

7) ピットE-405付近・404・403 (図80)

ピットE-405付近からは瓦質插鉢が1点(171)出土している。口縁端は下部に僅かに拡張した形状をなす。表面は摩耗しているが、外面に方向不明のヘラ削りが施され、内面に卸し目がつけられている。

ピットE-404からは赤変した瓦質羽釜の細片が1点出土(172)している。器壁は薄く、やや内傾する口縁部外面に3条の凹線により段がつけられているが、表面は摩耗しており、詳細は不明である。菅原編年の河内D1aかb型か。

ピットE-403からは土師質羽釜体部破片、瓦質甕および羽釜の破片が各1点出土している。173は瓦質甕で、くの字状に屈曲した短い頸部に、僅かに下方へ折れ曲がる口縁部よりなる。体部外面には横方向のやや細かい叩きが、内面には斜め方向の細かいハケ目が施されている。174は瓦質羽釜で、内傾ぎみに立ち上がる口縁部外面には3条の凹線により段がつけられ、体部外面には横方向のヘラ削りが施されている。菅原編年の河内D1aかb型か。

8) ピットF-301 (図81)

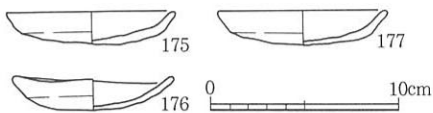


図81 ピットF-301出土土器

このピットは区画溝から少し南のトレンチ東端に位置する。ここからは口径9cm前後の土師器皿が約30点弱出土している。このうち煤の付着したものは3点みられる。175~177の土師器皿はやや平たい丸底からわずかに屈曲して斜め上外方に短く伸びて薄く終わる口縁部をもつ。土師器のみの出土なので時期は不確かであるが、13世紀頃のものか。

(3) 溝

1) 大溝B-1 (図82、写真図版38・45・61、カラー写真1)

ここからは奈良～平安時代の須恵器破片、黒色土器Bかと思われる破片が極少量みられるほか、中世の遺物や瓦破片が大量に出土している。このほか、弥生中期と思われる土器の底部中央を穿孔したものの1点、緑色片岩の細片、炭の細片、焼土塊の細片や鉄滓（写真図版61-758）も僅かにみられる。

中世遺物では、須恵器鉢、須恵器甕、瓦器碗、瓦器皿、瓦質羽釜、瓦質播鉢、瓦質甕、瓦質鍋または羽釜の脚、土師質羽釜、土師器皿、中国青磁碗、中国白磁碗、中国白磁四耳壺、常滑甕、渥美甕、滑石製石鍋、土師器のミニチュア竈などがある。瓦器碗はⅠ-2～3からⅣ-1～2期のものがみられ、その約2/3はⅡ-1～Ⅲ-1期にあたる。

178～181は土師器皿である。178～180は口径が小さく、いずれも手づくねで、178、179は浅黄橙色、180は灰白色を呈する。181は口径が13.3cmと大きく、薄手でやや深めの皿である。色調は黄橙色を呈する。

182～185は瓦器皿である。底部は丸みもち、見込みには格子状の暗文がみられる。底部外面は指押さえ、なでの調整が多いが、184のみは幅4mmのハケ状工具により、一定方向にへら削りが施されている。

186～190は瓦器碗である。186は内面にラセン状暗文が一面に施されている。187は見込みに格子状暗文が、188～190には平行の暗文が施されている。高台はいずれも若干小さめで、断面台形状または三角形状を呈する。Ⅱ-3～Ⅲ-2期の範囲に収まるものと思われる。

191～194は中国白磁碗である。191がⅡ5類、193がⅤ類、194がⅤ4c類である。194の白磁碗は釉が黄色味を帯びた灰白色を呈し、胎土が陶器質である。表面の釉に気泡がみられる。高台のみ無釉である。内面には櫛状のもので施文がされている。この他中国陶磁器には、カラー写真1に掲載の白磁碗Ⅴ4a類（656）、廈門碗窯系白磁碗Ⅳ2類（657）、白磁四耳壺小Ⅲ2類（658）、龍泉窯系青磁劃花文碗Ⅰ2a類（659）、龍泉窯系青磁碗（660）などがある。

195、196は須恵器練鉢、197は須恵器甕である。195の口縁端部には自然釉が掛かっている。196の口縁端部から下へ約2cmの所に重ね焼の痕跡と思われる色調の変わり目がある。197の甕は頸部が短く僅かに外反して立ち上がり、口縁部で短く水平に近く開く。口縁端部内面はなでが強く、凹んでいる。体部外面には綾杉状にやや狭い平行の叩きが施されている。

198～203は羽釜である。198、199が瓦質、200～203が土師質である。198は直線的に内傾する口縁端部が平坦で、口縁部外面には段がついていない。鏝の断面は台形状を呈する。菅原編年の摂津E型にあたるものか。口縁部は外内ともになでであるが、鏝部下面は横方向にへら削りが施されている。199は丸みをもって内傾する口縁部に、断面台形状の鏝がついた、小形の羽釜である。菅原編年の河内Ja'型にあたると思われる。調整は表面が摩耗しており不明。

200～203は内傾する口縁の端部が僅かに外反するものである。外反の度合いが少々異なるが、河内B1d型の範疇に入るものか。200のみ胎土が異なり、砂粒をあまり多く含まず、灰白色を呈している。体部外面は横方向のへら削りが施されている。203の体部外面は斜め方向のへら削りである。これらの羽釜には鏝下面から下方にかけての外面に煤の付着がみられる。

204は土師質のミニチュア竈と思われるもので、直方体の上部を一段削り出し、上面に2ヵ所の半円球場の凹みをつけ、下面は削りにより凹ませている。2ヵ所の凹みは竈口か。

205は滑石製の石鍋である。ちょうど198の羽釜のような口縁から鏝にかけての形状をなす。口縁部は短く直線的で僅かに内傾し、鏝はやや薄手で断面台形状を呈する。外面には煤の付着がみられる。破損

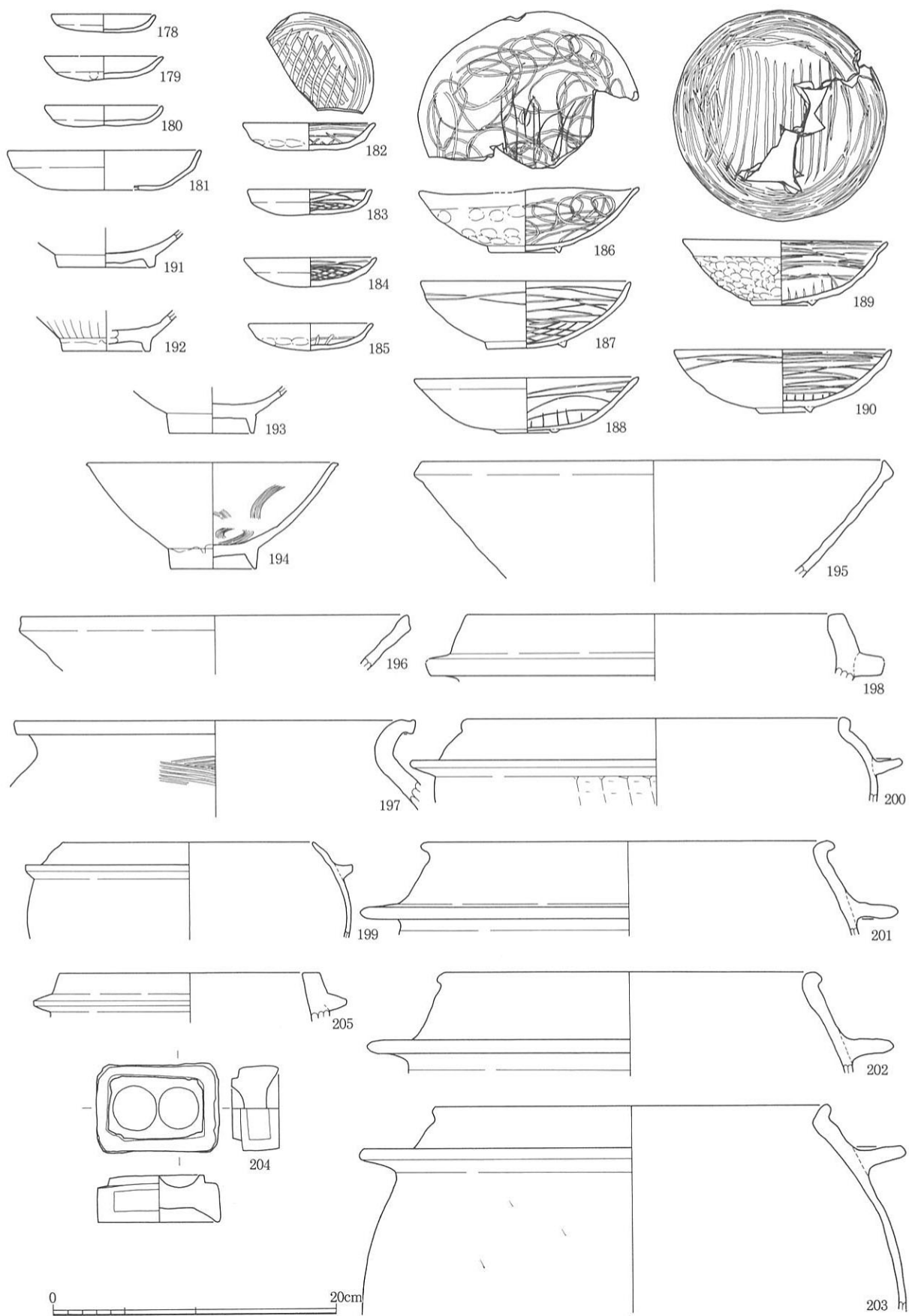


图82 大溝B-1 出土遺物

部左端面は直線的に擦られ、再加工が施されている。

その他、渥美甕、常滑甕の破片がある（写真図版45-691~694）。691の渥美甕は3 B トレンチの井戸 B-2 出土破片に同一個体と思われるものが認められた。

2) 大溝G-1 (図83、写真図版51)

大溝G-1 上層、中層からは古代の遺物と共に中世の遺物や瓦破片が少量出土している。下層、最下層出土の遺物については平安時代の項で述べた通りである。

中世遺物には土師器の皿、羽釜の鏝破片、瓦器皿、瓦器椀、須恵器鉢底、中国青磁碗などがある。このほか、中世の轆羽口かと思われる破片も1点みられた。206はやや深めの瓦器皿である。外内面には密なヘラ磨きが残る。207は器高が低く、内面の暗文がまばらな瓦器椀である。IV-1~2期のものか。このほか、瓦器椀にはI~III期にあたると思われるものが数点みられる。208は底部外面に糸切り痕を留める須恵器練鉢である。写真図版51-746は龍泉窯系青磁無文碗である。

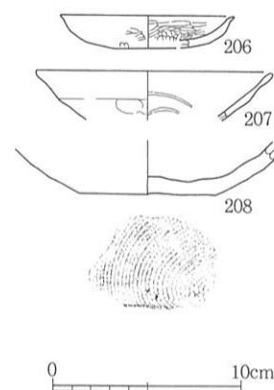


図83 大溝G-1 上層・中層出土土器

3) 溝G-11 (図84)

溝G-11はトレンチ北よりの東西に走る幅約40~60cmの溝である。ここからは須恵器、土師器、埴輪の細片、中世土器破片、瓦破片が少しと、混入かと思われる近代染め付け細片が1点出土している。

中世遺物は須恵器鉢体部片1点と、II-3からIII-1~2期の瓦器椀高台片が2点みられる。209、210は同一個体の可能性が高い瓦器椀の口縁部と底部である。両方ともに表面が摩耗し、灰白色を呈するが、210の見込みにはラセン状暗文が微かに残る。

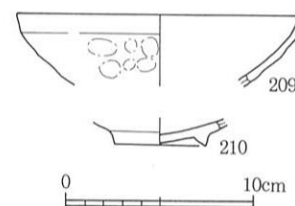


図84 溝G-11出土土器

(4) 井戸

B・D・E トレンチの井戸から出土の遺物を図化した。

1) 井戸B-1 (図85、写真図版39、カラー写真2-232)

ここからは6世紀から13世紀初め頃の遺物が大量に出土しており、なかでも12世紀代の瓦器椀が最も多く見られる。また、瓦破片がやや多く出土している。6世紀のものは提瓶かと思われる体部破片が1点出土している。他に奈良から平安時代にかけての須恵器片が2点ある。中世遺物は瓦器椀高台239点、瓦器皿口縁125点、瓦質甕体部破片2点、須恵器練鉢口縁1点、底4点、陶器甕口縁1点、中国製白磁口縁部1点、土師器皿口縁部34点、土師質羽釜7点、鉄滓3点がみられる。瓦器椀はII-1からIII-2期、中でもII-3~III-1期が188点と最も多い。また、瓦器椀は和泉型が殆どであるが、大和型が1点、大和型か不明のもの1点がみられる。土師質羽釜では和泉型が主であるが、胎土中に結晶片岩を含んだ紀伊型が2点認められた。大和型の瓦器椀、紀伊型の土師質羽釜が出土しているのは、この遺構のみで、他の遺構からは和泉型の瓦器椀、河内や和泉型の土師質羽釜が殆どである。

211~215は土師器皿である。211~214は手づくねによる小形の皿で、いずれも調整は横なで、なで、底部外面が指押さえである。211、212は胎土中に金雲母を含む。214は口縁部付近に一部煤が付着している。215は大形の皿であるが、調整は小形と同じである。底部外面には粘土の継ぎ目が、中央から口縁部にむけて円弧状にみられる。

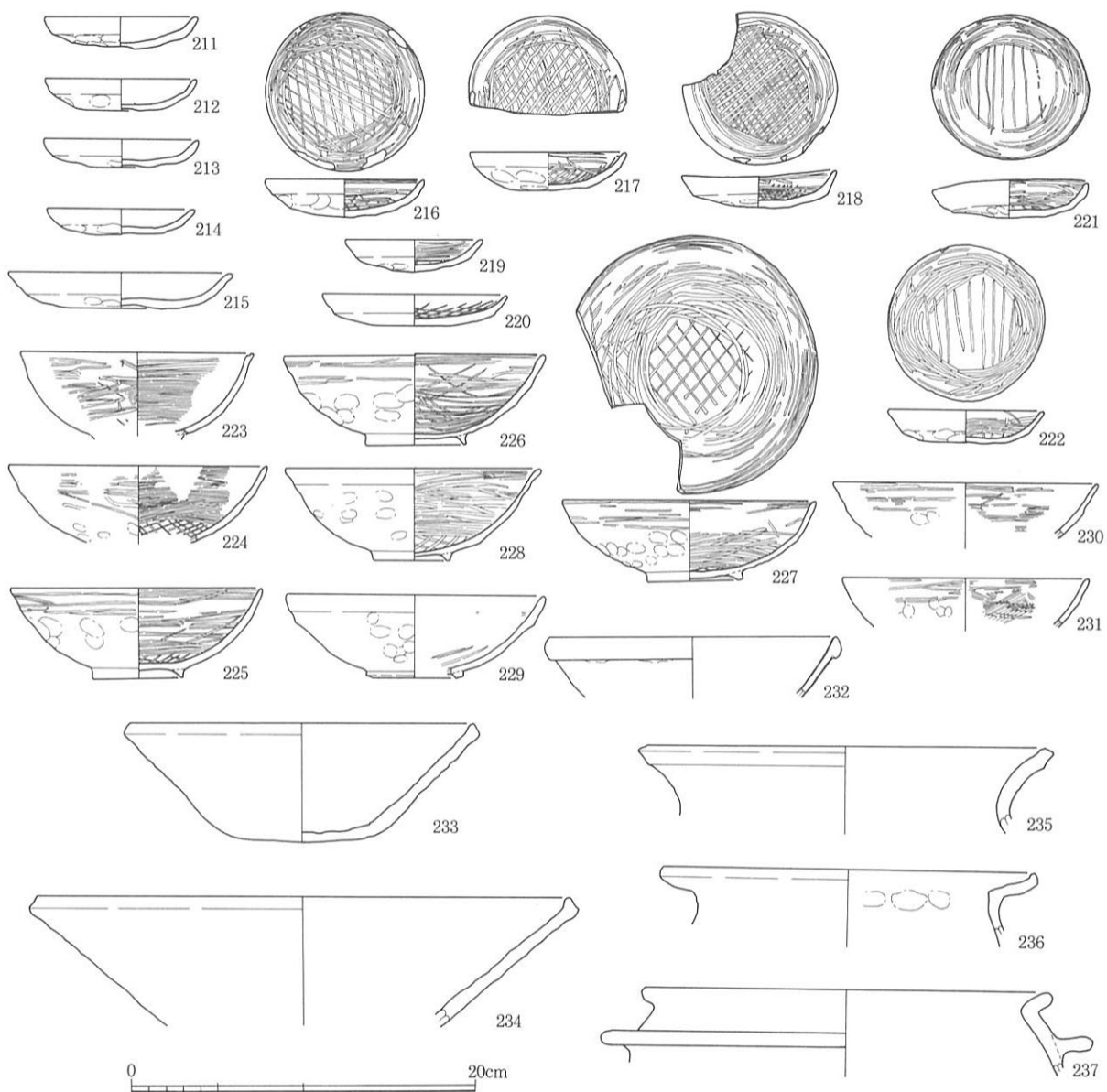


図85 井戸B-1出土土器

216～222は瓦器皿で、216、221、222がほぼ完形である。形状は全体に底が丸く、やや深めである。216～220の内面には格子状の暗文が、221、222の内面には平行の暗文がみられる。

223～231は瓦器碗である。223は口縁端部内面に明確な沈線が1条引かれている。器壁はやや薄手で、胎土は緻密である。外内の暗文は幅が狭く、内面の体部から口縁部にかけての圈線は密である。見込みの暗文は格子状である。外面には高台近くまでややまばらな暗文がみられる。大和II b期にあたる。224の見込みには格子状、口縁部から体部にかけては細い圈線の暗文が施されている。外面にはやや太い暗文が口縁部より少し下までまばらに施されている。225～228は見込みに格子状の暗文があるもので、225～227は口縁部外面に暗文があるが、228は口縁部を2回横なでしており、暗文は施されていない。225～227は高台径も大きく、外面に暗文が施されていることから、II-2～3期にあたるものか。228は高台径がやや小さめで、外面に暗文が施されていないことから、III-1～2期のものか。229は見込みに平行暗文が施され、外面に暗文が施されていないことから、III-1～2期のものか。230は口縁端部内面に弱い沈線を1条引いたもので、暗文は内面および口縁部外面に施されているが、和泉型瓦器碗

によく見られるような太い暗文である。231は内面および口縁部外面に粗い暗文が施されているが、内面の暗文の下面に斜め方向のハケ目が残る。

232は厦門碗窯系白磁碗Ⅳ2類である。

233、234は須恵器練鉢で、233は口径が小さく、底部外面にはカキ目状の筋と砂粒の動きがみられる。2点ともに口縁端部付近が重ね焼の痕跡で、色調が異なっている。

235は須恵器甕口縁部で、口縁端部および頸部外面に灰を被っている。奈良時代の遺物と思われるものである。

236、327は土師質羽釜である。236はくの字状に屈曲した頸部から水平に近く口縁が開き、端部で少し上方へ拡張した、紀伊型の羽釜である。胎土中にごく僅かに結晶片岩を含む。237はくの字状に屈曲した口縁部をもつ、菅原編年の河内B1c型である。2点ともに外面には煤の付着が認められる。

2) 井戸B-2 (図86、写真図版40・46、カラー写真2-251~253・661)

ここからは埴輪破片かと思われるもの、Ⅳ~Ⅴ型式の須恵器数点、黒色土器Aの高台破片1点、中世須恵器鉢、甕、陶器甕、中国製白磁碗、青磁碗、青磁皿の破片が数点、土師器の皿、羽釜少々、火舎1

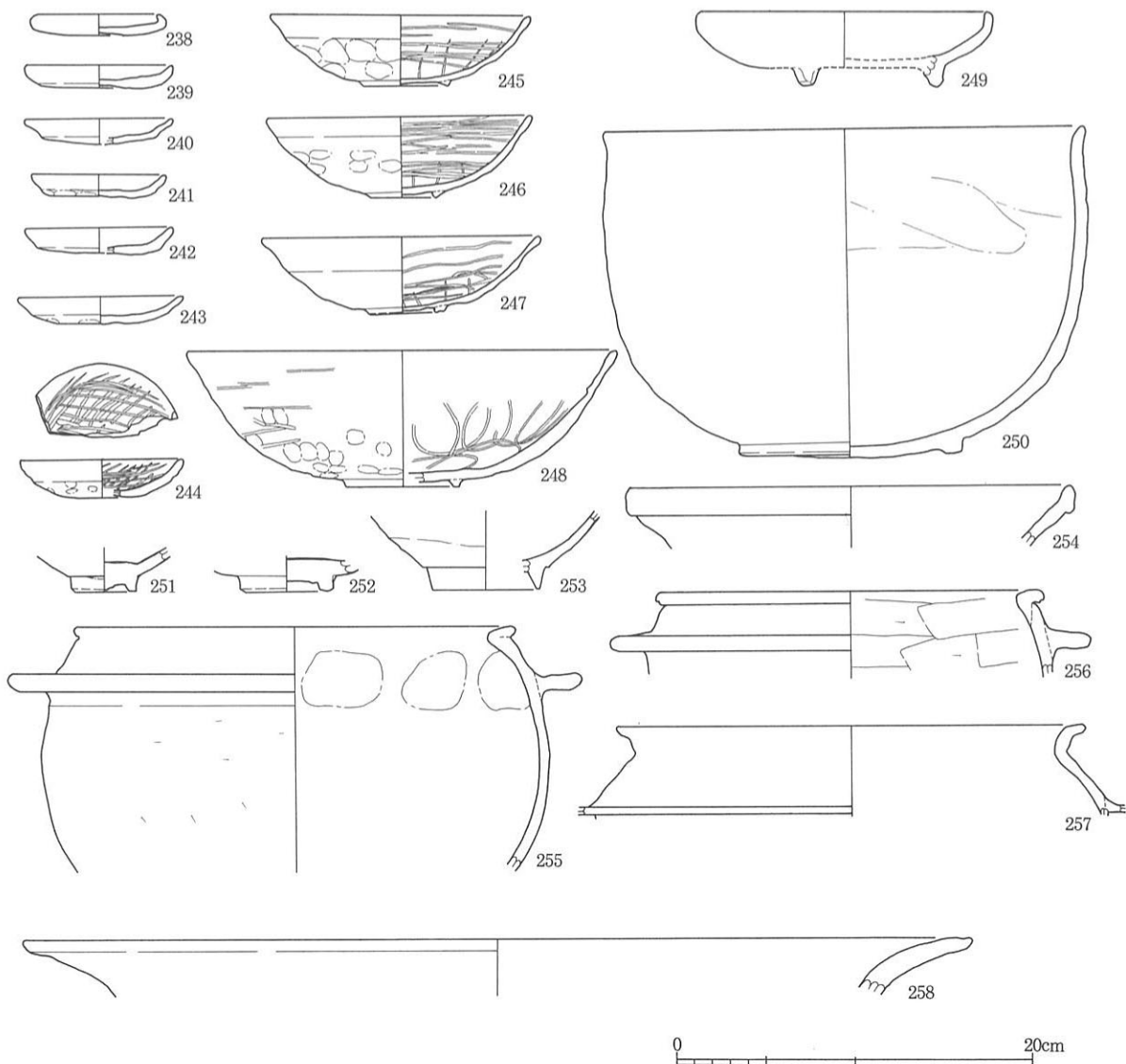


図86 井戸B-2 出土土器

点、瓦器碗、皿、瓦破片などが多量に出土している。瓦器は碗では高台で合計260点、皿口縁部破片では67点を数え、時期はⅠ-3～Ⅱ-1期のものからⅣ-1期までみられ、なかでもⅡ-2～3期のものが多い。土師質羽釜は河内型、和泉型、紀伊型がみられる。このほか、井戸2からは根石3点、砥石1点、炭細片、鉄滓9点、焼土塊1点、凝灰岩製不明品1点がある。

238～242は土師器皿で、238は口縁部が内側に折れ曲がっており、239～242は口縁部が斜め上方に開く。調整はいずれもなで、横なで、底部外面は指押さえである。238、239の底部外面には削りが一部施されているものか、僅かに砂粒の動きがみられる。238、240～242は色調が灰白色を呈する。239は淡黄色ないし灰黄色を呈する。

243、244は瓦器皿である。243は浅めで、見込みの暗文などは、表面が摩耗しており不明である。244の見込みには格子状の暗文が施されており、やや深めである。

245～248は瓦器碗である。245～247の見込みには平行の暗文が、248は大形の碗でラセン状の暗文がみられる。248の体部外面上半には僅かにへら磨きがみられ、体部外面下半にはへら削りの痕跡が残る。245は二次的な火を受けており、口縁部から体部にかけて赤く変色している。245～247はⅢ-2～3期にあたると思われる。248はもう少し古い段階のものか。

249は土師質の火舎である。浅い皿状をなし、口縁部でわずかに内湾する。脚部は小さな突起状の三足のうち、1つが残る。調整はなで、横なでである。口縁部内外は煤の付着した痕跡か、僅かに黒っぽい。

250は瓦質のやや深めの碗形をしており、口縁部は僅かに外反する。口径27cm、器高18cm、高台径12cmである。体部外面には粘土紐の継ぎ目が残る。

251～253は中国陶磁器である。251は龍泉窯系青磁小碗の高台破片、252は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、253は白磁碗Ⅴ類である。この他、同安窯系青磁碗Ⅲ1b類がある（カラー写真2-661）。

254は須恵器練鉢細片で、口縁端部は上下に僅かに拡張している。焼成がやや不良で、瓦質のような感じである。

255～257は土師質羽釜であり、255、256は内傾する口縁が、短く外反する。河内B1d型か。257は緩いくの字状に外反する口縁は端部でさらに水平に折れ曲がる。河内B1c型の変形したものか。255の体部外面には左上から右下方向へへら削りが施されている。内面および口縁部はなでおよび横なでである。255、256の外面には煤が付着している。

258の渥美大甕口縁部は細片で、口径は推定値だが53cmを測る。外内面ともになでられており、外面が褐灰色、内面が灰色を呈し、固く焼け締まっている。胎土は精緻だが、若干砂っぽい感じである。この甕は同じBトレンチのピットB-35出土破片と接合し、大溝B-1上層出土の破片とは同一個体と思われる。そのほか、渥美かと思われる甕破片、常滑甕破片もある（写真図版46）。

写真図版62-761は角のとれた直方体状の凝灰岩製不明品である。残存長19.6cm、残存幅11.8cm、残存厚9.8cm、重さ2030gを測る。一端および欠損部を除き、全面に煤の付着がみられる。

3) 井戸B-3 (図87、写真図版40、カラー写真2-272～274・662)

ここから出土の遺物は須恵器ではⅢ-2段階の杯蓋1点、Ⅳ～Ⅴ型式の破片数点、中世の須恵器鉢、甕のほか、土師器の皿、羽釜、瓦質羽釜、鉢、瓦器碗、皿、中国白磁碗、皿、白磁四耳壺、多量の瓦破片などが出土している。瓦器碗はⅡ～Ⅳ期のものがみられ、特にⅢ～Ⅳ期にかけてのものが多く、このほか、根石の破片と思われるもの数点、鉄滓、炭、焼土塊などが僅かにみられる。

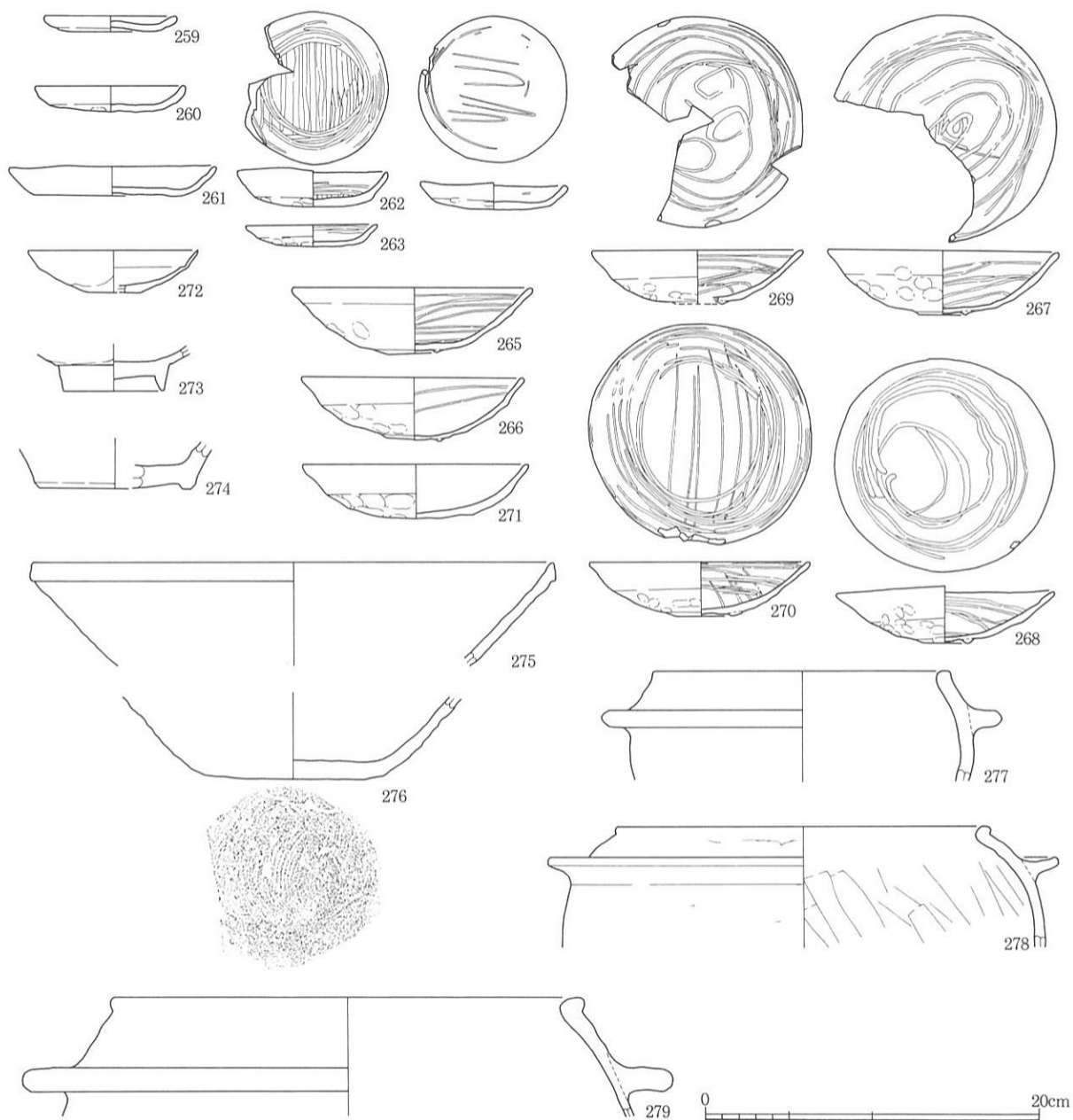


図87 井戸B-3出土土器

259～261は土師器皿で、259は灰白色、260は橙色、261は灰白色ないし黄灰色を呈する。調整は横なで、なで、底部外面が指押さえである。259、260が口径約8 cmの小形、261が口径約12 cmの大形である。

262～264は瓦器皿である。262は器壁がやや厚く深めの皿で、見込みには密に平行の暗文の後、体部から口縁部にかけて圏線の暗文が施されている。263、264は器壁がやや薄く浅めの皿で、見込みには間隔の粗い平行の暗文が施されている。

265～271は瓦器碗、265～268は右回りに底部内面中央から口縁部にかけて、渦巻き状に暗文が施されている。269の見込みにはラセン状暗文、270の見込みには平行の暗文が施されている。265～270は退化した紐状の高台がつくが、271は無高台で、見込みの暗文も不明瞭である。265～270がⅣ-1～2期で、271がⅣ-3～4期であると思われる。265、266、268～271の主に外面には、重ね焼きにより炭素の吸着が悪い部分がみられる。

272～274は中国陶磁器である。272が白磁皿Ⅷ1 b類、273が白磁碗Ⅴ類、274が白磁四耳壺Ⅵ類の底部破片である。その他に白磁四耳壺Ⅲ類もある（カラー写真2-662）。

275は須恵器の練鉢で、口縁端部は狭く、僅かに下部に拡張している。口縁端部外面は黒色を呈する。体部内面の残存する下方の部分は表面が使用によって滑らかになっている。276は須恵器練鉢の底部破片で、底部外面には回転糸切り痕を留める。底部から体部にかけての内面は、使用により滑らかである。

277～279は土師質羽釜である。277は口径17cmの小形の羽釜である。口縁部は少し内傾し、端部でごく僅かに外へつまみ出されている。調整は外内面ともになでである。外面には大量の煤が付着している。菅原編年の河内B1e型か。278は胎土が精緻で灰白色を呈し、他の2点とは異なる。内傾する口縁端部は小さく明確に折り曲げられている。調整は体部外面が右方向に削り、内面は斜め方向になで上げ、口縁部は横なでである。外面には煤の痕跡がみられる。和泉Bc型か、不明である。279は277を少し大形にしたような形態で、口縁端部の外反度が少しきつい。調整は外内面ともになでである。

4) 井戸D-2 (図88、写真図版41、カラー写真4-672)

ここからは黒色土器Aかと思われる破片、瓦器、土師器、須恵器、中国白磁碗などの破片が数片ないし十数片ずつ出土している。土師器では皿8点、碗高台1点、羽釜口縁部破片1点などがみられる。瓦器では碗高台が1点みられ、I-1～2期かと思われるものである。口縁部破片は10点余りのうち、I期と思われるものが半数を占めるが、II～III期にかけてのものまでみられる。瓦器皿は口縁部細片1点を含め、2点である。須恵器では、体部破片のみ3点あり、カキ目のある破片1点と、中世の甕体部破片1点がみられる。中国白磁碗Ⅳ2c類の口縁部が1点（カラー写真4-672）と、白磁碗高台1点がある。

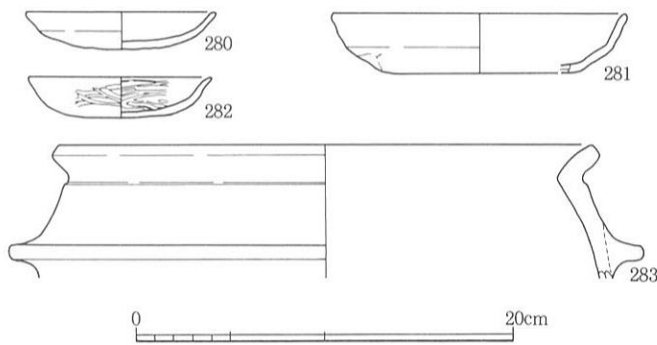


図88 井戸D-2 出土土器

280の土師器小皿はやや浅めの丸底で、口縁部はなだらかに外上方へ開く。全体に摩耗しているが、底部は指押さえの痕跡を留める。281の土師器皿は大形で、底部から体部にかけて緩やかに屈曲し、口縁部で僅かに外上方に立ち上がる。底部には指押さえが残る。282はやや深めの完形の瓦器皿で、口縁部は僅かに外方へ開く。暗文は外面の口縁部から体部にかけてと、内面全面にやや密に施されている。底部内面の暗文は一定方向に施されている。283の土師質羽釜はくの字状に屈曲する口頸部に、短い鏝がほぼ水平につけられている。菅原編年の河内B1c型にあたる。

5) 井戸D-3 (図89、写真図版41)

ここからは須恵器、土師器、瓦器、溶解炉片、炭細片などが出土している。須恵器は甕の頸体部破片のみで、カキ目のあるものが1点みられる。土師器では7世紀代かと思われる甕口縁部が1点みられるが、中世土器が殆どである。土師器の小皿は十数点余、羽釜は菅原編年の河内B1e型が6点、和泉Bc型が1点ある。瓦器ではII-2～3期かと思われる1点を除き、III～IV期が少々多くみられる。特にIV-1～2期が最も多く、十数点ある。

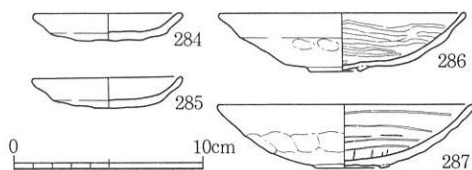


図89 井戸D-3 出土土器

284は土師器皿である。底部外面には粘土接合痕らしき痕跡を留める。285は浅めの瓦器皿である。表面の暗文はみられない。底部外面に粘土紐の接合痕を留める。286、287は瓦器碗である。2点ともに内面見込みに平行、体部から口縁部にかけての内面に粗い圈線が巡らされ、外面にミガキが施されていないことから、Ⅲ-3期にあたると思われるものである。

6) 井戸D-4 (図90、写真図版41・61、カラー写真4-291)

ここからは須恵器、灰釉陶器?、土師器、黒色土器A?、瓦器、瓦質土器、陶器、中国白磁、瓦、溶解炉などの破片が出土している。須恵器には陶邑Ⅲ~Ⅳ型式の杯蓋、高台破片、甕などがある。中世の須恵器では、鉢口縁部6点、鉢底部4点、甕口縁部2点がある。須恵器鉢は口縁端部を上方へ僅かに拡張したものと、上下に拡張したものが各3点ずつみられる。土師器では皿の口縁部破片が200余りある。288のような口縁部が屈曲するものは1点のみで、それ以外は口縁部が緩やかに上外方へ開く。土師器皿底部破片で、高台を有するものが1点、糸切り痕の痕跡を有するものが4点認められた。土師質羽釜は口縁部計21点あり、菅原編年の河内B1c型が1点、B1d型が3点、B1e型が14点、和泉Bc型が3点みられる。

瓦器では碗高台破片で119点あり、古くはⅠ-1~2期と思われるものが数点、新しくはⅣ-1~2期のものがある。大雑把に時期別の割合をみると、Ⅱ期が最も多く、次いでⅣ期が多い。また、瓦器碗口縁部破片の中には、片口付きのものが1点認められた。瓦器皿は口縁部破片で62点ある。

瓦質土器では甕1点、羽釜2点がある。瓦質羽釜は菅原編年のJ a'型が1点、和泉K型かと思われるものが1点みられる。

陶器甕は頸部および体部破片が8点みられる。

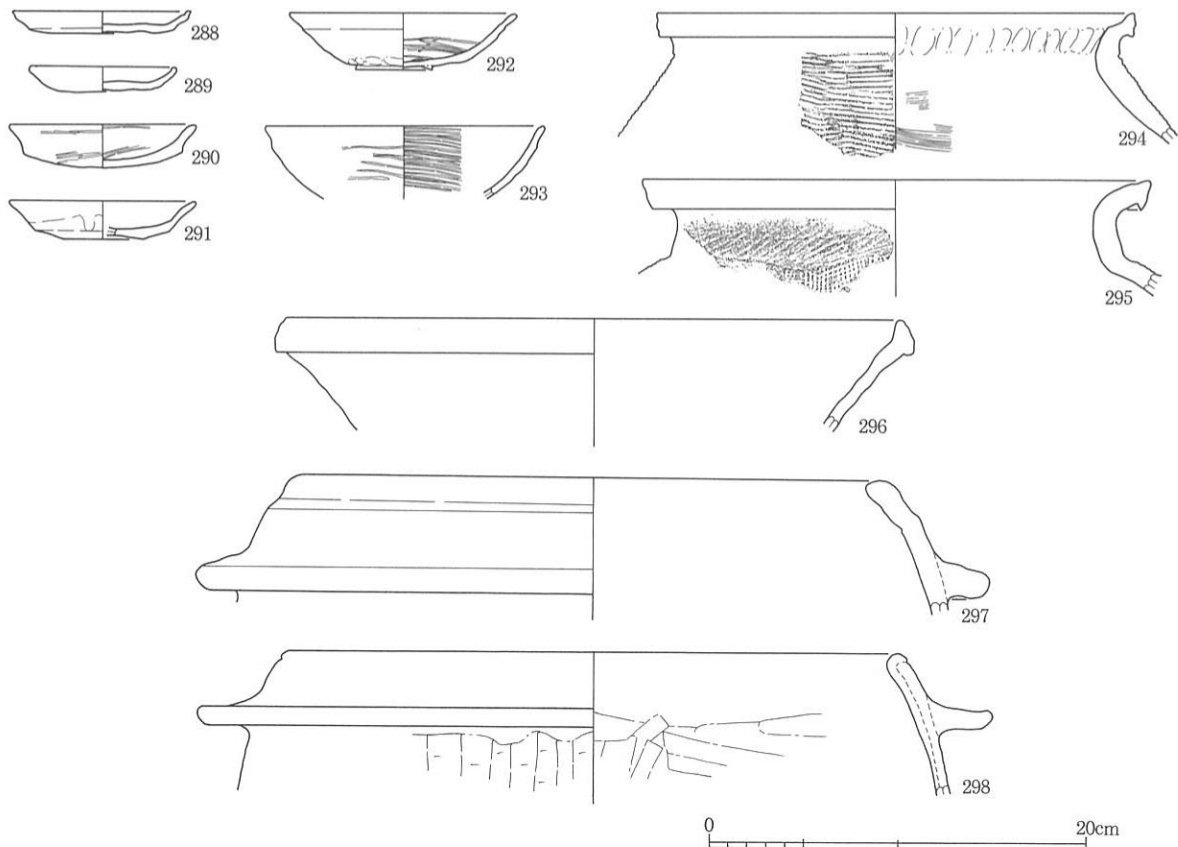


図90 井戸D-4 出土土器

288は土師器皿で、なでおよび横なで、指押さえにより調整が施されている。色調は黄灰色ないし灰白色を呈し、胎土中に微粒の金雲母を多く含む。

289はやや浅めの瓦器皿で、底部内外面は指押さえの痕跡を多く残し、粗雑な仕上げである。暗文は内面にごく僅かに施されているようであるが、詳細は不明である。290は深めで289よりも大きめの瓦器皿である。内底面には数条の平行暗文の後、斜め方向の暗文を施しており、その後、圏線状のものが数条巡るといった風に、あまり規則性がみられない。底部外面は指押さえ、なでであるが、交差する数条の暗文がみられる。

291は中国白磁皿Ⅷ2b類である。これは胎土が陶器質の粗悪品で、釉は黄色味を帯び、腰から下は無釉である。

292は高台が殆ど退化した小ぶりで浅めの瓦器碗である。内面には底部から口縁部にかけて渦巻き状の暗文がまばらに施されている。口縁部内面の一部と体部外面には重ね焼きの痕跡がみられる。Ⅳ-2期にあたる。293はやや深めの口径の大きめの瓦器碗である。内面は横方向に密な暗文が施されている。外面には体部にまでまばらな暗文が施されており、Ⅱ-2期にあたるものか。

294、295は須恵器甕口縁部破片である。294は外反した口縁の端部が少しだけ上下に拡張したもので、体部外面には平行叩きが綾杉状に重なっている。体部内面には横方向のハケ目が施されている。295は頸部で直立したのち外反する口縁で、端部が上下に幅広く拡張されている。体部外面に平行の叩きが直交する方向で施されており、体部内面は縦方向のハケ目らしきものが微かに残る。

296は須恵器練鉢で、口縁部は上下に大きく拡張された形態で、口縁端面は黒っぽい。口縁部直下の外面には粘土接合痕が横方向にみられる。

297、298は土師質の羽釜である。297は内傾する口縁部の外面が僅かに段状をなす。河内J a型の範疇にはいるものか。破損後、全面に煤を被っている。新しい破損部の色調は橙色を呈する。298は口縁端部外面に沈線が1条巡るもので、胎土は297に比べ砂粒をあまり含まず、精緻である。色調は灰白色を呈する。体部外面には左から右へ横方向にヘラ削りが施されている。体部内面は縦ないし横方向のなでである。外内に煤の痕跡が残る。

写真図版61-759は溶解炉の破片である。残存高約30cm弱、厚さ約5cmを測る。直径はおよそ70cm位か。内面は解けてガラス化し、炭を少し噛んでいる。外面は剥がれているが、胎土中にスサを含んでいる。

7) 井戸D-5 (図91)

ここからは中世遺物、瓦破片が少量出土している。須恵器では口縁端部を上方へ少し拡張した鉢(302)

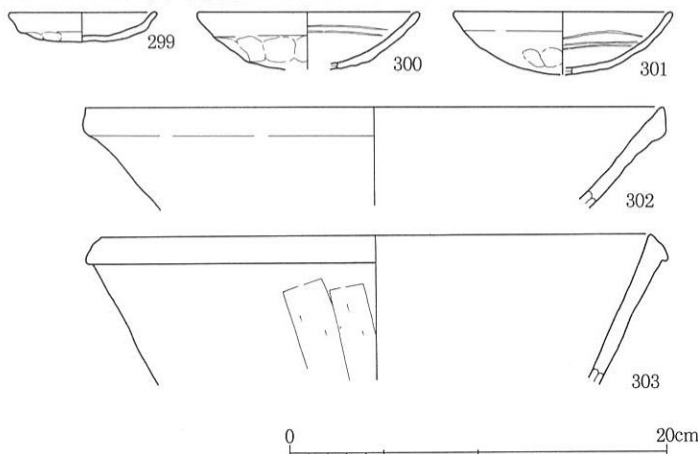


図91 井戸D-5出土土器

が4点ある。土師器の皿は5点である。土師質羽釜は細片で7点あり、菅原編年の河内B1e型と思われるものが5点、河内J a'型と思われるものが1点、和泉Bc型かと思われるものが1点みられる。瓦質羽釜は河内J a'型と思われるものが1点ある。瓦器では瓦器皿(299)は3点あり、内面の暗文は施されていない。高台部が残存するものは9点あり、Ⅲ-2~3期が2点、Ⅳ-1~2期が7

点みられる。300、301のようにⅣ-3～4期もみられる。303は口縁端を下部に僅かに拡張した瓦質挿鉢である。体部外面には縦方向のヘラ削りが施されている。ほかに器種不明の瓦質高台が1点ある。

8) 井戸D-6 (図92、写真図版41)

ここからは中世遺物が少量出土している。瓦器碗の口縁部破片ではⅢ-3期と思われるものが2点、Ⅳ-2～4期のものが6点、時期不明破片が7点である。

304、305の瓦器碗はⅣ-3～4期と思われるものである。土師器では皿1点、羽釜が1点あり、羽釜は河内B1e型と思われる。このほか、陶器甕体部破片2点、焼土塊細片1点などがある。

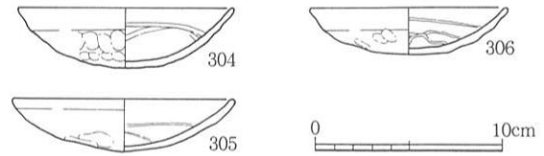


図92 井戸D-6・7出土土器

9) 井戸D-7 (図92)

ここからは少量の中世土器が出土している。須恵器では口縁端部が少し上方へ拡張する鉢口縁部破片が2点ある。瓦器碗ではⅣ期のものが7点みられ、Ⅲ期かと思われるものは2点、不明3点である。

306はⅣ-3～4期と思われるもので、この時期の瓦器碗は計4点みられる。306の口縁部外面には重ね焼きの痕跡を留める。このほか、土師器では河内B1d型が細片で1点と、黒色土器Aかと思われる体部細片が1点、瓦質土器の不明細片が1点、焼土塊細片1点などがみられる。

10) 井戸E-1 (図93、写真図版43・61)

ここからは中世遺物、瓦破片が少量出土している。内訳は瓦器碗23点、瓦器皿口縁5点、土師器釜口縁10点、土師器皿7点である。瓦器碗はⅠ-3～Ⅱ-1期からⅢ-2期までみられ、Ⅱ-3～Ⅲ-1期が17点と最も多く認められた。土師質羽釜では河内B1c型がみられる。

307、308は土師器皿である。307は表面が摩耗した細片であるが、308はほぼ完形である。調整はなで、

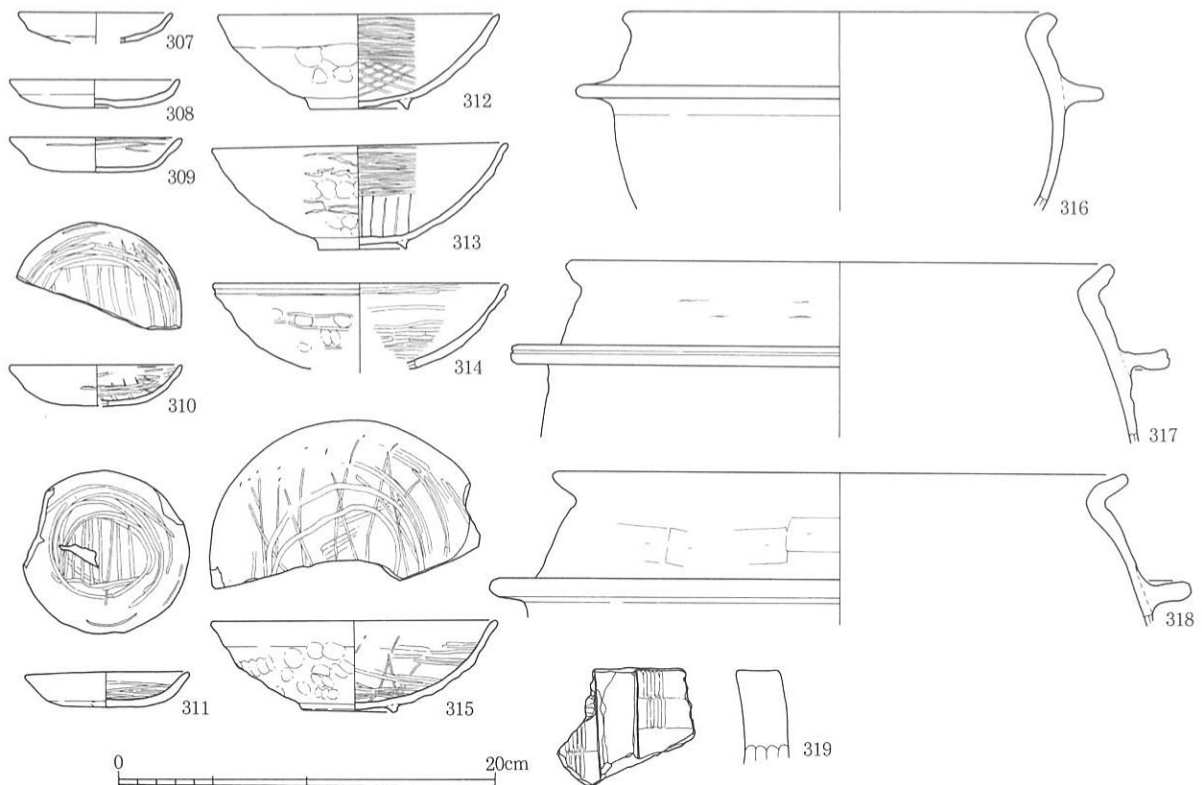


図93 井戸E-1出土遺物

横なで、底部外面を指押さえしており、底部外面中央が僅かに凹む。色調は307が淡橙色、308が淡黄色、断面が橙色を呈する。

309～311は瓦器皿である。3点ともに底部内面の暗文は平行であり、外面口縁部にはごく僅かに暗文がみられる。底部外面の指押さえ、なでは丁寧である。

312～315は瓦器碗である。312は口径がやや小ぶりの、口縁端部が僅かに内傾した平坦面をなす。見込みには格子状暗文が施されているが、外面には暗文がみられない。313は見込みに細くて間隔のやや狭い平行の暗文が、外面には体部中央よりもやや下までまばらな暗文が施されている。内底面には重ね焼きの際ついた、直径4.5cmの高台の溶着痕がみられる。313の高台径も4.5cmである。314は口縁部外面に幅3mmの沈線が巡るもので、体部内面には横方向の粗い暗文が、外面では体部下部まで、まばらな暗文がみられる。315は内底面に間隔の極めて粗い斜格子状の暗文が施され、口縁部には圈線が粗く巡る。外面にはまばらな暗文が体部下部までおよぶ。312、313、315の外面には炭素の吸着の不良箇所部分に重ね焼きの痕跡がみられる。

316～318は土師質羽釜である。316は口径22cmの小形の羽釜である。外反する口縁部はやや長めである。鏝より口縁部寄りの外面は右から左方向へヘラ削りを施したのち、軽くなでている。316の体部外面は左上から右下へ斜め方向にヘラ削りしている。318はヘラ削りの後なでか、不明である。316、318には煤の付着がみられる。3点ともに河内B1c型である。

319は滑石製石鍋である（写真図版61）。厚さ1.5cmの体部に、上場1.6cm、下場2cm、高さ1cmの把手

が縦方向についている。外面は横方向に削って仕上げたものか、横にのびる稜線がみられる。

11) 井戸E-2 (図94・95、写真図版42・64)

井戸2は口径30cm内外の土師質羽釜の底を打ち欠いて縦に積み、井戸枠としたものである。井戸底から曲物が出土している（写真図版64-332）。

中世の遺物、瓦破片が少量出土している。内訳は瓦器碗高台73点、瓦器皿口縁9点、土師器皿24点、土師質羽釜11点、中国青磁破片3点、白磁破片1点、陶器甕体部片1点、瓦質脚1点、不明鉄製品1点、鋳型？1点、砥石1点、奈良～平安

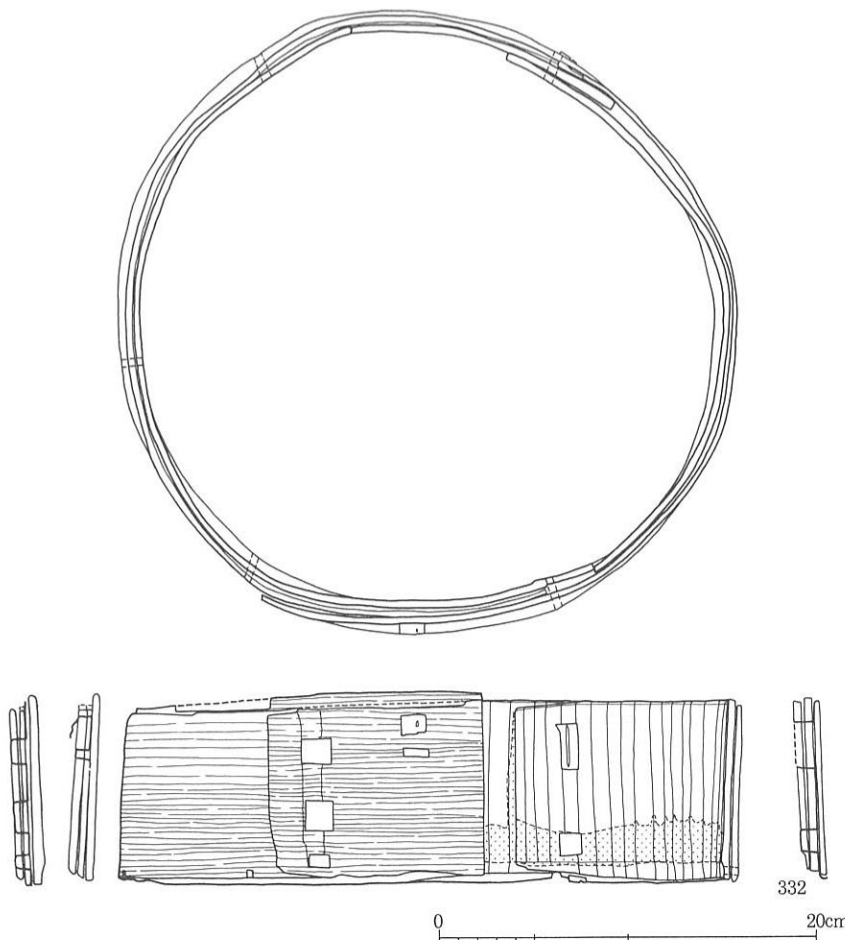


図94 井戸E-2出土木器

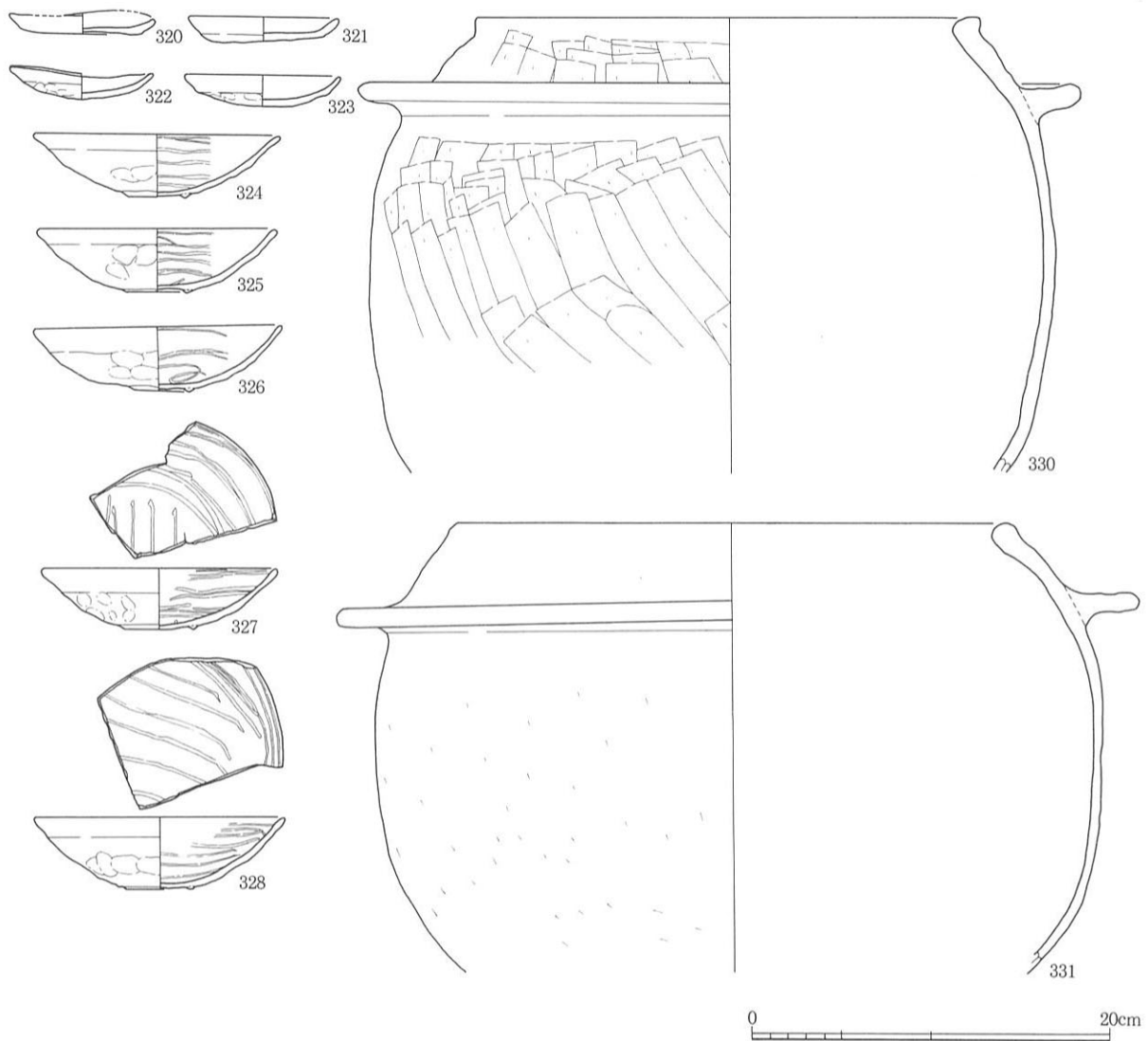


図95 井戸E-2出土土器

時代の須恵器破片2点である。瓦器碗はI-2期かと思われるものからIV-2期までみられ、そのうちIII-3からIV-1・2期が85%と最も多い。土師質羽釜は河内B1d型が6点、B1e型が5点出土している。中国青磁碗の体部破片3点には櫛描きの紋様がみられる。瓦器碗の口縁部破片には口縁端部内面に沈線を巡らせたものが破片で1点認められた。これは楠葉型のものか不明である。

320、321の土師器皿は、口径8~8.5cmの灰白色を呈した手づくね製で、口縁部は横なで、内底面は一定方向のなで、底部外面は指押さえである。321の底部外面には粘土接合痕が残る。

322、323は瓦器皿で、口縁部は横なで、内底面はなで、外底面は指押さえを施しており、暗文はみられない。322は口縁の一部に、323は内外面に火を受けて荒れている。324~328は瓦器碗で、いずれも高台の退化した、粘土紐状のものが貼り付けられている。324は底部内面中央から外に向かって、またはその逆方向で、渦巻き状の暗文がほどこされている。325も324と類似するが、見込み部分が若干ジグザグ状になっている。326の見込みにはラセン状の暗文が施されている。327、328の見込みには平行の暗文がみられる。

330、331、写真図版42-652~655は土師質羽釜である。井戸E-2から出土した土師質羽釜は口縁部形態に2種類みられる。330・653~655は内傾した口縁の端部が僅かに外反し、端部は丸く収め、菅原

編年の河内B1d型にあたる。330の調整は外面を縦方向のへら削り、内面をなでている。鏝よりも上方の口縁部外面はなでているが、部分によってはへら削りが横方向に残る。331は内傾する口縁の端部が肥厚し、丸くおさめたもので、菅原編年の河内B1e型にあたる。体部外面の調整は330と同じく縦方向のへら削りが施されている。これらの羽釜は外内面に煤が付着しており、使用後に底を打ち抜き、井戸杵として転用されたものである。

332の曲物は直径33cm、高さ10cmで、薄い板材を2ヵ所で綴じ合わせており、内面にはケビキが0.9～1.3cm間隔で縦方向に引かれている。綴じの部分は木の皮で、2段ないし3段で綴じ合わされている。内面は表面を柿渋のようなもので塗ったものか、下から1/3は黒く残る。また、底板との接合部は一部削りこんでおり、6ヶ所に4×3mm角の木製釘が打ち込まれている。

12) 井戸E-3 (図96)

ここからは少量の奈良時代の須恵器と、中世の遺物、瓦破片が出土している。奈良時代遺物の内訳では、陶邑Ⅲ-3段階とⅣ型式の須恵器杯蓋が各1点みられる。

中世遺物の内訳は、瓦器碗高台50点、瓦器皿11点、瓦質羽釜3点、瓦質脚7点、土師質羽釜10点、土師器皿67点、中国白磁碗口縁1点、底部1点、陶器甕頸部1点、体部4点、須恵器杯蓋2点、中世須恵器甕1点、練鉢2点、木片1点、焼土塊3点である。瓦器碗はⅡ-2～3からⅣ-2期までみられ、Ⅳ-1～2期のものが84%を占める。瓦質羽釜は河内J a'型1点、口縁が端部で小さく外反したものの1

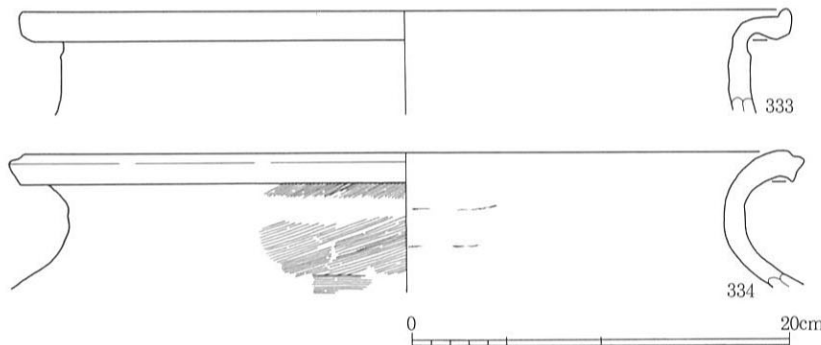


図96 井戸E-3出土土器

点、脚付きか不明のもの1点と、脚が7点出土している。土師質羽釜は河内B1e型ばかりである。

333は常滑甕口縁部破片である。直立した頸部から直角に外方へ曲がり、端部で上方へ拡張する。常滑4型式後葉から5型式のものである。

334は須恵器甕で、緩やかに外反する口縁端部は下方へ僅かに拡張し、端部外面は平坦である。口縁端部内面は強くなでられ凹む。口縁から肩部にかけての外面には細かい平行叩きがみられ、口頸部は斜め方向の叩きの後横なでが施されている。

13) 井戸E-5 (図97、写真図版53)

ここからは古代から中世の遺物、瓦が少量出土している。内訳は須恵器杯蓋1点、体部片1点、土師器甕1点、黒色土器Aか不明1点、土師器皿7点、土師質羽釜8点、瓦器皿5点、瓦器碗21点、陶器甕底部1点、中国白磁皿底部1点、中世須恵器練鉢底1点、砥石1点である。

335は瓦器皿で、見込みに微かに平行の暗文が残る。底部外面にはスサ状の圧痕がついているが、指押さえの後、比較的丁寧になでられている。

瓦器碗(336～338)はⅡ～Ⅲ期のうちⅢ-1～3期が半分強を占める。338の瓦器碗外面の高台内には、焼成後に「×」と線刻されているが、新しい傷の可能性もある。土師質羽釜は河内B1c型かと思われるものと、河内B1d型が各2点、河内B1e型が1点、和泉Bc型かと思われるもの(340)が3点みられる。340の体部外面は横方向にへら削りが施されており、鏝から下には煤が付着している。ま

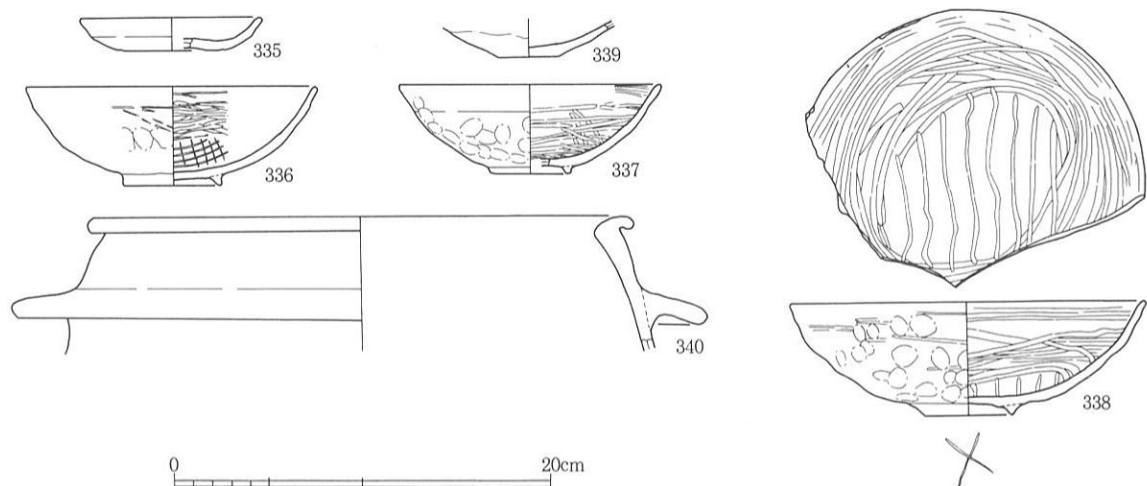


図97 井戸E-5出土土器

た、中国白磁皿VI1a類(339)の底部外面には「大」の墨書が認められた(写真図版53)。

14) 井戸E-12 (図98、写真図版43)

平安時代かと思われる須恵器の高台1点と、中世の遺物が少量出土している。内訳は瓦器碗5点、瓦器皿4点、土師質羽釜1点、須恵器練鉢底1点、砂岩製砥石1点である。瓦器碗はII-2~III-1期までみられ、II-2~3期が多い。土師質羽釜は河内B1c型の頸破片である。

図98は瓦器である。341はやや深めの皿で、底部内面には平行の口縁部には圏線状の暗文が施されている。外面は底部の指押さえ、なでが丁寧である。口縁部外面にごく僅かに暗文がみられる。

342は見込みに格子状暗文、体部から口縁部にかけて密な圏線状暗文が施されている。外面は口縁部付近に暗文がまばらにみられる。343、344は見込みに平行の暗文、体部から口縁部にかけて圏線状の暗文が密に施されている。見込みの暗文は344がやや細めである。344の内面には細かいハケ状の痕跡が暗文の下に残る。345は見込みの暗文がまばらなジグザグ状で、圏線も数条しか巡っていない。外面は指押さえのち口縁部を横なでしている。これらの瓦器碗はIII-1~3期にあたるものか。

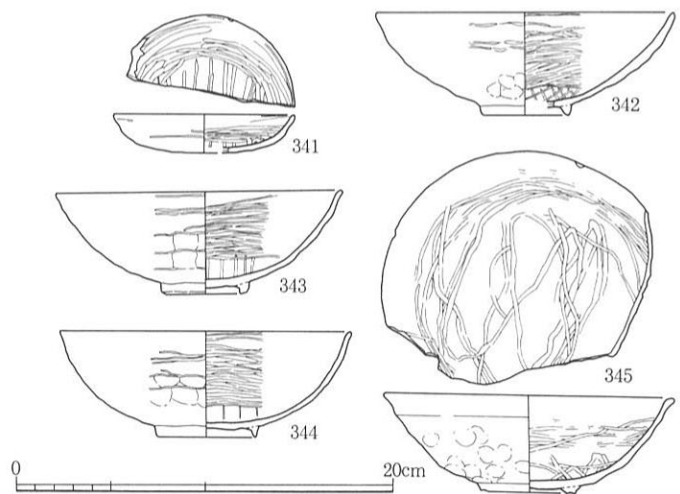


図98 井戸E-12出土土器

15) 井戸E-13 (図99・100、写真図版43・64、カラー写真5-356・357)

ここからは平安時代と思われる須恵器細片が2点と中世の遺物、瓦破片が少量、木簡が1点出土している。内訳は土師器皿5点、土師質羽釜4点、瓦器皿3点、瓦器碗20点、瓦質甕体部3点、瓦質羽釜脚部破片1点、中国白磁碗2点、須恵器練鉢1点、信楽甕口縁1点、底部1点、体部破片5点、根石破片1点、砂岩製砥石?1点である。瓦器碗はI-2~3期が1点、III-3~IV-1期が5点、IV-1~2期が13点、IV-3~4期が1点みられる。土師質羽釜は河内B1d型が1点、河内B1e型が3点である。

346~349は土師器皿である。色調は灰白色を呈する。調整は内面がなで、口縁部が横なで、外面は指

押さえの後などでている。347は口縁部外面の横なでが強く、体部との境に稜ができています。346と349の底部外面は一部砂粒の動いた痕跡がみられる。

350はやや浅めの瓦器皿である。内面には二次的な火を受けたものか、表面の炭素が消し飛んでいる。内面の暗文は不明である。

351～355は高台の退化して紐状となった瓦器碗である。351、352は見込みに平行の暗文が、353は詳細は不明であるが、ラセンと渦巻き状を組み合わせた様な暗文が、354、355は底部から口縁部に向かって間隔の粗い渦巻き状に暗文が施されている。Ⅲ-3～Ⅳ-1期にあたるものか。353を除く瓦器碗の外面ないし両面には重ね焼きの際の色調の変化部分がみられる。

356、357は中国製の厦門碗窯系白磁碗Ⅳ2類である。

358は瓦質羽釜または鍋の脚破片である。直径2～2.5cmを測り、外面には煤の付着がみられる。

359～362は須恵器甕である。359の体部破片にはやや粗い平行の叩きが施されている。360は口縁端部が殆ど拡張されていず、端部上面が強いなでにより凹んでいる。体部には細い平行の叩き目が施されている。361、362の頸部はくの字状に外反し、口縁部はそのまま丸くおさめる形態で、同一個体の可能性がある。体部外面にはやや粗い平行の叩きが交差するように施されている。内面は横なでである。

363は土師質羽釜の口縁部細片で、内傾する口縁の端部は小さく外反する。河内B1d型にあたるものか。外面には煤の付着がみられる。

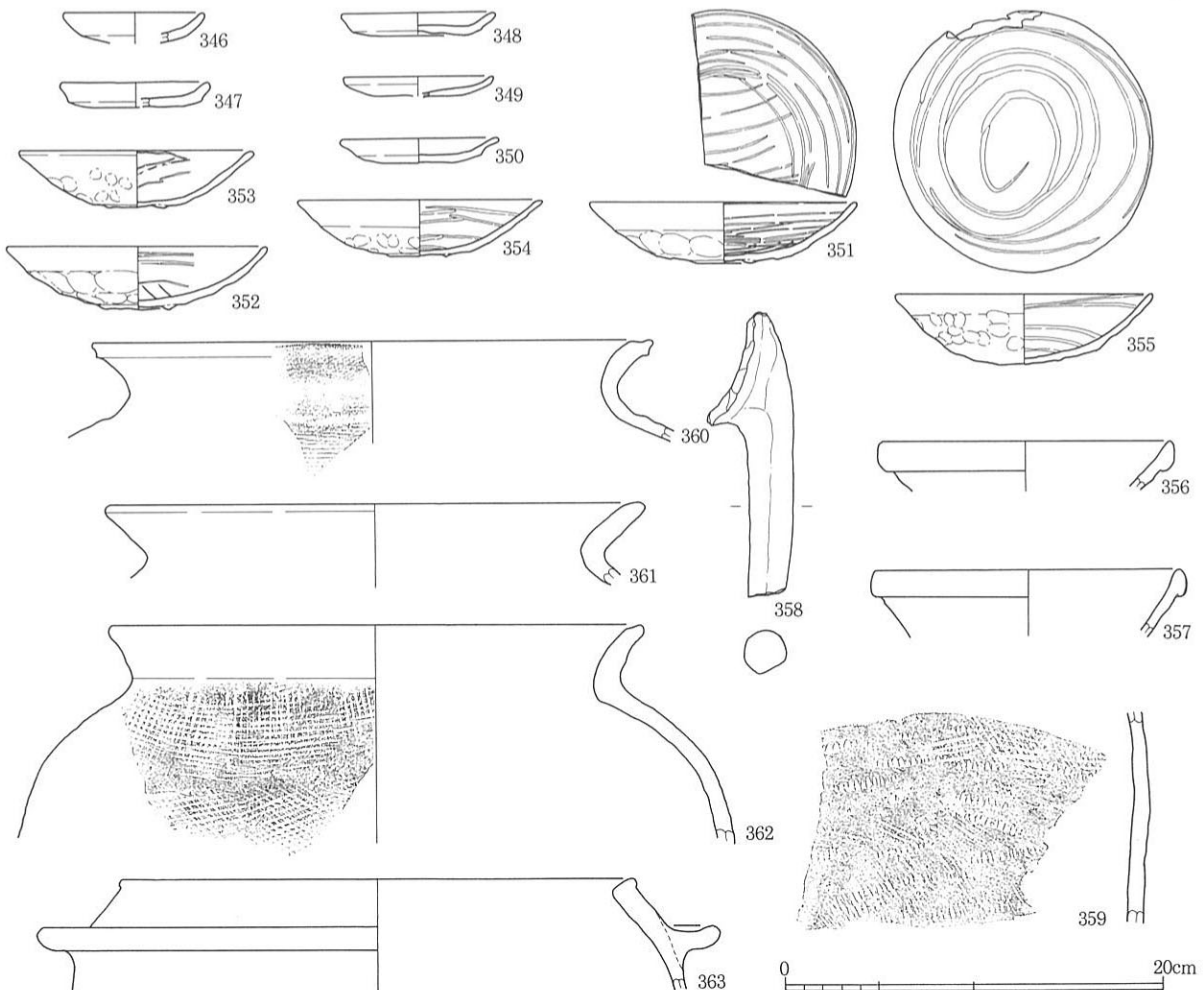


図99 井戸E-13出土土器

図100-364、写真図版64は先端を山形に削り出した薄い板の両面に墨書されている呪符である。長さ16.2cm、幅約2cm、厚さ1~2mmである。一部欠損しているが、片面には「昔蘇民将来子孫住宅也」、その裏面には「南无五大カ_____」と記されている。厄除けのまじない札である。

16) 井戸E-16 (図101、写真図版43)

奈良から平安時代の須恵器底部破片が2点と中世遺物、瓦破片が少量出土している。内訳は瓦器碗が12点、瓦器皿1点、須恵器練鉢2点、甕口縁部1点、甕体部1点、土師質羽釜5点、砂岩礫7点である。瓦器碗はⅢ-1~3期までみられる。実測したものはⅢ-2~3期と思われるもので、やや浅めの体部に退化した高台が貼り付けられ、内面のみ暗文が施され、見込みには平行の暗文が多くみられる。365の見込み暗文は粗雑な円形状に数回ぐるぐると回している。瓦器碗には重ね焼の痕跡を残すものと、粘土紐の継ぎ目を留めるものがある。須恵器練鉢は口縁端部を僅かに下方へ拡張したものがみられる。須恵器甕は頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部は上方へ僅かに拡張して、端部内面を強くなでて凹ませている。土師質羽釜は河内B1c型と河内B1d型が各1点みられる。

365~369は瓦器碗である。365の見込みには粗雑な渦巻き状の暗文がまばらに施されている。366~369は見込みに平行暗文を施した後、圏線を口縁部から体部にかけて施している。366、369の見込みの平行暗文は間隔がやや広い。365、366の体部外面には粘土紐の接合痕を留める。重ね焼きの痕跡は、程度の差はあるが、5点ともに色調の変化でみてとれる。これらの瓦器碗はⅢ-1~3期のものと思われる。

370は土師質羽釜である。内傾する口縁の端部はやや小さく外反する。調整は体部外面に右から左の横方向にヘラ削りが施されている。外面には煤の付着がみられる。河内B1d類にあたる。

以上の遺物の特徴から、13世紀前半の井戸と考えられる。

17) 井戸E-17 (図101、写真図版43・61)

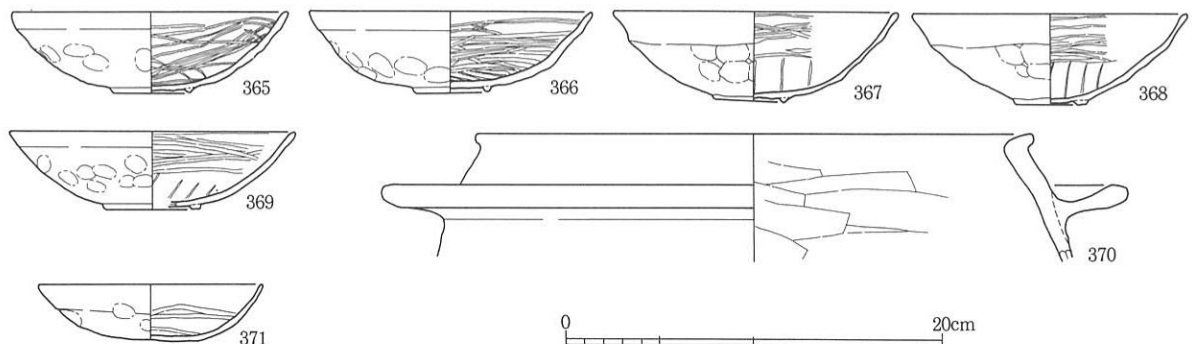


図101 井戸E-16・17出土土器

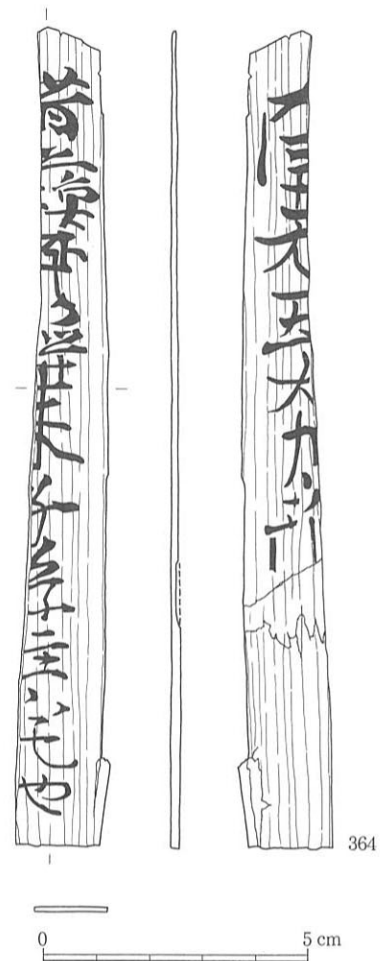


図100 井戸E-13出土木器

中世遺物、瓦破片が少量出土している。内訳は瓦器碗Ⅳ-3～4期が2点、瓦質羽釜和泉D1a型が2点、和泉K型が1点、陶器片3点（底部1点、土管？1点、体部破片1点）、須恵器練鉢体部1点、根石片1点、不明板片1点、骨1点（写真図版61-757）である。

757は牛の左上腕骨であり、骨の残存状態は悪く、青味を帯び、関節部分は欠損している。当遺跡出土の骨は、この1点のみである。

図101-371は無高台の、浅くて口径の小さい瓦器碗である。内面には2～3回楕円形状に暗文を描いている。口縁部の一部と底部外面に、重ね焼きの痕跡と思われる色調の変化がみられる。

18) 井戸E-18

数点の遺物が出土している。遺物の図化はしていないが、内訳は古墳時代か不明の須恵器の平底1点、瓦器碗口縁部破片4点（Ⅲ-2?期が2点、Ⅳ-1期が2点）、土師質羽釜河内B1e型1点である。

(5) 土坑

B・C・D・Eトレンチから検出された土坑の一部を図化した。

1) 土坑B-4 (図102、写真図版44)

土坑B-4からは土師器、瓦器碗、瓦器皿、須恵器、滑石製石鍋、瓦質土器、陶器、中国陶磁、瓦破片などが出土している。土師器は皿の細片が少々多く、羽釜は河内B1d型、河内B1e型がそれぞれ細片で数点みられる。瓦器はⅡ-1からⅣ-1～2期までの高台が残存するもの31点を数える。なかでもⅡ-3～Ⅲ-1期にかけての瓦器碗が若干多い。須恵器は陶邑Ⅲ～Ⅳ型式の蓋杯破片が数点みられる。中世の須恵器では練鉢口縁部が2点みられ、口縁端部は僅かに上または下に拡張している。瓦質甕は須恵器の甕口縁部形態と類似破片が1点だけ認められた。このほか、滑石製石鍋の体部細片1点や、中国白磁片、国産陶器破片、鉄滓片、焼土塊片、緑色片岩片、凝灰岩の破片などがみられる。

372は土師器皿、373、374はⅡ-3～Ⅲ-1期の瓦器碗である。375は口縁端部が上方へ拡張した、須

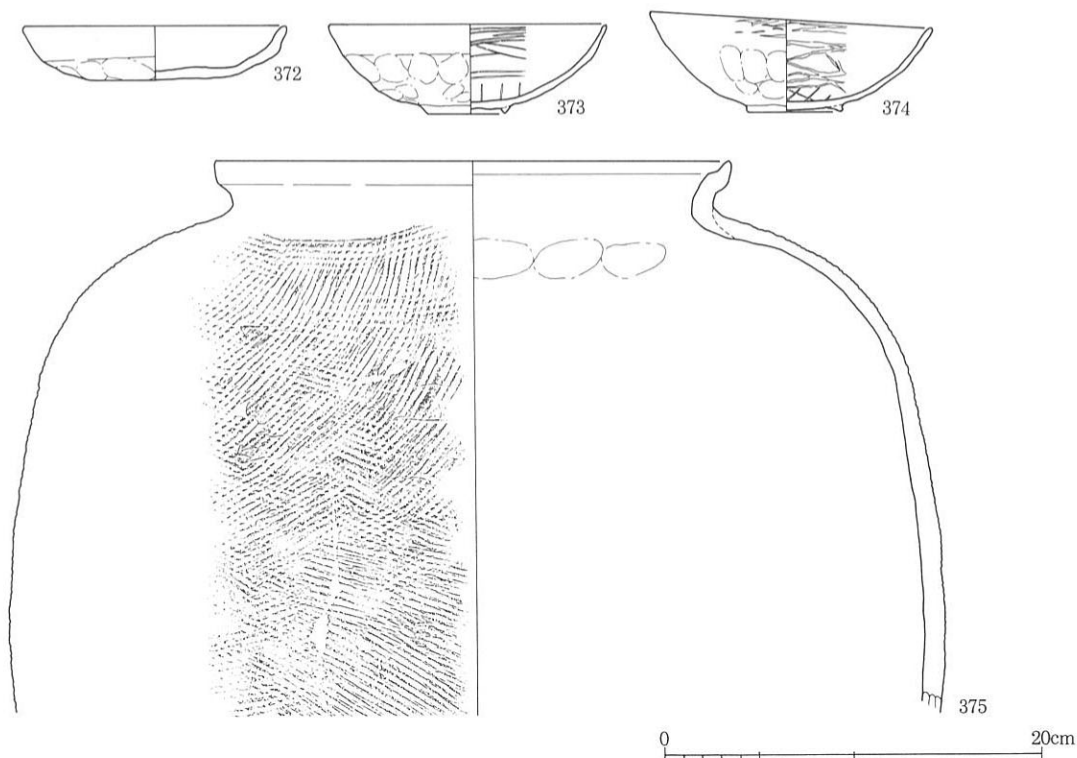


図102 土坑B-4出土土器

恵器甕の体部上半が残存するもので、体部外面にやや目の粗い平行叩き、内面はなで調整している。この甕は、隣の遺構である井戸3から出土の破片と接合した。

2) 土坑C-4 (図103、写真図版44)

ここからは土師器、瓦器皿、瓦器碗、須恵器が少量と、炭、焼土塊細片が出土している。土師器は皿数点と、羽釜は河内B1cとd型の間のようなもの(384)が1点である。瓦器は細片が多いが、碗高台でII~III期のものが少々みられ、なかでもII期が多い。須恵器鉢は口縁端部が下方に僅かに拡張したものが1点みられる。このほか、ミニチュアの土師質羽釜の鏝破片と思われるものが1点ある。

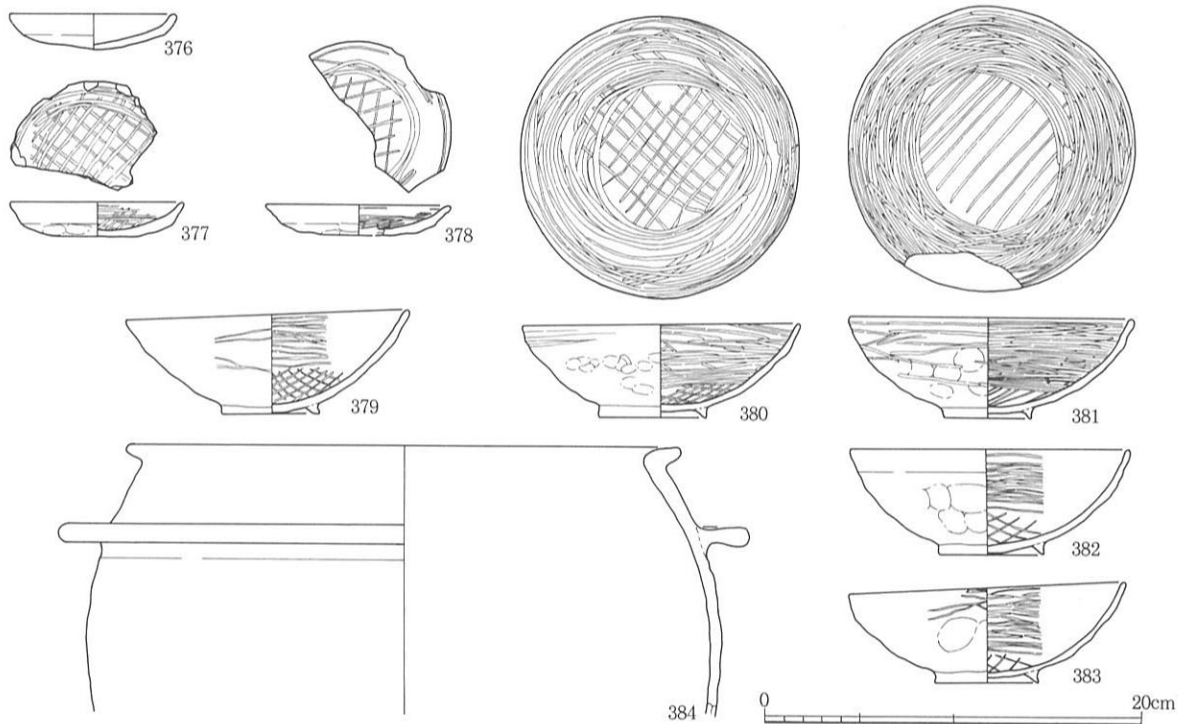


図103 土坑C-4出土土器

376は土師器皿、377と378は見込みに格子暗文を施した瓦器皿である。379~383の瓦器碗はII-2~III-1期にあたると思われるものである。見込みの暗文は381が平行、それ以外のものは格子である。

3) 土坑D-1 (図104、カラー写真4-675)

ここからは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、中国陶磁器、焼土塊細片などが出土しており、赤片した土器片が含まれている。瓦器はI-3~II-1?、II-2~3、III-1~2、IV-1~2の各時期の高台細片が少量みられる。土師質羽釜では河内B1e型細片が1点、土師器皿細片が少々みられる。須恵器では甕体部破片、練鉢体部片が各1点である。瓦質では脚破片が1点みられるのみである。中国陶磁器では龍泉窯系青磁蓮弁文碗I5b類が1点(675)ある。

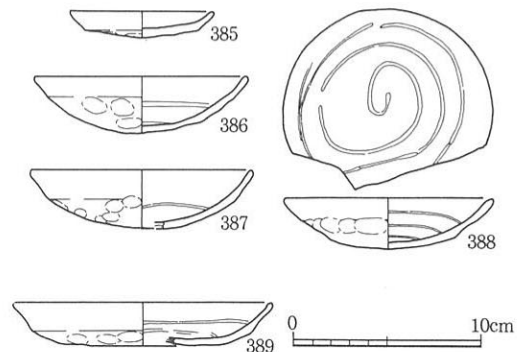


図104 土坑D-1・2出土土器

385の土師器皿は底部と口縁部の境に稜を持つ。386~388の瓦器碗では高台が認められず、暗文もまばらに見込みから口縁部にかけて渦巻き状に施されている。IV-3~4期のものか。

4) 土坑D-2 (図104)

ここからは瓦器碗細片が3点出土している。389は高台が消失した器高の低い形をなし、内面には渦巻き状のまばらな暗文が施されている。底部外面に粘土接合痕、重ね焼の痕跡を留める。IV-4期にあたるものか。

5) 土坑E-27 (図105)

建物E-5の西側を巡る溝E-7の西側を切る土坑E-27から、奈良から平安時代、中世の遺物が出土している。内訳は、須恵器杯蓋、須恵器横瓶?、須恵器甕、土師器皿、土師質羽釜細片、瓦器皿、瓦器碗が少量と瓦破片などである。

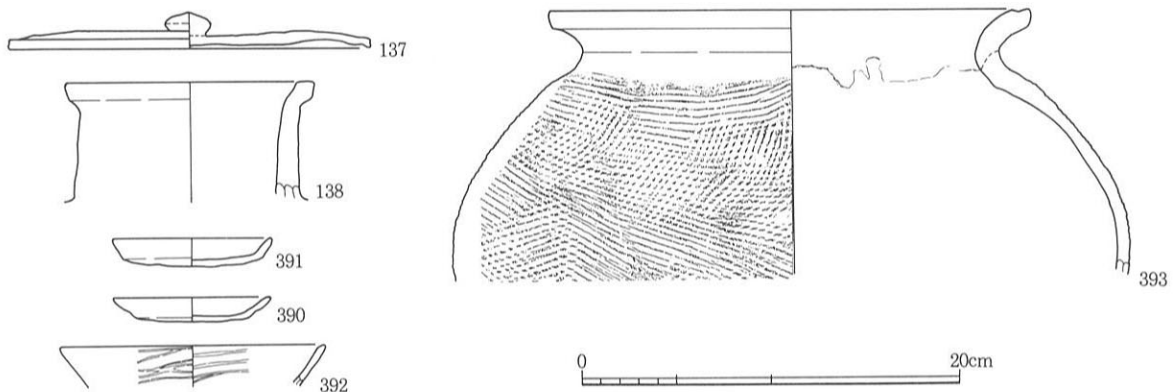


図105 土坑E-27出土土器

奈良から平安時代の遺物と思われるものでは、137は扁平な天井部外面に擬宝珠様のつまみがついたもので、口縁端部寄り外面に重ね焼きの痕跡を留める。平安京Iの時期にあたるものであろう。138はやや細めの直立した頸部に少し外反する口縁部を持つもので、口縁端部上面は平坦である。ごく僅かに残る肩部はほぼ水平に近く張り、外内面の屈曲部分はほぼ直角をなす。内面調整は頸部と肩との接合部まで青海波状の叩き目を留める。外内には自然釉がかかっている。形態および調整の特徴から、奈良時代の横瓶か。

390、391は土師器皿である。390は色調が灰白色を呈し、底部外面には砂粒の動きがみられるが、ヘラ削りの後なでたものか。391は火を受け、赤く変色している。

392は瓦器碗細片である。口縁部内外面にやや密な暗文が施されている。この瓦器碗はII-2~3期にあたると思われる。

393は須恵器甕である。外反する口縁の端部上面は強くなでられ凹んでいる。体部にはやや粗い平行叩きが、部分によって綾杉状に交差している。内面は横方向のなでである。

瓦器碗、須恵器甕などの特徴から、12世紀代の遺構と推定される。

6) 土坑E-35 (図106、写真図版44・60)

埴輪細片、土師器皿、土師質羽釜細片、瓦器碗、瓦質羽釜、瀬戸播鉢?底部破片、須恵器鉢、瓦、鉄滓細片、根石の破片かと思われる石などが出土している。これらのうち、瓦および石に一部、火をうけているものがみられる。

瓦器碗(394~401)は高台の退化してなくなった形の内面に渦巻き状暗文を施した、IV-3~4の時期にあたるもので、完形ないし完形に近いものが、およそ10個体みられる。402は瓦質片口鉢で、粘土接合痕を外面に留め、内面には同心円状の暗文かと思われるものが認められる。

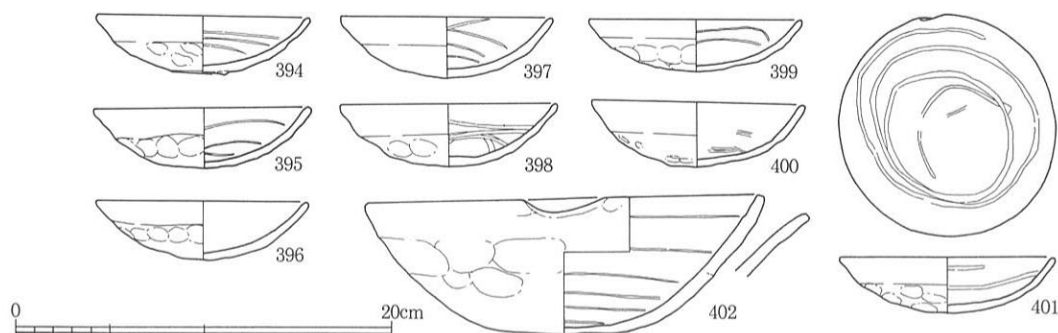


図106 土坑E-35出土土器

瓦器碗の特徴から、この土坑は13世紀末から14世紀前半頃の時期と推定される。

この土坑から出土したと考えられるもので、写真図版60-754にみるような、かなり摩耗して赤変した平瓦の破断面に、1.5cm×0.7cmの瓦器細片を含むものが1点認められた。

(6) 落込

1) 落込E-11 (図107)

ここからは瓦器碗口縁部細片、土師質羽釜体部細片、瓦質羽釜1点が出土している。403は内傾した口縁部外面に段を持たない瓦質羽釜である。罫は短く、体部外面の調整はなでである。胎土中には微粒の金雲母を多く含む。菅原編年の河内J a'型にあたるものとすれば、14世紀代のものか。

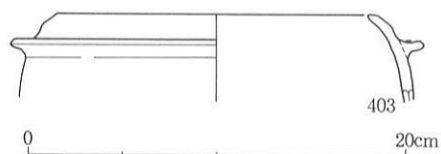


図107 落込E-11出土土器

(7) 畦畔

1) 畦畔D-1 (図108、カラー写真4-676)

C17h 7~9の地点から畦畔D-1が検出されている。上層、下層からは古代から中世にかけての遺物がごく少量出土しており、上・下層の遺物に時期差は認められない。須恵器では生焼けの甕体部破片、土師器では胎土中に角閃石を含む羽釜破片、土師器皿、中国白磁碗、瓦器皿、瓦器碗、焼土塊細片が出土している。瓦器碗はI期とIV-1~2期の高台各1点がみられる。

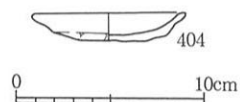


図108 畦畔D-1
出土土器

404は畦畔D-1下層から出土した瓦器皿である。口縁部にかなり歪みがみられる。内底面には暗文が微かに残るが、表面が荒れており、詳細は不明である。カラー写真4-676は厦門碗窯系白磁碗IV 2類である。瓦器碗、中国白磁碗の時期から、この畔は13世紀代にあたる。

(8) 包含層、その他

1) 包含層、その他 (写真図版51、カラー写真3)

中世以降の包含層、その他からも中国陶磁器が少々出土している。B地区からは663の白磁皿、664~666の厦門碗窯系白磁碗IV 2類、667の白磁四耳壺III類、668、669の同安窯系青磁皿I 1 b類、670の龍泉窯系青磁碗I 5 b類、671の同安窯系青磁碗I 1 b類が出土している。F地区からは741の龍泉窯系青磁碗I 5 b類、744の龍泉窯系青磁印字文碗が出土している。

3. 室町時代

瓦質土器が多くみられ、瓦器が伴わない時期のものをここで述べる。

ピット、溝、井戸、土坑、落ち込みからは、この時期の遺物が大量に出土している。

(1) ピット

1) ピットF-701 (図109)

ピットF-701からは土師器皿1点が出土している。405の土師器皿はやや平たい底部から大きく緩やかに外反して開く口縁部を持つ。15~16世紀頃の遺構と思われる。

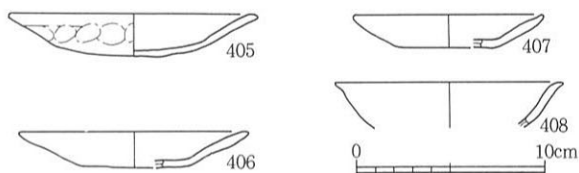


図109 F地区ピット出土土器

2) ピットF-702 (図109)

ピットF-702からは土師器皿が数点出土している。406の土師器皿は平たい底部から屈曲して大きく緩やかに外反して開く口縁部を持つ。16世紀頃の遺構と思われる。

3) ピットF-705 (図109)

ピットF-705からは土師器皿、土師質羽釜細片、土師器甕体部細片、中国白磁皿1点、陶器細片などが出土している。407の土師器皿は平たい底部から屈曲して直線的に斜め上外方へ大きく開く口縁部をもつ。408は口縁端部が反った中国白磁皿E-2類か。土師器皿、中国白磁皿から15~16世紀の遺構と思われる。

(2) 溝

1) 溝F-81 (写真図版61)

ここからは奈良から平安時代の須恵器細片が数点と、中世遺物が少量出土している。中世遺物の内訳は土師器皿、瓦質甕、鉢、羽釜、陶器破片、中国青磁碗高台破片などである。瓦質甕は内傾する体部の延長上に、やや丸みを帯びた口縁部のついたものである。このほか、滑石製の不明品1点、焼土塊細片などがある。写真図版61-756は長さ8.9cm、幅6.8cm、厚さ約2cm、重さ225gの板状の滑石である。表・裏面ともに剥がれた面をなし、隣り合う2辺がほぼ直角に面を研磨している。温石か、何の未成品か不明である。

2) 溝F-101 (図110)

ここからは土師器皿が2点、瓦細片が出土している。

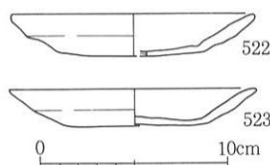


図110 溝F-101
出土土器

図110の土師器皿は2点ともに平底に近い。底部から斜め上方に直線的にのびる口縁の端部は横なでされ、さらに僅かに端が反れている。器壁は522がやや厚手、523がやや薄手である。調整は522が底部外面を指押さえ、なでで仕上げているのに対し、523は底部外面をヘラ削りし、薄く仕上げている。内面はなで、横なでである。522の底部と口縁部の境の内面には浅い凹みが巡る。土師器皿の特徴から、16世紀頃の遺構と思われる。

3) 溝F-104 (図111)

ここからは土師器皿が数点出土している。いずれも409のように平たい底部から大きく緩やかに外反して開く口縁部を持つ。15世紀頃の遺構と思われる。

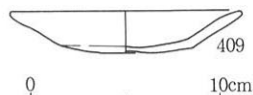


図111 溝F-104
出土土器

(3) 井戸

1) 井戸D-8 (カラー写真4-673・674)

ここからは中世遺物がごく少量出土している。内訳は土師器皿、瓦器碗、中国白磁碗、中国青磁碗、焼土塊細片などである。写真図版には中国陶磁器を掲載した。673は厦門碗窯系白磁碗IV1類、674は龍

泉窯系青磁印花文碗で、破損部を打ち欠き再加工している。

2) 井戸E-6 (図112、カラー写真5-410)

ここからは古墳時代と中世の遺物が出土している。古墳時代の遺物では、土師質および須恵質の埴輪片が各1点、須恵器II-5段階の挿鉢片1点である。中世遺物では土師器皿3点、瓦器椀2点、土師質羽釜1点、土師質甕2点、瓦質羽釜1点、瓦質甕2点、瓦質挿鉢1点、須恵器練鉢1点、須恵器甕体部破片、常滑甕1点、中国白磁碗1点、近世染付体部破片2点、瓦などが出土している。

瓦器椀はIII-2~3期が2点である。瓦質羽釜は河内D1b型、土師質羽釜は河内B1e型で、瓦質挿鉢は口縁端部が下方に僅かに拡張されたものがある。土師質甕は頸部で屈曲し、短い口縁の端部は丸くおさめた形態をなす。近世遺物は混入か。410は中国白磁碗D類の口縁部破片であり、やや小ぶりで、口縁端部が外側へ反っており、釉は全面にかかっている。



図112 井戸E-6
出土土器

3) 井戸E-14 (図113)

ここからは奈良時代の須恵器、中世の須恵器鉢、土師器、瓦器、瓦質挿鉢、瓦質羽釜、瓦などが出土している。奈良時代の遺物は陶器IV型式かと思われる須恵器高台が1片みられるのみで、他の破片は中世遺物である。

中世遺物では須恵器の練鉢細片1、瓦質挿鉢1点、瓦質羽釜1点などがみられる。411は瓦質の片口付き挿鉢で、口縁端下部はやや鈍角的になっている。注ぎ口は僅かに残る。体部外面は上部が横方向、下部は斜め方向にヘラ削りが施されている。内面には細かい横方向のハケ目の後、卸し目がつけられている。412の瓦質羽釜は口縁部がほぼ直立ぎみに立ち上がり、口縁部外面は凹線状の2つの段を有する。体部外面

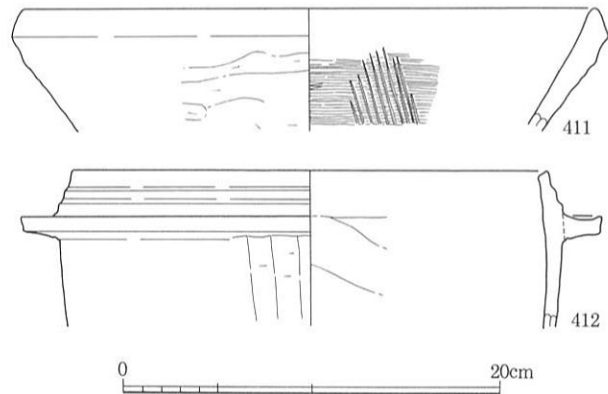


図113 井戸E-14出土土器

は幅広く左→右の横方向にヘラ削りを施している。内面はなでである。外面全体に煤の付着が認められる。河内D2a型に近いものか。これらの特徴から、15世紀後半の井戸かと思われる。

4) 井戸E-22 (図114、写真図版43・47)

井戸E-22からは古墳時代の須恵器甕体部破片が1点と中世遺物が少々出土している。

中世遺物の内訳は、土師器皿10点余、土師質羽釜3点(河内B1d型1点、和泉D2a型1点、不明1点)、瓦器椀細片、瓦質羽釜14点(和泉D1a型2点、和泉D1b型1点、和泉D1c型2点、和泉D2a型9点)、脚1点、瓦質挿鉢5点、瓦質甕4点、瓦質火舎?1点、瀬戸灰釉卸皿1点(写真図版47-711)、備前底部破片1点(写真図版47-712)、備前挿鉢体部片1点、瓦破片、焼土塊少量、根石片6点などが出土している。

413~421は土師器皿である。413~415が口径8cm以下の小形、416~418が口径10cm前後の中形、419~421が口径12cm前後の大形である。色調は413と418が灰黄色、414が黄灰色、421の内面が浅黄橙色、外面はその他の土師器皿と同じ淡黄色を呈する。413の口縁部には少し歪みがみられる。415、416は底部が上げ底のへそ皿である。418の口縁部外面は指押さえにより一部へこんでいるが、底部と体部の境に稜が見られず、413、414の小皿を大形にしたような形状をなす。417と419~421は類似した形状で、

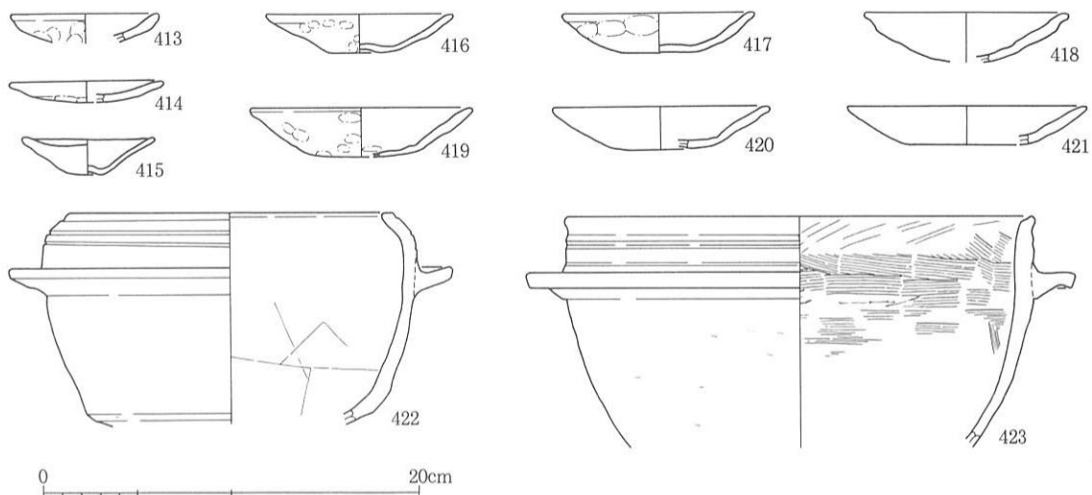


図114 井戸E-22出土土器

平底に近い底部から直線的に斜め上方に開く口縁部をもつ。15世紀代の土師器皿の特徴に類似すると思われる。

422、423は土師質羽釜である。422は直立した後内傾する口縁部の外面に、凹線1条、沈線2条が巡るやや小ぶりの羽釜である。底部と体部の境には稜がみられ、平底に近い形で、鉄釜を模したような形状をなす。底部外面には左から右方向にヘラ削りが施されている。体部外内面はなで調整である。口縁部内面にはかすかに横ハケが残る。外面には煤が大量に付着している。菅原編年の河内Jb'型にあたるものか。423は直立する口縁部外面に凹線状の凹みが3条巡る。口縁端部は内傾した平坦面をなす。調整は体部外面を横方向にヘラ削りし、内面は斜めないし横方向にハケ目を施している。外面に煤の付着が著しい。菅原編年の和泉D2a型にあたるものか。

土師器皿、羽釜の特徴から、この井戸は15世紀代のものと推定される。

5) 井戸E-32 (図115)

ここからは瓦質挿鉢体部破片、瓦質甕体部破片、瓦とともに土師器の大甕が出土している。

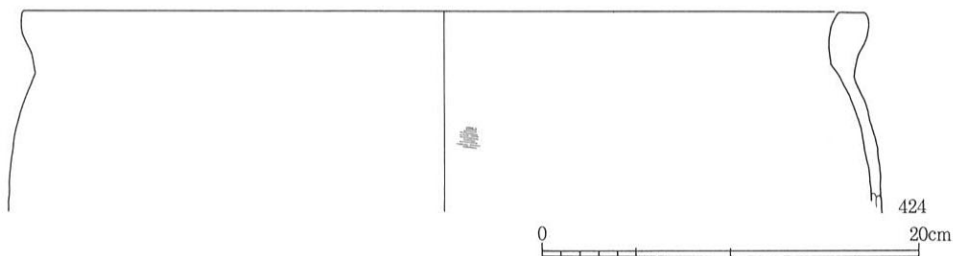


図115 井戸E-32出土土器

424は肩部から頸部にかけて僅かに内湾し、口縁部はほぼ直立する。口縁部の断面は四角形状を呈する。外面調整は表面の残り状態が悪く不明、体部内面には縦の後、横方向にやや粗いハケ目調整が施されている。

6) 井戸F-7 (図116)

ここからは大量の土師器皿、少量の瓦破片が出土している。口縁残存が1/6以上のものを対象に点数を数えると177点ある。これらの皿は、口径が7~16cmまでみられ、1cm刻みに大きさが異なり、最も多いのは14~15cmの間である(426、427)。底部の凹んだへそ皿(425)は口径11cmと16cmに偏る。また、

厚手の皿は口径が小さめで、7～8 cmの間におさまる。

土師器皿以外には、瓦質羽釜（428）1点、瓦器細片、須恵器甕体部、土師質羽釜の破片が僅かにみられる。

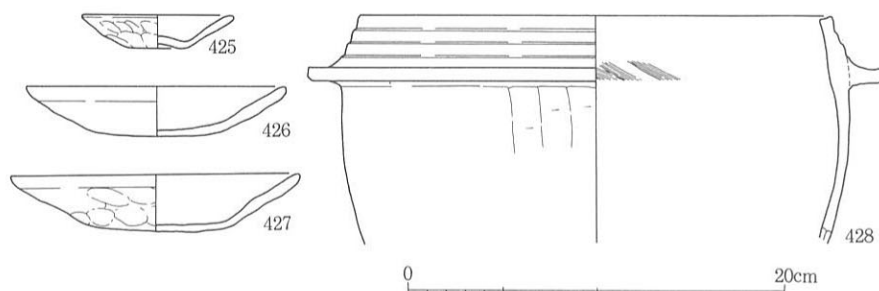


図116 井戸F-7出土土器

7) 井戸F-11 (図117)

ここからは土師器皿、瓦器？細片、瓦質甕、瓦破片が出土している。

429、430は瓦質甕口縁部破片である。429は屈曲した頸部に短い口縁部がつく。430は短く直立した後

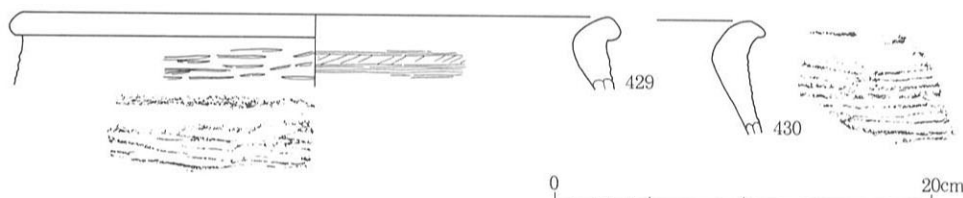


図117 井戸F-11出土土器

小さく外反する口縁部をなす。2点ともに体部外面には横方向の粗い平行叩きが、内面には横方向のハケ目が施されている。これらの甕は、口縁部の短い特徴から、15世紀前半頃の特徴を示すと思われる。

(4) 土坑

1) 土坑E-37 (図118～120、写真図版33・47・48・54・61・62)

ここからは古墳時代から中世までの遺物が大量に出土している。特に瓦の破片が多く、遺跡全体での瓦出土量の約2割強を占める。古墳時代から奈良・平安時代の遺物には、須恵器では陶邑II～V型式までの時期範囲で、窯壁付着の破片、器台、杯、直口壺、甕などの器種があり、また、土師器では奈良時代の製塩土器がある。埴輪では土師質の円筒埴輪、朝顔形埴輪、須恵質の円筒埴輪破片がある。また、時代は遡るが、サヌカイト剥片が1点みられる。平安時代から中世の遺物では土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、瓦質灯明台、陶器、中国青磁、石鍋、鉄滓、砥石、瓦、凝灰岩製五輪塔、相輪の破片などがある。灯明台、瓦、五輪塔、相輪の詳細については、付章のとおりである。

中世遺物の内訳は土師器では皿、羽釜、瓦質土器では甕、挿鉢、羽釜、須恵器では甕、練鉢、陶器では信楽壺、備前挿鉢、甕、常滑甕、瀬戸瓶子などがある。

土師器皿では、431のへそ皿、432～434のような平底から斜め上方へ直線的にのびる皿の2種類と、短く湾曲する口縁部をもつものがあり、431～434のような形態のものが多い。

435は瀬戸鉢の破片である。外内に淡黄色ないし浅黄色の釉がかかっている。

羽釜には土師質と瓦質があり、438～443のうち、441、443は瓦質、それ以外の形態のものには瓦質、土師質の両方がみられる。但し、火を受けた遺物が多いため、438のような形態は瓦質の変色した可能性が高い。出土量は438のような形態のものが最も多く、また、上記以外に、把手付きの瓦質羽釜の頸部から体部にかけての破片が1点みられる。

瓦質挿鉢には口縁端部を下に僅かに拡張した形態のものが多い。瓦質甕では短い直立した頸部をもち、

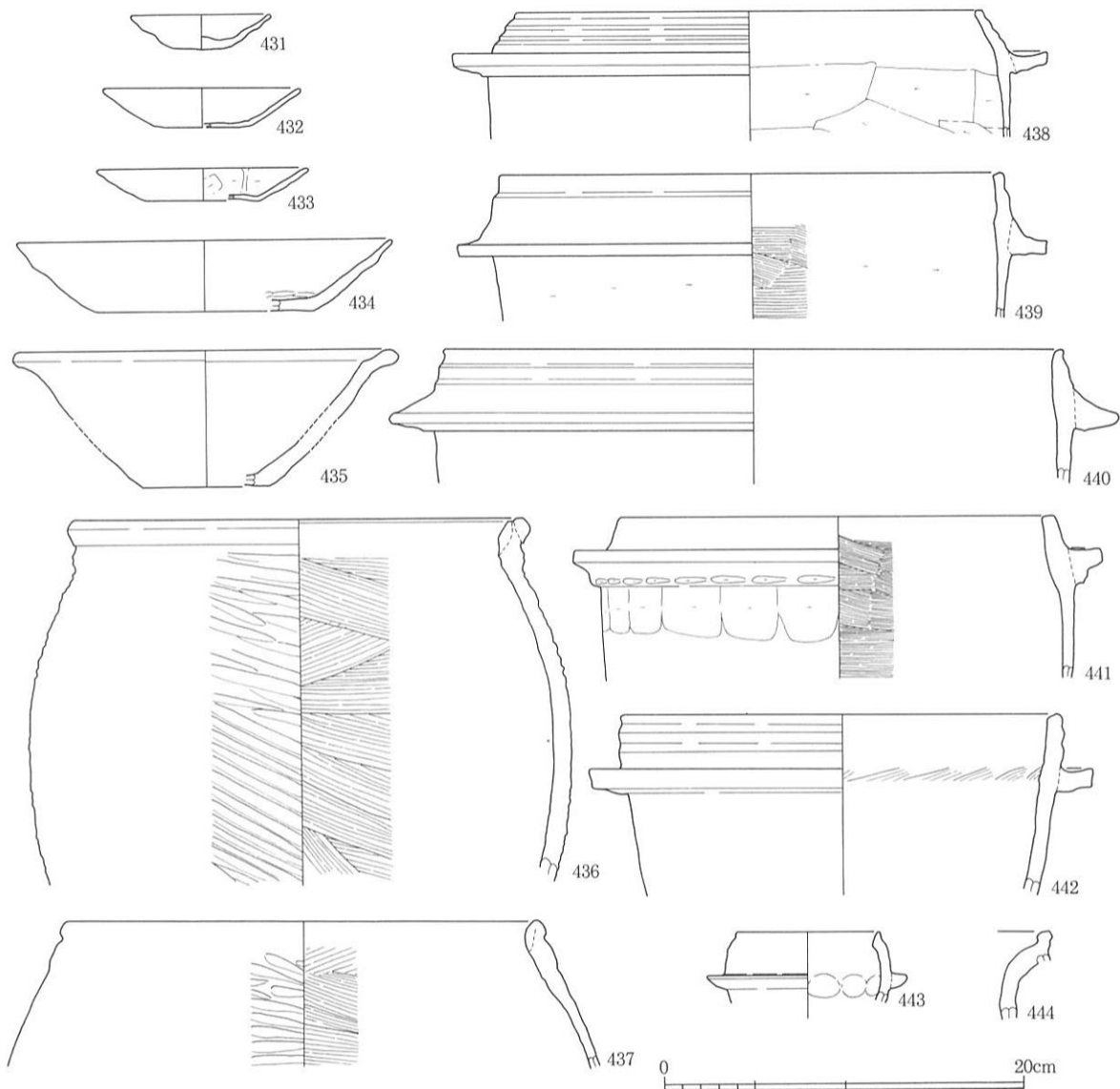


図118 土坑E-37出土土器

口縁部で短く外反するもの(436)と、肩部の延長上に肥厚した口縁部をもち、端部を丸く収める形態(437)のものが多くみられる。

陶器(写真図版47、48)には瀬戸鉢(写47-435、715)、瀬戸灰釉深皿?(写47-714)、瀬戸花瓶(写47-716)、瀬戸瓶子(写47-717)、常滑甕(写48-444、718、719)、信楽甕(写48-720)、信楽壺(写48-721)、備前播鉢(写48-722~724)、備前甕(写48-725、726)がある。

石鍋(写真図版61-755)は滑石製の口縁部細片が1点みられる。鏝は小さく、断面幅狭の蒲鉾形状を呈する。口縁部はほぼ直立し、端面はほぼ平坦であるが、内面側に面とりを施している。外面には煤の付着がみられる。破損部には擦ったような痕跡を留めるが、何に再加工したものか不明である。

図119-445は瓦質の灯明台と称されているものである。直径7.8cm、厚さ2.6cmの円板状土製品の中央に、一辺1.2cmの四角い孔を開けたもので、片面には「寺」の刻字が、裏面には四角い穴からのびる幅0.4cm、長さ1cmの溝状のものが残る。この溝は残存長で1cmのため、もっと長くなる可能性もある。この瓦質製品は表面に炭素の吸着がみられるが、破損断面は土師器の色をなす。胎土中には8mm以下のチャート、長石、石英粒を少し含む。調整は裏面に一部、砂粒の動いた痕跡がみられるが、全面なで

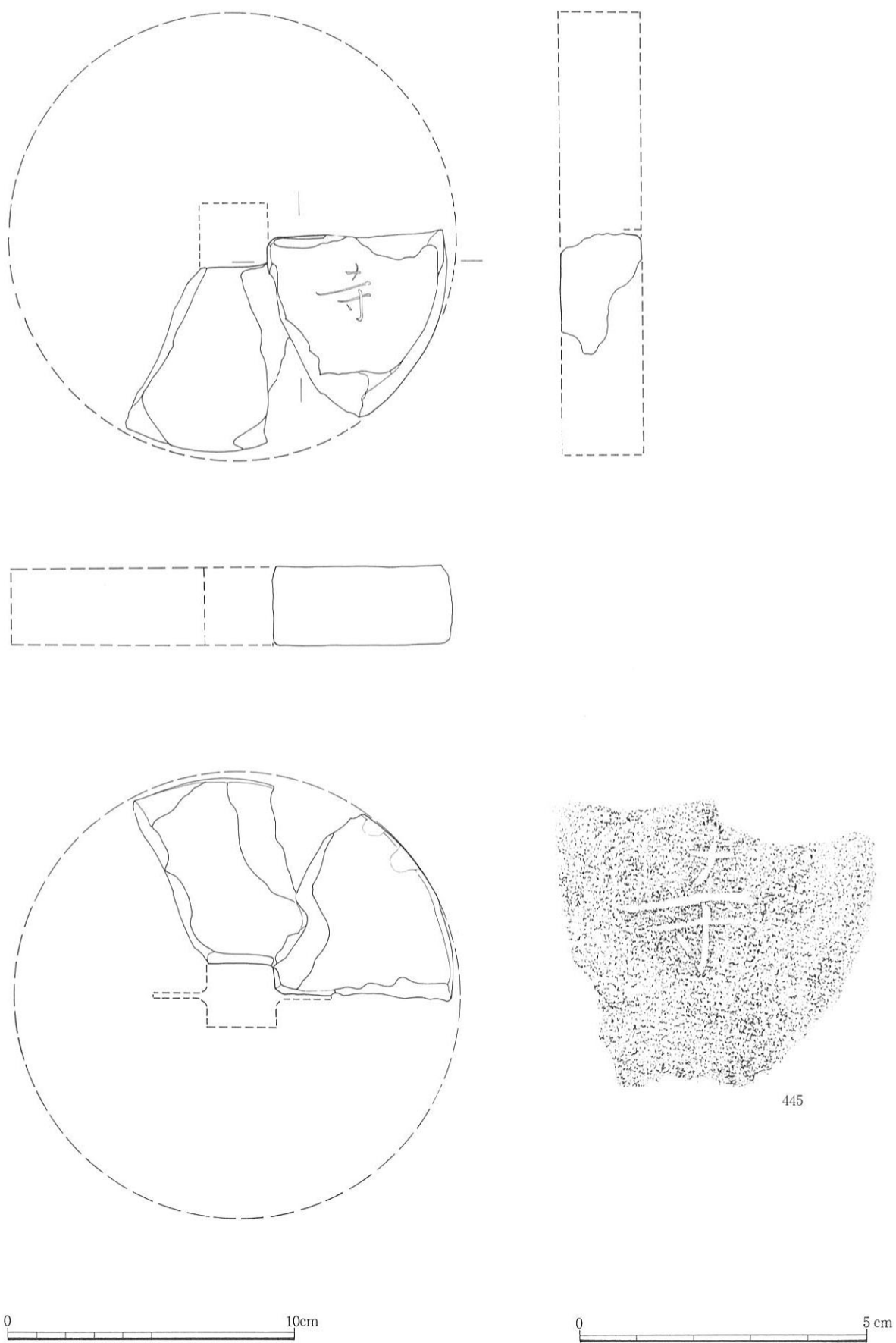


图119 土坑E-37出土土製器

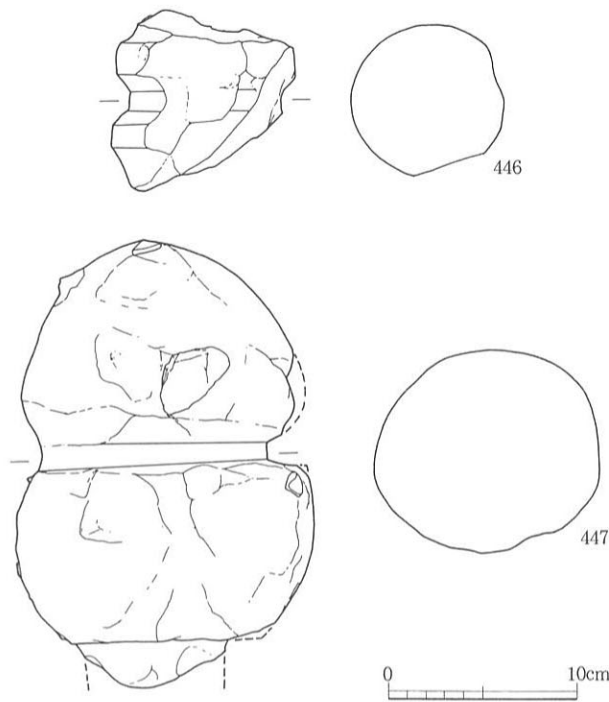


図120 土坑E-37出土石製品

以下にあり、古様相を示している。時期は、鎌倉前期から鎌倉中期ごろと考えられる。(相輪・五輪塔：西山)

2) 土坑E-39 (カラー写真6)

ここからは形象埴輪の破片と思われるものから、中世須恵器鉢、土師質羽釜、土師器皿、瓦器、瓦質甕、瓦質羽釜、瓦質火舎、中国青花皿、瓦、焼土塊、砥石などの中世遺物が少々出土している。682は景德鎮窯系青花太湖石皿である。

3) 土坑E-41 (写真図版49)

ここからは古墳時代の須恵器細片1点、奈良から平安時代かと思われる須恵器細片数点以外に、中世遺物が少々出土している。瓦器碗、瓦質土器、土師器、須恵器、陶器、中国陶磁器、瓦などのほか、溶解炉の破片かと思われるもの1点がみられる。写真図版には陶磁器を載せた。廈門碗窯系白磁碗Ⅳ1類(727)、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(728)、龍泉窯系青磁線描蓮弁文碗(729)、景德鎮窯系青花雷文帯碗(730)、備前播鉢(731)がある。

4) 土坑E-45 (図121・122、写真図版50・54・59・62、カラー写真8)

ここからは古墳から奈良時代、中世の遺物と大量の瓦が出土している。特に瓦の出土量は当遺跡出土量全体の約1割弱を占める。古墳から奈良時代の遺物には土師質の埴輪破片と、須恵器の陶器Ⅱ～Ⅴ型式かと思われる時期のものがあり、器種は器台片、蓋、杯、甕などの破片がみられる。

中世遺物では須恵器練鉢、瓦器碗、瓦器皿、瓦質の鉢、甕、羽釜、灯明台、土師器の皿、羽釜、中国陶磁器(449～453、カラー写真8-690)、備前種壺(454)、備前播鉢(455、写50-738)、備前甕(写50-739)、瀬戸灰釉御皿(写50-737)などがある。このほか、五輪塔1点(写62-760)、根石2点、砥石1点もみられる。

土師器皿はへそ皿が2点で、それ以外は448のような形状のものが少々ある。

瓦器碗では高台の残存するものが9点あり、Ⅲ-2～3期が4点、Ⅳ-1～2期が5点である。瓦器

ているようである。

図120-446は相輪の九輪の一部である。石材は流紋岩質火山礫凝灰岩で、二上山系の凝灰岩と考えられる。現高9.5cm、輪部の最大径は9.5cmを測る。重さは450gである。輪部と擦管との間は狭いが、丁寧に断面を台形に彫成している。径から考えて本相輪の規模は小さく、宝塔の相輪であったと思われる。

447は五輪塔の宝珠・請花である。石材は流紋岩質凝灰角礫岩で、二上山系の凝灰岩と考えられる。宝珠には径約9cmの黒色の溶結凝灰岩を含んでいる。柄を除いた高さ21.2cmを測る。重さは3350gである。宝珠と請花の間に首部、下部に高さ2.5cmの柄を造り出す。宝珠の最大径は高さの1/2

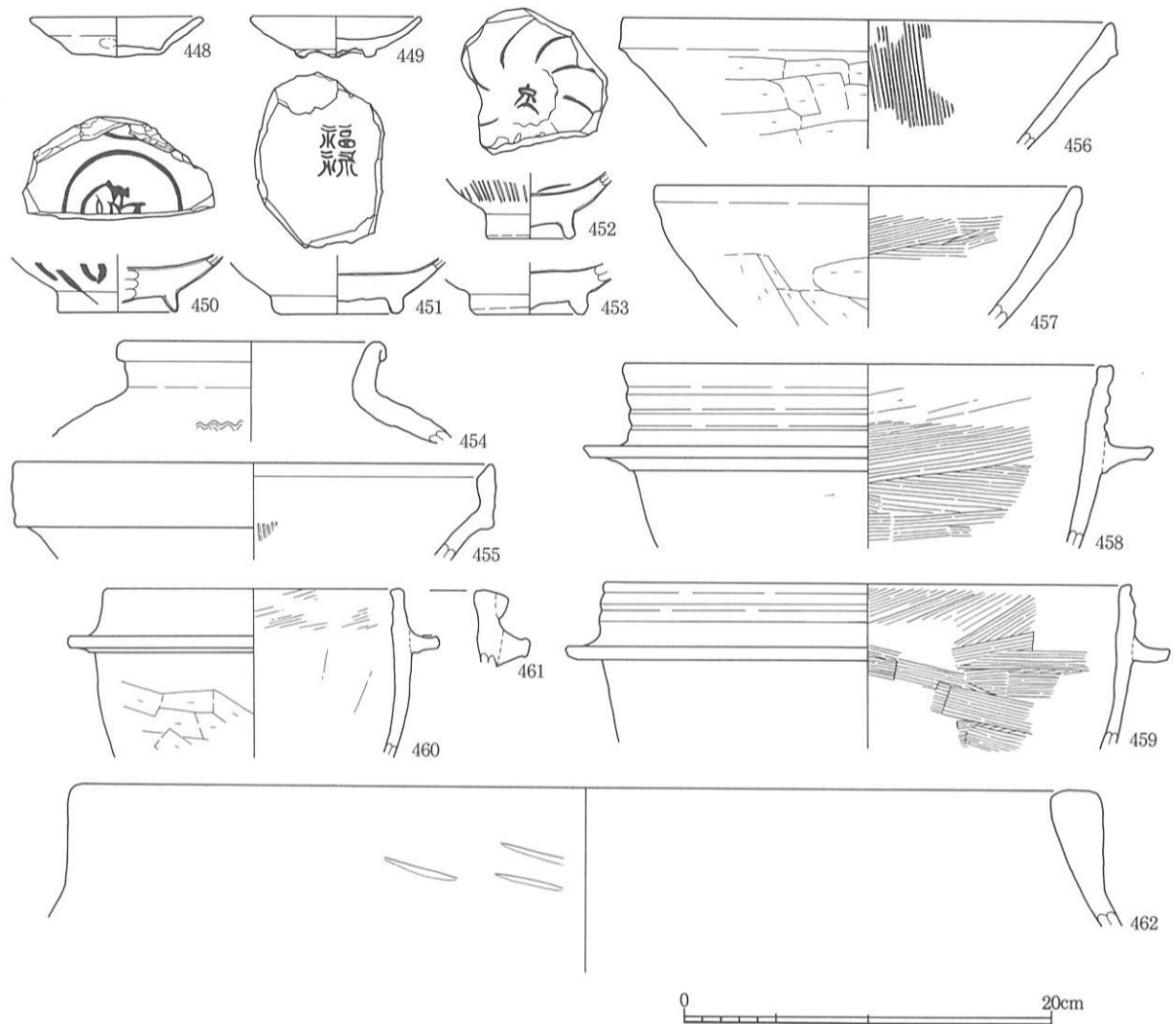


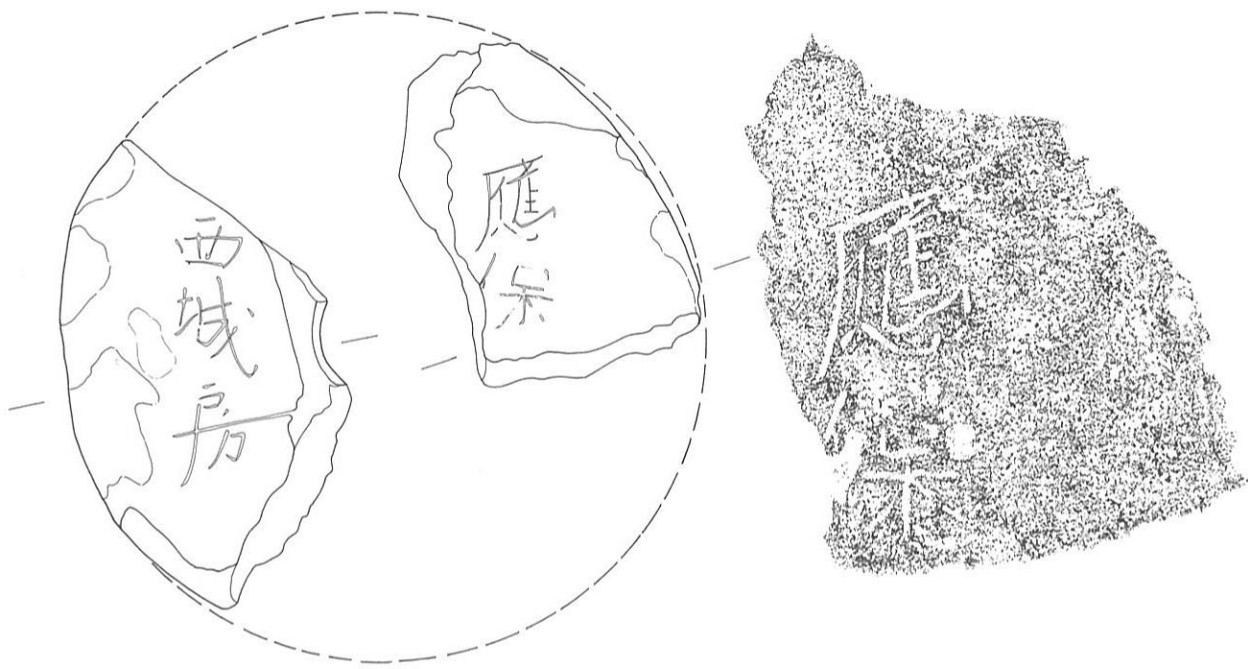
図121 土坑E-45出土土器

皿は1点のみである。瓦質挿鉢は口縁端部を下方へ少し拡張したもの(456)が多くみられる。また、口縁端部が丸みを持ち、土師質の鉢(457)も数点ある。甕は古い特徴を示す破片が1点だけ認められるのみで、多くみられるのは短い頸部に外反した短い口縁部をもつもの、肩部の延長上に口縁部が丸みを持って肥厚した形態のもので、口縁部断面が長形状を呈するもの(462)は1点だけみられた。

羽釜は瓦質、土師質の両方がみられ、458~461のような形態のもの、口縁部がもう少し内傾したものが多くみられる。461は瓦質羽釜の和泉K型か。このほか、土師器の菅原編年の河内B1c型、大和B1f型と思われる破片も各1点出土している。

中国陶磁器は449が割高台の白磁皿D類で、全面に釉が掛かっている。450は龍泉窯系青磁印花文碗で、外面には縦方向の片彫りがみられる。高台内は蛇の目釉剥ぎである。451は龍泉窯系青磁福祿字文碗で、高台内は蛇の目釉剥ぎである。452は龍泉窯系青磁印字文碗で、外面に線描き蓮弁文がみられる。高台内は蛇の目釉剥ぎである。453は龍泉窯系青磁無文碗で、胎土がベージュ色の土青磁である。釉の色は他と比べ薄く、明緑灰色である。破損部周縁は再加工されたものか、滑らかである。カラー写真8-690は建窯系天目茶碗の体部破片である。

図122-463の灯明台は推定直径8.6cm、厚さ2.6cmの円板状で、中心には直径1.6cmの孔が開いており、その周縁は裏面側に少し厚くなっている。「西城房」と刻字されている表面はごく僅かに凹んでおり、



0 10cm

0 5cm

图122 土坑 E-45 (1992年度調査区舎) 出土土器

周縁が少し高まっている。色調は表面が炭素を吸着しており黒っぽいが、側面、断面、裏面は土師器の色を呈している。断面には粘土板を3枚貼り合わせたような痕跡がある。側面は炭素が吸着していないので、剥落したものかと、最初は考えたが、表面の残存状態が良好で、なで調整の痕跡がみられるため、当初からこの形であった可能性が高い。胎土は直径6mm以下の石英、長石、チャートを少々含んでいる。この灯明台と同一個体と思われるものが、8 E トレンチの土坑45の続きの溝状遺構から出土しており、それを一緒に図化している。その破片からは「應保」（1161～1163年）という年号の線刻が認められた。これにより、古文書に記録された時期と近い年号が確認されたことになる。

瓦の中で特筆すべきものは、写真図版59-628の凹面に「大鳥郡」とヘラ書きされた丸瓦破片が1点認められた事である。瓦大工の名前が続けて刻まれていた可能性が高い事を福永氏に御教示頂いた。

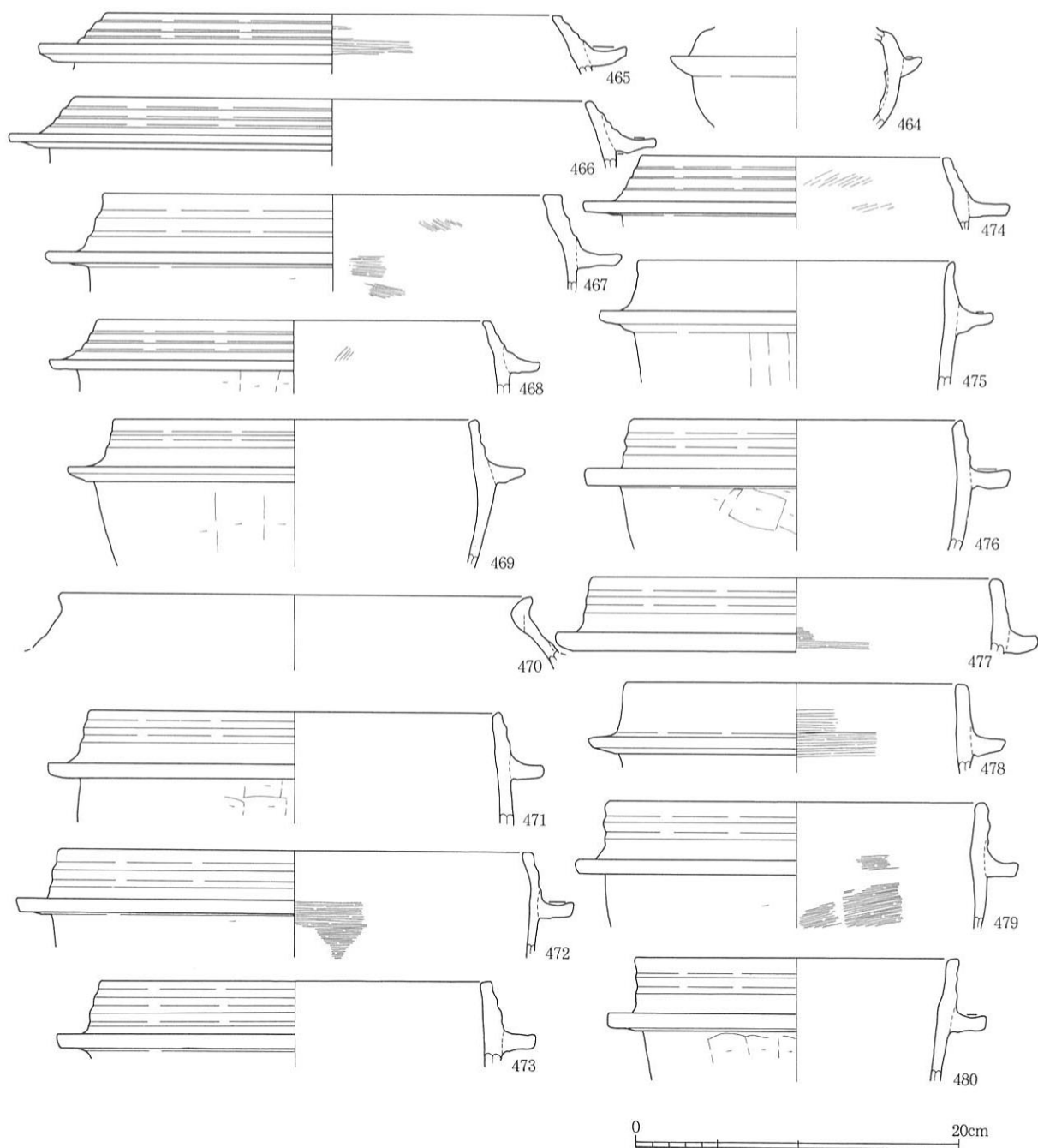


図123 土坑E-45（1992年度調査区）出土土器

写真図版62-760は、五輪塔の請花である。石材は流紋岩質凝灰角礫岩で、二上山系の凝灰岩と考えられる。柄を除いた現高16.0cmで、請花の下部に高さ10.0cmの柄を造り出す。残存高28.8cm、残存幅21.6cm、重さ8.2kgを測る。(西山)

5) 土坑E-45 (1992年度調査区) (図123・124、写真図版50・53・54)

この土坑は先述の土坑の続きの溝状遺構であり、1992年度に調査された8 E トレンチの土坑E-45にあたる。ここからは先述の土坑と同じ種類の遺物が多く出土している。しかし、若干近世を含むため、1-3 E トレンチの土坑E-45出土遺物とは区別した。

図123には瓦質および土師質の羽釜を載せた。464-469が瓦質、470-480が土師質である。464は口縁部の欠損した小型の羽釜で内面に0.5mmの厚さで鉄分が付着している。調整は外内共になでている。河内Jb型にあたるものか。465-469の羽釜は口縁部に段を持ち、体部外面をヘラ削り調整している。465、466、468が河内D1a型、467が河内Ja型、469が河内D1b型にあたるものか。470の土師質羽釜は、内傾した口縁が端部で「く」の字状に外反する河内B1d型である。罫は欠損しており不明である。471-480の土師質羽釜のうち、474のみ口縁部が内傾しており、他はほぼ口縁部が直立している。474は口縁部外面が浅い段状を呈し、478は口縁部外面が平坦、それら以外の口縁部外面には凹線状のものが巡る。477は凹線が浅い。土師質羽釜は調整観察可能なものでは、いずれも体部外面に横方向のヘラ削

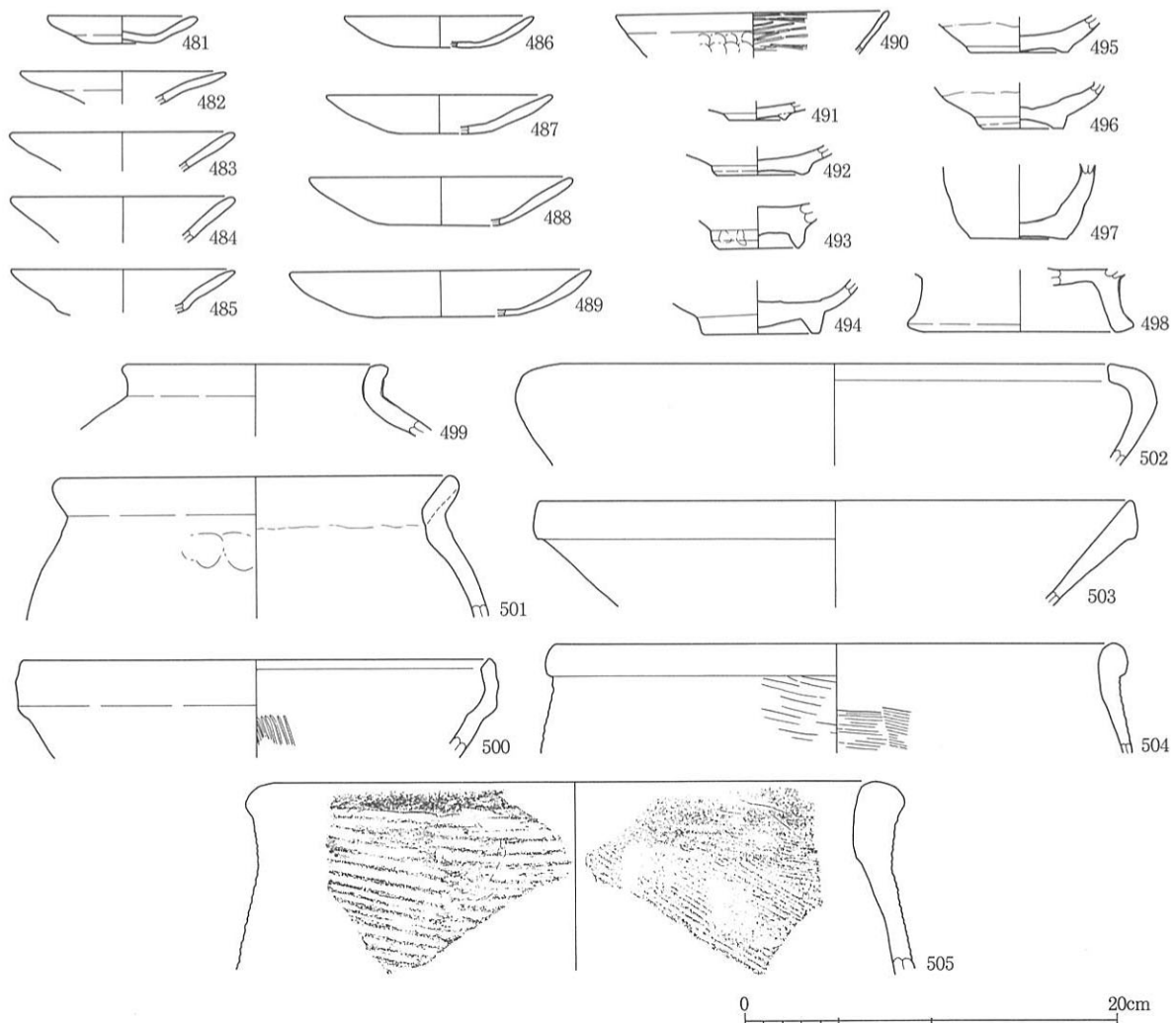


図124 土坑E-45 (1992年度調査区) 出土土器

りがみられる。ヘラ削りの方向は瓦質羽釜、土師質羽釜ともに左から右へ横方向である。474は河内D1 a型、478は摂津F2 b型にあたるものか。それら以外は河内D2 aないし和泉D2 a型にあたるものか。

図124は土師器皿（481～489）、瓦器椀（490、491）、中国白磁皿II1 a類（492）、龍泉窯系青磁無文碗（493、494）、唐津皿（495）、唐津碗（496）、お歯黒用の唐津小壺（497）、瀬戸花瓶II類（498）、備前種壺？（499）、備前播鉢（500）、土師質壺？（501）、瓦質土器（502～505）である。土師器皿は口縁部が斜め上外方に直線的に大きく開き、底部が上げ底状をしたものを含むことから、15～16世紀頃のものか。489は他の土師器皿とは異なり、僅かに内湾ぎみに口縁部が立ち上がり、器表面は黒く、外面には煤の付着がみられる。瓦器椀は外面に磨きがみられず、高台も退化していることから、III-3期頃と思われる。501の土師質壺と思われるものは火を受けたものか、全面が橙色を呈する。502は瓦質火舎か不明である。503は瓦質播鉢であるが、火を受けて炭素が全て飛び、にぶい橙色になっている。504、505は瓦質甕である。この他、高台内に「土」と墨書された唐津皿が1点（写真図版53-749）みられる。

6) 土坑E-84 (図125)

ここからは土師器皿、土師質羽釜、瓦質播鉢、瓦質甕、瓦破片などが出土している。

506の土師器皿は平らな底から斜め上外方へ直線的に開く口縁部よりなり、口縁端部は薄い。口縁部細片であるため、口径は不確定であるが、推定24cmと大型である。

508、509の土師質羽釜は口縁部がほぼ直立し、その外面には凹線状の沈線が巡る。体部外面は横方向にヘラ削りが施されており、煤の付着がみられる。2点ともに内面に横方向のハケ目が一部残る。

507の瓦質播鉢は口縁端の下部が角張る形態で、内面には卸し目が残る。体部外面は横方向にヘラ削りが施されている。

510、511の瓦質甕は頸部が殆ど無くなり、口縁部断面に丸みを持つ。体部外面には510はやや粗めの

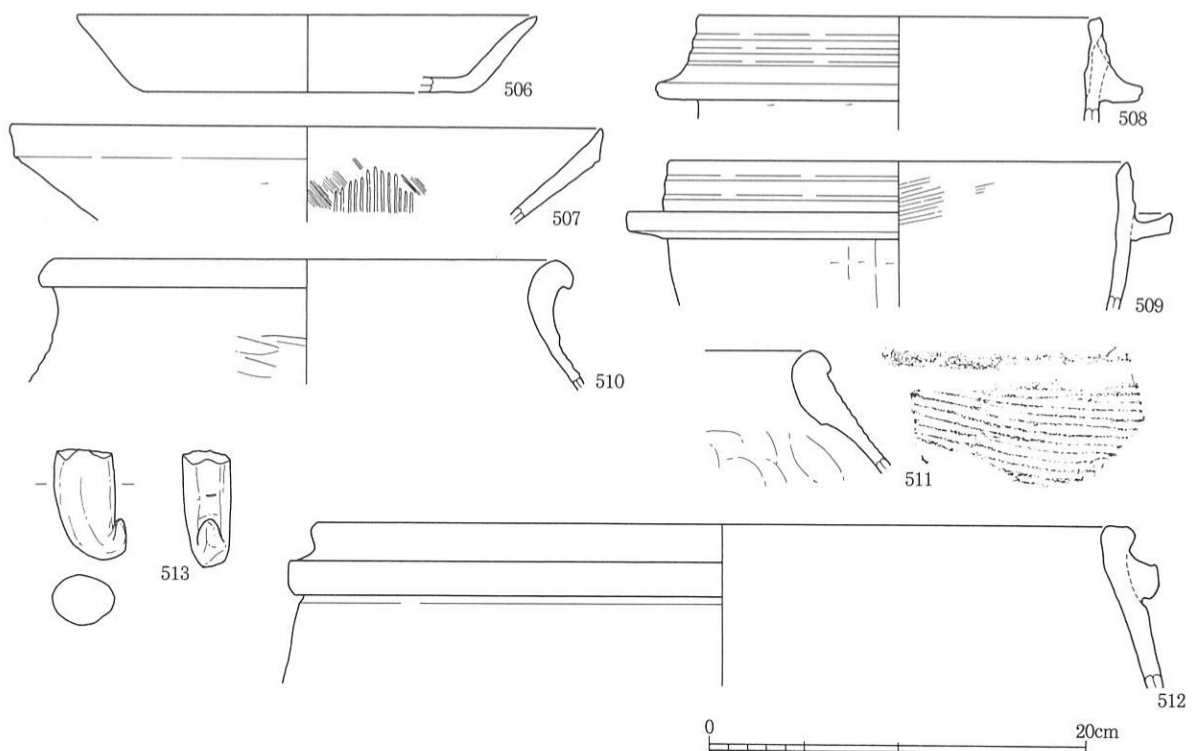


図125 土坑E-84出土土器

平行叩き、511はやや細めの平行叩きが施されている。511の口縁部内面には細い横方向のハケ目が残る。

512は直線的にやや内傾した口縁の端部が平坦で、口縁端部直下に断面四角形状の凸帯を1条巡らせている。調整は表面の遺存状態が悪く、不明である。断面を観察すると、粘土接合痕は内傾である。口径が推定42.8cmと大きいことから、瓦質の井戸枠か。

513は瓦質の脚破片である。脚端に向けて細く、鈎針状に折れ曲がっている。胎土中に9mm以下の花崗岩礫、石英、長石を多く含み、微粒の角閃石、金雲母もみられる。鍋か羽釜の脚か。

(5) 包含層、その他

1) 包含層、その他 (写真図版51)

F地区の攪乱及び水路からは、744の龍泉窯系青磁印字文碗が出土している。

第3節 近世の遺物

調査区全域で遺物が出土しているが、それらのうち、主要遺構出土の遺物に限り、ここで述べることにする。

(1) 溝

1) 溝E-2 (写真図版45)

ここからはサヌカイト剥片、古墳、奈良、平安の各時代の遺物が少量、中世、近世の遺物が大量に出土している。また、近代の染付破片が1点出土しているが、混入か。これら遺物のうち、中世、近世の陶磁器を写真図版に載せた。中国白磁碗Ⅴ類(695)、龍泉窯系青磁無文碗(696)、瀬戸灰釉平碗(697)、瀬戸黒碗(698)、常滑甕(699~701)、備前?鉢(702)、堺播鉢(703)である。

2) 溝F-63 (写真図版51)

古墳時代の須恵器、土師器、中世須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、中国陶磁器、近世陶磁器などの破片が少量出土している。これらのうち、中国白磁皿を写真図版に載せた。740は白磁皿F期のIX1c類であり、口縁部は欠損している。

3) 溝G-1 (図126、写真図版51)

ここからは古墳から奈良・平安時代の遺物が少量と、中世から近世の遺物が大量に、また、瓦が少々出土している。古墳から奈良時代の遺物には、土師質の埴輪片、須恵器杯、無蓋高杯、甕体部破片、奈良・平安時代の遺物では須恵器杯、杯蓋、壺などがある。中世遺物では土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、中国陶磁器、国産陶器、瓦など、近世遺物では土師器、陶磁器などがみられる。また、現代遺物も僅かに含むが、現代まで用水路として機能していた事による。

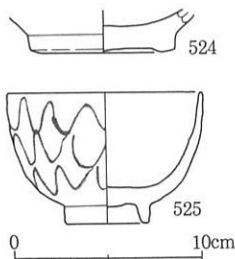


図126 溝G-1
出土土器

図126-524と写22-745は中国白磁碗Ⅳ1類の底部破片である。胎土はやや黄色味を帯び、内面の釉には貫入が入っている。高台部分は浅く削り出されている。外面残存部分は無釉である。図123-525は波佐見窯系染付の一重網目文碗である。高台接地部分のみ無釉で、ここには細かい離れ砂が付着している。

写22-747は龍泉窯系青磁無文碗で、体部破損部を打ち欠き再加工している。

(2) 井戸

1) 井戸A-1 (写真図版64)

ここからはトレンチ中央付近で検出されたもので、漆器碗が1点(766)出土している。表面には黒

漆が塗られている。共伴遺物はないが、近世のものか。

2) 井戸A-2 (写真図版64)

ここからはトレンチ南部で検出されたもので、漆器碗が1点(767)、底のほうから出土している。表面には黒漆が塗られており、高台の高い碗で、口縁部が大半欠損している。共伴遺物はないが、近世のものか。

3) 井戸E-8 (写真図版47)

ここからは中世から近世にかけての遺物が少量出土している。内訳は瓦質細片、瀬戸灰釉平底碗(写真図版47-709)近世染付片少々などである。

4) 井戸E-9 (図127、写真図版47・52)

ここからは大量の土師器皿、少量の陶磁器や須恵器、瓦質土器、埴輪破片かと思われるもの、瓦、砥石1点、炭細片などが出土している。

土師器皿(526~532)は手づくねの後などで、横なでにより成形調整されたもので、口径6cmから12.5cmのものまでみられ、口径10cm前後のものが全体の約9割弱を占める。526、527は口径6~6.4cm、528~530はおよそ10cm、531、532はおよそ12cmである。529の口縁部は一部内面に押し潰されており、口縁部外面には煤の付着がみられる。

533は肥前系碗である。外内の釉には貫入がみられる。高台の畳付け部分のみ無釉である。見込みと外面の一部に溶着痕がみられる。534は波佐見窯系染付碗で、松と草花文が施され、高台内には「大明年製」が省略した字体で書かれている。このほか、丹波挿鉢(写47-710)もある。

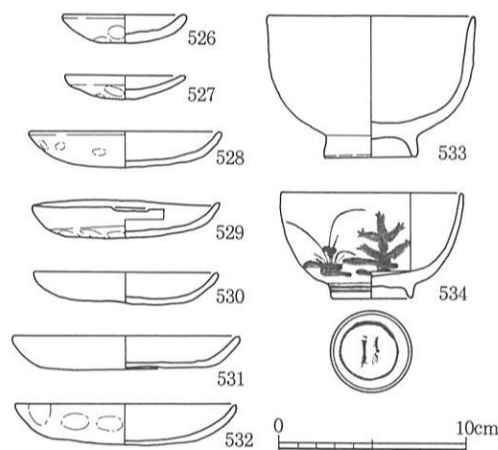


図127 井戸E-9出土土器

5) 井戸E-19 (写真図版63、カラー写真5-677~680)

ここからは中世から近世にかけての遺物が少々出土している。内訳は土師器皿、土師質羽釜、土師質甕、瓦質羽釜、瓦質挿鉢、瓦質甕、中国青磁碗、近世染付破片、瓦、一石五輪塔、石臼、根石かと思われるものなどである。

写真図版63-677~680は中国製陶磁器である。677は龍泉窯系青磁小碗III2b類の体部破片で、線描き蓮弁紋がみられる。678は龍泉窯系青磁印花文碗で、破損部が打ち欠かれ再加工されている。679は漳州窯系青花碗、680は景德鎮窯系青花碗である。

763は直径28cm、厚さ6cm前後、重さ2110gの石臼の破片である。片面に引き臼の溝が6条1単位で刻まれており、表面は滑らかである。中央には表面に直径3.8cm、裏面では直径約7cmと大きくなっている孔が開けられている。裏面は出っ張った部分が滑らかになっているが、成形時の研磨によるものか。

764は一石五輪塔の上部が欠損したものである。残存高26cm、重さ7kg、一辺が11cm×11.8cmの角柱状をなす。笠石部分の端の幅が4.2cm、中央部分で幅2.2cmである。水輪の高さは7.6cm、地輪の高さは10cmである。片面に煤が付着している。17世紀のものである。

765は地輪部分だけ残っているもので、幅と高さが約15cmの立方体をなし、重さ7.8kgを測る。片面の左下隅に文字が刻まれ、かろうじて「年九月十日」と読めるが、砥石に転用され、詳細は不明である。一部に煤の付着がみられる。15世紀終わり頃から16世紀位のものである。

6) 井戸E-23 (写真図版47)

ここからは古墳時代の須恵器数片、中世～近世にかけての遺物が少量出土している。中世遺物ではⅢ-3～Ⅳ-1期の瓦器碗、瓦質播鉢、瓦質羽釜、瓦質甕、備前甕(写真図版47-713)、中世瓦少々、近世遺物では染付細片がある。その他、煤の付着した安山岩の根石片1点もみられる。

7) 井戸F-2 (写真図版51)

ここからは平安時代の須恵器破片数点、中世・近世の遺物が少量出土している。内訳は瓦器、土師器、陶磁器、瓦などである。写真図版には中国白磁を掲載した。742は廈門碗窯系白磁碗Ⅳ2類、743は口禿白磁皿Ⅸ1c類である。

(3) 土坑

1) 土坑E-12 (カラー写真6)

調査区を南北に走る現代水路の東側に、縦1列に並ぶ近世の土坑群がある。土坑E-12はその中の一つである。ここからは、須恵器細片、土師器皿、土師質羽釜、土師器鉢、瓦器、陶器、瓦などの、中世主体の遺物が少量出土しており、ねずみ志野向付の破片が1点含まれていた(681)。

2) 土坑E-44 (図128、写真図版32・44・49・59・60、カラー写真7)

ここからは古墳から平安時代の遺物が少量、中世から近世の遺物がやや多く出土している。また、瓦が大量に出土しており、土坑E-37に続いて、当遺跡全体出土量の約2割強を占める。古墳から奈良時代の遺物では手持ち勾玉、土師質の埴輪破片、須恵器の器台脚かと思われるもの、杯、杯蓋、甕、壺、鉢などが出土している。平安時代は土師器高杯脚破片、中世の遺物では土師質羽釜、Ⅱ～Ⅳ期の瓦器碗、須恵器鉢、須恵器甕、瓦質羽釜、瓦質甕、瓦質播鉢、瓦質火舎?、瓦質井戸枠、土師器皿、中国陶磁器、常滑甕、備前播鉢などが、近世では波佐見窯系染付、唐津碗などがみられる。また、窯壁片、鉄滓片、炭細片なども極少量ある。

535～537は土師器皿、538、539はⅣ-3～4期の瓦器碗、540～546は中国陶磁器、547は朝鮮王朝陶磁雑釉碗、548は唐津丸碗、549は唐津鉢、550は備前播鉢、551、552は瓦質播鉢、553～555は瓦質羽釜、556、557は土師質羽釜、558は土師質甕である。548の唐津碗の見込みには胎土目が残る。

中国陶磁器の内訳は、540が口禿白磁皿Ⅸ1c類、541が白磁碗、542が漳州窯系青花碗、543が漳州窯系菊皿、544～546が龍泉窯系青磁無文碗である。

陶磁器では図以外にカラー写真7の龍泉窯系青磁壺(688)、青磁四耳壺Ⅵ2類?(689)、瀬戸瓶子(写真図版49-732)、瀬戸卸皿(733)、常滑甕(734)、備前大甕(735、736)などがある。

549の唐津鉢のみ、土坑44、45の上面から出土したものである。

瓦の中で特筆すべきものは、平瓦の凹面に「建暦」(1211～1213年)とヘラ書きされたものが1点認められたことである(写真図版59-627)。この瓦は凸面が叩きの後なでられており、砂の付着が少し見られる。凹面は微かに布目圧痕状のものが認められるが、表面がなでられ、少し砂の付着がみられる。

このほか、平瓦の凸面に「南无阿弥陀仏」とスタンプ状のもので浮き彫りにされたものが1点出土している(写真図版60-630)。この「南无阿弥陀仏」とスタンプされた瓦は珍しく、ヘラ描きで記されたものであれば幾つか類例があるという事を上原氏に御教示頂いた。

3) 土坑E-48 (写真図版60)

ここからはサヌカイト剥片1点、平安時代と思われる須恵器杯高台細片1点、中世・近世の遺物が少量出土している。中世遺物では瓦器細片、瓦質羽釜、甕、須恵器練鉢、中国青磁碗、土師器皿、甕、羽

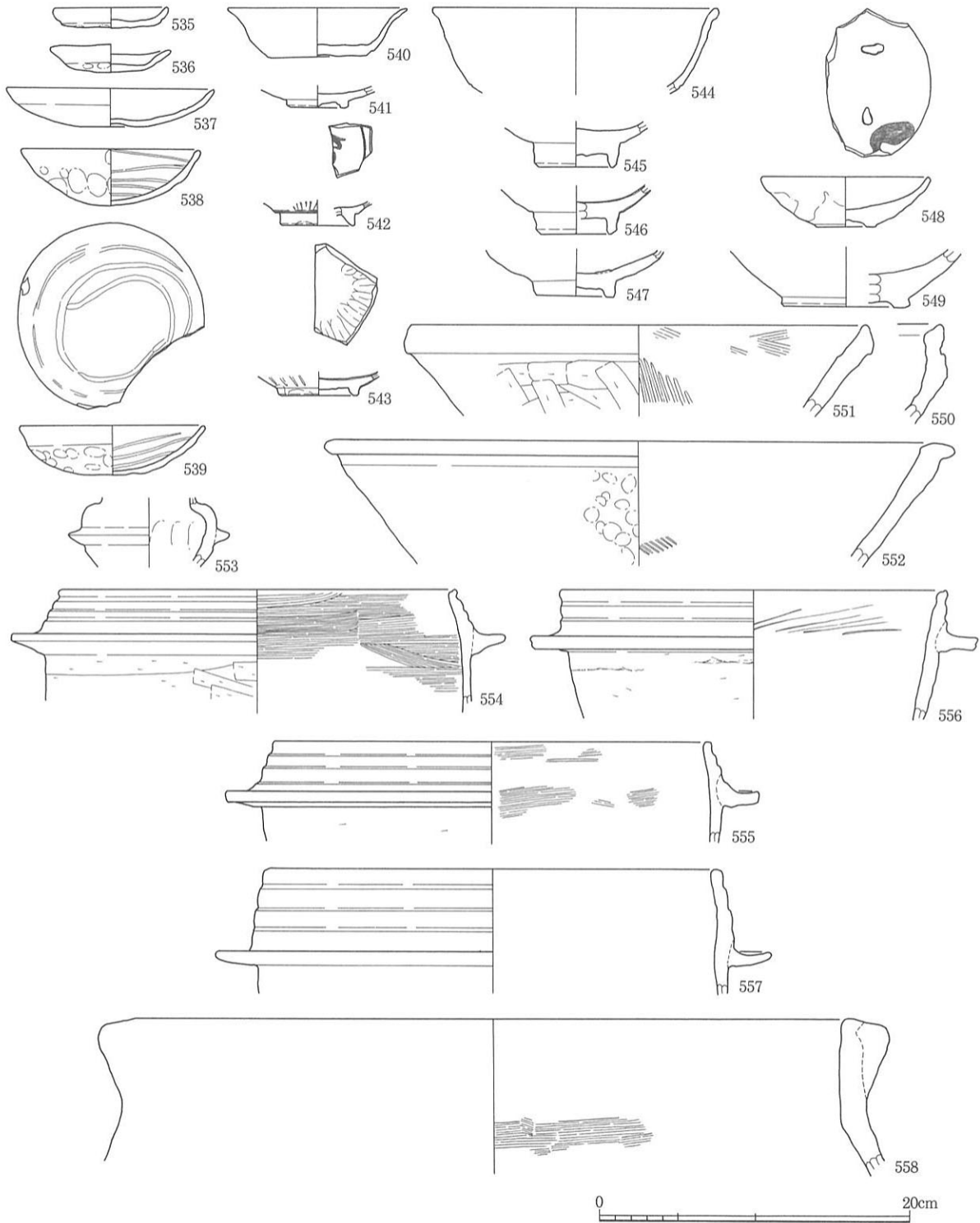


図128 土坑E-44出土土器

釜、などの破片がみられる。近世では肥前系の細片、波佐見窯系の染付、紅皿などがある。また、瓦も少量みられ、写真図版60-753は丸瓦の凸面に不明の線刻？が認められた。凸面はなで、凹面には指押さえの痕跡がみられる。

4) 土坑E-64 (カラー写真6)

ここからは中世から近世にかけての遺物が少量出土している。内訳は土師器皿、土師質羽釜、瓦器、瓦質播鉢、瓦質羽釜、常滑甕、土師器甕、中国青花、唐津、瓦、根石破片と思われるものなどが出土し

ており、瓦は一部火を受けている。683は常滑甕、684は漳州窯系青花折花文碗、685は胎土目の唐津皿である。

5) 土坑E-65 (写真図版53)

ここからは須恵器、瓦器の細片、土師器、瓦質土器、陶磁器、中世瓦、轆羽口かと思われるものなどが出土している。須恵器では奈良時代の杯、土師器では皿、湊焼き甕、羽釜体部破片、瓦質土器では甕、羽釜、脚破片、鉢か不明のものなど、陶磁器では唐津皿1点(写真図版53-750)、景德鎮白磁端反皿1点が出土している。時期は16世紀終わりから17世紀初めにあたる。唐津皿の高台内面には「十一」と読むのか不明であるが、墨書が認められた。

6) 土坑E-72 (図129、カラー写真6)

土坑E-72はトレンチ北端にあり、溝E-16の続きに位置する遺構である。3Eトレンチ部分からは小円筒埴輪破片、奈良時代の須恵器杯蓋と、瓦器、土師器皿、土師質羽釜、中国青磁碗、須恵器鉢、瓦質羽釜、瓦質插鉢、瓦質甕、瓦などの中世遺物破片が少々出土している。また、根石もみられ、瓦と共に、一部火を受けている。カラー写真6-686は渥美か不明の三筋壺体部破片である。

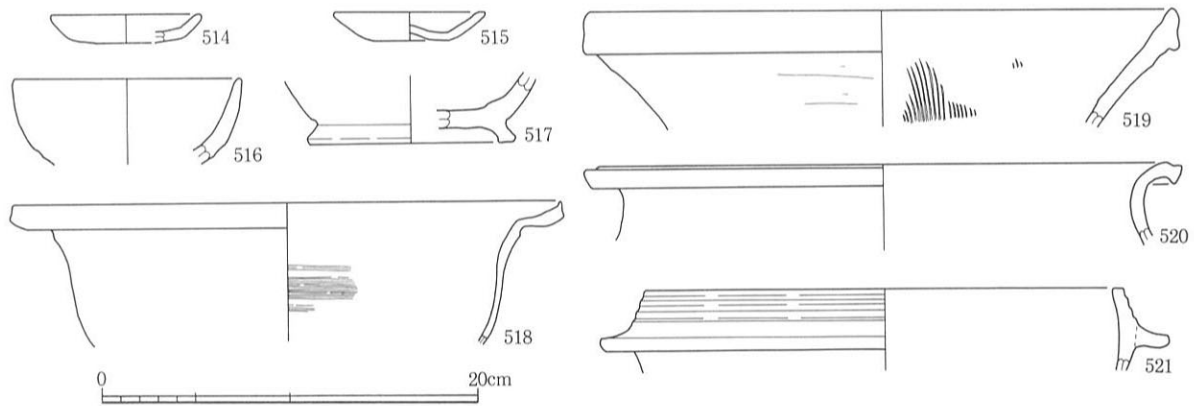


図129 土坑E-72出土土器

8Eトレンチの土坑E-72も似たような遺物組成がみられるが、出土量が少なく、近世遺物を含む。内訳は、古墳から奈良時代の須恵器、中世土器の土師質羽釜、土師器皿、中国青磁碗、近世の美濃窯系碗などである。514の瓦器皿は浅めで、暗文がみられず、内面の炭素吸着が少ない。515の土師器へそ皿は口縁端部に煤の付着がみられる。灯明皿として使用された痕跡か。516の美濃窯系長石釉丸碗は外面体部の途中まで釉がかかり、無釉の部分は左方向にヘラ削りが施されている。517は須恵器壺高台で、平城宮Ⅲの時期にあたるものか。518は土師質の鍋と思われるもので、頸部からほぼ水平に開いた口縁の端部は上方へ拡張している。器壁は薄い。調整は外面を指押さえ、なで、内面を横方向になでている。外面には煤の付着がみられる。519は瓦質插鉢で、口縁端部は下方に僅かに突出している。外面調整は横方向のヘラ削り、内面は横方向のやや細かいハケ目のちなで、縦方向に卸し目がつけられている。520の瓦質甕は緩やかに屈曲する頸部に口縁部は外反し、端部は上下に拡張して下がる。口縁端部内面には沈線が1条巡る。頸部外面には斜め方向のやや細かい平行叩きが施された後、なでられている。内面はなで調整か。521の瓦質羽釜は口縁部が少し内傾し、口縁部外面に3条の凹線により段がつけられている。この瓦質羽釜は細片である。

7) 土坑F-82 (図130、写真図版51)

ここからは古墳から奈良時代にあたると思われる須恵器細片、中世瓦質羽釜、土師器皿、近世染付皿、

陶器、瓦破片などが少量出土している。559は薄手で深めの土師器皿で、少し丸みのある底部から緩やかに斜め上にのび、体部中央でごく僅かに外方へ屈曲し、そこからさらに僅かに内湾する。調整はなでおよび横なである。560は口縁端部が上方へ折れ曲がった唐津皿である。561は備前？か不明のものである。口径は小さめで、器壁は厚く、浅めの鉢のようなものか。口縁部および内面は横なで調整が施され、その後、体部外面は横方向に、底部外面は回転のヘラ削り調整が施されている。

(4) 暗渠

1) 暗渠E-1 (写真図版63)

瓦製暗渠は調査区南端の溝E-2の北側で、土管が5本連なった状態で検出されたもので、ここからは土管以外に土師器、須恵器、瓦器、近世染付を含む陶磁器などの破片や近世瓦片も出土している。写63-762は直径29.5cm、高さ41.5~42.5cm、器壁の厚さ2.0cmの円筒形をなす。調整は外面を長軸方向に板状のものでナデ、内面は短軸方向に、幅3~4cm位か不明であるが、板状のものでナデている。内面のナデの下面に布目圧痕が残ることから、瓦と同じ製作技法かと思われる。

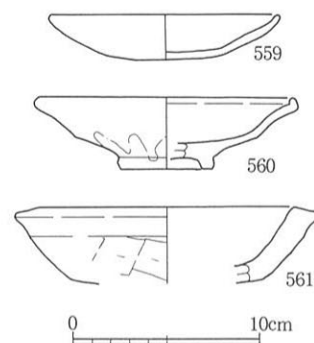


図130 土坑F-82出土土器

この章を記述するにあたり、五輪塔、相輪などの石製品について、西山氏の貴重な原稿を頂き、また、いろいろ御教示頂いた。墨書土器、瓦のヘラ書き年号など、文字資料の判読は館野和己氏、山下信一郎氏に御教示頂いた。また、陶器は一部、中野晴久氏に産地同定して頂き、陶磁器の大部分を森村健一氏に御教示頂いた。骨の鑑定に際しては、沖田絵麻氏のお手を煩わせた。瓦に関しては、福永信雄氏、上原真人氏から類例などを御教示頂いた。さらに、付章では瓦を市本芳三氏、灯明台を大野薫氏、宝珠を西山昌孝氏により考察して頂いた。ここに記して、併せて感謝の意を表します。

遺物一覧表(1)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺 構・層 名	備 考
1	46		土師器甕	12G	竪穴式住居G-1	
2	47		土師器羽釜	9F	ピットF-62	胎土中に角閃石を含む
3	47		土師器羽釜	9F	ピットF-62	胎土中に角閃石を含む
4	48		須恵器杯	11G	ピットG-51 掘方	
5	48		須恵器杯蓋	12G	ピットG-451	
6	49		土師器鉢	2E	溝E-7	
7	49		須恵器壺	2E	溝E-7	
8	49		土師器甕	2E	溝E-7	
9	50		須恵器高杯	9F	溝F-5	
10	50		土師器甕	9F	溝F-5	
11	50	34	土師器甕	9F	溝F-5	
12	51		須恵器杯蓋	8F	溝F-24	
13	51		須恵器鉄鉢形鉢	8F	溝F-24	
14	52		須恵器盤	11F	溝F-108	
15	53		須恵器盤	12G	溝G-3 (溝G-1 東側)	
16	53		須恵器長頸壺	12G	溝G-3 (溝G-1 東側)	
17	53		須恵器広口壺	14G	池底溝状遺構G-1 灰色砂層	
18	53		土師器甕	14G	池底溝状遺構G-1 灰色砂層	
19	53		土師器羽釜	14G	池底溝状遺構G-1 灰色砂層	
20	53		須恵器杯身	16G	溝G-61 南側	
21	53		須恵器杯身	16G	溝G-61 北側	
22	54		土師器皿	11D	土坑D-11 (焼土坑)	
23	54		土師器杯	11D	土坑D-11 (焼土坑)	
24	54		土師器皿	11D	土坑D-11 (焼土坑)	
25	54		土師器皿	11D	土坑D-11 (焼土坑)	
26	55		土師器皿	8F	土坑F-18	
27	56		須恵器杯蓋	10F	土坑F-84	
28	56		須恵器杯身	10F	土坑F-84	
29	56		須恵器杯身	10F	土坑F-84	
30	56		土師器甕	10F	土坑F-84	
31	56		須恵器杯蓋	10F	土坑F-85 上層	
32	56		須恵器杯蓋	10F	土坑F-85 上層	
33	56		須恵器杯身	10F	土坑F-85 上層	
34	57		土師器把手付短頸壺	11G	土坑G-50 最上層	
35	58	34	須恵器広口壺	8G	灰青砂礫	
36	58	34	土師器甕	8G	灰青砂礫	
37	58	34	須恵器鉄鉢形鉢	2F	地山面直上	
38	59	37	黒色土器A類椀	10F	ピットF-706 (建物5)	
39	59		土師器ミニチュア短頸壺	9F	土坑F-7 (建物5)	
40	60		黒色土器B類椀	8E	ピットE-401	
41	60		黒色土器B類椀	8E	ピットE-401	
42	61		土師器耳皿	9F	ピットF-380	
43	61		瓦器椀	10F	ピットF-707	
44	61		黒色土器A類椀	10F	ピットF-707	
45	61		凹み石	10F	ピットF-707	
46	62		須恵器長頸壺	11G	ピットG-309	
47	63		須恵器大甕	2E	溝E-9	
48	64		土師器杯	8F	土坑F-13	
49	64		土師器皿	8F	土坑F-13	
50	64		土師器皿	8F	土坑F-13	
51	64		土師器皿	8F	土坑F-13	
52	64		須恵器杯蓋	8F	土坑F-13	
53	64		須恵器杯身	8F	土坑F-13	
54	64		須恵器長頸壺	8F	土坑F-13	
55	64		須恵器盤	8F	土坑F-13	
56	64		土師器鉢	8F	土坑F-13	
57	65	51	瀬戸灰釉陶器山茶碗	10F	溝F-102	
58	65		須恵器壺	10F	溝F-102	

遺物一覧表(2)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器種	トレンチ	遺構・層名	備考
59	66		須恵器杯蓋	12G	大溝G-1 最下層(灰色砂層)	
60	66		須恵器杯身	13G	大溝G-1 最下層(暗青灰色砂層)	
61	66		須恵器杯身	12G	大溝G-1 最下層(灰色砂層)	
62	66		須恵器杯身	16G	大溝G-1 下層	
63	66		須恵器皿	12G	大溝G-1 最下層(灰色砂層)	
64	66		須恵器短頸壺	16G	大溝G-1 下層	
65	66		須恵器平瓶	13G	大溝G-1 最下層(暗青灰色砂層)	
66	66		土師器高杯	16G	大溝G-1 下層	
67	66		土師器杯	13G	大溝G-1 最下層(暗青灰色砂層)	
68	66		土師器壺?	16G	大溝G-1 下層	
69	66	53	土師器皿	13G	大溝G-1 最下層(暗青灰色砂層)	「召」墨書
70	66		土師器杯	16G	大溝G-1 下層	
71	66		土師器杯	12G	大溝G-1 最下層(灰色砂層)	
72	67		須恵器広口壺	13G	大溝G-1 最下層(暗青灰色砂層)	
73	67		須恵器甕	13G	大溝G-1 最下部(暗灰色砂層)	
74	67		土師器甕	13G	大溝G-1 最下層(暗青灰色砂層)	
75	67		土師器甕	16G	大溝G-1 下層	
76	67		土師器甕	16G	大溝G-1 下層	
77	67		土師器壺	12G	大溝G-1 最下層(灰色砂層)	
78	67		土師器甕	16G	大溝G-1 下層	
79	67		土師器壺	12G	大溝G-1 最下層(灰色砂層)	
80	67		土師器甕	13G	大溝G-1 最下部(暗青灰色砂層)	
81	67		土師器甕	12G	大溝G-1 最下部(灰色砂層)	
82	67		土師器甕	12G	大溝G-1 最下層(灰色砂層)	
83	67		土師器甕	16G	大溝G-1 下層	
84	67		土師器甕	16G	大溝G-1 下層	
85	67		土師器甕	16G	大溝G-1 下層	
86	67		土師器甕	12G	大溝G-1 最下層(灰色砂層)	
87	67		土師器羽釜	16G	大溝G-1 下層	
88	68	35	須恵器杯蓋	3E	井戸E-15	
89	68	35	須恵器杯身	3E	井戸E-15	
90	68	35	土師器杯	3E	井戸E-15	「晶」墨書
91	68		土師器杯	3E	井戸E-15	
92	68	53	土師器杯	3E	井戸E-15 土器群9の東	「二」墨書?
93	68		土師器杯	3E	井戸E-15	
94	68		土師器皿	3E	井戸E-15 壁ぎわ崩壊土	
95	68		土師器皿	3E	井戸E-15	
96	68		土師器台付不明品	3E	井戸E-15	
97	68	35	土師器片口鉢	3E	井戸E-15 壁ぎわ崩壊土	
98	68	35	土師器片口鉢	3E	井戸E-15	
99	68		土師器鉢	3E	井戸E-15	
100	68		黒色土器B類杯	3E	井戸E-15	
101	68		灰釉陶器?壺	3E	井戸E-15 土器群5	
102	68	35	須恵器鉢	3E	井戸E-15 土器群	
103	69		土師器甕	3E	井戸E-15 下層	
104	69		土師器甕	3E	井戸E-15 土器群13	
105	69		土師器甕	3E	井戸E-15 土器群7	
106	69		土師器甕	3E	井戸E-15 土器群4	
107	69	36	土師器甕	3E	井戸E-15 土器群7	
108	69	36	土師器甕	3E	井戸E-15 土器群の下(黒色粘土)	
109	69		土師器甕	3E	井戸E-15 土器群15	
110	69	36	土師器甕	3E	井戸E-15 土器群12	
111	69		土師器甕	3E	井戸E-15 中央崩壊土	
112	69	36	土師器甕	3E	井戸E-15	
113	69		土師器甕	3E	井戸E-15 壁ぎわ崩壊土	
114	69	36	土師器甕	3E	井戸E-15 中央崩壊土、壁ぎわ崩壊土	
115	69		土師器甕	3E	井戸E-15 中央崩壊土	
116	69		土師器甕	3E	井戸E-15	
117	69		土師器甕	3E	井戸E-15 土器群の下(黒色粘土)	

遺物一覧表(3)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺構・層名	備 考
118	69		土師器甕	3E	井戸E-15	
119	69		土師器甕	3E	井戸E-15 壁ぎわ崩壊土	
120	69	36	土師器甕	3E	井戸E-15 中央崩壊土	
121	69		土師器甕	3E	井戸E-15	
122	69		土師器甕	3E	井戸E-15 中央崩壊土	
123	69		土師器甕	3E	井戸E-15 土器群9の東	
124	69		土師器把手付甕	3E	井戸E-15	
125	70		土師器皿	9F	井戸F-6 IV層	
126	70		土師器杯	9F	井戸F-6 第2層	
127	70		黒色土器A類碗	9F	井戸F-6	
128	70		黒色土器A類盤	9F	井戸F-6	
129	70		須恵器瓶子	9F	井戸F-6 第2層	
130	70	37	土師器甕	8・9F	井戸F-6	
131	70		土師器甕	9F	井戸F-6	
132	70	37	土師器把手付甕	8F	井戸F-6	「東寺」墨書
133	70		土師器把手付甕	9F	井戸F-6 最下層	
134	71		土師器皿	11G	井戸G-4 最下層	
135	71	37	黒色土器B類碗	11G	井戸G-4 最下層	
136	71	37	黒色土器B類碗	11G	井戸G-4 最下層	
137	105		須恵器杯蓋	2E	土坑E-27	
138	105		須恵器横瓶?	2E	土坑E-27	
139	72		須恵器杯蓋	9F	土坑F-54	
140	73	37	土師器甕	11G	土坑G-43	
141	74		須恵器長頸壺	12G	畦畔G-1	
142	75		瓦器皿	3B	建物B-1 ピットB-133 黄灰色土	
143	75		瓦器碗	3B	建物B-1 ピットB-317 灰色粘土・黄 灰色土	
144	75		瓦器碗	3B	建物B-1 ピットB-133 黄灰色土	
145	75		土師器皿	3B	建物B-1・4 ピットB-191 黄灰色土	
146	75		瓦器碗	3B	建物B-1・4 ピットB-118 黄灰色土・ 混焼土	
147	75		瓦器碗	3B	建物B-4 ピットB-134	
148	75		瓦器皿	3B	建物B-4 ピットB-134 暗黄灰色土	
149	75		瓦器皿	3B	建物B-4 ピットB-64 暗黄灰色土	
150	76		土師器皿	3B	建物B-6 ピットB-9 暗黄灰色土	
151	76		土師器皿	3B	建物B-3 ピットB-80 暗黄灰色土	
152	76		瓦器皿(高台付)	3B	建物B-3 ピットB-79 黄灰色土	
153	76		瓦器碗	3B	建物B-3 ピットB-41 黄灰色土	
154	77		土師器皿	2D	建物D-3 ピットD-61 柱穴	
155	77		土師器皿	2D	建物D-3 ピットD-8	底部外面糸切り痕
156	77		瓦器碗	2D	建物D-3 ピットD-40	
157	77		砥石	2D	建物D-3 ピットD-131 柱穴	
158	78		土師器皿	3B	ピットB-90 黄灰色土	
159	78		瓦器皿(高台付)	3B	ピットB-90 黄灰色土	
160	78		瓦器皿	3B	ピットB-103 暗黄灰色土	
161	78		瓦器皿	3B	ピットB-192 黄灰色土	
162	79	41	土師器皿	3D	土器埋納ピットD-1	
163	79		土師器皿	3D	土器埋納ピットD-1	
164	79		土師器皿	3D	土器埋納ピットD-1	
165	79		土師器皿	3D	土器埋納ピットD-2	
166	79	41	瓦器碗	3D	土器埋納ピットD-3	
167	80		土師器皿	10E	ピットE-408と407の間	
168	80		瓦器皿	10E	ピットE-408	
169	80		瓦器碗	10E	ピットE-407	
170	80		瓦器碗	10E	ピットE-409	
171	80		瓦質插鉢	8E	ピットE-405付近東壁	
172	80		瓦質羽釜	8E	ピットE-404	
173	80		瓦質甕	8E	ピットE-403	
174	80		瓦質羽釜	8E	ピットE-403	

遺物一覧表(4)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺構・層名	備 考
175	81		土師器皿	8F	ピットF-301	
176	81		土師器皿	8F	ピットF-301	
177	81		土師器皿	8F	ピットF-301	
178	82	38	土師器皿	1B	大溝B-1	
179	82	38	土師器皿	1B	大溝B-1 上層下位	
180	82		土師器皿	2B	大溝B-1 下層(暗灰色粘土・灰色粘土)	
181	82		土師器皿	2B	大溝B-1 上層(黄灰色土)	
182	82		瓦器皿	2B	大溝B-1 下層上位(灰色粘土)	
183	82	38	瓦器皿	1B	大溝B-1 上層下位	
184	82	38	瓦器皿	1B	大溝B-1 上層下位	
185	82		瓦器皿	1B	大溝B-1 上層下位	
186	82		瓦器椀	2B	大溝B-1 上層(黄灰色土)、下層上位 (灰色粘土)	
187	82	38	瓦器椀	1B	大溝B-1 上層下位	
188	82		瓦器椀	1B	大溝B-1 下層(灰色粘土)	
189	82		瓦器椀	2B	大溝B-1 下層下位(暗灰色粘土)	
190	82	38	瓦器椀	1B	大溝B-1 上層下位	
191	82	カラー1	白磁碗 II 5類	2B	大溝B-1 上層(黄灰色土)	12C後半
192	82	カラー1	白磁碗	2B	大溝B-1 上層(黄灰色土)	12C
193	82		白磁碗 V類	2B	大溝B-1 下層下位(暗灰色粘土)	12C中頃～13C前半
194	82	38	白磁碗 V 4c類	1B	大溝B-1 上層上位	12C中頃～13C前半。陶器質。質悪い。釉薄いクリーム色。
195	82		須恵器練鉢	1B	大溝B-1 下層(灰色粘土)	
196	82		須恵器練鉢	1B	大溝B-1 上層下位	
197	82		須恵器甕	1B	大溝B-1 上層下位	
198	82		瓦質羽釜	1B	大溝B-1 下層上位	
199	82		瓦質羽釜	1B	大溝B-1 上層下位	
200	82		土師質羽釜	1B	大溝B-1 下層(灰色粘土)	
201	82		土師質羽釜	1B	大溝B-1 上層下位	
202	82		土師質羽釜	1B	大溝B-1 下層(灰色粘土)	
203	82		土師質羽釜	2B	大溝B-1 下層下位(暗灰色粘土)	
204	82	38	土師質ミニチュア甕	1B	大溝B-1 上層下位	
205	82	61	石鍋	1B	大溝B-1 上層下位	滑石
206	83		瓦器皿	16G	大溝G-1 上層	
207	83		瓦器椀	16G	大溝G-1 上層	
208	83		須恵器練鉢	16G	大溝G-1 中層	
209	84		瓦器椀	16G	溝G-11	
210	84		瓦器椀	16G	溝G-11	
211	85	39	土師器皿	3B	井戸B-1 最下層	
212	85		土師器皿	3B	井戸B-1 最下層	
213	85		土師器皿	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
214	85	39	土師器皿	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
215	85		土師器皿	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
216	85	39	瓦器皿	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
217	85		瓦器皿	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
218	85	39	瓦器皿	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
219	85		瓦器皿	3B	井戸B-1 最下層	
220	85		瓦器皿	3B	井戸B-1 下層	
221	85	39	瓦器皿	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
222	85	39	瓦器皿	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
223	85		瓦器椀	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
224	85		瓦器椀	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土・砂を含む)	
225	85	39	瓦器椀	3B	井戸B-1 最下層	
226	85	39	瓦器椀	3B	井戸B-1 下層	
227	85	39	瓦器椀	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
228	85	39	瓦器椀	3B	井戸B-1 下層	
229	85		瓦器椀	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土・砂含む)	
230	85		瓦器椀	3B	井戸B-1 下層(砂含む・暗青灰色粘土)	
231	85		瓦器椀	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土・砂を含む)	

遺物一覧表(5)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器種	トレンチ	遺構・層名	備考
232	85	カラー-2	厦門碗窯系白磁碗 Ⅳ2類	3B	井戸B-1 下層	13C前半
233	85		須恵器練鉢	3B	井戸B-1 下層	
234	85		須恵器練鉢	3B	井戸B-1 下層	
235	85		須恵器甕	3B	井戸B-1 下層(暗青灰色粘土)	
236	85		土師質羽釜	3B	井戸B-1 最下層(暗青灰色粘土・混砂)	紀伊型。胎土中僅かに結晶片岩含む。
237	85		土師質羽釜	3B	井戸B-1 上層(黄灰色土)	
238	86	40	土師器皿	3B	井戸B-2 下層(暗褐色土)	
239	86		土師器皿	3B	井戸B-2 中層(暗褐色土・混暗灰粘土)	
240	86		土師器皿	3B	井戸B-2 下層	
241	86		土師器皿	3B	井戸B-2 下層(暗青灰色粘土)	
242	86		土師器皿	3B	井戸B-2 上層(暗黄灰色土)	
243	86	40	瓦器皿	3B	井戸B-2 上層(暗黄灰色土)	
244	86		瓦器皿	3B	井戸B-2 下層(暗褐色土)	
245	86		瓦器椀	3B	井戸B-2 中層	
246	86	40	瓦器椀	3B	井戸B-2 下層	
247	86		瓦器椀	3B	井戸B-2 下層	
248	86		瓦器大型椀	3B	井戸B-2 上層(黄灰色土)	
249	86		土師質火舎	3B	井戸B-2 中層(暗褐色土・混暗灰色粘土)	
250	86	40	瓦質鉢?	3B	井戸B-2 中層	
251	86	カラー-2	龍泉窯系青磁小碗	3B	井戸B-2 中層	13C
252	86	カラー-2	龍泉窯系青磁碗 I 類	3B	井戸B-2 中層	13C
253	86	カラー-2	白磁碗 V類	3B	井戸B-2 下層	12C中頃~13C前半
254	86		須恵器練鉢	3B	井戸B-2 下層	
255	86		土師質羽釜	3B	井戸B-2 下層	
256	86		土師質羽釜	3B	井戸B-2 下層(暗褐色土)	
257	86		土師質羽釜	3B	井戸B-2 上層(暗黄灰色土)	
258	86	46	渥美甕	3B	井戸B-2 上層(暗黄灰色土)	12C第3四半期。ピットB-35接合、 大溝B-1上層同一個体。
259	87		土師器皿	3B	井戸B-3 中層下位	
260	87	40	土師器皿	3B	井戸B-3 中層(暗黄灰色土)	
261	87		土師器皿	3B	井戸B-3 最下層(暗青灰色粘土)	
262	87	40	瓦器皿	3B	井戸B-3 中層(黄灰色土)	
263	87		瓦器皿	3B	井戸B-3 下層上位(灰色粘土)	
264	87		瓦器皿	3B	井戸B-3 上層(灰褐色土)	
265	87	40	瓦器椀	3B	井戸B-3 下層	
266	87	40	瓦器椀	3B	井戸B-3 下層	
267	87		瓦器椀	3B	井戸B-3 下層下位(青灰色粘土)	
268	87		瓦器椀	3B	井戸B-3 中層(灰色粘土)	
269	87		瓦器椀	3B	井戸B-3 下層上位(灰色粘土)	
270	87	40	瓦器椀	3B	井戸B-3 中層(暗黄灰色土)	
271	87		瓦器椀	3B	井戸B-3 下層	
272	87	カラー-2	白磁皿 VIIIb類	3B	井戸B-3 中層下位	13C中頃
273	87	カラー-2	白磁碗 V類	3B	井戸B-3 中層(灰色粘土)	12C中頃~13C前半
274	87	カラー-2	白磁四耳壺 VI類	3B	井戸B-3 中層(灰色粘土)	12C中頃~後半
275	87		須恵器練鉢	3B	井戸B-3 中層(黄灰色土)	
276	87		須恵器練鉢	3B	井戸B-3 上層(暗灰褐色土)	
277	87		土師質羽釜	3B	井戸B-3 上層(灰褐色土)	
278	87		土師質羽釜	3B	井戸B-3 中層(青灰色土)	
279	87		土師質羽釜	3B	井戸B-3 中層(暗黄灰色土)	
280	88	41	土師器皿	3D	井戸D-2	
281	88		土師器皿	3D	井戸D-2	
282	88	41	瓦器皿	3D	井戸D-2	
283	88		土師質羽釜	3D	井戸D-2	
284	89	41	土師器皿	2D	井戸D-3 最下層	
285	89	41	瓦器皿	2D	井戸D-3 最下層	
286	89	41	瓦器椀	2D	井戸D-3 最下層	
287	89		瓦器椀	2D	井戸D-3 最下層	

遺物一覧表(6)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺 構・層 名	備 考
288	90		土師器皿	2D	井戸D-4	
289	90		瓦器皿	2D	井戸D-4	
290	90		瓦器皿	2D	井戸D-4	
291	90	カラー4	白磁皿 VM2b類	2D	井戸D-4 暗灰色シルト	13C後半。胎土陶器質、粗悪品。釉黄色味帯びる。腰から下無釉。
292	90	41	瓦器碗	2D	井戸D-4	
293	90		瓦器碗	2D	井戸D-4	
294	90		須恵器甕	2D	井戸D-4	
295	90		須恵器甕	2D	井戸D-4	
296	90		須恵器練鉢	2D	井戸D-4	
297	90		土師質羽釜	2D	井戸D-4	
298	90		土師質羽釜	2D	井戸D-4	
299	91		瓦器皿	3D	井戸D-5	
300	91		瓦器碗	3D	井戸D-5	
301	91		瓦器碗	3D	井戸D-5	
302	91		須恵器練鉢	3D	井戸D-5	
303	91		瓦質播鉢	2D	井戸D-5	
304	92	41	瓦器碗	3D	井戸D-6	
305	92	41	瓦器碗	3D	井戸D-6	
306	92		瓦器碗	3D	井戸D-7	
307	93		土師器皿	5E	井戸E-1 上層	
308	93	43	土師器皿	5E	井戸E-1 最下層	
309	93		瓦器皿	5E	井戸E-1 最下層	
310	93		瓦器皿	5E	井戸E-1 下層	
311	93	43	瓦器皿	5E	井戸E-1 中層	
312	93		瓦器碗	5E	井戸E-1 中層	
313	93		瓦器碗	5E	井戸E-1 中層	
314	93		瓦器碗	5E	井戸E-1 下層	
315	93		瓦器碗	5E	井戸E-1 下層	
316	93		土師質羽釜	5E	井戸E-1 中層	
317	93		土師質羽釜	5E	井戸E-1 上層	
318	93		土師質羽釜	5E	井戸E-1 上層	
319	93	61	石鍋	5E	井戸E-1 最下層	滑石
320	95		土師器皿	5・7E	井戸E-2	
321	95	42	土師器皿	5・7E	井戸E-2 本体9段目	
322	95	42	瓦器皿	5・7E	井戸E-2 最下部、曲物	
323	95		瓦器皿	5E	井戸E-2	
324	95		瓦器碗	5・7E	井戸E-2 最下部	
325	95		瓦器碗	5・7E	井戸E-2 最下部	
326	95		瓦器碗	5・7E	井戸E-2 本体9段目	
327	95		瓦器碗	5・7E	井戸E-2 最下層	
328	95		瓦器碗	5・7E	井戸E-2 最下部	
329		53	土師器甕	9F	井戸F-6	「東寺」墨書
330	95	42	土師質羽釜	5・7E	井戸E-2 本体12段目	
331	95	42	土師質羽釜	5・7E	井戸E-2 本体9段目	
332	94	64	曲物	5・7E	井戸E-2 11段目内曲物	
333	96		常滑甕 4型式後～5型式	5E	井戸E-3 中層	
334	96		須恵器甕	5E	井戸E-3 中層	
335	97		瓦器皿	2E	井戸E-5 中層	
336	97		瓦器碗	2E	井戸E-5 最下層	
337	97		瓦器碗	2E	井戸E-5 下層	
338	97		瓦器碗	2E	井戸E-5 中層(灰色砂質土)	
339	97	53	白磁皿 VI1a類	2E	井戸E-5	12C後半。釉黄色、腰から下は無釉。「大」墨書。
340	97		土師質羽釜	2E	井戸E-5 中層(灰色砂質土)	
341	98		瓦器皿	3E	井戸E-12	
342	98		瓦器碗	3E	井戸E-12 土器群	
343	98	43	瓦器碗	3E	井戸E-12 土器群	

遺物一覧表(7)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺 構 ・ 層 名	備 考
344	98		瓦器椀	3E	井戸E-12 土器群	
345	98	43	瓦器椀	3E	井戸E-12 土器群	
346	99		土師器皿	3E	井戸E-13	
347	99		土師器皿	3E	井戸E-13	
348	99	43	土師器皿	3E	井戸E-13	
349	99		土師器皿	3E	井戸E-13	
350	99		瓦器皿	3E	井戸E-13	
351	99		瓦器椀	3E	井戸E-13	
352	99		瓦器椀	3E	井戸E-13	
353	99		瓦器碗	3E	井戸E-13	
354	99		瓦器椀	3E	井戸E-13	
355	99	43	瓦器椀	3E	井戸E-13	
356	99	カラー5	廈門碗窯系白磁碗 IV 2 類	3E	井戸E-13	13C前半
357	99	カラー5	廈門碗窯系白磁碗 IV 2 類	3E	井戸E-13	13C前半
358	99		瓦質脚	3E	井戸E-13	
359	99		須恵器甕	3E	井戸E-13	
360	99		須恵器甕	3E	井戸E-13	
361	99		須恵器甕	3E	井戸E-13	
362	99		須恵器甕	3E	井戸E-13	
363	99		土師質羽釜	3E	井戸E-13	
364	100	64	墨書木簡	3E	井戸E-13	
365	101	43	瓦器椀	1・2E	井戸E-16	
366	101	43	瓦器椀	1・2E	井戸E-16	
367	101		瓦器椀	2E	井戸E-16	
368	101		瓦器椀	2E	井戸E-16	
369	101		瓦器椀	1・2E	井戸E-16	
370	101		土師質羽釜	2E	井戸E-16	
371	101	43	瓦器椀	1・3E	井戸E-17	
372	102	44	土師器皿	3B	土坑B-4 中層	
373	102	44	瓦器椀	3B	土坑B-4 中層	
374	102	44	瓦器椀	3B	土坑B-4 下層	
375	102		須恵器甕	3B	土坑B-4 中層	
376	103		土師器皿	3C	土坑C-4 下層	
377	103		瓦器皿	3C	土坑C-4	
378	103		瓦器皿	3C	土坑C-4	
379	103	44	瓦器椀	3C	土坑C-4 下層	
380	103		瓦器椀	3C	土坑C-4 下層(灰色粘土)	
381	103		瓦器椀	3C	土坑C-4	
382	103	44	瓦器椀	3C	土坑C-4 下層	
383	103		瓦器椀	3C	土坑C-4 下層	
384	103		土師質羽釜	3C	土坑C-4	
385	104		土師器皿	2D	土坑D-1	
386	104		瓦器椀	2D	土坑D-1	
387	104		瓦器椀	2D	土坑D-1 中・下層(2~3層)	
388	104		瓦器椀	2D	土坑D-1	
389	104		瓦器椀	3D	土坑D-2	
390	105		土師器皿	1E	土坑E-27	
391	105		土師器皿	1E	土坑E-27	
392	105		瓦器椀	1E	土坑E-27	
393	105		須恵器甕	1・2E	土坑E-27	
394	106		瓦器椀	2E	土坑E-35	
395	106	44	瓦器椀	2E	土坑E-35	
396	106		瓦器椀	2E	土坑E-35	
397	106	44	瓦器椀	2E	土坑E-35	
398	106		瓦器椀	2E	土坑E-35	
399	106	44	瓦器椀	2E	土坑E-35	
400	106		瓦器椀	2E	土坑E-35	

遺物一覧表(8)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺 構・層 名	備 考
401	106		瓦器碗	2E	土坑E-35	
402	106	44	瓦質片口鉢	2E	土坑E-35	
403	107		瓦質羽釜	10E	落込E-11	
404	108		瓦器皿	2D	畦畔D-1 下層	
405	109		土師器皿	10F	ピットF-701	
406	109		土師器皿	10F	ピットF-702	
407	109		土師器皿	10F	ピットF-705	
408	109		白磁皿 E-2類?	10F	ピットF-705	
409	111		土師器皿	10F	溝F-104	
410	112	カラ-5	白磁碗 D類	1・2E	井戸E-6 暗灰褐色砂質土	15C
411	113		瓦質片口挿鉢	2E	井戸E-14	
412	113		瓦質羽釜	2E	井戸E-14	
413	114		土師器皿	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
414	114		土師器皿	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
415	114		土師器皿	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
416	114		土師器皿	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
417	114		土師器皿	2E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
418	114		土師器皿	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
419	114		土師器皿	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
420	114	43	土師器皿	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
421	114		土師器皿	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
422	114		土師質羽釜	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
423	114		土師質羽釜	1・3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
424	115		土師質甕	8E	井戸E-32	
425	116		土師器皿	8F	井戸F-7 上層	
426	116		土師器皿	8F	井戸F-7 上層	
427	116		土師器皿	8F	井戸F-7 上層	
428	116		瓦質羽釜	8F	井戸F-7 下層	
429	117		瓦質甕	10F	井戸F-11	
430	117		瓦質甕	10F	井戸F-11	
431	118		土師器皿	3E	土坑E-37	
432	118		土師器皿	3E	土坑E-37	
433	118		土師器皿	3E	土坑E-37	
434	118		土師器皿	3E	土坑E-37	
435	118	47	瀬戸鉢	3E	土坑E-37	14C
436	118		瓦質甕	3E	土坑E-37	
437	118		瓦質甕	3E	土坑E-37	
438	118		瓦質羽釜	3E	土坑E-37	
439	118		土師質羽釜	3E	土坑E-37	
440	118		土師質羽釜	3E	土坑E-37	
441	118		瓦質羽釜	3E	土坑E-37	
442	118		土師質羽釜	3E	土坑E-37	
443	118		瓦質羽釜	3E	土坑E-37	
444	118	48	常滑甕 6a型式	3E	土坑E-37	13C中頃～後半
445	119	54	瓦質灯明台	3E	土坑E-37	「寺」線刻
446	120	62	相輪	3E	土坑E-37	流紋岩質火山礫凝灰岩
447	120	62	五輪塔	3E	土坑E-37	流紋岩質凝灰角礫岩
448	121		土師器皿	3E	土坑E-45	
449	121	カラ-8	白磁皿 D類	3E	土坑E-45	15C中頃～後半。割高台。
450	121	カラ-8	龍泉窯系青磁印花文碗	3E	土坑E-45	15C前半
451	121	カラ-8	龍泉窯系青磁福祿字文碗	3E	土坑E-45	15C
452	121	カラ-8	龍泉窯系青磁印字文碗	1~3E	土坑E-45	16C前半
453	121	カラ-8	龍泉窯系青磁無文碗	3E	土坑E-45 現排水路部分	15C。陶器質。再加工?
454	121	50	備前種壺	3E	土坑E-45	16C前半
455	121	50	備前挿鉢	3E	土坑E-45	16C後半
456	121		瓦質挿鉢	3E	土坑E-45	

遺物一覧表(9)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺 構・層 名	備 考
457	121		土師質播鉢	3E	土坑E-45	
458	121		土師質羽釜	3E	土坑E-45	
459	121		土師質羽釜	3E	土坑E-45	
460	121		土師質羽釜	3E	土坑E-45	
461	121		瓦質羽釜	3E	土坑E-45	
462	121		土師質甕	1E~3E	土坑E-45 中・下層	
463	122	54	瓦質灯明台	1E~3E	土坑E-45 (1992年度調査区) 上層	「應保」「西城房」線刻
464	123		瓦質小型羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
465	123		瓦質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
466	123		瓦質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
467	123		瓦質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
468	123		瓦質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
469	123		瓦質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
470	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
471	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
472	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
473	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
474	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
475	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
476	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
477	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
478	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
479	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
480	123		土師質羽釜	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
481	124		土師器皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
482	124		土師器皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
483	124		土師器皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
484	124		土師器皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
485	124		土師器皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
486	124		土師器皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
487	124		土師器皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
488	124		土師器皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
489	124		土師器皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
490	124		瓦器椀	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
491	124		瓦器椀	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
492	124	50	白磁皿 II1a類	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	12C後半。粗悪品。
493	124	50	龍泉窯系青磁無文碗	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	15C。再加工。
494	124	50	龍泉窯系青磁無文碗	8E	土坑E-45 (1992年度調査区) 下層	15C
495	124		唐津皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
496	124	50	唐津碗	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	16C末~17C初
497	124	50	唐津小壺	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	16C末~17C初。お歯黒壺。
498	124	50	瀬戸花瓶 II類	8E	土坑E-45 (1992年度調査区) 黄灰色土	14C中葉
499	124	50	備前種壺?	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	15C?
500	124	50	備前播鉢	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	15C後半
501	124		土師質壺?	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
502	124		瓦質火舎?	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
503	124		瓦質播鉢	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
504	124		瓦質甕	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
505	124		瓦質甕	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	
506	125		土師器皿	8E	土坑E-84	
507	125		瓦質播鉢	8E	土坑E-84	
508	125		土師質羽釜	8E	土坑E-84	
509	125		土師質羽釜	8E	土坑E-84	
510	125		瓦質甕	8E	土坑E-84	
511	125		瓦質甕	8E	土坑E-84	
512	125		瓦質井戸枠?	8E	土坑E-84	
513	125		瓦質脚	8E	土坑E-84	
514	129		瓦器皿	8E	土坑E-72	
515	129		土師器皿	8E	土坑E-72	

遺物一覧表 (10)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺 構 ・ 層 名	備 考
516	129		美濃窯系長石釉丸碗	8E	土坑E-72	17C前半
517	129		須恵器壺	8E	土坑E-72	
518	129		土師質鍋	8E	土坑E-72	
519	129		瓦質挿鉢	8E	土坑E-72	
520	129		瓦質甕	8E	土坑E-72	
521	129		瓦質羽釜	8E	土坑E-72	
522	110		土師器皿	10F	溝F-101	
523	110		土師器皿	10F	溝F-101	
524	126	51	白磁碗 IV1類	11G	溝G-1	13C前半
525	126	51	波佐見窯系染付一重網目文碗	12G	溝G-1	17C後半
526	127	52	土師器皿	3E	井戸E-9 中層	
527	127	52	土師器皿	3E	井戸E-9	
528	127	52	土師器皿	3E	井戸E-9	
529	127	52	土師器皿	3E	井戸E-9	
530	127	52	土師器皿	3E	井戸E-9	
531	127	52	土師器皿	3E	井戸E-9	
532	127	52	土師器皿	3E	井戸E-9	
533	127	52	肥前系碗	3E	井戸E-9	17C後半
534	127	52	波佐見窯系染付碗	3E	井戸E-9 灰褐色砂質土	18C前半。「大明年製」の略字。松と草花文。
535	128		土師器皿	3E	土坑E-44 最下層	
536	128		土師器皿	1E~3E	土坑E-44 最下層	
537	128		土師器皿	1E~3E	土坑E-44 下層	
538	128		瓦器椀	1E~3E	土坑E-44 最下層	
539	128		瓦器椀	1E~3E	土坑E-44 最下層	
540	128	44	口禿白磁皿 IX1c類	1~3E	土坑E-44 最下層	13C。粘性度の高い白釉。粗悪品。
541	128	カラー7	白磁碗	1~3E	土坑E-44 上層	13C。D期。腰から下無釉。畳付に黒漆付着。
542	128	カラー7	福建省漳州窯系青花碗	1~3E	土坑E-44 上層	16C末~17C初
543	128	カラー7	漳州窯系菊皿	1~3E	土坑E-44 上層	16C末~17C初
544	128	カラー7	龍泉窯系青磁無文碗	1~3E	土坑E-44 上層	15C
545	128	カラー7	龍泉窯系青磁無文碗	1~3E	土坑E-44 上層	15C
546	128	カラー7	龍泉窯系青磁無文碗	1~3E	土坑E-44 上層	15C
547	128	カラー7	朝鮮王朝陶磁雜釉碗	1~3E	土坑E-44 上層	16C後半~17C初。4カ所砂目。
548	128	49	唐津丸碗	1~3E	土坑E-44 上層	16C末~17C初。胎土目。
549	128		唐津鉢	2E	土坑E-44・45 上面	17C初
550	128	49	備前挿鉢	1~3E	土坑E-44 上層	16C末~17C初
551	128		瓦質挿鉢	1E~3E	土坑E-44 下層	
552	128		瓦質挿鉢	1E~3E	土坑E-44 最下層	
553	128		瓦質羽釜	1E~3E	土坑E-44 下層	
554	128		瓦質羽釜	1E~3E	土坑E-44 最下層	
555	128		瓦質羽釜	1E~3E	土坑E-44 下層	
556	128		土師質羽釜	1E~3E	土坑E-44 下層	
557	128		土師質羽釜	1E~3E	土坑E-44 最下層	
558	128		土師質甕	1E~3E	土坑E-44 上下層	
559	130		土師器皿	10F	土坑F-82	
560	130	51	唐津皿	10F	土坑F-82 下層	17C中頃
561	130		備前?鉢?	10F	土坑F-82	
632		32	翼状剥片	9F	土坑F-5	(79.0)*41.0*11.2mm 37.8g
633		32	不定形刃器	3E	暗灰黄色粘質土	(69.8)*47.0*15.0mm 55.8g
634		32	石鏃	10F	土坑F-86	(24.0)*21.1*4.2mm 1.7g
635		32	石鏃	10F	ピットF-707	23.8*15.7*3.2mm 1.0g
636		32	石鏃	3D	鋤溝D-1	24.2*17.5*2.5mm 0.9g
637		32	石鏃	3D	明黄橙色	24.0*18.2*2.5mm 1.3g
638		32	石鏃	11G	土坑G-31	25.0*16.9*3.5mm 1.3g
639		32	石鏃	8F	土坑F-28	(21.4)*16.4*3.5mm 1.2g
640		32	石鏃	11G	落込G-4 黄灰色土	(18.2)*16.1*3.9mm 1.4g

遺物一覧表 (11)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺 構・層 名	備 考
641		32	石鏃	7A	黄灰色土下層	(36.0)*14.0*5.5mm 2.7g
642		32	子持ち勾玉	1~3E	土坑E-44 上層	滑石
643		33	形象埴輪 (人物)	12G	溝G-3 灰白色粘質土	
644		33	窯壁付着須恵器片	3E	土坑E-37	
645		33	形象埴輪 (盾)	11G	溝G-3	
646		34	製塩土器	11G	溝G-14 灰褐色土	
647		34	製塩土器	11G	溝G-14 灰褐色土	
648		34	製塩土器	11G	溝G-14内土器群	
649		34	和同開珎	9F	溝F-11	
650		34	和同開珎	9F	溝F-11	
651		34	和同開珎	9F	溝F-11	
652		42	土師質羽釜	5・7E	井戸E-2本体11段目	
653		42	土師質羽釜	5・7E	井戸E-2本体7段目	
654		42	土師質羽釜	5・7E	井戸E-2本体2段目	
655		42	土師質羽釜	5・7E	井戸E-2本体5段目	
656	カラー1		白磁碗 V4a類	1B	大溝B-1 上層下位	12C中頃~13C前半
657	カラー1		廈門碗窯系白磁碗 IV2類	1B	大溝B-1 上層下位	13C第2四半期
658	カラー1		中国白磁四耳壺 小 III2類	1B	大溝B-1 上層下位	12C中頃~後半
659	カラー1		龍泉窯系青磁画劃文碗 I2a類	1B	大溝B-1 上層下位	13C第2四半期
660	カラー1		龍泉窯系青磁碗	1B	大溝B-1 上層下位	15C。疊付擦っている。不良品。再加工?
661	カラー2		同安窯系青磁碗 III1b類	3B	井戸B-2 上層	13C
662	カラー2		白磁四耳壺 III類	3B	井戸B-3 中層 (灰色粘土)	12C中頃~後半
663	カラー3		白磁皿 V1類	2B	黄灰色土層上層	13C第2四半期
664	カラー3		廈門碗窯系白磁碗 IV2類	2B	黄灰色土層下層	13C第2四半期
665	カラー3		廈門碗窯系白磁碗 IV2類	2B	黄灰色土層上層	13C第2四半期
666	カラー3		廈門碗窯系白磁碗 IV2類	2B	黄灰色土層下層	13C第2四半期
667	カラー3		白磁四耳壺 III類	2B	黄灰色土層下層	12C中頃~後半
668	カラー3		同安窯系青磁皿 I1b類	2B	黄灰色土層上層	13C中頃~後半
669	カラー3		同安窯系青磁皿 I1b類	2B	黄灰色土層下層	13C中頃~後半
670	カラー3		龍泉窯系青磁碗 5b類	2B	床土・黄褐色土	13C中頃~後半
671	カラー3		同安窯系青磁碗 I1b類	2B	黄灰色土層下層	13C中頃~後半
672	カラー4		白磁碗 IV2c類	3D	井戸D-2 2層	12C中頃~後半
673	カラー4		廈門碗窯系白磁碗 IV1類	2D	井戸D-8 2層	13C前半
674	カラー4		龍泉窯系青磁印花文碗	2D	井戸D-8	15C。めんこ転用。
675	カラー4		龍泉窯系青磁蓮弁文碗 I5b類	2D	土坑D-1 上層	13C後半
676	カラー4		廈門碗窯系白磁碗 IV2類	2D	畦畔D-1 下層	13C前半。腰から下無釉。
677	カラー5		龍泉窯系青磁小碗 III2b類	2E	井戸E-19 2段目	14C前半。線描き蓮弁文。
678	カラー5		龍泉窯系青磁印花文碗	2E	井戸E-19 青灰色砂質土	15C後半。再加工。
679	カラー5		漳州窯系青花碗	2E	井戸E-19 青灰色砂質土	16C末~17C初
680	カラー5		景德鎮窯系青花碗	2E	井戸E-19 青灰色砂質土	16C後半
681	カラー6		ねずみ志野向付	3E	土坑E-12	17C初。高価、珍しい。
682	カラー6		景德鎮窯系青花太湖石皿	2E	土坑E-39	16C

遺物一覧表 (12)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺 構・層 名	備 考
683		カラー6	常滑甕 5型式	2E	土坑E-64	13C前半
684		カラー6	漳州窯系青花折花文 碗	2E	土坑E-64	16C末~17C初
685		カラー6	唐津皿	2E	土坑E-64	16C末~17C初。胎土目。
686		カラー6	渥美? 三筋壺	3E	土坑E-72	12C前半
687						欠番
688		カラー7	龍泉窯系青磁壺	1~3E	土坑E-44 上下層	14C代
689		カラー7	青磁四耳壺 VI2類?	1~3E	土坑E-44 上層	13C。基筒底。
690		カラー8	建窯系天目茶碗	1~3E	土坑E-45	14C
691	45		渥美甕	1B	大溝B-1 上層上位	12C第3四半期。井戸B-2と同一。
692	45		常滑甕 1bか2型式	1B	大溝B-1 上層下位	12C中頃~後半
693	45		常滑甕 1bか2型式	1B	大溝B-1 上層下位	12C中頃~後半
694	45		常滑 2か3型式	2B	大溝B-1 上層	12C後半。井戸B-3と同一。
695	45		白磁碗 V類	3E	溝E-2 下層	12C中頃~13C前半
696	45		龍泉窯系青磁無文碗	5E	溝E-2 下層	15C
697	45		瀬戸灰釉平碗	3E	溝E-2 上層	14C後半~15C前半
698	45		瀬戸黒碗	3E	溝E-2	
699	45		常滑甕	3E	溝E-2 上層	12C第4四半期
700	45		常滑甕	1・2E	溝E-2 下層	12C第4四半期
701	45		常滑甕	3E	溝E-2	12C第3四半期
702	45		備前? 鉢	3E	溝E-2 上層	16C末~17C初?
703	45		堺播鉢	3E	溝E-2 上層	18C
704	46		渥美?	3B	井戸B-2 中層	12C?
705	46		常滑甕	3B	井戸B-2 上層	
706	46		渥美? 甕	3B	井戸B-2 下層	
707	46		常滑甕	3B	井戸B-2 下層	
708	46		渥美? 甕	3B	井戸B-2 下層	
709	47		瀬戸灰釉平碗底	3E	井戸E-8	15C中頃
710	47		丹波播鉢	3E	井戸E-9	17C前半
711	47		瀬戸灰釉卸皿	2E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	13C後半~14C前半
712	47		備前壺?	3E	井戸E-22 暗青灰色粘質土	
713	47		備前甕	2E	井戸E-23 上部	15C前半
714	47		瀬戸灰釉深皿?	3E	土坑E-37	古瀬戸中期IV期?
715	47		瀬戸鉢	3E	土坑E-37	14C
716	47		瀬戸花瓶 II類	3E	土坑E-37	14C中葉
717	47		瀬戸瓶子 II類	3E	土坑E-37	古瀬戸中期IV期?
718	48		常滑甕	3E	土坑E-37	13C第1四半期
719	48		常滑甕	3E	土坑E-37	13C第3四半期
720	48		信楽甕	3E	土坑E-37	13~14C
721	48		信楽壺	3E	土坑E-37	15C前半
722	48		備前播鉢	3E	土坑E-37	16C初頭
723	48		備前播鉢	3E	土坑E-37	16C前半~中頃
724	48		備前播鉢	3E	土坑E-37	16C前半~中頃
725	48		備前甕	3E	土坑E-37	15C
726	48		備前甕	3E	土坑E-37	15C
727	49		厦門碗窯系白磁碗 IV1類	2E	土坑E-41	12C第4四半期~13C第1四半期
728	49		龍泉窯系青磁碗 I類(14a or 12a か)	2E	土坑E-41	13C中頃~後半
729	49		龍泉窯系青磁線描蓮 弁文碗	2E	土坑E-41	15C後半
730	49		景德鎮窯系青花雷文 帶碗	2E	土坑E-41	16C
731	49		備前播鉢	2E	土坑E-41	16C初
732	49		瀬戸瓶子 前期 I類	1~3E	土坑E-44 上層	13C中頃。III期。
733	49		瀬戸卸皿	1~3E	土坑E-44 下層	13C後半~14C初
734	49		常滑甕 VII型式	1~3E	土坑E-44 上層	14C前半
735	49		備前大甕	1~3E	土坑E-44 下層	14C前半。III期。
736	49		備前大甕	1~3E	土坑E-44 上下層	16C
737	50		瀬戸灰釉卸皿	3E	土坑E-45	14C後葉~15C中頃

遺物一覧表 (13)

遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器 種	トレンチ	遺 構・層 名	備 考
738		50	備前播鉢	1~3E	土坑E-45	16C後半
739		50	備前甕	3E	土坑E-45	13C
740		51	白磁皿 IX1c類	8F	溝F-63	13C終頃~14C前半。F期。
741		51	龍泉窯系青磁碗 I5b類	9F	床土上面から掘られた溝	13C後半
742		51	廈門碗窯系白磁碗 IV2類	8F	井戸F-2	13C第2四半期
743		51	口禿白磁皿 IX1c 類	8F	井戸F-2	13C中頃~後半。F期。
744		51	龍泉窯系青磁印字文 碗	8F	攪乱及び水路	15C
745		51	白磁碗 IV1類	11G	溝G-1	13C前半
746		51	龍泉窯系青磁無文碗	16G	大溝G-1 上層	14C
747		51	龍泉窯系青磁無文碗	12G	溝G-1	15C。めんこ転用
748		53	土師器甕	9F	井戸F-6	「東寺」墨書
749		53	唐津皿	8E	土坑E-45 (1992年度調査区)	16C末~17C初。碁笥底「+」? 墨書。
750		53	唐津皿	2E	土坑E-65	16C末~17C初。外底「+」? 墨書。
755		61	石鍋	3E	土坑E-37	滑石
756		61	滑石製不明品	9F	溝F-81	温石?
757		61	牛骨	1・3E	井戸E-17	左上腕骨
758		61	鉾滓	1B	大溝B-1 上層上位	
759		61	溶解炉	2D	井戸D-4	
760		62	五輪塔	1~3E	土坑E-45 最下層	流紋岩質凝灰角礫岩
761		62	凝灰岩製不明品	3B	井戸B-2 最下層 (淡青灰色砂)	
762		63	瓦製暗渠	5・6E	暗渠E-1 本体3	
763		63	石臼	2E	井戸E-19 青灰色砂質土	砂岩
764		63	五輪塔	2E	井戸E-19 青灰色砂質土	砂岩
765		63	五輪塔	2E	井戸E-19 青灰色砂質土	砂岩
766		64	漆器椀	8A	井戸A-1	黒漆
767		64	漆器椀	8A	井戸A-2	黒漆
768		64	木簡	3E	井戸E-15	

第6章 まとめ

近畿自動車道建設に伴う発掘調査によって、観音寺遺跡のうち全長約1km、幅約30mの調査区内で、主に飛鳥時代から現代に至る多くの遺構や遺物が検出された。詳細については、前章までで述べたが、ここでは調査区全体の遺構の変遷を時代順に簡単に整理し、さらに特徴的な時期における時代背景などを含めた歴史的景観をとらえることによって、まとめにかえることとする。

第1節 遺構の変遷

本調査では、古墳時代以前の遺構は検出されていない。遺物に関しては、混入品であるが、打製石器やサヌカイト片が出土している。縄文時代や弥生時代の石鏃もみられるが、縄文土器や弥生土器は出土していない。古墳時代の遺物では、土師器や須恵器、埴輪、子持勾玉などが出土している。調査区の東側に隣接して立部古墳群跡が知られており、埴輪のなかに人物埴輪などもみられることから、埴輪をもつ古墳が存在していたことが推測される。調査区の北東部には、大型の前方後円墳である河内大塚山古墳が現存しているが、埴輪の使用は確認されていない。また、窯壁付着の須恵器片や生焼けの須恵器片などもみられることから、須恵器窯の存在も推測される。調査区の北側には樋野ヶ池窯跡が知られており、須恵器窯の立地環境としては適している場所と考えることができる。全体の遺物量としては、非常に少ないことから、古墳時代以前には、集落などが営まれていた可能性はほとんどないものと考えられる。古墳時代に限れば、周辺に大型の前方後円墳をはじめ複数の古墳が立地していたり、須恵器窯跡が認められる地域であることから、明確な遺構は検出されていないが、重要な地域であったことがわかる。

確実に時期のおさえられる遺構で最も古いものは、奈良時代に属する建物群で、G地区南部を中心にひろがっている。ただ、遺物が出土していないため時期は確定できないが、重複関係によって、奈良時代の建物群に先行する建物群が検出されていることから、これらが調査区内で検出された最も古い遺構といえる。かなり柱穴の規模が大きくしっかりしており、総柱の建物であることから、倉庫群と考えることができ、なんらかの公的施設に伴う可能性が考えられる。奈良時代の遺構は建物のほか、溝や土坑なども検出されていることから、集落が営まれていたことがわかる。調査区の南側には、古代の官道である丹比道（竹之内街道）が横切っていることが知られていることから、実態ははっきりしないものの、街道に面した部分に集落か公的施設が設けられていた可能性が高いものといえる。

平安時代前期では、C・E・F・G地区で建物群やピットを中心とした遺構群が検出されている。特にF地区では、溝で囲まれた屋敷地がみられ、在地の有力者のものと考えられる。屋敷地は、庇を持ち、雨落ち溝を伴う中心的な掘立柱建物を中心に溝や井戸などが配置されており、全容は明らかではないものの、まわりをめぐる溝から南北方向で1/4町、東西方向で1/2町の規模を想定することができる。遺物量は全体に少ないが、井戸から多くの遺物が出土しており、特に「東寺」の墨書が書かれた土師器甕が3点みられることが特徴的である。また、一部の建物で重複がみられることから、溝が掘削される以前の建物群も確認されており、当時の中心的な場所であったことがわかる。他の地区でも建物やピット群が検出されているが、F地区のようなまとまりは認められず、散発的なものである。ただ、大溝G-1や井戸E-15などでは多くの遺物が出土しており、墨書土器もみられるため、建物は復原できなかったものの、これらの地区の周辺でも集落が営まれていた可能性は高い。さらに井戸E-15から

は、「河内国丹比郡・・」と書かれた木簡が出土しており、当時の行政区画を示す資料として重要である。

平安時代末～南北朝時代は、最も遺構が多く検出されている時期である。ほぼ各地区で検出されているが、まとまりとしてはB・D・E地区で、建物群を中心とした遺構群が認められる。併存した時期もあるが、B地区西部は平安時代末、D地区北部は平安時代末～鎌倉・南北朝時代、E地区東部は平安時代～鎌倉時代を中心とした時期である。ただし、各地区の建物群の構成は異なっており、居住者の階層の差がある程度反映したものと考えられる。

B地区の屋敷地は、大型の建物を持つ屋敷でまわりに堀をめぐらしており、当時の有力者層の屋敷と推定される。遺構群は、大きく2時期に分けられるが、出土遺物からみても1型式程度の時期差しか認められない。建物は、やや主軸方向がずれているが、ほぼ同様の位置に建て直していることから、同じ一族が継続して居住していたものと考えられる。いずれの時期も3棟の建物が検出されているが、主屋と考えられる建物はみられず、調査区の西側に位置しているものと推測できる。このことは、建物B-4の北西部と建物B-5の北部に柵列がみられることから考えられる。堀の陸橋部は屋敷の入口ということができ、堀の内側には、門を構成していたと考えられる一対の柱穴が検出されている。入口の正面に位置する大型の建物は、使用人などの住居である長屋などの施設と想定される。厩舎と考えることもできるが、積極的な確証は認められないため、可能性を示す程度にとどめておくこととする。したがって、ここで検出された入口は正面の入口とは考えられず、裏口のような性格をもった入口といえる。

D地区では、比較的大型の建物がみられるが、B地区とは異なり、建物がまとまって一群を形成する屋敷地の形態をとっておらず、区画溝なども検出されていない。大型と小型の建物がセット関係をなしており、住居と倉庫と考えることができる。建物に伴う地鎮のための土器埋納ピットも検出されている。周辺で鋤溝が多く検出されていることから、耕作地に隣接した有力な農民層の居住地といえる。また、井戸からスラグや比較的大型の溶解炉破片が出土していることから、付近で金属生産に関わる作業が行われていたことが考えられるが、調査区内では明確な遺構や工房などの痕跡は検出されていない。

E地区では、一段高い平坦面で建物群がまとまって検出されているが、3グループに分けることができ、各グループを画する溝が掘られている。各グループの様相は同じではなく、柱穴の形状の違いや井戸の有無などから、住居部分と倉庫部分に分かれることが推測される。各グループの占有面積は比較的小さいため、他地区の建物群のような有力者の居住地というより、一般的な集落と考えるのが妥当と思われる。ただ、建物がつくられている高台の縁辺部を検出したのみであるため、集落の全体像や構造ははっきりしない。また、検出された井戸はほとんどが素掘りのものであるが、E地区では土師器羽釜を積み上げて井戸枠とした井戸が検出されている。このほか、井戸E-13から呪符木簡が出土しており、当時の信仰を示すものとして重要な資料である。

室町時代では、D・E・F地区でピットや溝、土坑、井戸などが検出されているが、平安時代末～鎌倉時代のような遺構のまとまりは認められず、散発的に分布している。ただ、E地区で検出された井戸や土坑から大量の遺物が出土していることから、建物はみられないものの、鎌倉時代に営まれていた集落がこの時期まで存続していたことが考えられる。大量の瓦や寺院に関連する遺物（灯明台や五輪塔など）がみられることから、付近に寺院が存在していたことがわかる。また、灯明台には「・・寺」や「應保・・」、「西城房」などの刻字があり、当時の文献史料の記述と一致する部分が認められる。

近世以降になると、建物群はみられず、溝や井戸が散発的に検出されたのみである。遺物量も少なく

なり、調査区内では集落は営まれていないものと考えられる。井戸は、耕作に伴うものと考えられ、中には漆器碗が出土したものもあるが、全体に遺物量は少ない。E地区では、調査区中央部分に一直線に並ぶ土坑群が検出されている。平面形は円形もしくは楕円形で、断面は碗状を呈している。遺物量が少ないため性格ははっきりしないが、水溜めか粘土取りのために掘削されたものと推定される。江戸時代には、立部村でかわらけを製造していたことが知られていることから、それに伴う粘土採掘坑の可能性が高い。調査区付近一帯がほぼ全域にわたって耕作地になり、現在に至っている。

調査区南端部にある新池は、開析谷を利用した溜池であるが、池底確認により大溝G-1の続きと考えられる痕跡が認められた。このため、大溝G-1が掘削された時期（奈良時代頃）にはまだ溜池はつくられていなかったことがわかる。大溝G-1は中世まで存続したものと考えられるが、大溝G-1の廃絶と溜池の築造が関連するものかどうかははっきりしないため、溜池の築造時期を特定することはできなかった。ただ、近世以降、付近の開発が進み、急激に耕作地が広がっていることから、この時期に大量の農業用水確保のため、溜池を築造したものと考えることができる。

第2節 文献史料による時代背景

今回の調査により出土した遺物の中で、文字資料が数点認められ、文献史料と一致するものもみられることから、時代背景を探ってみたい。

まず、調査時から問題となっていた、土坑E-45出土の「西城房」と刻字された灯明台である。遺物に関する詳細については、別章で大野薫氏がまとめられているので、ここでは割愛させていただくが、さらに時代背景をまとめてみることにする。「西城房」は、高山寺聖教類紙背文書の中にある『佐伯景弘持経者巻数注進状』のなかに記載がみられる。この記録は、安芸国厳島神社の神主である佐伯景弘が、10人の僧侶を集めて写経させ、各人の仕事量を集計して報告した内容のものである。10人の内訳は、河内国丹北郡・丹南郡・石川郡の僧侶7人と、安芸国一宮（厳島神社）住僧3人である。筆頭に記載されている河内国丹南郡黒山長和寺の明蓮房良尊は、河内国の僧侶を引率したものと考えられており、佐伯景弘と深いつながりがあったものと推測される。『注進状』の日付は承安2年(1172)3月18日で、平清盛の三女徳子が、建礼門院の女御参定（承安元年12月2日）から立后を経て入内した時期である。佐伯景弘は、この時期に平清盛の命により徳子の唐衣などを厳島神社に奉納している。これ以前の佐伯景弘の動きを見てみると、応保2年(1162)には平氏を称して掃部允に任ぜられ、仁安2年(1167)には民部大丞となり、民部大夫と通称された。この間の長寛2年(1164)には、平清盛が一門の繁栄を祈願して装飾経33卷（平家納経）を厳島神社に奉納しており、平氏との密接な関係がうかがわれる。

一方、厳島神社所蔵の国宝紺紙金字法華経巻8には、「承安二年三月廿二日書了、端廿五入道太相国御書写也、参議正三位右兵衛督平朝臣頼盛」という奥付があり、佐伯景弘のもとで行われていた写経と並行して、平清盛（入道相国）や弟の頼盛が写経を行っていたことがわかる。これらの写経が、この時期の国家的な重要な作業であったといえる。これに参与している河内国の僧侶の中に、丹北郡松原法源寺の西城房請西が含まれているのである。さらに推論を重ねると、西城房請西は、『注進状』の中で2番目に名が連ねられており、10人の中で2番目の立場であったことが考えられる。通常なら、筆頭である丹南郡黒山長和寺と同郷の寺院を連ねるところであるが、それらより前に位置しているのである。丹北郡松原法源寺を含めて、記載されている寺院は現在のところ確認されておらず、規模も不明である。ただ、当時の国家的な重要な作業を任命されていることから、これらの寺院はある程度の格式をもった

寺院であることは確かである。

灯明台の出土した土坑E-45は、出土遺物から時期は室町時代と考えられ、文献で知られる時期とは隔たりがある。ただ、残存状況や瓦類の出土状況からみて、灯明台がわざわざ遠くから運ばれてきたものとは考えにくい。このため、遺構は検出されていないものの、E地区周辺に寺院が存在していたことは確実で、松原法源寺と関係があったものといえる。「・寺」や「應保・」と刻字された灯明台も同様に、密接な関係があったものといえる。「應保」は年号で、応保年間(1161～1163)を表しているものと考えられ、承安2年(1172)の『佐伯景弘持経者巻数注進状』とは約10年しか差がない。

寺院に関係する遺物として、瓦類も多く出土している。出土瓦の基礎分析は別章で市本芳三氏がまとめられているので、割愛させていただくが、瓦の中にも刻字が認められるものがあり、灯明台の刻字とともに重要な資料といえる。土坑E-44は、近世遺物まで含まれているが、主体となるのは中世で、「建暦」の線刻のある平瓦や「南无阿弥陀仏」のスタンプ紋のある平瓦などが出土している。「建暦」は年号で、建暦年間(1211～1213)を表しているものと考えられ、応保年間とは約50年、承安2年とは約40年の差がある。ただ、「西城房」や「應保・」が刻字されている灯明台を使用していた建物とは無関係とはいえず、同一の寺院がこの地域で存続していたことは確かであるといえる。

なお、遺跡名の由来となった観音寺は、奈良～平安時代の寺院と考えられ、実態ははっきりしないものの、現在残っている小字によって、調査区の南西部に位置していたものと推定されている。観音寺に関しては、立部集落内に現存する栄久寺に記録が残っている。それによると観音寺はもと真言宗の寺院であったが、明応年間(1492～1501)に本願寺の蓮如に帰依して改宗し、寺号も改めて浄土真宗大谷派栄久寺となったということである。また、立部の隣の岡集落に現存する円正寺は、もと立部にあり、小土山向福寺と称して七堂伽藍の大寺院であったが、寛永年間(1624～1643)に焼失して岡に移り、再建改宗して現在の浄土真宗大谷派小土山円正寺になったという。いずれの寺院も発掘調査などで検出されおらず、正確な位置は不明である。

さらに、寺院に関係する遺物としては、井戸F-6から、体部に「東寺」と墨書された把手付甕が3点出土している。相伴遺物により、9世紀のものと考えられ、F地区の屋敷に伴うものである。あくまでも推論にすぎないが、ここに出てきた「東寺」の意味するものは、大きく2点考えることができる。ひとつは、平安京に建立された東寺(教王護国寺)で、ふたつめは、この地域における二つの寺のうちの一つ(東の寺)の呼称である。

東寺(教王護国寺)は、平安遷都直後に平安京の羅城門の左に東寺、右に西寺が創立されたうちのひとつである。東寺の造営着工の時期ははっきりしていないが、平安遷都当時の東・西寺の造営は朝廷にとって大きな負担となったため、造営はなかなかはかどらなかったようである。弘仁14年(823)に空海に勅賜された後、講堂と五重塔の造営に着手しているが、在世中に完成したのは講堂のみで、五重塔は元慶年間(877～885)に完成している。真言宗に国家的な修法がおこなわれる場合は、東寺に対して依頼されていたことから、平安時代前中期を代表する仏画・工芸品などの優品が多く残されている。教王護国寺の名は、天長2年(825)に講堂に本尊を安置した際、仁王護国の意味から名付けられたと伝えられている。ただ、この名称は最初からのものではなく、時期は不明だが、後世つけられたものである。墨書土器に記されている「東寺」がこの東寺(教王護国寺)とすると、時期的には創建時にあたり、直接関係のある寺院や集団がこの場所に存在していたことが想定される。ただ、現在のところ、この地域と東寺(教王護国寺)を結びつける史料はみつかっておらず、関係を証明する確証は得られていない。

一方、この地域における二つの寺のうちの一つ（東の寺）の呼称とすれば、西の寺ともいうべき寺院の存在が必要となる。前出した『佐伯景弘持経者巻数注進状』によれば、12世紀段階では周辺に複数の寺院が存在したことは確かであるが、記載されている寺院の位置も創建時期も不明である。9世紀段階における、周辺の寺院はあまり確認されていないが、調査区の西方に位置する布忍寺が平安時代後期に存在していたことが知られており、強いていえば西の寺と呼べるかもしれない。この所在地は約3km離れており、松原と呼ばれる区域内ではないが、丹北郡には属している。布忍寺は永興寺として知られており、この地に現存する大林寺所蔵の布忍山永興寺略縁起によると、寛治3年(1089)に永興律師によって創建され、弘安年間(1278~1288)に興正菩薩（西大寺叡尊）が中興し、文暦元年(1234)には平家一門から鐘が寄付されたことなどが記されている。一方、布忍山布忍寺所蔵の布忍山東坊縁起には、東之坊は聖徳太子が薬師如来を本尊として建立し、弘仁5年(814)に空海が再建して真言密教の寺院となったが荒廃し、寛治3年に永興が再興し永興寺と号したと記されている。現在大林寺所蔵である永興寺の本尊十一面観音像は、頭上面は後補のものであるが、平安時代後期の作とみられている。先の縁起のほか、再建については諸説あって確定できないが、発掘調査によって出土した瓦などから、11世紀中頃にはこの地に七堂伽藍の寺院が存在していたことは明らかになっている。寺伝によると、元中8年(1391)に兵火で焼失したという。布忍山東坊縁起によると、9世紀には真言密教の寺院が存在しており、「東之坊」と呼ばれていたことはわかっているが、「西寺」と呼ばれていたかどうかは不明である。発掘調査によっても、9世紀代の寺院跡は確認されていない。

9世紀段階で、同じ地域内に存在する寺院を「東寺」や「西寺」と呼ぶ例は、現在のところ確認できていない。また、「東寺」と呼ばれる寺院が、この時期に調査区周辺に存在したかどうか、不明である。墨書土器の出土した井戸は、F地区の屋敷に伴うものであるが、瓦類の出土量は非常に少なく、寺院とは考えられない。

断片的な史料をもとに推測すると、まず、真言宗の寺院である観音寺が調査区周辺に存在しており、15世紀まで存続していたことは確かである。観音寺の創建ははっきりしていないが、9世紀段階で存在していたとすれば、真言宗の寺院ということで、東寺（教王護国寺）とは関

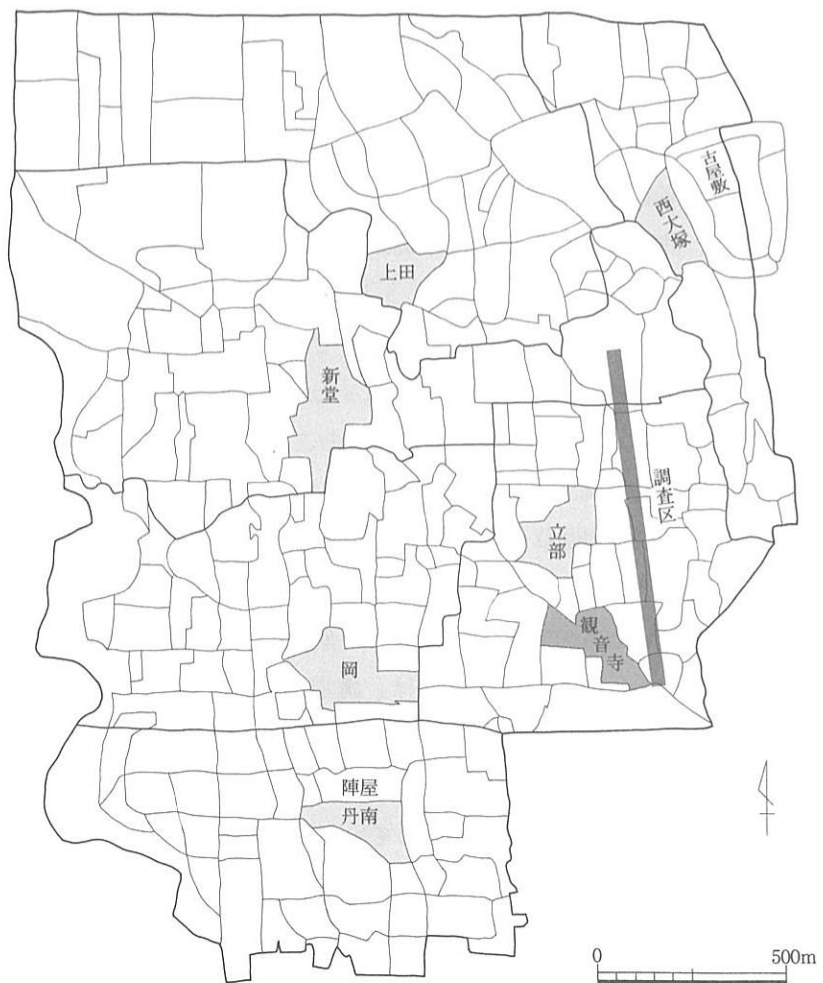


図131 調査区周辺小字図

係があったものといえる。調査区南端部のG地区では、瓦類の出土はほとんどないため、寺院の存在は確認できなかった。なお、E地区北部と小字の観音寺の区域とは、約500m離れている。周辺の小字名の中には、観音寺を除いて寺院に関連のあるものは見あたらない。松原地域には、場所は確定できないものの、前出の『佐伯景弘持経者卷数注進状』によって、平安時代末に法源寺と大臣寺と呼ばれた寺院が存在していたことが知られている。また、このうちの法源寺の西城房請西という僧侶が、当時の国家的事業に関わっており、かなり有力な勢力をもっていたことが想定される。この西城房と刻字された遺物が出土したことにより、法源寺がにわかには現実味を帯びてくることになる。軒瓦の出土量は、E地区北部にほとんどが集中しており、市本氏の分析によると平安時代後期～鎌倉時代初頭に属するものが多くを占めており、室町時代になると大幅に減少する。瓦類の時期は、『注進状』がつくられた時期と一致している。

当初想定されていた観音寺と法源寺を結びつけるものは現在見あたらない。E地区北部で大量に出土した瓦類の時期が、鎌倉時代初頭までということであれば、法源寺と呼ばれる寺院は室町時代にはこの位置に存在していなかったことになる。法源寺は、この時点で廃絶したか、場所を変えるか、名称や宗派を変更して存続したものと考えられる。付近の現存する寺院においても、現在のところ資料が見あたらないことから、廃絶した可能性が高い。ただ、先述したように規模はわからないものの、格の高い位置にある寺院と考えられるため、なんらかの形で存続した可能性も残る。調査の範囲内では、現在のところ、平安時代後期～鎌倉時代初頭に法源寺がこの地に存在した可能性が高いといえる。

一方、文字資料として、井戸E-15出土の木簡は重要である。これは、都に運ばれる荷物につけられた付札と考えられ、「河内国丹比郡・・」と記されている。共伴遺物により、9世紀代のもと考えられるが、この時期に丹比郡がまだ分離していないことを表している。ちなみに、前出した12世紀の『佐伯景弘持経者卷数注進状』の中では、丹比郡が丹北郡と丹南郡に分離していることがわかる。

さらに、井戸E-13から呪符木簡が出土している。左側辺を欠失しているが、表には「昔蘇民将来子孫住宅也」、裏には「南无五大力□□（菩薩）」と墨書されており、疫災除けのまじない札である。「蘇（蘇）民将来」は疫病除けの守護神で、牛頭天王に対する信仰である祇園信仰に由来するものである。牛頭天王は祇園精舎の守護神であったが、中国に入って陰陽道と結びついた後、厄除けの呪法が成立した。日本に入ってきたのは奈良時代のことと言われており、さらに神道とも習合した。『釈日本紀』巻7には『備後国風土記』逸文が記されており、疫隅国社の縁起として「蘇民将来」の説話がみられる。中世以降、多くの御伽草子として民間に広まり、牛頭天王が疫病に対する守護神と考えられるようになった。裏面にある「五大力（菩薩）」は、仁王会の本尊として祀られていたが、後に五大明王との関係などから密教化したものである。金剛手、金剛宝、金剛利、金剛薬叉、金剛波羅密多の五菩薩を表しており、前出の東寺（教王護国寺）には、講堂に承和6年(839)の創建時のものと考えられている、国宝五大力菩薩像（うち金剛波羅密菩薩像は後世の補作）が現存している。真言密教の影響がここにもみられる。共伴遺物により、13世紀末～14世紀初頭のもと考えられるが、この時期に仏教だけではなく、陰陽道をもとにしたまじないも流行していたことを示している。また、1枚の呪符に2種類の信仰が込められていることから、両者は明確には分かれていなかったことが考えられる。

このほか、文献史料に残る地名から時代背景がうかがわれるものをあげてみる。遺構でははっきりしないが、E地区で大量に出土した瓦類は平安時代後期～鎌倉時代初頭であることから、付近に存在した寺院は鎌倉時代後期以降に廃絶したことがわかる。この時期は、調査区周辺の南河内地域で多くの戦乱

が行われたことが知られているため、これらの戦乱によって廃絶した寺院と考えることができる。ここで、調査区付近の地名に係る記事をあげて、鎌倉時代末～南北朝時代の時代背景をみることにする。鎌倉時代には、丹南（現松原市・調査区より約1 km南西）に河内守護所が設けられていたほか、河内大塚山古墳には軍事的な拠点である丹下城がつくられていた。鎌倉時代末～南北朝時代の合戦記録の中で、丹南や丹下城に関する記事を見ることができる。まず、楠木正成が南河内から北上して幕府軍と戦う一連の記録の中に「同（正慶2年(1333)）正月十四日、楠木於河州致合戦、被追落人々、河内守護代在所丹南、同国丹下、池尻、花田地頭俣野、和泉国守護、并田代、品河、成田以下地頭御家人」『楠木合戦注文』と記されており、楠木正成が丹南の河内守護所において、河内守護代丹下入道西念、河内国丹下・池尻・花田地頭俣野彦太郎、和泉守護阿保国清らを破ったことがわかる。この後、楠木軍は天王寺へ進軍するため、丹比道（竹之内街道）を北上したものと考えられる。ここに登場する丹下入道西念の本拠地は丹下城であるため、丹下城から丹南の守護所まで進軍する中間点に調査区が位置していることになる。この際に、周辺に存在した集落もなんらかの被害や影響を受けたことが考えられる。

また、後醍醐天皇が吉野に移った後の延元2年(1337)には、「同三月二日、属当御手、令発向河州古市郡、構要害之处、丹下三郎入道西念已下凶徒等、率大勢寄来当所古市間、馳向野中寺前致合戦。逆徒等追笔丹下城、焼払在家畢」『岸和田治氏軍忠状（和田文書）』の記録があり、南朝方の岸和田治氏が北朝方の丹下入道西念と戦い、丹下城に追いつめている。さらに同文書に「同十日、細川兵部少輔（顕氏）、同帯刀先生（細川直俊）等為大將軍、寄来古市之間、馳向野中寺東、防戦之处、逆類等引退之間、追懸藤井寺西、并岡村北面、致散々合戦之刻、細川等大勢、分二手寄来之間、数刻致合戦之忠節者也。就中細川帯刀先生討死之時者、於藤井寺前大路、至御方軍勢退散之期、抽軍忠畢。此等次第、当国守護代大塚掃部助惟正、并平石源次郎、八木弥太郎入道法達已下、同所合戦之間、所令存知也。」と記されており、北朝方の細川顕氏・直俊が、野中寺東や藤井寺西・岡村北などで岸和田治氏と戦い、細川直俊が戦死している。野中寺は調査区より約1 km南東に位置しており、丹比道（竹之内街道）に面している。岡村北は調査区より約800m西に位置しており、調査区一帯が戦場となっていたことがわかる。

さらに延元3年(1338)の『高木遠盛軍忠状』によれば、「同（延元二年八月）十八日押寄丹下城、致合戦、焼払近隣在家畢」と記されており、南朝方の高木遠盛が丹下城で合戦し、近隣の家を焼き払っている。また、同文書には、「今年（延元三年）三月八日、属和田左兵衛尉正興之手、相向丹下城、及数日致合戦畢」や「丹下凶徒等、当国松原庄構城郭之間、閏七月廿二日、属正興手致合戦、追落凶徒等、討取丹下八郎太郎子息能登房畢」とあり、南朝方の和田正興が丹下城や松原城を攻撃し、これを破ったことがわかる。日付の細かい記録であるが、この時期に丹下城から松原・岡村にかけての地域で局地的な戦闘が行われていたことが記されており、調査区周辺の建物が被害をうけていたことが推測される。調査成果では、具体的な火災の跡などは確認できなかったが、B地区の柱穴などで一部焼土などがみられることから、この時期の度重なる戦闘により建物に被害が及んでいたことがうかがわれる。

第3節 最後に

観音寺遺跡の発掘調査は、昭和57年度(1982)より開始され、昭和59・60年度にほぼ全域の現地調査が終了した後、散発的に平成4・6年度に追加調査が行われた。当時は、近畿自動車の発掘調査が多く行われていた時期で、調査方法が大幅に変更されることが多かった。観音寺遺跡でも、高架橋の橋脚のみの調査で終わった部分もあるが、ほぼ全面の調査を行うことができた。残念ながら、延長は長いもの



図132 大阪府文化財分布図 (1/20000)

の、幅は狭いため、遺構のまとまりがはっきりしない部分もあるが、中世の屋敷地などの範囲はほぼ確定することができた。予測されていた観音寺に関する遺構は確認できなかったが、瓦類や文字資料の出土により、寺院がこの地域に存在していたことがわかった。また、相互の関連はないが、中世を中心とした屋敷の変遷がみられ、各時期の景観を復原することができた。遺物も多く出土したため、この時期の指標となるべきものといえることができる。

当初、観音寺遺跡として調査を行ったものであるが、現在の最新版である平成8年(1996)発行の『大阪府文化財分布図』において、観音寺遺跡という名称および範囲は削除されている。立部遺跡(39)の範囲が広がったことにより、観音寺遺跡が吸収された形になっている。調査当初の昭和61年(1986)に発行された『大阪府文化財分布図』では、観音寺遺跡(25)と観音寺跡(10)は遺跡として認識されており、範囲も明記されていた。この後の平成3年(1991)に発行された『大阪府文化財分布図』では、観音寺遺跡はまだ明記されている。平成8年までに見直しが行われたようで、観音寺遺跡をはじめ周辺の遺跡に対する認識が大きく変わっている。全体として、細切れ状態であった遺跡範囲が大きくまとめられたようで、新たに加わった遺跡も含めて、遺跡と認識される範囲が広がったものとなっている。

調査終了時に作成した調査概要報告書のまとめにおいて、「将来の報告書においてその責を果たすことにしたい」と締めくくっていたが、遺構や遺物に対する十分な検討ができたかどうかは断言できない。概要報告書で不十分であった調査成果に関しては極力網羅したつもりであるため、本書は事実報告としてまとめたものである。将来的に、これらの成果をもとに様々な検討が加えられれば幸いである。

現地調査から約10年経過したが、現在では調査区内に近畿自動車道の高架橋が完成しており、景観はまったく変わったものとなっている。調査を行った者としては、観音寺遺跡の名称がこの報告書で最後になってしまうのは、寂しい限りである。

付 章

第1節 観音寺遺跡出土瓦の様相

市本 芳三

瓦は調査区全域から出土しており、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦などが出土している。ここでは出土遺構毎の記述ではなく、紋様ごとの説明をすることとする。また、出土地点、出土量等は掲載一覧（表5）、出土量一覧（表1～3）を作成した。

1. 軒丸瓦

29種85点の軒丸瓦が出土している（表1・5）。

1類（図1-562）は複弁蓮華紋であり、外区に珠紋を配し、その外側に圏線・鋸歯紋が巡る。

2類（図1-563）は単弁蓮華紋であり、中房の隆起はなく、圏線によって表現されている。外区の珠紋の配列は粗である。

3類（図1-564）は細弁蓮華紋であり、中房直径が大きい。中房内蓮子は1+7+9と考えられるが、残存不良である。外縁外側に瓦範の圧痕がみられる。

4類（図1-565）は、単弁蓮華紋であり、蓮弁外縁とその外側を巡る圏線は接する。

5類（図1-566）は雄薬帯を有する単弁蓮華紋である。膨らみのある蓮華紋の外側には圏線を有した珠紋帯がある。中房には蓮子の盛り上がりが見られるが、梵字紋等も考えられる。

6類（図1-567）は雄薬帯を有する複弁蓮華紋である。中房内の蓮子は放射状につながっており、雄薬帯は幅が広く盛り上がっている。蓮弁は一葉のように先端を尖らす。

7類（図1-568～571）は中房に梵字を配する複弁蓮華紋である。7-1a～1c類は中房に梵字の「キリク」を配し、その周りに雄薬帯を有する。7-1a・1b類の梵字は断面三角形を呈し、シャープさが残るが、本来の字体は崩れ、形骸化している。1c類は更にシャープさも欠けている。7-2類の梵字は「ア」或いは「アク」の可能性が高いであろう。珠紋帯内外に圏線を有する。いずれも瓦当裏面に丸瓦接合面が観察される。

8類（図1-572）は下半部に蓮華座を斜め上方よりみた状況の紋様を、また、上半部には梵字を配していると考えられる（図16-1）が、不確かである。外縁幅は狭い。

表1 軒瓦類別出土点数表

軒丸瓦		軒平瓦	
類	点数	類	点数
1類	1	1-1類	22
2類	2	1-2類	2
3類	1	1-3類	1
4類	1	2-1類	4
5類	1	2-2類	4
6類	4	2-3類	1
7-1a類	20	2-4類	2
7-1b類	2	3類	3
7-1c類	2	4類	1
7-2類	6	5類	1
8類	1	6類	1
9類	1	7類	1
10類	1	8類	1
11類	1	9類	1
12類	4	10類	1
12-1類	1	11類	1
12-2類	1	12類	3
12-3類	1	13類	1
12-4類	1	14類	1
12-5類	1	15-1類	1
12-6類	1	15-2類	1
12-7類	1	15-3類	1
12-8類	1	15-4類	1
12-9類	1	15-5類	1
12-10類	1	15-6類	1
12-11類	2	16類	1
12-12類	1	分類不可	10
12-13類	1	軒平瓦合計	69
12-14類	1		
12-15類	1		
分類不可巴文	9		
分類不可	12	鬼瓦	点数
軒丸瓦合計	85		4

9類（図1-573）は下部に蓮華座を配し、その左右に内へ向く放射状のものが見られるが、不明瞭である。上半部に梵字、仏像、宝塔のいずれかの紋様の配置が推定される。

10類（図1-574）は下部に蓮華座を置き、上部には梵字を配していると考えられる。蓮華が細かく表現されている。

11類（図1-575）は文字らしきものが配されており、圈線を巡らす。

12類（図2）は巴紋である。12-1・3類の紋様断面は台形を呈している。12-11類は巴頭部が接着し、尾が長く伸びる。珠紋は密である。

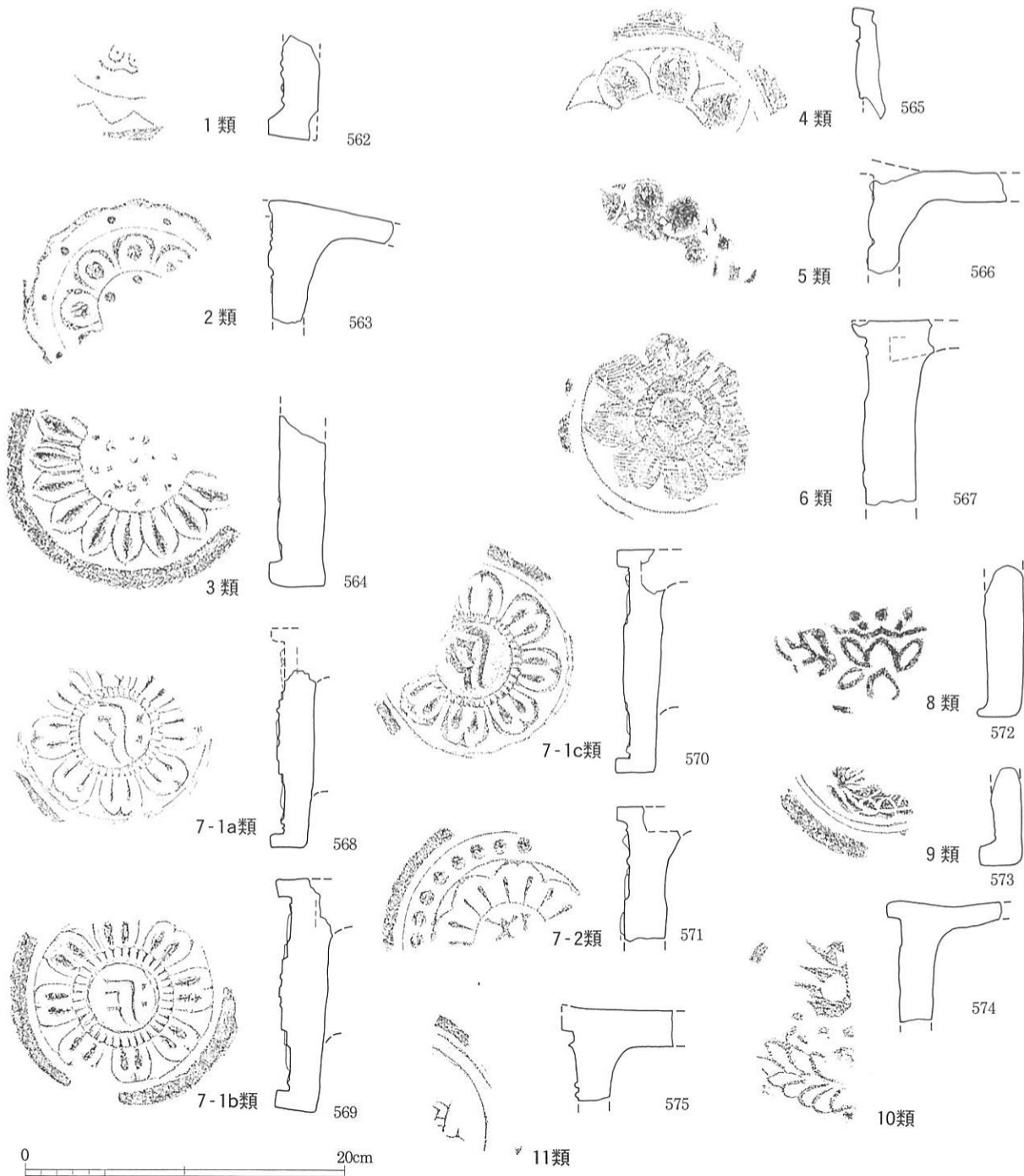


図1 出土軒丸瓦（1）

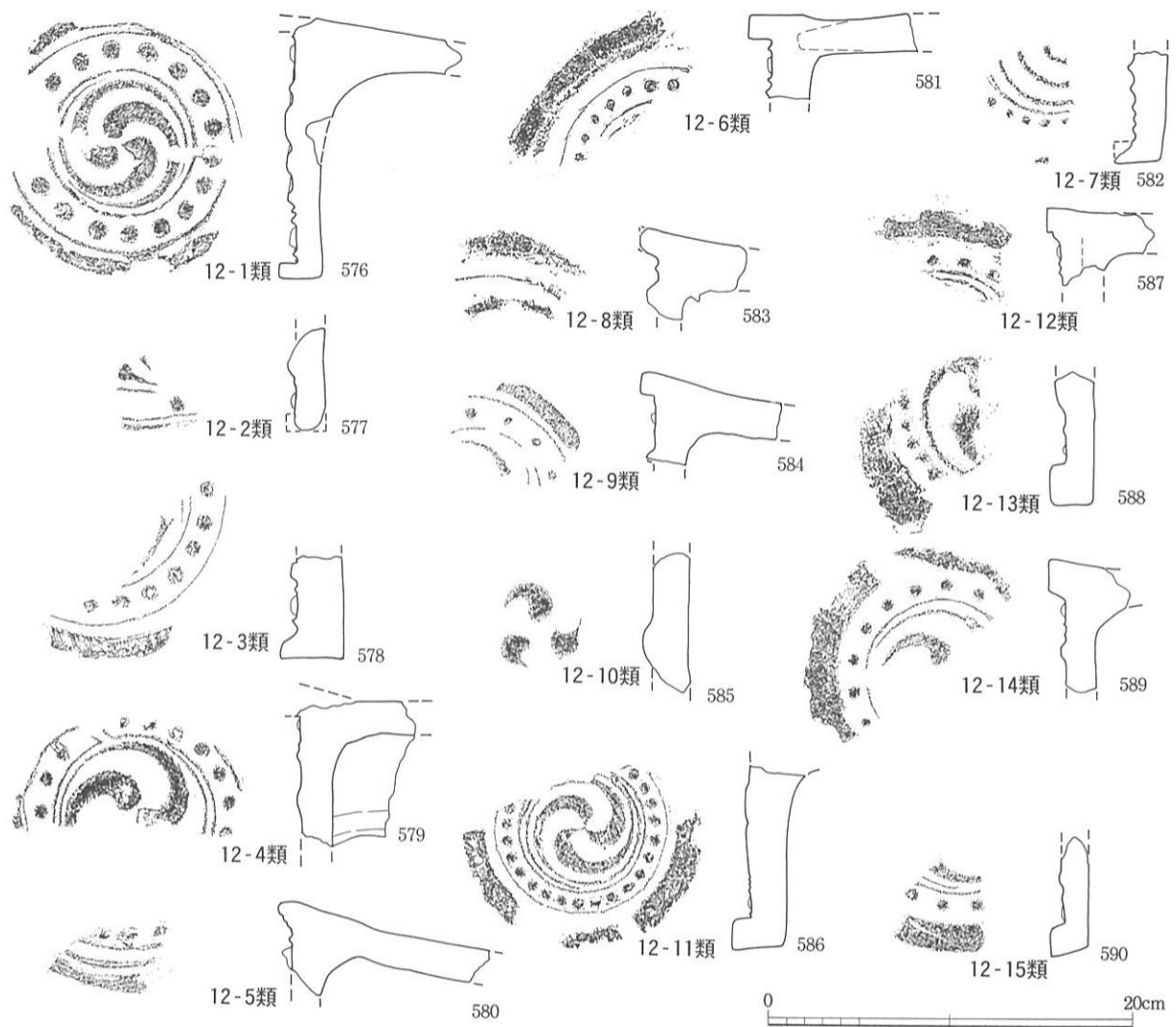


図2 出土軒丸瓦（2）

2. 軒平瓦

26種69点の軒平瓦が出土している（表1・6）。

1類（図3-591～593）は梵字（キリーク）を中心飾りとする唐草紋である。1-1類は円形凸部にキリークを配し、外縁に沿って界線がみられる。平瓦凹面には荒い布目が残存する。1-2類のキリークは退化しており、形骸化している。1-3類は1-2類と同形態のキリークを中心飾りとするものと考えられるが、唐草紋の支葉の数に相違がみられる。段顎である。

2類（図3-594～598）は上からみた蓮子を表現した中心飾りとする。2-1類は下部のみに界線がみられ、顎形態は直線顎である。平瓦部挟端側に凹面から凸面に穿つ釘穴がみられる。2-2類は直線顎である。2-3類の顎形態は不明である。2-4類の唐草紋は連続する。直線顎である。3Eトレンチ土坑E-45・8Eトレンチ土坑E-45と1・3Eトレンチ井戸E-20の出土瓦が接合した遺物である。

3類（図3-599・600）は唐草紋である。中心飾りが残存していないが、中心飾りが梵字紋である1類の可能性はある。段顎である。

4類（図3-601）は連続した唐草紋である。

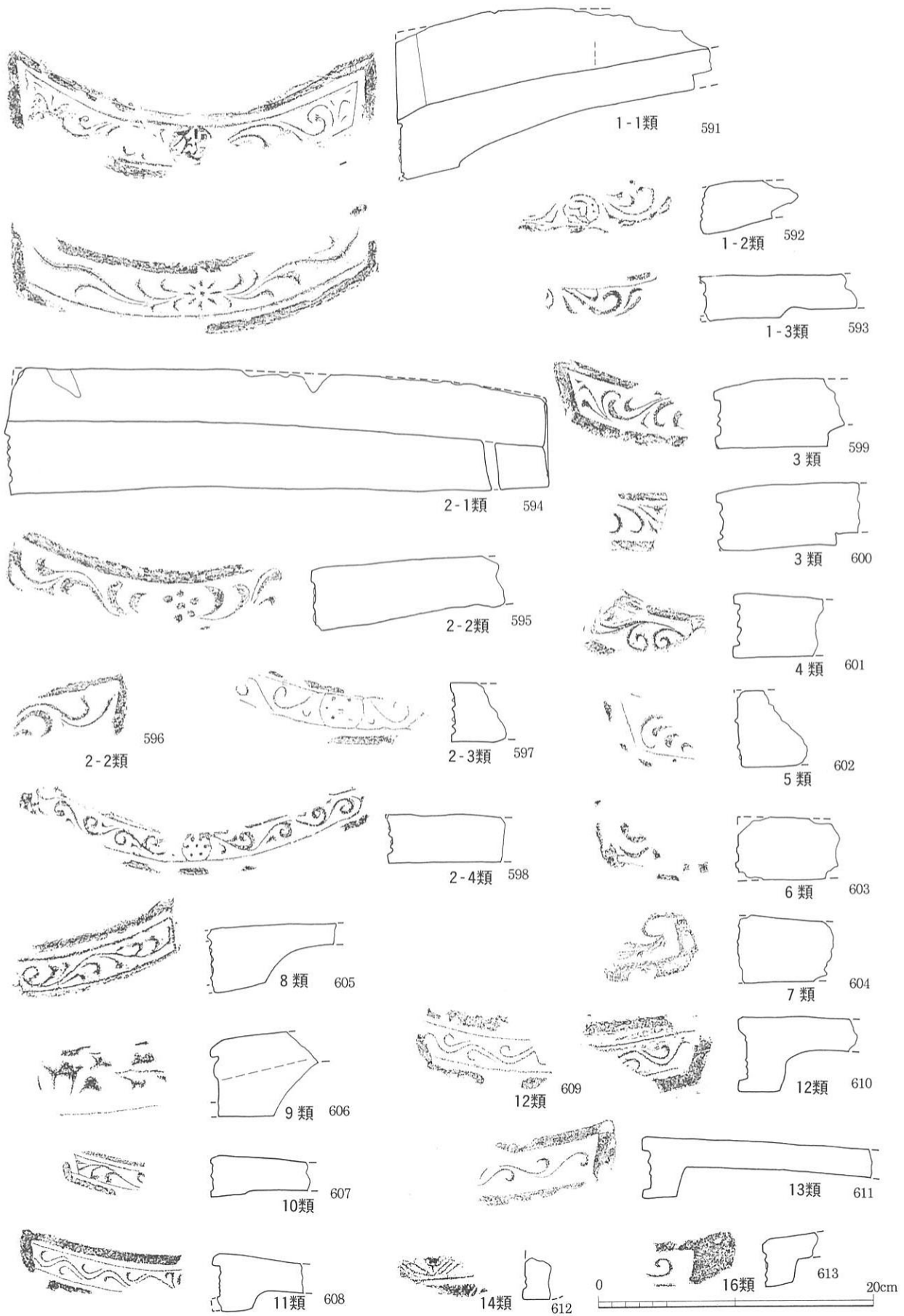


图3 出土軒平瓦(1)

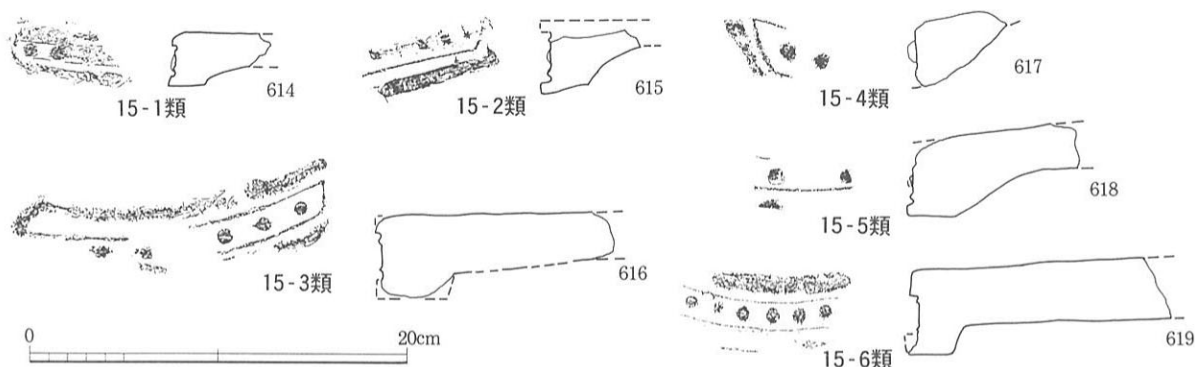


図4 出土軒平瓦（2）

- 5類（図3-602）は四周に界線が巡り、下部界線外側に珠紋がみられる。
- 6類（図3-603）は段顎である。
- 7類（図3-604）の唐草紋は内側の方向に伸びる。
- 8類（図3-605）は四周に界線が巡る。曲線顎である。
- 9類（図3-606）の中心飾りは不明である。唐草は短く太い。顎貼り付け技法である。
- 10類（図3-607）の上下界線は左右の外縁へ当たる。顎は曲線顎の形態であるが、不明瞭である。
- 11類（図3-608）は中心飾りが一部残存するが、不明瞭である。界線は上下のみであり、左右の外縁へ当たる。
- 12類（図3-609・610）も同じく界線が上下のみであり、左右の外縁へ当たる。11類と比較して大振りの瓦である。
- 13類（図3-611）には界線がない。顎に厚みのない段顎である。
- 14類（図3-612）の中心飾りは花紋と考えられ、左右には唐草紋が伸びる。
- 15類（図4）は連珠紋である。15-1、2類は曲線顎であり、15-5類は厚みのない段顎である。15-3類～15-6類はやや大振りの軒瓦である。15-3類は顎貼り付け技法である。
- 16類（図3-613）は左右の外縁幅が広い。

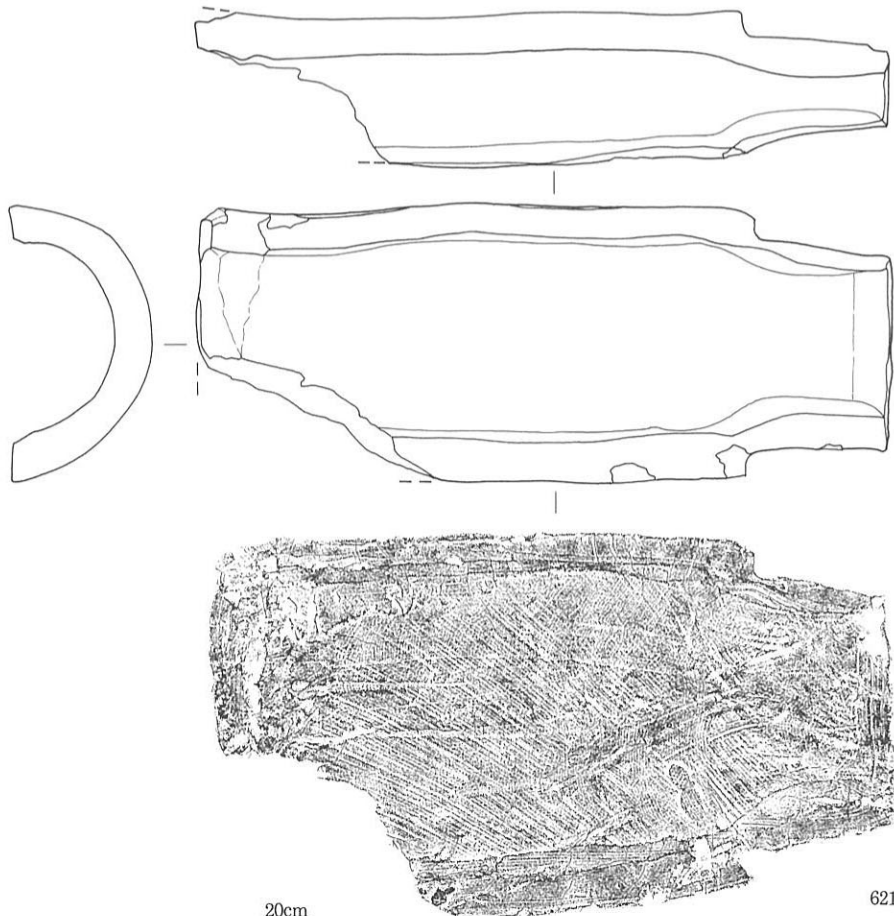
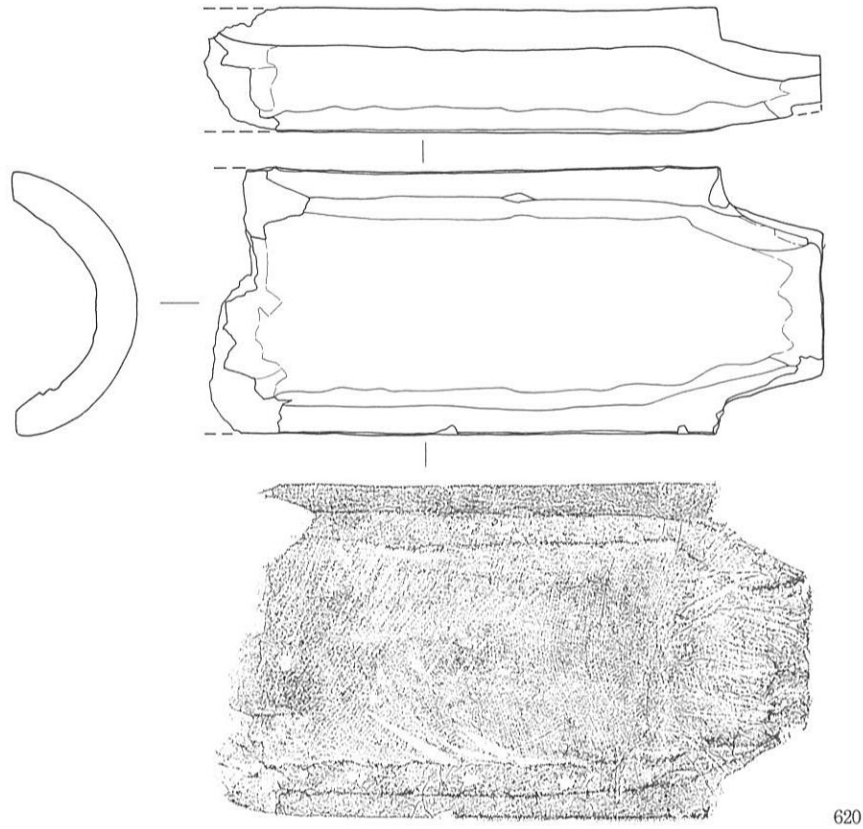
3. 丸瓦・平瓦・特殊瓦

丸瓦・平瓦は表2のように総重量2067.71kgを量り、多量に出土している。完形に近いものは少ないが、代表的なものを記述する（表7）。

図5-620は有段式丸瓦である。凸面は縄目をナデ消しているが若干残り、凹面には布目が残存する。玉縁部側縁の外側面取りは胴部の狭端まで及んでいる。図5-621の有段式丸瓦は全長36.8cmを測る大型品である。凸面は縄目をナデ消しているが若干残り、凹面には布目が残存する。玉縁部の長さが長い。図6-622は無段式丸瓦である。凸面は横位にナデ、凹面には粗い布目が残存し、布袋端部が観察できる。

図6-623～626は平瓦である。623の凸面には縄目が残存し、離れ砂がみられる。625は厚さ2.8～3.0cmを測り、厚みのある大型の平瓦である。凸面に弧状圧痕が観察される。626は厚さ1.7cmを測り、薄い平瓦であり、また、彎曲度も低い。

図7-627（写真図版59-627）の平瓦凹面には「建曆」（西暦1211～1213）の線刻がみられる。凹凸面共にナデののち、離れ砂を施す。凹面の側縁は丸く仕上げる。628の丸瓦凹面には「大鳥郡」の線刻



0 20cm

图5 出土丸瓦(1)

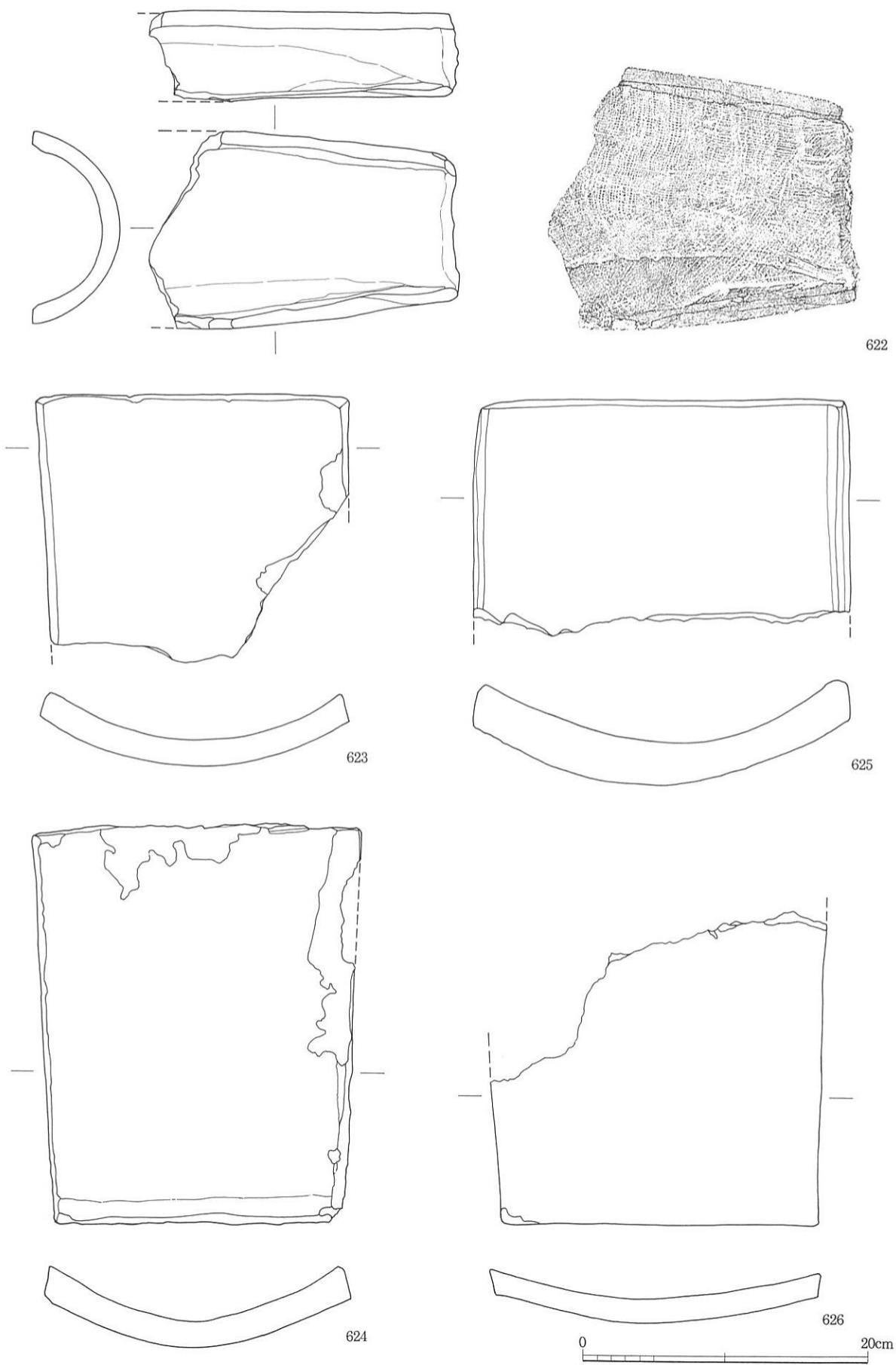


图6 出土丸瓦(2)·平瓦

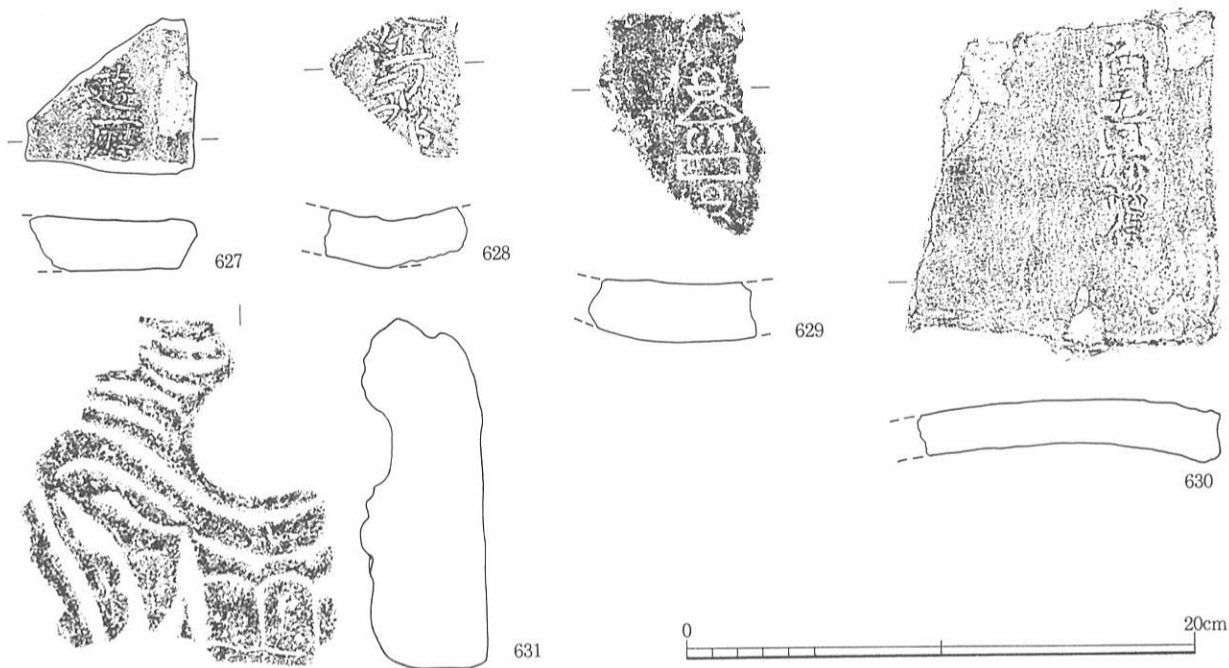


図7 出土特殊瓦（1：3）

がみられる。凹面の調整は不明瞭、凸面はナデである。629は平瓦凹面に五輪塔紋のスタンプが施されている。水輪内に梵字があるかどうか不明である。五輪塔紋の原体は単体ではなく、縦方向に数基を一単位としたスタンプであると考えられる。凸面に縄目叩きが残存する。630は平瓦凸面に「南无阿弥陀佛」の文字スタンプ紋がみられる。凹凸面共にナデに離れ砂がみられる。写真図版60-753は曲線の線刻がみられる。写真図版60-754の胎土には瓦器の破片がみられる。

631は鬼瓦の左側部分の破片である。口に牙・歯が表現されており、目は欠損している。紋様表現は全体に平面的である。写真図版58-751・752も鬼瓦である。

4. 分布状況

瓦は調査区全域から出土しており、特にB地区のX=-159,120~-159,140付近、E地区のX=-159,370~-159,500付近、F地区南半とG地区のY=-39,620ライン付近の3か所に集中して出土していることがわかる（図8~15）。

B地区は大溝B-1（堀）と井戸B-3から特に多量に出土している。大溝B-1は東西方向に走る南側溝と南北方向に走る東溝があり、瓦は南北方向溝の中心に検出された門より北側から出土しており、他の場所からは少量しか出土していない。また、軒瓦の出土はB地区では井戸B-3からの1点のみである。井戸B-1・2からも瓦は出土しているが特に井戸B-3からの出土量が多い。

E地区では建物群の西側の南北方向に走る溝E-2、北西隅にある土坑E-44・45、建物E-1・2の南側にある落込E-4から瓦が多量に出土している。しかし、建物群に付属すると考えられる井戸からは瓦は少量しか出土していない。溝E-2の北側にある井戸E-19・22、土坑E-37、土坑E-45（1992年度調査区）からも多量の瓦が出土している。土坑E-37・44・45、土坑E-45（1992年度調査区）からは軒瓦が多くみられた。

F地区北端の溝F-6・38に囲まれた屋敷地からの出土は少量である。F・G地区では南北方向に走る溝G-1に沿って多量ではないが散漫的に瓦の出土がみられる。

表2 地区別出土重量表

地区	平瓦計(kg)	丸瓦計(kg)	他瓦計(kg)	地区	平瓦計(kg)	丸瓦計(kg)	他瓦計(kg)	地区	平瓦計(kg)	丸瓦計(kg)	他瓦計(kg)	地区	平瓦計(kg)	丸瓦計(kg)	他瓦計(kg)
A17	1.5	0.35		C17f7	0.68	0.23	0.15	E17e8	0.1	0.1		G17g4	0.05	0.1	
A17h10	0.05			C17f8	0.2	0.2		E17d4	0.2			G17g5	0.05		
A17i10	0.05			C17g7	1.53	0.53	0.15	E17d5	6.52	3.06	0.2	G17h1	0.2		
A17j10	0.05			C17g8	0.15	0.3		E17d6	13.64	8.29	0.2	G17h2	7.35	0.7	
A18	2.65	0.55		C17h6	0.1			E17d7	0.05			G17i2	4.05		
A18a1	0.05			C17h7	1.88	0.53		E17e5	2.3	1.3		G17i4	0.3	0.1	
A18b1	0.05			C17h8	0.8			E17e6	5.45	4		G17j1	0.2		
A18e1	0.05			C17h9	0.05			E17f4	0.23	0.1		G17j2	0.7	0.7	
A18e2	0.05			C17i6	0.9	0.15		E17f5	6.13	3.6		H16		0.1	
A18f1	0.15	0.1		C17i7	2.7	2.6		E17f6	2.78	1.95		H16d10	0.1		
A18f2	0.05			C17i8	1.6			E17f7	0.43	0.1		H16f10	0.5		
A18h1	0.05			C17i9	0.6			E17g4	0.05			H16g10	0.1	0.1	
B17	5.5	0.9		C17j6	2.55	0.2		E17g5	9.85	5.7		H16h10	0.1		
B17a10	1	0.1		C17j7	4.85	0.95		E17g6	2.55	0.95		H16j1	0.1		
B17b10	3.1	0.15		D17	4.38	1.08		E17h5	18.7	7.4	0.3	H17	0.2	0.15	
B17b9	0.1			D17b6	0.5	0.1		E17h6	0.6			H17a1	1.4	0.8	
B17c10	21.35	2.8		D17b7	0.15			E17i5	3.3	1.5		H17a2	27.2	3.2	
B17e9	0.1	0.1		D17b8	0.7			E17i6	0.2			H17a3		0.05	
B17d10	11.1	1.15		D17b9	0.1			E17i7	0.2			H17a4		0.15	
B17d9	2.3	0.6		D17c9	0.1			E17j5	11.35	2.15	0.1	H17b1		0.05	
B17e10	0.35	0.05		D17e6	0.7	0.55		E17j6	7.45	1.25	1.5	H17b2	2.9	2.2	
B17e8	0.2			D17e8	0.05			F17	5.93	1.83		H17b3	0.4	0.4	
B17e9	1.3	0.6		D17d6	0.5	0.35		F17a5	0.1			H17b4	0.1		
B17f9			0.4	D17d7	0.1	0.4		F17c3		0.6		H17c1	0.2	0.55	
B17g10	0.4	0.1		D17d8	0.2	0.1		F17d4	0.1			H17c2	2.4	0.9	
B17g8	0.5	0.2		D17e6	1	0.5		F17d5	0.7			H17d2	6.2	8.4	
B17g9	0.8	0.6		D17f6	1.4	0.6		F17d6	0.2	0.2		H17d3		0.1	
B17h10	0.2			D17g5	1.1	0.55		F17e3	0.2			H17e1	1.5	0.4	
B17h8	0.3	0.3		D17g7		0.1		F17e5	0.7	0.15		H17e2	3.9	0.9	
B17h9	0.2	0.2		D17h5	0.1	0.1		F17e6	0.7	0.45		H17e3		0.1	
B17i10	0.2			D17h7	19.55	10.1		F17f3	0.4			H17f1	0.1		
B17i8	0.2	0.1		D17h8	17.55	4.9		F17f4	0.4	0.1		H17f2	1.75	0.6	
B17i9	3.2	1		D17i8	0.05			F17f5	0.1			H17f3	0.05		
B17j10	0.1	0.1		D17i5	24.1	14.6	0.5	F17f6	0.8	0.3		H17g1	0.1		
B17j8	0.5	0.4		D17i6	0.9	0.1		F17g3	0.1			H17g2	6.1	1.5	
B18a1	0.3			D17i7	292.4	157.8	0.2	F17g6	0.2	0.2		H17g3	0.5	0.1	
B18b1	0.3	0.15		D17j5	65.9	31.45	0.1	F17h5	0.1			H17h2	2.2	0.6	0.1
B18e1	21.2	9.95		D17j6	28.8	12.55	0.1	F17j5	0.1	0.5		H17h3	0.3	0.2	
B18d1	14.7	1.45		D17j7	9.85	3.5		G17	1.1	0.7		H17i1		0.2	
B18e1	1.4	0.4		D17j8	0.27	0.07		F17a5	0.4	0.3		H17i2	0.8	0.2	
B18f1	1.4			E17	4.68	1.43	0.1	G17b2	0.5	0.45		H17i3	0.6		
B18g1	0.5	0.1		E17a5	39.01	24.04	0.25	G17b5	0.1			H17j2	3.4	0.3	
B18h1	0.1	0.1		E17a6	5.36	2.44	0.15	G17c2	3.8	2.15		H16		0.05	
C17	1.7	0.85		E17a7	6.37	3.27		G17c3	0.15	0.2		H16d10	0.1		
C17a8	1.4	0.3		E17a8	2.07	0.47		G17c4	0.25	0.1		H16e10	0.1		
C17b8	0.15	1.6		E17b5	202.1	82.79	1.05	G17c5	0.5	0.1		H17a1	2.05	0.4	
C17c7	0.1			E17b6	175.96	66.14	0.85	G17d2	2.1	0.3		H17a2	0.3		
C17c8	0.95	1.1		E17b7	110.8	52.95	0.3	G17e2	0.9	0.3		H17b1	1.75		
C17c9	0.1			E17b8	43.4	18.65		G17e3		0.1		H17b2	1.5	0.1	
C17d8	0.2			E17c5	23.27	11.51	0.15	G17f2	3.4	1.65		O18	0.55	0.2	
C17d9		0.1		E17c6	30.07	12.71	0.15	G17f4		0.1		合計	1435.09	625.62	7
				E17e7	0.05	0.1		G17g2	2.1	0.55					

5. 検討

丸瓦、平瓦、軒丸瓦・軒平瓦それぞれの出土分布図を作成した。瓦はいずれも廃棄された状態で出土しているが、その分布状況をみるとB・E・F・G地区共に溝を有する建物群周辺から出土していることがわかる。但し、F地区の平安時代前期と考えられている屋敷地からはほとんど出土していない。

丸瓦と平瓦の分布には明瞭な変化は見られなかった。軒瓦はE地区においてその出土量のほとんどが占められており、他地区は皆無に等しい。また、軒瓦の時代別出土量は平安時代後期から鎌倉時代初頭に属する瓦が軒丸瓦で約65%、軒平瓦で約80%を占め、室町時代に属する軒瓦は大幅に減少する。

E地区の建物群北側に軒瓦が集中して出土しており、丸・平瓦も他地区より出土量が多い。基壇を有する建物跡は検出されていないが、「西城房」「寺」と線刻された灯明台も出土しているところから寺院関連施設の存在が推定される地区である。

それぞれの地区の出土量をみると、一棟の建物の屋根全体に葺くだけの量は出土しておらず、屋根の一部分の瓦使用、或いは2次使用のための搬出が考えられる。

また、梵字紋様を有する軒丸・軒平瓦が多く出土しているが、後述するように紋様の組み合わせとして違和感があるところから、この場所で使用するために制作されたものではなく、他からの搬入品と推

表3 遺構別出土重量表(1)

トレンチ	遺構名	平瓦(kg)	丸瓦(kg)	他瓦(kg)	軒丸瓦(点数)	軒平瓦(点数)	トレンチ	遺構名	平瓦(kg)	丸瓦(kg)	他瓦(kg)	軒丸瓦(点数)	軒平瓦(点数)
8A	井戸1	0.2					8E	P-402	0.6				
3B	P-115(建物1)	0.1					10E	P-406		0.1			
3B	P-133(建物1)	0.1					1~3E	溝1	4.3	1.1	0.4		
3B	P-184b(建物1)	2	0.6				1~3・5E	溝2	39.2	19.5		7-1:1	2-3:1
3B	P-184(建物1・4)	0.5					3E	溝3	1	0.2	0.2		
3B	P-109(建物2)	0.4					3E	溝4	0.4	0.4			
3B	P-179(建物2)	1.8					2E	溝7	0.6				
3B	P-183(建物2)	0.4					3E	溝16	6.5	3.6	0.2	5:1	7-1a:1
3B	P-193(建物2)	0.3					2E	溝18	1.4	0.3			
3B	P-218(建物2)	1.3					2・3E	溝19	0.7	0.2			
3B	P-134(建物4)	1.1					3E	溝21	0.1	0.1			
3B	P-216(建物5)	0.1					3E	溝22	1				
3B	P-10(建物6)	0.2					2E	溝29	0.1				
3B	P-63	0.1					3E	溝32	0.7	0.3			
3B	P-71	0.1					3E	溝33	0.1				
3B	P-90	0.1					8E	溝41	0.7				
3B	P-104		0.3				5E	井戸1	0.4				
3B	P-130	0.3					5・7E	井戸2	2	0.5			
3B	P-147	0.1					5E	井戸3	4.5	0.4		6:1	
3B	P-158		0.2				2E	井戸5	0.8				
3B	P-163	0.1					1・2E	井戸6	2.9	2.3			
3B	P-259	0.6					3E	井戸7	1.3	0.4			
3B	P-316	0.1					3E	井戸8	1.9	0.5		不明:1	
3B	P-338	0.2					3E	井戸9	4.9	2.1	0.1		
3B	溝4		1.5				3E	井戸10	0.5	0.1			
1~3B	大溝(堀)	38.5	7.8	0.4			3E	井戸11	3.9	1.7			
3B	井戸1	5.5					3E	井戸13	2.3	1.8			
3B	井戸2	6.7	0.9				2E	井戸14	1.3	7.3		6:1	
3B	井戸3	11.2	4.9		4:1		3E	井戸15	0.2				
3B	井戸4	6.6					2E	井戸16	1.2	1.9			
2B	土坑1	0.3	0.1				1~3E	井戸17	1.8	0.2			
3B	土坑3	2.9	1.5				3E	井戸18	0.1				
3B	土坑4	3.7	1.1				2E	井戸19	14.4	3.8			1-1:1 1-2:1
3B	土坑6	0.2	0.1				1・3E	井戸20	18	6.9	0.1	7-1:1	
3B	土坑7	2.9	0.1				1~3E	井戸22	21.9	12.3		7-1a:1 7-2:1	
3B	土坑8	0.3					2・3E	井戸23	3	1			
3B	土坑9		0.3				5・7E	井戸2、3	0.1				
3C	溝4	0.2					8E	井戸31		0.1		2-2:1	
2C	井戸1	0.3	1.8				8E	井戸32	2.7	0.7			
2C	井戸4	1.1	0.3				8E	井戸33	0.6	0.2		12:1	
1C	土坑(井戸?)					1-1:1	3E	土坑6	0.7	1.1		不明:1	1-2:1
2D	井戸4	3.4				2-2:1	3E	土坑7	0.2				
3D	井戸5	1.7					3E	土坑8	1.1	0.5			
2D	井戸8	15.8	6.3	0.3			3E	土坑9	0.6				
3D	P-501(建物1)	0.1					3E	土坑10	0.5	0.2			16:1
2D	P-538(建物1)	0.1					3E	土坑11		0.1			
3D	P-381(建物2)	1					3E	土坑12	1.3	0.6			
2D	P-241(建物4)	0.3					2E	土坑14					13:1
2D	P-169(建物5?)		1.1				3E	土坑16	3	2			
2D	P-31	1.6					3E	土坑19	0.3	0.8			
2D	P-83	0.6					3E	土坑21	1.3	0.3			
2D	P-110		0.2				3E	土坑22	0.4	0.2		6:1	
2D	P-241	0.3					3E	土坑23	0.2	1.1			
2D	P-247	0.1					3E	土坑24	1.7	0.4			
1・2D	雨落ち溝	2.4	0.6				3E	土坑26		0.3			
3D	溝2		0.1				3E	土坑27	9	4.5			
2E	P-181(建物3)		0.2				3E	土坑28	2.1	1.9			
2E	P-91	0.1					3E	土坑29	0.8	0.2			
2E	P-230	0.2					3E	土坑30	0.1	0.1			
3E	P-366	0.2					3E	土坑31	3.1	0.8		不明:1	1-1:1
3E	P-394	0.2					3E	土坑32	6	0.7			
3E	P-396		0.1										
8E	P-401	0.1	0.1										

表3 遺構別出土重量表(2)

トレンチ	遺構名	平瓦(kg)	丸瓦(kg)	他瓦(kg)	軒丸瓦(点数)	軒平瓦(点数)	トレンチ	遺構名	平瓦(kg)	丸瓦(kg)	他瓦(kg)	軒丸瓦(点数)	軒平瓦(点数)
3E	土坑33	0.1	0.1				8E	土坑82		0.2			
					7-1a:1	2-2:1	8E	土坑83	1.1	0.2			
					12-1:1		8E	土坑84	4	1.4			
2・3E	土坑35	22.1	13.3		12-3:1		2E	瓦の入った土坑	7	3.6			
					不明:1		5E6E	瓦製暗渠周辺			0.1		
					2:1	1-1:7	2E	落込	0.3				
					7-1a:2	2-2:1	2E	落込4	114.7	44	1.5		
					7-2:1	4:1	9F	P-541	0.1				
					12-5:1	6:1	10F	P-703	0.1	0.5			
					12-13:1	15-1:1	10F	P-704	0.5				
3E	土坑37	281.6	153.5		巴紋:1	15-2:1	11F	P-708	0.4	0.3			
2E	土坑38		0.1		不明:2	15-4:1	9F	溝5		0.6			
2E	土坑39	3.6	1.5		不明:4		8・9F	溝13	0.1				
2E	土坑41	13.4	6.3	0.2			9F	溝14	0.5				
					7-1a:4	1-1:9	8F	溝54	0.1	0.1			
					7-1c:1	2-1:1	8F	溝60	0.5	0.1			
					8:1	3:2	8F	溝61	1.3				
					12-4:1	8:1	8F	溝63	1.7	0.3			
					12-6:1	9:1	8F	溝64	0.4	0.4			
					12-8:1	12:1	9F	溝81	0.3	0.2			
					12-14:1	14:1	10F	溝103	0.6	0.7			
1~3E	土坑44	319.5	117.7	1.5	巴紋:3	15-3:1	11F	溝105	0.1				
1~3E	土坑44・45	8.6	2.6	0.6	不明:2	15-5:1	11F	溝106	0.1				
					7-1a:1	2-1:1	11F	溝107	0.1				
					7-1:1	2-1:1	11F	溝109	0.1				
					7-1a:1	2-4:1	8F	井戸2	3.9	0.8			
					12-11:1	10:1	8F	井戸3	0.9	0.6	6:1		
					12-12:1	11:1	9・						
1~3E		111.1	56.2	0.4	不明:2	不明:1	10F	井戸6	0.8	0.3			
					7-1a:2	1-3:1	8F	井戸7	0.5	0.3			
					7-1b:1	2-1:1	10F	井戸11	0.2	0.2	3:1		
					7-2:1	2-4:1	8F	土坑13	0.1				
					9:1		8F	土坑61	0.3				
					10:1		10F	土坑81	0.1				
					11:1		10F	土坑82	0.1	0.1			
					12:3		10F	土坑83	0.1	0.1			
8E	土坑45	71.1	32.7		12-11:1		10F	土坑85	0.6	0.6	3:1		
					不明:1		2・11・12G	溝1	13.8	8.6		7-1a:1	
					7-2:1		12G	溝3	2.4	0.3		12-9:1	
2E	土坑46	11.2	6.5		巴紋:1		11G	溝9	0.4	1.1		巴紋:1	
2E	土坑48	2.1					12G	溝11		0.1			
2E	土坑50	3.4	1.9				12G	溝31	0.4				
2E	土坑51	17.6	9.7				7G	溝161	0.3				
3E	土坑52	1	0.6				13G	南北溝	1.2				
2・3E	土坑55	0.4	0.1				13G	東西溝	0.9	0.1			
2E	土坑59	0.1					13・						
2E	土坑64	6.2	2.5				16G	大溝	1.1	0.2			
					12-10:1	1-1:1	16G	溝2		0.1			
					巴紋:1	7:1	16G	溝56	0.1	0.2			
2E	土坑65	5.4	8.3			不明:1	16G	溝63	0.2	0.1			
3E	土坑66	1.1					16G	溝66	0.1				
3E	土坑67	0.3					11G	井戸1	0.9	0.6			
3E	土坑68	0.8	0.5				12G	井戸3	0.7	0.2			
					2:1	2-2:1	12G	井戸5	0.6	0.1			
3E	土坑72	11.2	2.9		6:1	15-6:1	11G	土坑1	19.3	7.8			
8E	土坑72	5.6	1.7				11G	土坑42	0.4				
3E	土坑73		0.1				12G	土坑51	3	1.2			
3E	土坑75	1	0.5				12G	土坑52	0.1				
2E	土坑76	2	0.9				11G	池状遺構	0.4				
8E	土坑81	0.2					14G	池底溝状遺構	0.2				
							11G	落込	0.4				

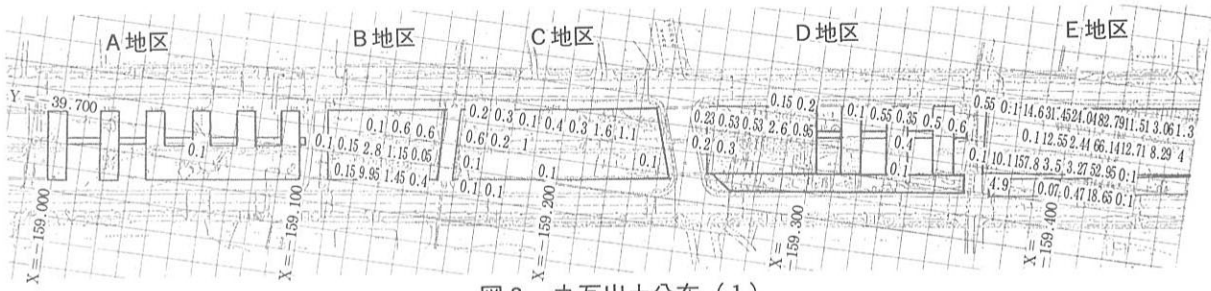


图8 丸瓦出土分布 (1)

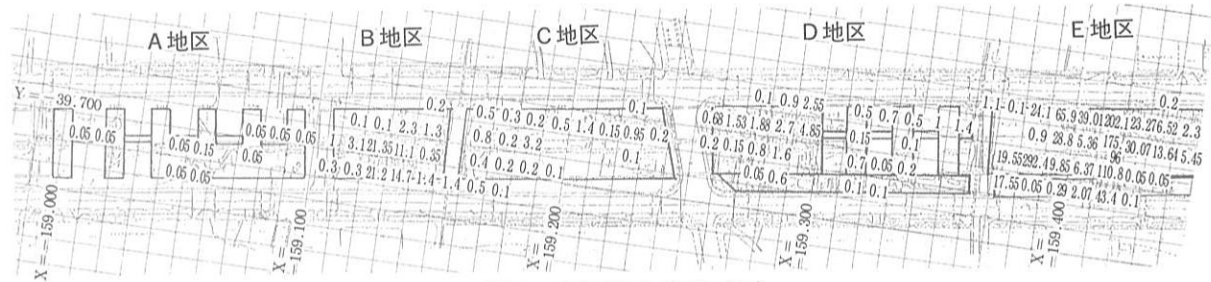


图9 平瓦出土分布 (1)

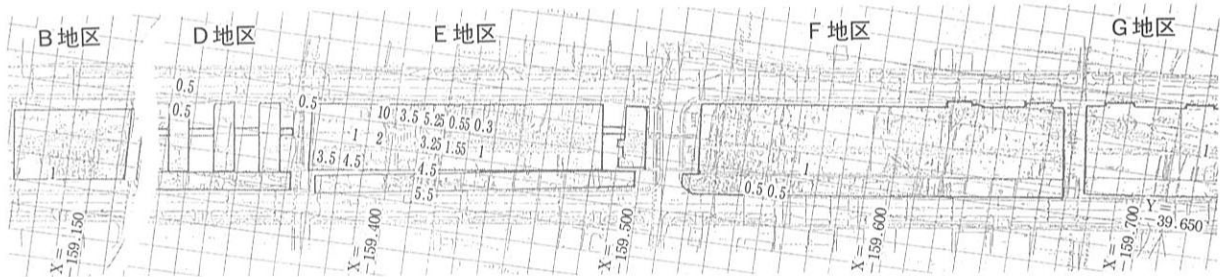


图10 軒丸瓦 (12~13世紀初頭) 出土分布

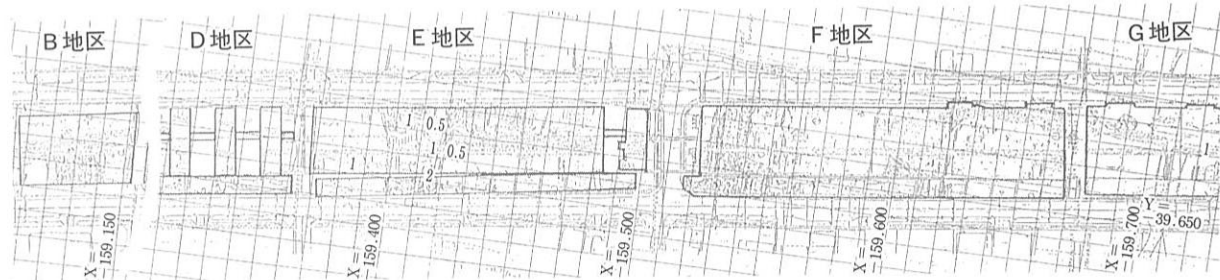


图11 軒丸瓦 (13世紀) 出土分布

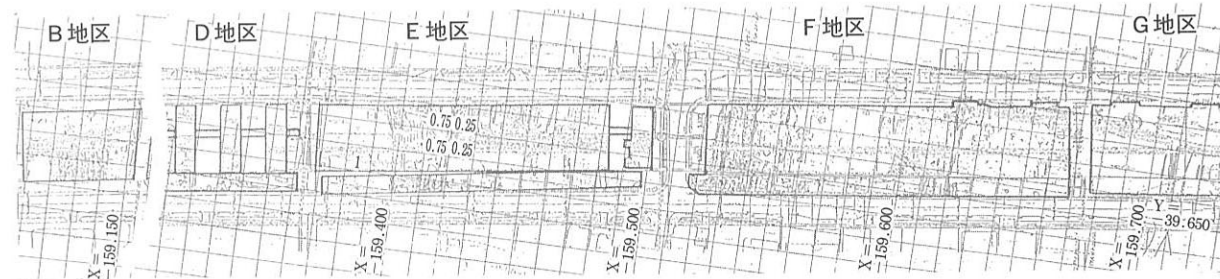


图12 軒丸瓦 (14~15世紀) 出土分布

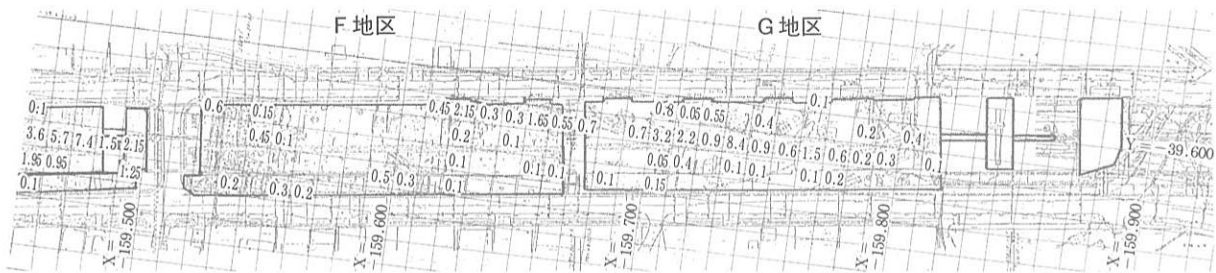


图8 丸瓦出土分布 (2)

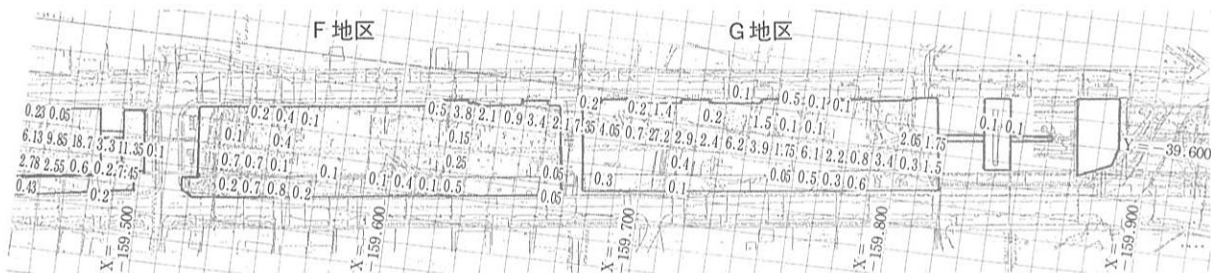


图9 平瓦出土分布 (2)

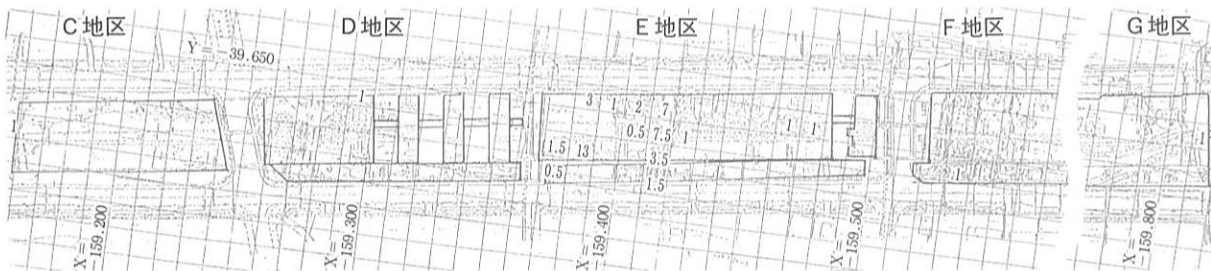


图13 軒平瓦 (12~13世紀初頭) 出土分布

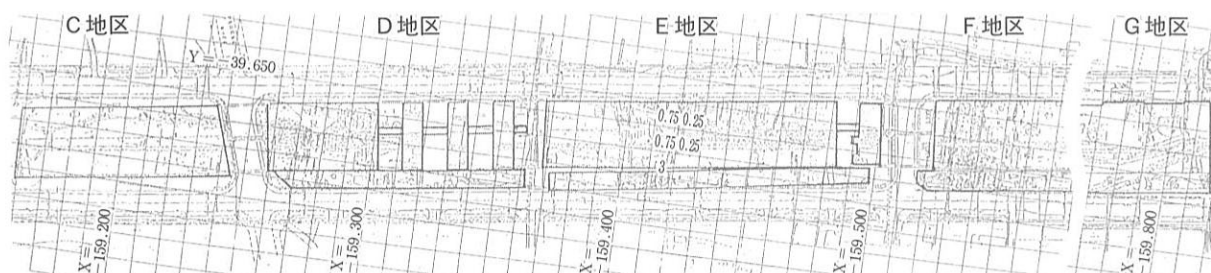


图14 軒平瓦 (13世紀) 出土分布

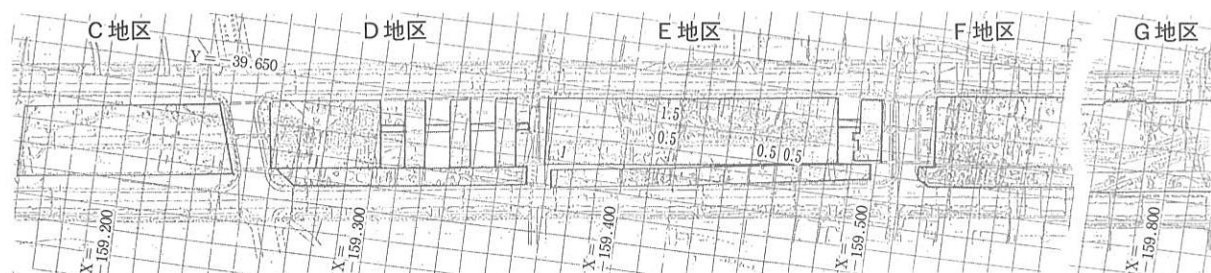


图15 軒平瓦 (14~15世紀) 出土分布

定され、梵字紋様を有する軒瓦という大きな枠組み中で選択され、使用されたものと考えられる。

他遺跡出土瓦の同範・同文関係は管見するところでは表4の通りである（現物を確認した上で同一のものと確認したものを「同範」、同範か異範か判断できないものを「同文」としたが、ほぼ同範の可能性が高いものである。）。表からわかるように南河内を中心とした分布が認められる。また、軒丸瓦10類は松原市大和川今池遺跡出土瓦（図16-1）と近似意匠である。

軒丸瓦7類、軒平瓦1類は中房・中心飾りの梵字部分が文字ではなく、紋様として退化したものがみられ、先後関係や組み合わせを推定することができる資料である（市本芳三「梵字文軒丸瓦・軒平瓦の一様相」『文化財学論集』1994 文化財学論集刊行会）。

また、軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせは紋様から軒丸7-2類と軒平1-1類が推定できる。出土点数からは軒丸7-1類と軒平1-1類の組み合わせが考えられるが、前述したように、梵字紋様を有する軒瓦という枠組みの中での搬入品として捉えたい。

軒丸瓦の年代については1類は奈良時代（8世紀）、2類は平安時代後期（12世紀）、3～12-4類は平安時代後期から鎌倉時代初頭（12世紀～13世紀初頭）、12-5～10類は鎌倉時代中期から後期（13世紀）、12-11～15類は、室町時代前期から中期（14～15世紀）と推定される。

巴紋については外縁や巴紋の形態により12-1～4類、12-5～10類、12-11～15類に分割することができ、古相→新相の位置づけができる。

軒平瓦の年代については1～7類が平安時代後期から鎌倉時代初頭（12世紀～13世紀初頭）、8～10・15-1～5類が鎌倉時代前期（12世紀前半）、11・12・15-6類が鎌倉時代後期（12世紀後半）、13・14

表4 観音寺遺跡出土瓦同範・同文関係

軒丸瓦			
7-1a	堺市	多治速比売神社	同範
7-1a	大阪市	四天王寺	同文
7-1b	堺市	桜井神社	同文
7-1b	富田林市	錦織神社境内遺跡	同文
軒平瓦			
1-1	堺市	日置荘遺跡(J-2型式)	同範
1-1	堺市	多治速比売神社	同文
1-1	藤井寺市	はさみ山遺跡	同文
1-2	堺市	日置荘遺跡(J-5型式)	同範
1-2	藤井寺市	はさみ山遺跡	同文
1-3	堺市	日置荘遺跡(J-7型式)	同範
2-3	藤井寺市	土師の里遺跡(78-5区)	同文

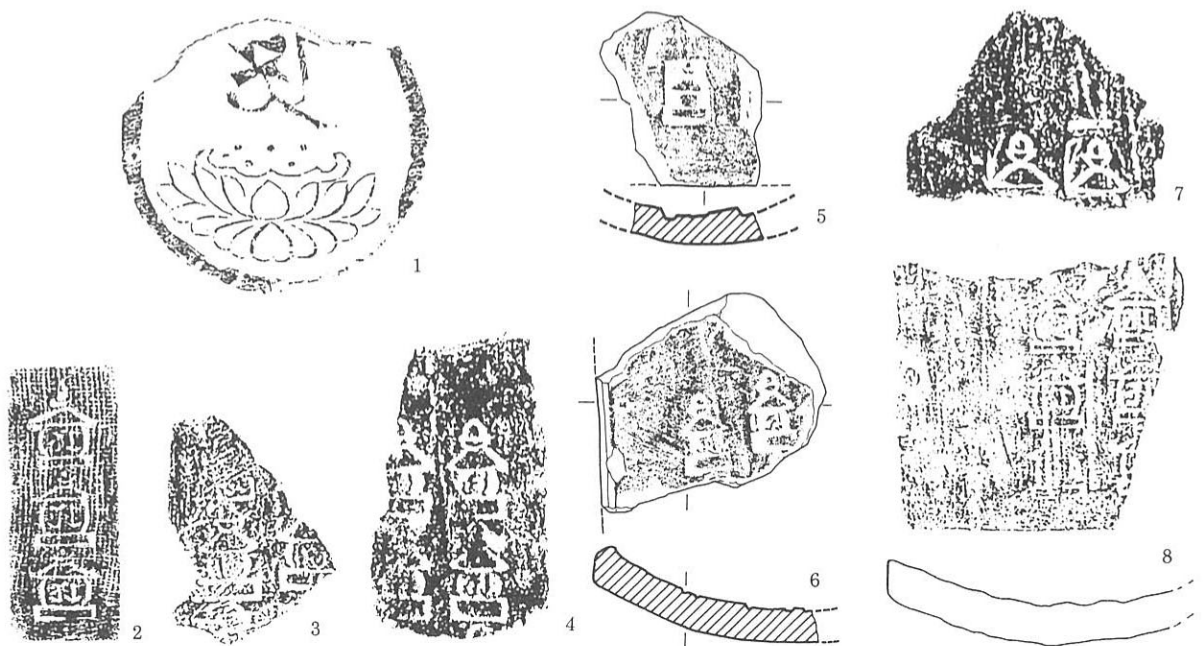


図16 他遺跡出土梵字紋軒丸瓦・五輪塔紋平瓦

類は室町時代前期から中期（14～15世紀）、16類が室町時代後期（16世紀）と推定される。

図7-1の「建暦」紀年銘平丸は西暦1211～1213年に限定できる資料であり、凹凸面共にナデ・離れ砂の技法のものが当該期に存在することが明らかとなった。軒瓦では軒丸瓦12-1～12-4類、軒平瓦15-1～15-5類が当時期に該当するものと考えたい。

図7-629の五輪塔スタンプ紋の類例として大阪市住道寺跡（図16-2）、京都市法勝寺跡（図16-3）、柏原市船橋遺跡（図16-4）、羽曳野市駒ヶ谷第2散布地No.15地点（図16-5）、羽曳野市駒ヶ谷第2散布地No.89地点（図16-6）、羽曳野市西琳寺（図16-7）、豊中市山ノ上遺跡（図16-8）、東大阪市若江寺跡を挙げることができ（江谷寛「平安京出土の河内産搬入瓦」『研究紀要第4輯』古代学協会1994）、分布が南河内に集中していることが指摘されている。また、このうち山ノ上遺跡、住道寺跡、船橋遺跡、駒ヶ谷第2散布地No.89地点の例は水輪部分に梵字が描かれている。

表5 出土軒丸瓦 報告書掲載一覧

図番号	写真番号	紋様	類	トレンチ	遺構名	時期(世紀)	特徴
1-562	55-562	複弁蓮華紋	1	1E・3E	包含層	8	胎土褐色。複弁外縁に沿って別の圏線。外縁内面は傾斜し凸線の鋸歯紋が巡る。
1-563	55-563	単弁八葉蓮華紋	2	3E	土坑E-72	12	胎土乳白色。珠紋帯内側の圏線は細い。丸瓦部内面の布目は粗。
1-564	55-564	細弁十六葉蓮華紋	3	10F	土坑F-85(1992年度調査区)	12	外縁断面は四角。中房内蓮子1+7+9。外縁外側に范型の痕跡。2次火熱。
1-565	55-565	単弁八葉蓮華紋	4	3B	井戸B-3上層(暗灰褐色土)	12	中房形態不明。裏面剝離。2次火熱。外縁范ずれ。
1-566	55-566	単弁蓮華紋	5	3E	溝E-16	12	中房内不明、梵字か。雄蕊帯、珠紋帯を有する。
1-567	55-567	複弁八葉蓮華紋	6	5E	井戸E-3	12	中房内蓮子放射状に接合。雄蕊帯幅広。瓦当面粘土板糸切り痕。
1-568	55-568	梵字複弁八葉蓮華紋	7-1a	1E・3E	井戸E-22	12	中房にキリーク。字体はシャープ。
1-569	55-569	梵字複弁八葉蓮華紋	7-1b	2E	暗灰褐色土	12	中房にキリーク。字体はシャープだが1aとは相違。雄蕊帯やや幅広。
1-570	55-570	梵字複弁八葉蓮華紋	7-1c	1E～3E	土坑E-44上層	12	中房にキリーク。字体の盛り上がり欠ける。
1-571	55-571	梵字複弁八葉蓮華紋	7-2	2E	土坑E-46	12	中房にア或いはアク。蓮弁輪郭線は連続。珠紋帯内外に圏線。
1-572	55-572	—	8	1E～3E	土坑E-44上層	12	下部に蓮華座か。軟質。
1-573	56-573	—	9	8E	土坑E-45(1992年度調査区)	12	下部に蓮華座か。二重の圏線。軟質。
1-574	55-574	—	10	8E	土坑E-45(1992年度調査区)	12	下部に蓮華座。上部に梵字か。軟質。瓦当面残存不良。
1-575	55-575	文字紋	11	8E	土坑E-45(1992年度調査区)	12後半	圏線巡る。
2-576	56-576	三巴紋	12-1	2E	土坑E-35	12後～13初	珠紋大。珠紋帯内外に独立した圏線。外縁幅狭い。
2-577	56-577	三巴紋	12-2	2E	暗灰褐色土	12後～13初	巴の尾が太く短い。
2-578	56-578	三巴紋	12-3	2E	土坑E-35	12後～13初	紋様隆起大きい。珠紋帯内外に独立した圏線。外縁幅狭い。外縁外側ケズリ。
2-579	56-579	三巴紋	12-4	1E～3E	土坑E-44上層	12後～13初	紋様隆起小さい。巴頭部丸い。
2-580	56-580	三巴紋	12-5	3E	土坑E-37	13	珠紋、外縁に范ずれがみられる。
2-581	56-581	三巴紋	12-6	1E～3E	土坑E-44上・下層	13	珠紋帯内外に圏線。2次火熱。
2-582	56-582	三巴紋	12-7	3E	暗灰褐色土	13	巴の尾が長く伸びる。珠紋帯外側に圏線なし。
2-583	56-583	三巴紋	12-8	1E～3E	土坑44E-上層	13	珠紋帯なし。巴の隆起大きい。
2-584	56-584	三巴紋	12-9	12G	溝G-1下層(暗灰色砂質土)	13	珠紋帯内外に圏線。瓦当面に離れ砂。
2-585	56-585	三巴紋	12-10	2E	土坑E-65	13	巴頭部丸い。
2-586	56-586	三巴紋	12-11	8E	土坑E-45(1992年度調査区)	13	紋様隆起小さい。巴頭部接する。瓦当面に丸瓦接着面。
2-587	56-587	三巴紋	12-12	1E～3E	土坑E-45	14～15	—
2-588	56-588	三巴紋	12-13	3E	土坑E-37	14～15	外縁幅広。珠紋帯内外に圏線なし。
2-589	56-589	三巴紋	12-14	1E～3E	土坑E-44下層	14～15	外縁幅広。珠紋帯外に圏線なし。
2-590	56-590	三巴紋	12-15	2E	土坑E-46	14～15	外縁幅広。珠紋帯外に圏線なし。瓦当幅薄い。

表6 出土軒平瓦 報告書掲載一覧

図番号	写真番号	紋 様	類	トレンチ	遺 構 名	時期(世紀)	特 徴
3-591	57-591	梵字唐草紋	1-1	1E~3E	土坑E-44下層	12	キリーク。顎断面曲線顎。外縁凹面側に幅広の面取り。日置荘遺跡1-2型式。
3-592	57-592	梵字唐草紋	1-2	3E	土坑E-6	12	キリーク。顎形態不明。2次火熱。日置荘遺跡1-5型式。
3-593	57-593	梵字唐草紋	1-3	2E	溝E-16	12	中心飾りキリークと推定。顎断面段顎。日置荘遺跡1-7型式。
3-594	57-594	蓮子唐草紋	2-1	3E	土坑E-45	12	平瓦部狭端側に釘穴。直線顎。平瓦凹面に粗い布目と糸切り痕。
3-595	57-595	蓮子唐草紋	2-2	3E	土坑E-37	12	直線顎。凹面に粗い布目。
3-596	57-596	蓮子唐草紋	2-2	3E	土坑E-72	12	直線顎。2次火熱。
3-597	57-597	蓮子唐草紋	2-3	3E	溝E-2下層	12	中心飾りの界線が外縁周囲の界線と接続。
3-598	57-598	蓮子唐草紋	2-4	3E	土坑E-45	12	中心飾りの界線が外縁周囲の界線と接続。直線顎。
3-599	57-599	唐草紋	3	1E~3E	土坑E-44上層	12	中心飾りが残存していないが、1類の梵字紋の可能性がある。段顎。
3-600	57-600	唐草紋	3	1E~3E	土坑E-44下層	12	—
3-601	57-601	唐草紋	4	3E	土坑E-37	12	連続した唐草紋。顎形態不明。
3-602	57-602	唐草紋	5	13G	黄灰色土・粘質	12	外縁の四周に界線が巡る。下部界線外側に珠紋あり。
3-603	57-603	唐草紋	6	3E	土坑E-37	12	段顎。
3-604	57-604	唐草紋	7	2E	土坑E-65	12	唐草紋の伸びる方向が内側に向く。
3-605	57-605	唐草紋	8	1E~3E	土坑E-44上層	13	曲線顎。胎土軟質。
3-606	57-606	唐草紋	9	1E~3E	土坑E-44上層	13	中心飾り不明。太く短い唐草紋。曲線顎。顎貼り付け。
3-607	57-607	唐草紋	10	3E	土坑E-45	13	上下界線が外縁に当たる。不明瞭な曲線顎。2次火熱。
3-608	57-608	唐草紋	11	1E~3E	土坑E-45下層	13~14	中心飾りは不明瞭。上下界線が外縁に当たる。曲線顎。
3-609	58-609	唐草紋	12	3E	土坑E-45	13~14	瓦当面に離れ砂。
3-610	58-610	唐草紋	13	1E~3E	土坑E-44下層	13~14	上下界線が外縁に当たる。曲線顎。瓦当面に離れ砂。
3-611	58-611	唐草紋	13	2E	井戸E-14青灰色粘質土	14~15	瓦当幅の厚みのない段顎。
3-612	58-612	唐草紋	14	1E~3E	土坑E-44上層	14~15	瓦当面に離れ砂。
3-613	58-613	唐草紋	16	3E	土坑E-10	16	左右外縁幅広い。
4-614	58-614	連珠紋	15-1	3E	土坑E-37	13	左右圏線無し。
4-615	58-615	連珠紋	15-2	3E	土坑E-37	13	顎貼り付け。
4-616	58-616	連珠紋	15-3	1E~3E	土坑E-44上層	13~14	顎形態不明。顎貼り付け。平瓦凹面布目細かい。
4-617	58-617	連珠紋	15-4	3E	土坑E-37	13~14	顎形態不明。顎貼り付け。軟質。
4-618	58-618	連珠紋	15-5	1E~3E	土坑E-44上層	13	曲線顎。
4-619	58-619	連珠紋	15-6	3E	土坑E-72	14~15	段顎。平瓦部厚い。

表7 出土丸瓦・平瓦・特殊瓦 報告書掲載一覧

図番号	写真番号	種 類	トレンチ	遺 構 名	時期(世紀)	特 徴
5-620		有段式丸瓦	1E・2E	井戸E-17	12~13	玉縁側縁外側の面取りが丸瓦部端面に及ぶ。2次火熱。
5-621		有段式丸瓦	1E~3E	土坑E-44最下層	12	軒瓦の丸瓦部。大型品。
6-622		無段式丸瓦	1E~3E	土坑E-44最下層	12	凹面布目粗い。
6-623		平瓦	1E~3E	土坑E-44最下層	12~13	凹面布目、離れ砂。凸面縄目叩き、離れ砂。
6-624		平瓦	1E・2E	井戸E-17	13~15	凹凸面離れ砂。
6-625		平瓦	1E~3E	土坑E-44最下層	12~13	凹面布目、中央部に3条のナデ痕。凸面縄目叩き。
6-626		平瓦	11G	土坑G-1	14~16	凹凸面共にナデ。彎曲度小さい。
7-627	59-627	平瓦	1E~3E	土坑E-44	13初頭	凹面に「建曆」(西暦1211~1213)の線刻。凹凸面共にナデ、離れ砂。
7-628	59-628	平瓦	3E	土坑E-45	13~15	凹面に「大鳥郡」の線刻。凸面ナデ。
7-629	59-629	平瓦	1E・3E	井戸E-22暗青灰色粘質土	12~13	凹面に五輪塔のスタンプ紋。凹面ナデ。凸面縄目叩き。
7-630	60-630	平瓦	1E~3E	土坑E-44	13~15	凸面に「南无阿弥陀佛」のスタンプ紋。凹凸面共にナデ、離れ砂。
7-631	58-631	鬼瓦	1E~3E	土坑E-44上層	8	左側部分。眼部分欠損。紋様平坦。
	58-751	鬼瓦	2E	土坑E-44	12~13	左側部分。眼と眉毛部分。
	58-752	鬼瓦	8E	土坑E-45(1992年度調査区)	13~15	口から右頬部分。裏面剝離。
	60-753	丸瓦	2E	土坑E-48	13~16	焼成前の曲線紋様。
	60-754	平瓦	2E	土坑E-35	13~15	胎土に瓦器の破片。

第2節 松原市観音寺遺跡出土の灯明台

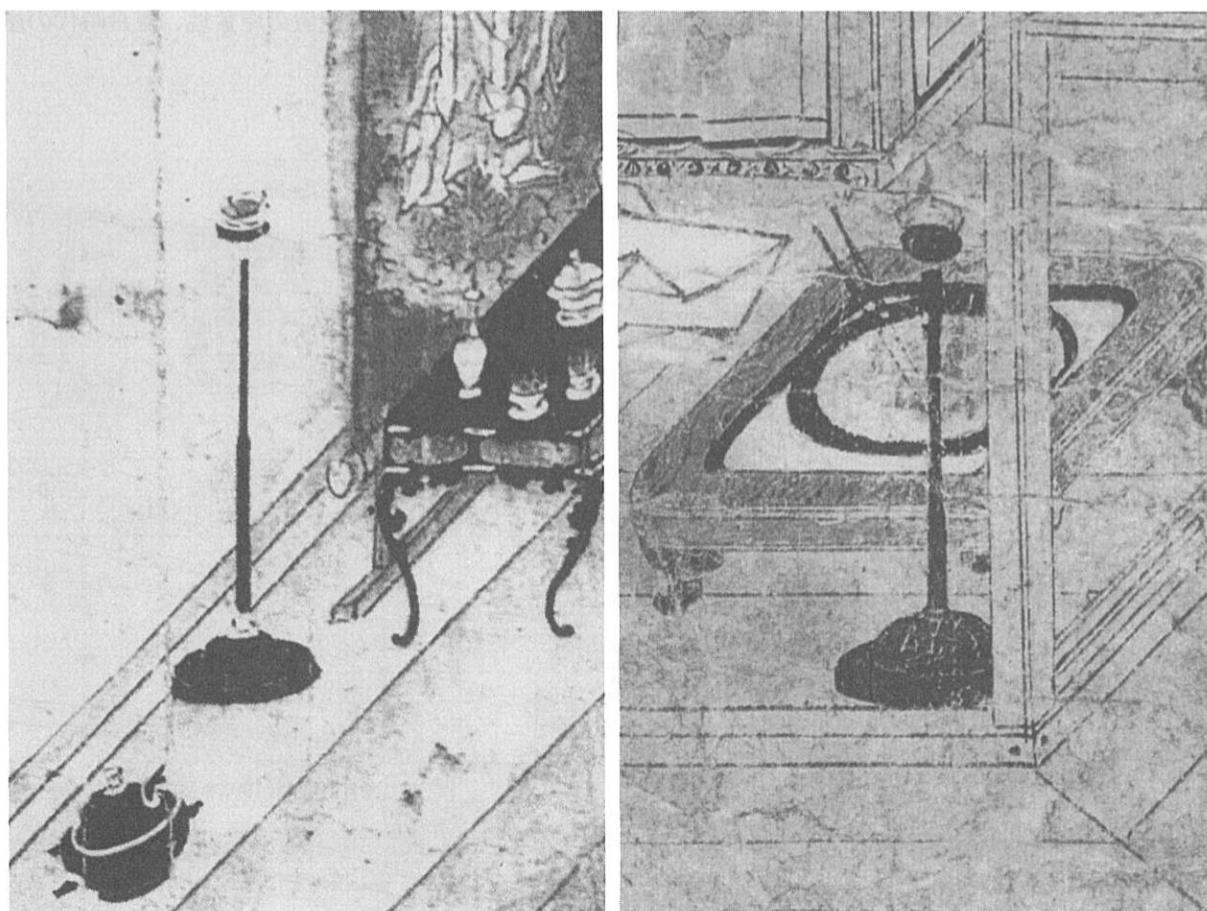
大野 薫

(大阪府教育委員会)

(1) はじめに

ここに取り上げる土製瓦質の灯明台⁽¹⁾は、大阪府教育委員会と財団法人大阪文化財センターが近畿自動車道と歌山線（現阪和自動車道）建設に先立って発掘調査を実施した諸遺跡のうち、大阪府松原市立部および西大塚に所在する観音寺遺跡から出土したものである。灯明台とは灯明皿を置く台のことで、絵巻等⁽²⁾によると、灯明皿を直接置く円盤状の受け皿と、棒状の軸、軸を支える台座からなり、寺院や邸宅の室内で用いられる。多くは全体が木製で、台座には、半球状のものや、木を十字に組み合わせたものなどがみられる（図1）。

筆者はこの観音寺遺跡の発掘調査ならびに基本整理を担当し、1986年にその概要を報告した⁽³⁾。また、この灯明台については、財団法人大阪府文化財調査研究センターが1996年に刊行した『摂河泉発掘資料精選』⁽⁴⁾でも取り上げたところである。



法然上人絵伝巻一（14世紀初頭）

灯明台をはさんで、手前につのだらい、向う側に香炉・花瓶・六器を置いた前机がある

西行物語絵巻（13世紀中頃）

板敷の間の隅に灯明台（菊燈台と呼ばれるもの）があり、この向う側に足付火鉢がある

図1 絵巻にみる灯明台（註2文献）

今般、本格的な遺物整理が実施されたところ、あらたに同一個体と考えられる灯明台破片が見いだされ、その破片数は計4点となった。これらの灯明台は発掘出土品としては希有のものであり、また、「西城房」、「應保」、「寺」などの文字が刻まれているものもあって、すこぶる興味深い内容を含んでいると考えられるのである。報告本文と重複する部分もあるかと思うが、本稿ではこの灯明台をあらためて紹介し、広く類例の御教示を乞いたいと考える。

なお、灯明皿を置く台は、一般には「燈台」と表現されている。絵巻などの解説においても「燈台」という語が用いられることが多い。が、藤澤一夫先生の御教示により、当初より灯明台と呼んでいたため、本稿においても引き続き灯明台という語を用いたい。

(2) 遺跡と遺構の概要

灯明台そのものの記述にはいる前に、観音寺遺跡と灯明台を出土した遺構について、その概要を簡単に述べておこう。

観音寺遺跡は瓜破台地と呼ばれる洪積段丘の南部に立地している。この瓜破台地は幅約2kmで、南から北にのびており、段丘上にはいくつかの開析谷が認められる。阿湯戸池から今池・小治ヶ池・樋野ヶ池へと続く開析谷もその一つで、観音寺遺跡はその開析谷の南西側に立地している。

発掘調査の結果、観音寺遺跡は、奈良時代から室町時代にかけての集落遺跡であることが判明している。奈良時代の掘立柱建物、平安時代(9世紀代)の溝で囲まれた官衙風配置の屋敷地、鎌倉時代の屋敷地や集落、室町時代の掘立柱建物、等が検出されている。



図2 灯明台を出土した遺構(1:400)

灯明台が出土したのは1985年度調査第4調査区（E地区）、および1992年度調査区で検出した遺構である（図2）。E地区土坑37からは「寺」の文字線刻のある灯明台受け皿、およびそれと接合する破片の計2点、E地区土坑45からは「西城房」の文字線刻のある灯明台受け皿1点、1992年度調査区土坑45からは「應保」の文字線刻のある灯明台受け皿1点、が出土している。E地区土坑45と1992年度調査区土坑45は一連の遺構であり、それぞれの遺構から出土している灯明台受け皿は、形状・大きさ・胎土・調整等からみて、同一個体と判断できるものである。

土坑37はE地区の北西隅にある、いわゆる瓦溜で、長径約8m、短径約3.5m、深さ約0.5mである。平面形は長楕円形を呈し、断面形は皿形を呈する。この土坑37の北側には溝16が接続し、さらに直角に西に折れ曲がるように土坑72が取り付いている。土坑37からは多量の瓦や土器が投棄された状態で出土している。出土遺物には、須恵器では杯・甕・鉢・筒形器台、須恵質土器挿鉢、土師器では杯・皿、土師質土器羽釜、瓦器椀・瓦器皿、瓦質土器では甕・鉢・羽釜・火舎・挿鉢、陶磁器では中国青磁・常滑・信楽・瀬戸・備前、他に砥石・窯壁片・五輪塔風輪未製品・鉾滓・焼石などが出土している。時期的に最も古いのは須恵器の杯蓋や筒形器台で5世紀のもの、最も下るのは備前挿鉢で16世紀のもので、中心となるのは15～16世紀の遺物である。染付が1点あるが土坑37内の攪乱出土である。したがって土坑37は16世紀の所産で、時期幅のある遺物が多量に含まれていることになる。

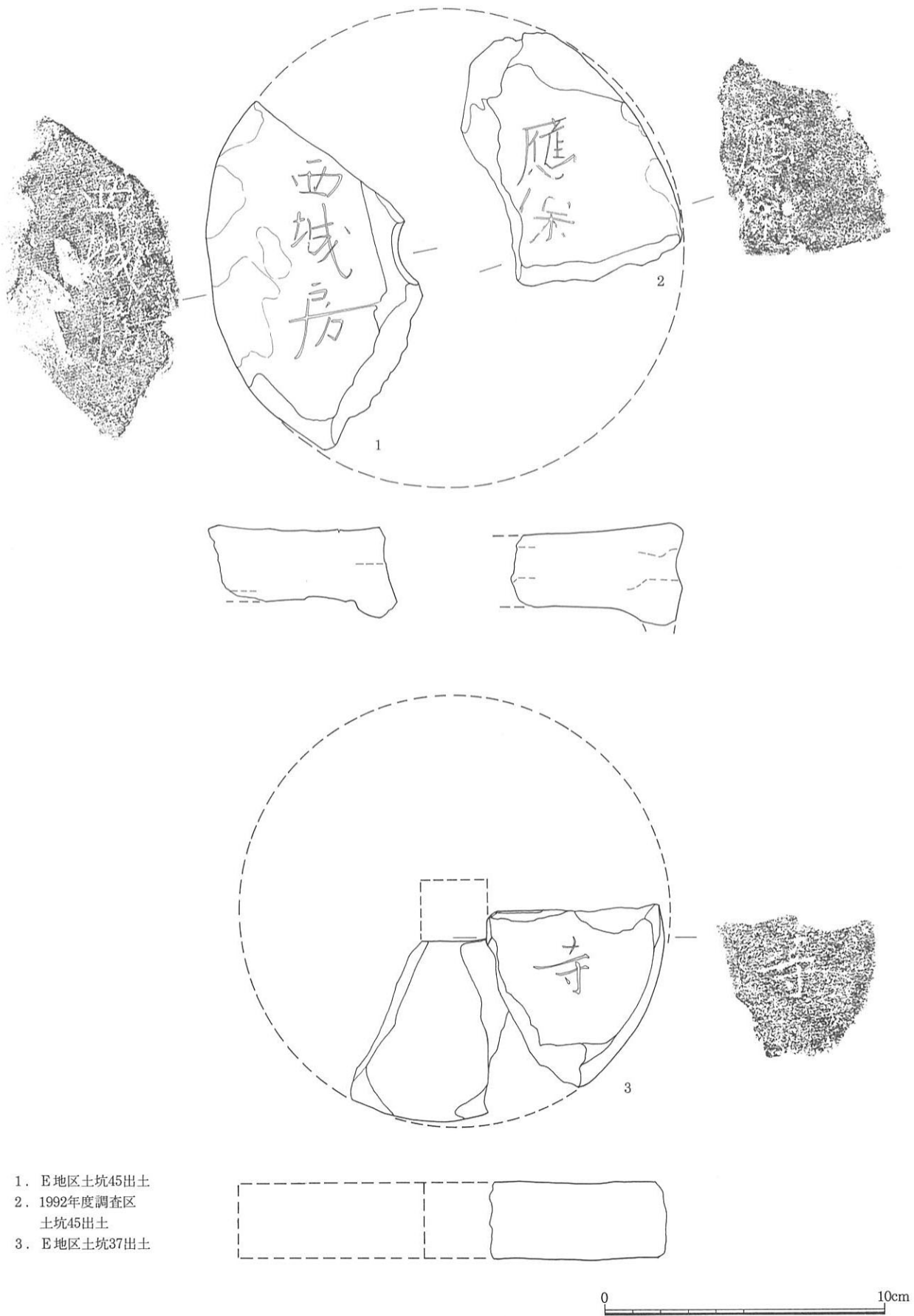
E地区土坑45と1992年度調査区土坑45は一連の溝状の遺構で、幅3～4m、深さ約0.7m、長さ28.2m以上あり、多量の土器や瓦が出土している。土坑45の出土遺物には、須恵器では杯・筒形器台、土師器では杯・皿、土師質土器では甕・羽釜・挿鉢、瓦器椀・瓦器皿、瓦質土器では甕・鉢・羽釜・挿鉢・火舎・三足土器、陶磁器では中国青磁・中国白磁・中国染付・常滑・瀬戸・備前挿鉢、他に不定形石器・砥石・窯壁片などがある。最新の遺物は16世紀に下る備前挿鉢だが、中心となるのは15～16世紀のものである。1992年度調査区土坑45の出土遺物は土坑45と同じ様相を示し、近世陶磁器が入っている。

（3）灯明台の観察

図3-1はE地区土坑45出土の「西城房」の文字線刻を有する灯明台受け皿、同図-2は1992年度調査区土坑45出土の「應保」の文字線刻を有する灯明台受け皿である。これらの2点の灯明台は、形状・大きさ・胎土・調整等からみて、同一個体と考えられるものである。しかし、直接は接合しない。図3では「應保」と「西城房」の文字が縦に並ぶように配置したが、「應保」や「西城房」の文字が中央孔をとりめぐるように刻まれるのではなく、ほぼまっすぐに配列されていることから、図3のような配置が最も可能性が大きいと考えている。

1は全体の1/4ほどの破片である。側面は長さ約14.5cmにわたって遺存している。上面は黒色瓦質で、焼成前に施された「西城房」の文字線刻がある。線刻はしっかりしており、「西城房」の読みに疑念の余地はない。中央の孔は現状では貫通しているように見えるが、孔の側面を観察すると、上半（文字線刻のある側）は剝離面、下半はプライマリーな面と思われ、本来は貫通していない穴であったと考えられる。

2は全体の1/5ほどの破片である。側面が長さ約9cmにわたって遺存しているが、中央の孔の部分はこの破片には残っていない。上面は黒色瓦質で、焼成前に施された「應保」の文字線刻がある。上面がかなり傷んでいるため、文字線刻の遺存状況はあまり良くないが、「應保」であることは間違いなからう。



- 1. E地区土坑45出土
- 2. 1992年度調査区
土坑45出土
- 3. E地区土坑37出土

图3 観音寺遺跡出土灯明台実測図(1:2)

1、2の両者を合わせると全体のおよそ1/2が遺存していることになる。復元すると、直径約17cm、厚さ2.5~3.5cmの円盤状を呈し、上面は平坦で周縁部が若干高くなっている。下面中心部に直径約3.5cmの円形の穴がある。断面を観察すると、2枚の円盤状のものを貼り合わせていることが明瞭で、上は厚さ2cm前後のほぼ平坦な円盤状を呈する。下側は中央に円孔があり、その中央孔の周縁に幅1.5cm程の高まりがめぐる。また、外周縁側も厚くなっていて、下面はかなり凹凸がある。胎土には石英・長石・チャートを多量に含み、焼成は良好で、色調は、表面は明褐灰色、断面は灰白色を呈する。

図3-3は土坑37出土の「寺」の文字線刻を有する灯明台受け皿である。二つの破片からなり、およそ1/3が残存する。復元すると、直径約16cm、厚さ2.6cmの円盤状になる。2枚の円盤を貼り合わせた形跡は認められない。中心部には方形の孔が穿たれている。残存部ではこの穿孔は一辺2.3cmあるが、正方形になるどうかは確定できない。穿孔は突き抜けているが、下面側の穿孔の横には一段くぼんだ部分がある。くぼんだ部分を均等に反転復元すると細いスリット状になるが、本来そのようなスリット状であったのかどうか断定できないと考える。表面はいずれの面も丁寧に平滑に調整されており、上面をはじめ、穿孔面に至るまで、表面は黒色瓦質（脱色している部分あり）を呈する。断面は淡黄橙色である。線刻文字は「寺」であり、線刻部分に炭素が吸着している点からみても、焼成前の線刻である。

灯明台は冒頭にも記したように、1. 灯明皿等を置く円盤状の受け皿、2. 棒状の軸、3. 軸を支える半球状や十字形の台座、から成っている。ここに紹介した土製灯明台は1. の受け皿と考えるのが適切である。

「應保」・「西城房」の文字線刻のある灯明台は、上面を平坦に、かつ周縁を若干高く仕上げている。受け皿とするにふさわしい形状を示している。軸を差し込む中央孔も貫通しておらず、この点も受け皿と見ることを補強している。また、下面には凹凸があり、この灯明台を台座とすると、凹凸のある面が眼に触れることになり、室内の調度とするには無理があろう。

「寺」の文字線刻のある灯明台はまったくの円盤状で、これのみで台座とするには、2.6cmという厚さからみても無理がある。しかし、軸を差し込む中央孔が貫通している点が受け皿と断定するのを躊躇させる。しかし、先の報告のところにも記されているとおり、下面には中央の方形孔の横に「スリット状の切り込み」があり、軸を固定する何らかの仕掛けがあるのかもしれない。類例の増加を待つほかないが、ここでは受け皿と考えておきたい。

(4) 「西城房」をめぐる

観音寺遺跡の灯明台には、「西城房」、「應保」、「寺」等の文字線刻が認められた。他に、「大鳥郡」(E地区土坑45出土丸瓦)、「建曆」(E地区土坑44出土平瓦、建曆は1211年~1213年)、「南无阿弥陀佛」(E地区土坑44出土平瓦)等の文字資料も認められた。

「應保」は平安時代末の、1161年~1163年に当たっている。のちに述べる『佐伯景弘持経者卷数注進状』にみられる承安二年(1172年)とは僅か10年ほどの違いに過ぎない。同時代と言ってよからう。

「西城房」については、高山寺聖教類紙背文書のなかに、承安二年(1172年)三月十八日の奥書のあたる『佐伯景弘持経者卷数注進状』があり、ここに「西城房 證西 十一部 同國 丹北郡松原法原寺」とみえる。この文書は平清盛の三女徳子の入内に関連して、證西をはじめとする10人の僧が写経に従事し、その経過を厳島神社神主佐伯景弘が報告したものである⁽⁹⁾。灯明台と文書の年代や出土場所からみて、両者の「西城房」は同一のものと考えて差し支えあるまい。そのように考えてよければ、「西城房」の

佐伯景弘持經者卷數注進狀

(佐伯)
景弘沙汰持經者十口卷數事

合百廿六部

明蓮房	良尊十三部	河内國丹南郡黒山長和寺
□卷		
西城房	證西十一部	同國 丹北郡松原法原寺
□卷		
了惠房	弁勝十六部	同國 同郡 松原大臣寺
花林房	義詮十四部	同國 丹南郡黒山學音寺
常円房	智祐十二部	同國 同郡 同郷花林寺
□卷		
南教房	教祐十二部	同國 同郡 同郷薬師寺
慈定房	應覺十二部	同國 石川郡山城郷定福寺
文養房	尊仁十二部	安藝國一宮住僧
智乘房	慶誘十二部	安藝國一宮住僧
□卷		
勝光房	円慶十三部	安藝國一宮住僧

右注進如件、但自十四日夕至于十八日朝、

承安二年三月十八日

佐伯景弘持經者卷數注進狀 (註5 文献より)

文字線刻のある灯明台は、河内国丹北郡の松原に所在する法原寺の、僧證西の部屋—すなわち西城房—に備えられていたとみることができるのではないだろうか。さらにこのことは、とりも直さず、松原法原寺がこの付近に存在したことを示している可能性が出てくるのである。また、以上のことから推測すれば、土坑37出土の灯明台に刻まれた「寺」は「法原寺」の可能性がすこぶる強いといえよう。

灯明台に刻まれた「寺」、「西城房」を上述のように、平安時代末頃の法原寺の西城房と解すれば、E地区土坑37・E地区土坑45・1992年度調査区土坑45の示す年代、すなわち中世後期、あるいは近世初頭とはかなりの隔りがある。したがってこれらの土坑や溝は平安時代末頃の松原法原寺にかかわる遺構とは認められないが、灯明台を含む多量の遺物がどこか別の離れた場所からここに運ばれてきたものでない限り、松原法原寺の所在地を本調査区付近に想定して大過ないであろう。

註

1 この灯明台については、当初、灯明台とはわからず、不明な点を残すも「文字瓦」と認識して、報道資料提供したところである。報道資料提供の当日、大阪府教育委員会文化財保護課の部屋で報道資料提供の時刻を待っていたところ、たまたま藤澤一夫先生が来室され、この「文字瓦」をご覧になり、即座にこれが灯明台であること、土製の灯明台は極めて珍しいことを御教示下さった。そして、ポケットから筆ペンを取り出し、灯明台の全体の絵をさらさらと描かれたのである。その絵を右に掲げる。さらに、鞆から拓本道具を取り出し、「ちょっと、水、持ってきてくれる」と言われて、その場で「西城房」、「寺」の文字の拓本をとられたのである。

報道資料提供の直前に、文字瓦ではなく灯明台と教えられ、担当者としてはいまさらどうしようもなく、冷や汗を流すばかりであった。

2 澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『日本常民生活絵引』（平凡社 1984）

白畑よし編『西行物語繪巻 當麻曼茶羅縁起』（『新修日本繪巻物全集』第12巻 角川書店 1977）

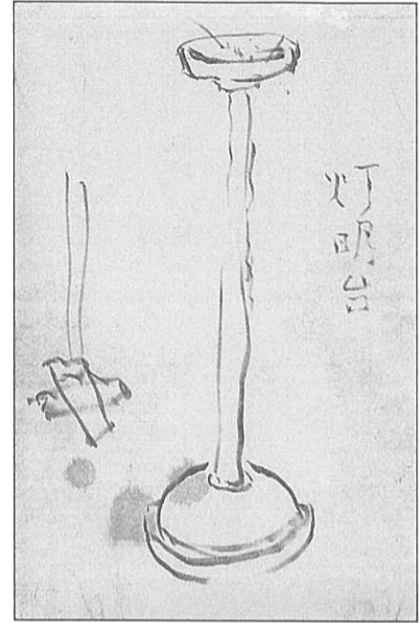
塚本善隆編『法然上人繪傳』（『新修日本繪巻物全集』第14巻 角川書店 1977）

3 田中和弘・大野薫・中村淳磯『松原観音寺遺跡第2次発掘調査概要』（大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1986）

4 財団法人大阪府文化財調査研究センター編『摂河泉発掘資料精選』（1996）

5 高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺古文書』（高山寺資料叢書第四冊 東京大学出版会 1975） なお、『平安遺文』5055に同文書が収録されている。

6 松原市史編さん委員会編『松原市史』第1巻（本文編1 松原市役所 1985）



藤澤一夫先生筆、灯明台の図
(原図の1/2)

小文をなすにあたり、藤澤一夫先生をはじめ、次の方々にとにかくたならぬお世話になりました。文末ですが、記して、御礼申し上げます。

足立俊彦・梶木良夫・合田幸美・高橋雅子・田中和弘・中村淳磯・村上富喜子

第3節 二上山系凝灰岩における宝珠について

西山昌孝

(千早赤阪村教育委員会)

1. はじめに

石造物には、多くの塔形が存在する。個々の塔形は共通の部分をもっており、部分の形状変化を見ることにより塔形を区別することができる。若干の出入りや変化はあるが、概ね基礎・塔身・屋蓋・請花・宝珠で構成されている。なかでも宝珠は、層塔・宝塔・宝篋印塔・五輪塔・笠塔婆・燈籠など多くの塔形に共通する部分である。

しかし、ひとくちに宝珠といっても、いろいろな形態が存在する。その用途は石造物以外に建築物・仏像の持物・工芸品・絵画など多岐にわたっている。これらについて関 忠夫氏は宝珠を団形型・尖頂型・三弁型に大別し考察を行っている⁽¹⁾。今回は、この範囲を本報告書の観音寺遺跡で出土した宝珠と同じ二上山系凝灰岩⁽²⁾の石材に限定し、宝珠の形態変化について考えたい。

2. 宝珠

1は、松原市観音寺遺跡出土の宝珠・請花である。塔形は五輪塔である。宝珠には、径約9cmの黒色の溶結凝灰岩を含んでいる。柄を除いた高さ21.2cmを測る。宝珠と請花の間に首部、下部に高さ2.5cmの柄を造り出す。宝珠の最大径は高さの1/2以下にあり、古様相を示している⁽³⁾。

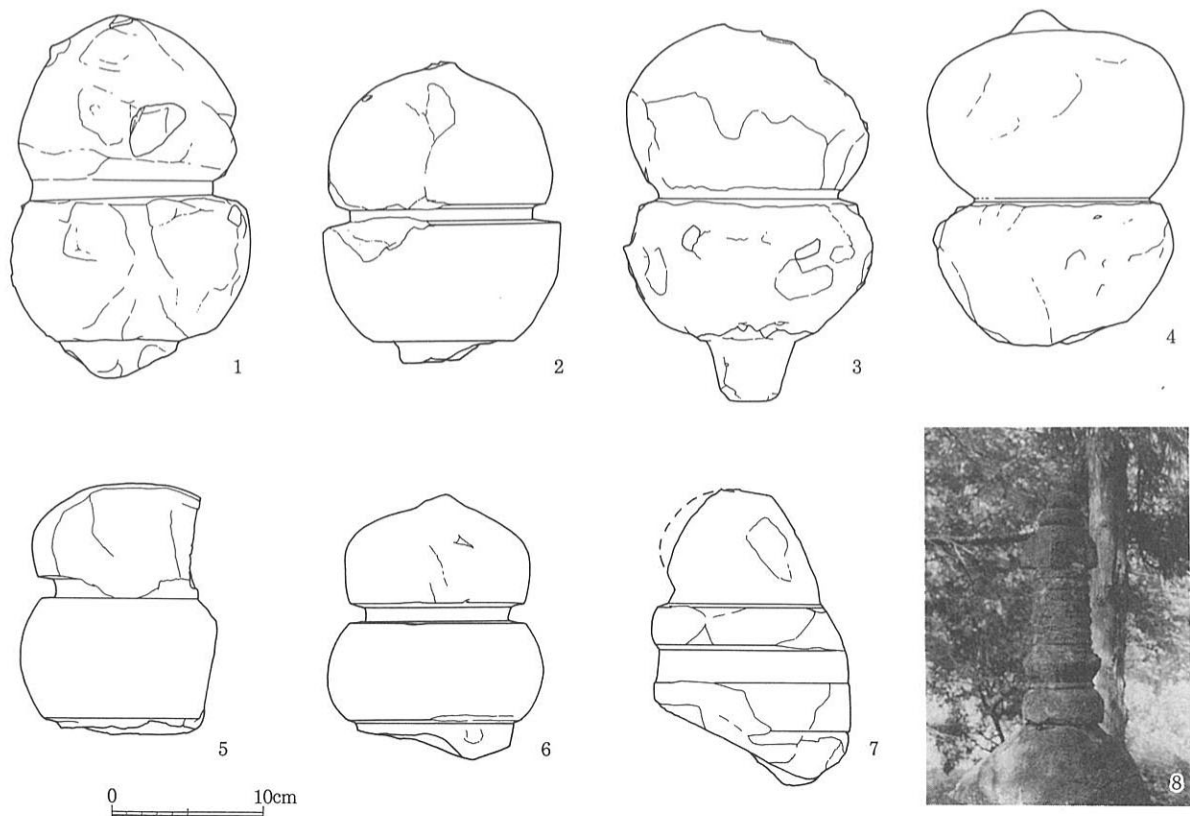


図1 二上山系凝灰岩製の宝珠1

2は、千早赤阪村森屋墓地の宝珠・請花である。塔形は五輪塔である。柄を除いた高さ18.3cmを測る。宝珠と請花の間に高さ0.8cmの首部、下部に高さ1.4cmの柄を造り出す。宝珠は先端をやや突出し、最大径は高さの1/2以下にある。

3は、河南町寛弘寺・神山墓地の宝珠・請花である。塔形は五輪塔である。柄を除いた高さ20.8cmを測る。宝珠と請花の間に高さ0.6cmの首部、下部に高さ4.1cmの柄を造り出す。宝珠の最大径は高さの約1/2にあり、請花の最大径は宝珠より大きい⁽⁴⁾。

4は、富田林市龍泉寺墓地の宝珠・請花である。塔形は五輪塔である。請花を大きく欠損している。現高22.1cmを測る。宝珠先端には突出を設け尖頂とし、肩が張り下部がすぼまり胴ばりである。宝珠と請花の間に高さ0.6cmの首部を造り出す。

5～7は、河内長野市天野金剛寺開山堂にある宝珠である。塔形は層塔である。5の宝珠の下は、形態から見て請花ではなく竜車と考えられる。宝珠の高さは低く、宝珠と竜車の間に高さ1.2cmの首部を造り出す。

6の宝珠はやや歪んで、先端に突出を設けている。宝珠と竜車の間に高さ1.0cmの首部を造り出す。

7の石材の外面は、ややピンク色をしている。円頂と思われる宝珠の下に請花や竜車を設けず、直接九輪を設ける。宝珠は、九輪から半分でたような形態である。堂内の層塔のものとは別の遺物である。中国の河南省登封の北魏十二角十五層密簷式塔の宝珠に似ている⁽⁵⁾。

8は、奈良県五條市栄山寺の宝珠・請花である。塔形は層塔である。相輪は非常に太く、宝珠は扁平である。宝珠の下には、請花ではなく竜車を刻出する。宝珠と竜車間に首部を造り出しているようである⁽⁶⁾。水煙の形態は鎌倉中期以降に現れる花崗岩製層塔と同じ表現方法である。

9は、奈良県天満神社の宝珠・請花である。塔形は宝塔・層塔である。宝珠の下に首部、請花に単弁を刻出する⁽⁷⁾。

10は、奈良県当麻町当麻北墓地の宝珠・請花である。塔形は五輪塔である。柄を除いた宝珠・請花の高さ56.1cmを測る。宝珠は最大径が下部にあり、腰ばりである。請花の間に高さ6.7cmの首部を造り出す⁽⁸⁾。

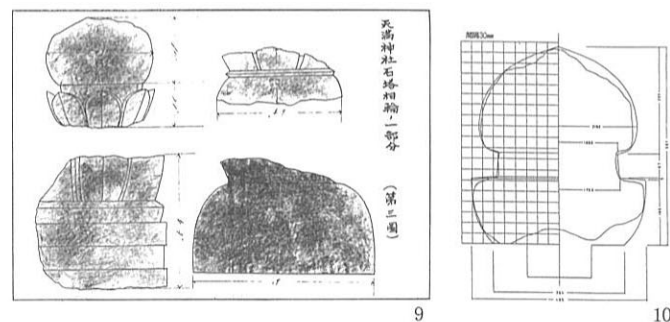


図2 二上山系凝灰岩製の宝珠2

また、当麻寺燈籠にも宝珠が残されている。現存する宝珠は風化が激しいが、天沼氏によれば団形で下膨れの形状で図化されている。

3. 形態の変遷

宝珠の形態を概観すると、1. 最大径が上昇する、2. 頂部は肩はりになり、尖頂ぎみになる、3. 首部は低くなること判った。

形態がある方向に変化していることから、この変化は時期的な形態変化であるとみることができる。このように石材を限定することによって一定の方向で変遷が追えることから、工人集団が存在し長期間にわたって石造物の製作を行っていたと想定できるであろう。

形態の特徴に宝珠に続く首部があげられる。これは二上山系凝灰岩の石造物に顕著に見られる特徴である。他の石材では、奈良県生駒郡平群町の千光寺宝塔など少数ではあるが存在している。首部が低くなくても沈線となって首部が残るのは、宝珠と請花の間を際立たせ工具痕を消すために沈線を入れたことが原因だと考えられる。

元来、石造層塔は木造層塔の模倣から始まった部分がある。造立趣旨についても、経済的な理由から石造層塔の建立を行ったことが指摘されている⁽⁹⁾。相輪の形状も木造塔のように造形したかたはずである。しかし、椽管を細くすることは素材の性質上困難であるため、椽管を太くし九輪部との差を小さくした。この理由から、栄山寺塔の相輪や竜車は横に拡がり、扁平になってしまったと考えられる。木造塔でも、宝珠の取り付け部分の椽管が太いため石造塔と同じになるものもある。

これに対して五輪塔は、理念上にあるものが具現化されたものである。建築物としての先例はない。宝珠は初めから五大思想にあるように「団形」として造形された。工人達はいろいろな塔形を作成する間に、層塔の宝珠と五輪塔の宝珠を同じ形状にするようになった。言い換えれば、石造層塔の相輪は木造塔の形状を離れ、石造塔として一歩進んだことになる。

遺物の時期は、これらの宝珠の石材である二上山系凝灰岩の石造物からは紀年銘が確認されていないため、明確な時期を設定することは難しい。奈良県御所市南郷の鶏足寺層塔の内部から建仁元年(1201)の紀年銘のある奉納銅板が発見されているが、その年代と層塔の年代は合わないとし鎌倉中期の造立としている⁽¹⁰⁾。本稿の遺物について従来どおりの時期設定を用いると、4以外は鎌倉中期以前の造立となる。しかし、楠木石切場の調査では明確に首部をもつ五輪塔の宝珠と共に13世紀後半から14世紀前半の遺物が出土しており、これまで古いとされていた形態が鎌倉中期から後期にかけても使用されていた可能性も考慮する必要がある⁽¹¹⁾。

中世墓地の成り立ちから考えても、総供養塔が鎌倉後期に造立される以前にのみ凝灰岩製石造物が造立されていたのではなく、以降も凝灰岩石造物が造立されていても何の問題もない。15世紀になって突然砂岩製等の一石五輪塔が造立されて行くほうが不自然とも思える。また、永正ごろの一石五輪塔と同じ形態のものも確認しているので、連続していたかどうかは考慮の必要があるが16世紀前後までは凝灰岩が使用されていたことになる⁽¹²⁾。これらからすると、二上山系凝灰岩の使用は室町時代にまで使用時期を下げるができる。

4. おわりに

石造物は鎌倉時代後期には形態が安定し整備型へと移行していく。凝灰岩製宝珠もそのひとつで、首部は残しているが、鎌倉後期には他の石造物と同じ形態になったと考えられる。

石造物全体が実測図が不足しているなか、手元に集まった図を中心に組み立てていった。宝珠だけを見て年代を決定することは非常に困難で、塔全体を観察して時期を決定しなければならない。しかし、現在も墓地に残されている部分であっても造立当時は完形品であったはずで、これが残欠となったことが原因で資料から除くことはできない。とくに、中世墓地の初期に使用されたといわれる石材でもあり資料の価値は変わらない。

最近、中世寺院・館・墓地からの出土、石切場の調査が行われて成果が蓄積されるなか、実測図も少なく時期設定についても多くの問題を残している。多くのご批判を賜りたい。

今回の調査については、多くの方々にご教授いただいた。記して感謝の意を表したい。

堀 智範、奥田 尚、小林義孝、村上富喜子、井上智博、河端 智（順不同、敬称略）

註

- 1 関 忠夫「宝珠の造形意匠」『東京国立博物館紀要』10 東京国立博物館 昭和50.3
- 2 奥田 尚「大和を中心にした古墳の石室・石槨」『橿原考古学研究所論集 第7』吉川弘文館 昭和59.12
- 3 本書掲載 P.116
- 4 拙稿「寛弘寺墓地の中世石造物」『寛弘寺遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会 1994.3
- 5 竹島卓一『中国の建築』中央公論美術出版 昭和45.4
- 6 天沼俊一「奈良懸に於ける慶長以前の石燈籠補遺 附奈良懸所在の石塔、其他に就て」『建築雑誌』324 大正2.12
- 7 西崎辰之助「古代石塔、石燈籠并ニ古墳」『奈良県史蹟名勝地調査会報告書 第1回』大正2.11
- 8 奈良県文化財保存事務所編『重要文化財 五輪塔（鎌田家）修理工事報告書』奈良県教育委員会 昭和61.2
- 9 大塚活美「畿内・近国の中世石造物」京都文化博物館研究紀要第3集『朱雀』京都文化博物館 1990
- 10 清水俊明『奈良県史』第7巻 名著出版 昭和59.3
- 11 井上智博氏、河端 智氏のご教授による。
- 12 横田・西山・小林「一石五輪塔は何を語るのか―書を持ち、墓地を巡ろう―」（下）『歴史民俗学』6 歴史民俗研究会 1997.2